

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第115図 15 耳皿 図版 68	口: (8.2×5.3) 高: 2.3 底: 3.8	約3/5 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	小型の耳皿。直線的な体部形態。折り曲げは丁寧。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後調整。
第115図 16 蓋 図版 68	口: (13.0) 高: - 横: -	破片 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	天井部低く直線状に腹部が開く。かえり部は内面に突出する。右回転轆轤整形。天井部回転調整。
第115図 17 蓋 図版 68	口: (12.7) 高: - 横: -	約1/6 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部丸みを帯び唇部僅かに彎曲気味に開く。かえり部は直立する。右回転轆轤整形。天井部回転調整。
第115図 18 埴 地 図版 68	口: (13.0) 高: (4.0) 底: (6.7)	約1/6 覆土	①緻密 ②還元焰 ③灰白色 ④灰釉陶器	口唇部玉縁状をなし口縁部外反。体部上半に丸みを持たせ。高台は短く直立する。右回転轆轤整形。施釉は内面に顕著。
第115図 19 皿 図版 68	口: - 高: - 底: 6.4	約1/3 覆土	①緻密 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④灰釉陶器	体部は強く開き、高台は開く。右回転轆轤整形。底部回転調整。高台貼付時周縁撫で。施釉内面に顕著で刷毛掛け。
第115図 20 蓋 図版 68	口: (20.0) 高: - 底: -	口縁部破片 覆土	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③灰白色 ④須恵器	口縁部内傾し頸部は短く屈曲も弱い。肩部の張りは強い。轆轤整形。回転方向不詳。
第115図 21 壺 図版 68	口: - 高: - 底: 11.5	約1/4 壺内	①粗 片岩・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部中位に膨らみを持たせ下半は緩やかに落ちる。高台は長く開く。右回転轆轤整形。底部回転調整後高台貼付。貼付時周縁撫で。調整は体部下半にも施される。底部厚手。
第115図 22 蓋 図版 68	口: - 高: - 底: (8.8)	体部一 底部破片 床直上	①粗 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部中位に大きく膨らみを持たせ下半は緩やかに落ちる。高台は短く開く。右回転轆轤整形。底部切り難し技法不明。高台貼付時周縁撫で。
第115図 23 平皿 図版 68	口: - 高: - 底: (12.8)	体部一 底部破片 覆土	①緻密 ②還元焰 ③褐色 ④須恵器	底径広く体部高低い。屈曲は強い。右回転轆轤整形。底部及び体部下半は回転調整が見え、内外面に自然釉付着。
第115図 24 特殊羽釜 図版 68	口: - 高: - 底: -	肩部破片 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③黒色 ④須恵器	突帯下に瘤状の小突起を付し、突起中位を小穴が上下に貫孔する。轆轤整形。回転方向不詳。外面自然釉付着する。
第115図 25 瓶 図版 68	口: - 高: - 底: (20.4)	底部破片 覆土	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③浅黄色 ④須恵器	体部は強く開く。肩部は設地面広く安定する。肩部域に小孔を穿つ。轆轤整形。内面施釉。
第116図 26 蓋 図版 68	口: - 高: - 底: -	体部破片 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大蓋体部破片。内外面とも横位撫で。内面に顕著。
第116図 27 蓋 図版 68	口: - 高: - 底: -	体部破片 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大蓋体部破片。外面平行叩き後撫で。内面撫で。円環状当て目残る。
第116図 28 蓋 図版 68	口: - 高: - 底: -	体部破片 壺内	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③褐色 ④須恵器	大蓋体部破片。内外面撫で。内面は円環状当て目残る。図は内面のみ拓影図示。
第116図 29 蓋 図版 68	口: - 高: - 底: -	体部破片 壺内	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③褐色 ④須恵器	大蓋体部破片。外面平行叩き後撫で。内面青海波状当て目残る。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 測定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第116図 30 甕 図版 69	口: (17.6) 高: - 底: -	口縁部破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焙 ③鈍黄褐色 ④土師器	コ字口縁甕。口縁部上位外傾し下位は直立する。肩部の張りは弱く体部上半に緩やかな膨らみを持たせる。口縁部横撫で強く頸部で凹線状となす。体部上半斜位・横位施釉で。体部内面横位施釉で。
第116図 31 甕 図版 69	口: (20.0) 高: - 底: -	口縁部破片 覆土	①細 白色粒 ②酸化焙 ③橙色 ④土師器	コ字口縁甕。口縁部～頸部外反し一体化する。内面はコ字状。肩部の張りは弱い。口縁部横撫で全入で上位で凹線状となす。体部は縦位・斜位施釉で。体部内面横位施釉で。
第116図 32 甕 図版 69	口: (18.0) 高: - 底: -	口縁部破片 甕内	①細 白色粒 ②酸化焙 ③橙色 ④土師器	コ字口縁甕。口縁部上位外傾し下位は直立する。肩部の張りは弱く体部中位で膨らむ。口縁部横撫で強く頸部で凹線状となす。体部は縦位・斜位施釉で。体部内面は横位施釉で。
第116図 33 台付甕 図版 69	口: - 高: - 底: -	体部一 底部破片 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焙 ③褐色 ④土師器	台付甕体部下半。脚部欠損。緩やかな膨らみを持たせる体部下半形態。おそらく小型梗か。体部下半は縦位施釉で。脚部接合部は横撫で。体部内面は撫で。
第116図 34 台付甕 図版 69	口: - 高: - 底: (8.2)	底部一 脚部破片 覆土	①細 白色粒・黒色粒 ②酸化焙 ③鈍白色 ④土師器	台付甕脚部。脚部は強く外反して開く。体部下半の立ち上がりも開き気味。脚部内外面全念横撫で。内底面に鼠毛目残る。
第116図 35 台付甕 図版 69	口: - 高: - 底: (9.0)	底部一 脚部破片 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焙 ③明褐色 ④土師器	台付甕脚部。脚部は強く直線状に開き、体部との接合部は屈曲する。脚部内外面全念横撫で。内面に黒付着。
第116図 36 土罎 図版 69	長: 4.0 径: 1.5 重: 6.43g	ほぼ完形 覆土	①細 白色粒・石英 ②酸化焙 ③橙色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。中位が膨らみ両端が小径の整った紡錘状の形態。外面縦位施釉で。
第116図 37 土罎 図版 69	長: 4.4 径: 1.6 重: 9.61g	ほぼ完形 覆土	①細 白色粒 ②酸化焙 ③黄灰色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。両端が小径ながら中位の膨らみが弱くややずんぐりした紡錘状の形態。外面縦位施釉で。

32号・39号住居跡

調査区東側のC区東斜面で検出された。緩やかな東斜面地形に立地し、C-D区住居群の北東部にあたる。周辺は住居跡が密集しており、本住居跡も東側を38号住居跡が重複し、18号住が南東隅に重なる。ただ、本住居跡西側は、重複・密接する住居はなく、22号住や25号住などがやや距離をおいて近接する。また、周辺は土坑群もあり、35号坑・31号坑が床面に重複する。

本住居跡は、重複住居として捉えて調査したが、両者とも遺存度も不良であり、平面形・深さも不均質で整いを持たない。故に、個々の報告は行わず、両者を併せて報告する。

新旧は、土層で確認したが、32号住が39号住覆土を切る関係である。

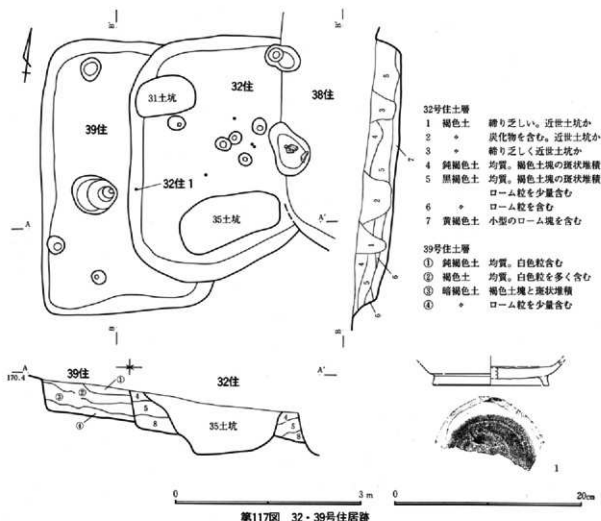
2軒とも、床面は北東側へ傾斜する。周辺地形に沿った形状である。ローム層士の地床であり、硬化面は見られなかった。

小ピットや土坑も数基確認されたが、柱穴・貯蔵穴としては妥当性に欠ける。

竈も、焼土等が確認されなかったが、32住と38住重複部分で検出された不整形の土坑が位置的に可能性が考えられる。38号住が32住を切る様相のため、出土遺物は、本住居跡には帰属し得ない。

遺物も少なく、須恵器輪底部破片1点を図示したのみである。

第5節 奈良・平安時代の住居跡



第94表 32号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cxy-26・27	—	380×—×50	N7°W	—		竈1	18-28-29住 -31-35坑

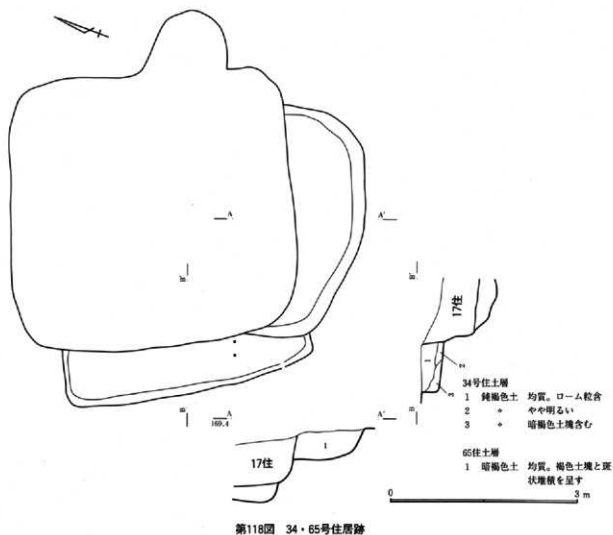
第95表 39号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cxy-26・27	隅丸長方形	434×—×50	N4°E	—			32住

第96表 32号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形整・手法等)
第117図 1 四版 69	口: — 高: — 底: (12.0)	底部1/2 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④硝患部	体部下半に緩やかな丸みを持たせ、高台は開き気味に付される。右面転軸調整形。底部回転調整後高白貼付。貼付時周縁—底面無で。底面に静止塵での痕跡も看取される

第III章 検出された遺構と遺物



第97表 34号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cv-27	—	—X—X43	—	—			17・65住

第98表 65号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
CvW-26・27	—	—X—X33	—	—			17-34-48 住

## 34・65号住居跡

調査区東側のC区東斜面に位置する。C-D区住居跡群の東側にあたり、17号住居跡と重複した状態で検出された。34号住が17号住南壁に、65号住は17号住西壁に重なる。両住居跡とも掘り込みが浅く、また新旧も17号住に切られる関係である。また、南西側で48号住と重複するが、新旧は不明である。

両住居跡とも、平面形は方形を基準としながらも不整形である。

特に34号住は、各隅の形状も整っておらず、西壁から北壁にかけて大きく彎曲する。また、床面も凹凸が多く、周辺の地形に沿った傾斜を見せる。貼床・硬化面は認められなかった。

65号住北西隅は、やや整った形状で、西壁も直線状を呈す。床面は傾斜に沿った地床であり、貼床・硬化面は見られなかった。

遺物は、覆土中より微量出土したが、小破片であり、図示に堪え得る遺物は無かった。

## 35号住居跡

調査区中央北のC区台地鞍部のやや東に位置する。C-D区住居跡群の南東部にあたり、緩やかな東・北斜面地形に占地する。

周辺は住居跡が密集し、重複住居が群在するが、本住居跡はほぼ単独の検出となった。近接する住居跡としては、西側に45号住居跡が竈を接す。北西隅には30号住が、東側には113号住居跡、南側には122号住居跡、北側はやや距離をおいて36号・64号住居跡が見られる。

平面形は、約3.6×2.5m小型の縦長長方形を呈し、西壁に僅かな乱れが見られる。深さは、約14cmと浅く遺存状態は不良である。尚、北壁東半は斜面地形のため逸失していた。

床面は、北側へ緩やかに傾斜するものの平坦面が意識されており、黄褐色ローム塊主体の貼床がなされていた。硬化面は竈周辺に狭い範囲で確認された。

壁周溝は無い。柱穴は、南壁にかかる小ピット、西壁際と北壁際の小ピットを充てたい。

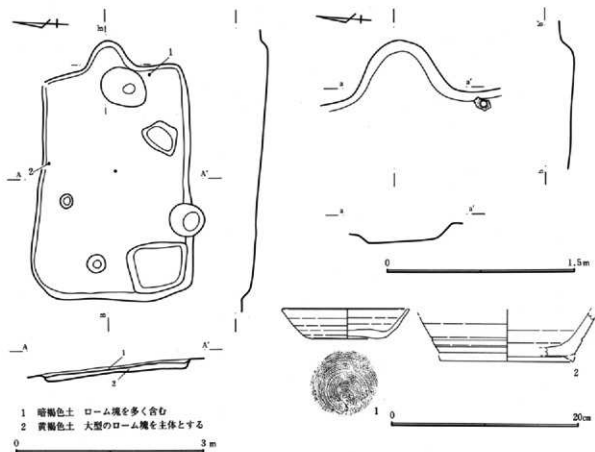
貯蔵穴は、配置がずれるが、南壁際東よりの不整形土坑に妥当性が求められよう。また、床下調査で得られた。西南隅の方形土坑も可能性を示唆できる。

竈は、東壁ほぼ中央に設けられる。馬蹄状の煙道部を壁外に突出するが、掘り込みは浅く、構築材や補強材は検出されなかった。焚口部南に不整形の土坑が重複するが、ローム塊を主体とした埋土であり、床下遺構の可能性が高い。

床下遺構は、西南隅にやや大型方形の土坑が検出された。黄褐色ローム塊が埋土としていた。

遺物は少なく、床直上に数点の土器片の出土を見るのみである。竈南より須恵器坏(1)、床面中央より須恵器臺底部破片(2)が出土している。

第III章 検出された遺構と遺物



- 1 暗褐色土 ローム塊を多く含む  
2 黄褐色土 大型のローム塊を主体とする

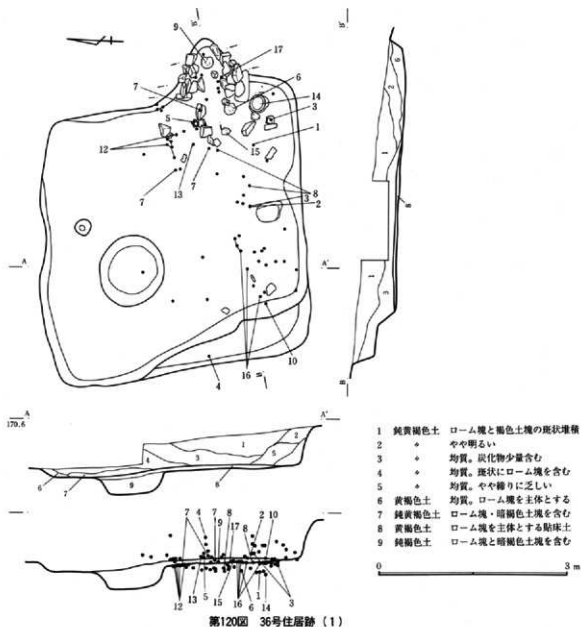
第119図 35号住居跡

第99表 35号住居跡計画表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竜方位	主な施設	主な遺物	重観遺構
Cw-29・30	隅丸長方形	363×252×14	N88°E	N85°E		坏1 壺1	

第100表 35号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(m) ( )推定値	残存率 出土状態	①粘土 ②地成 ③色調 ④その他	特徴(形態・手法等)
第119図 1 坏 図版 69	口: 13.4 高: 3.2 底: 7.0	ほぼ完形 床直上	①粗 砂羅・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁一体部僅かな彎曲をもって一体化する。下半に丸みを持たせ底部はやや上げ底。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後腰部に僅かな輪を加える。
第119図 2 壺 図版 69	口: - 高: - 底: -	底部破片 床直上	①粗 砂羅・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	直線状に開く体部下。高台は短く開くか。左回転轆轤整形。底部回転調整後高台貼付。調整は体部下半に及ぶ。



第101表 36号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cw <sub>5</sub> -27・28	不整形正方形	442×428×57	N85°E	N77°E	床下土塊	坏4 埴1 蓋4 盤1 瓶1 甕6 金銅器1	18・48・64 住

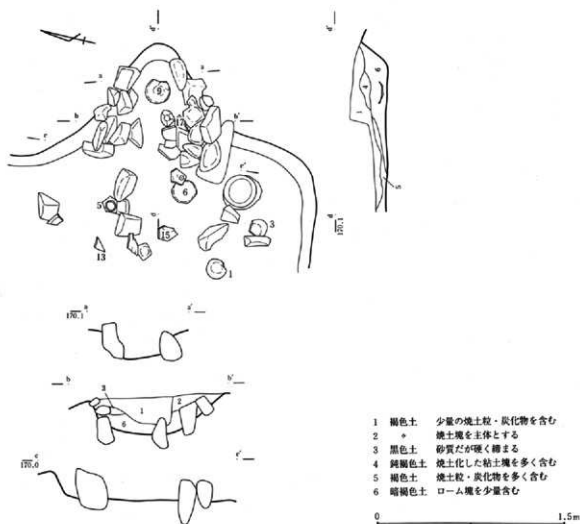
## 36号住居跡

調査区中央北のC区西端の台地較部やや東に位置する。C～D区住居群の南東部にあたり、緩やかな東・北斜面地形に占地する。斜面地形は、東側へがやや強い。

周辺は、住居跡が密集し、重複住居が群在する。

本住居跡も東側が48・64号住居跡に乗り、北側を18号住居南壁と接する。30号住・35号住が西側から南側に近接する。

平面形は、主軸を東西に持つ不整形正方形で、約4.4×4.2mの中型の規模である。各隅が直角ではなく、各辺の形状も整っていないため、ややいびつな



第121図 36号住居跡(2)

印象を得る。また、南壁と北壁中位は僅かながら彎曲を持たせており、本住居跡の特徴の一つとなっている。

深さは、残存状態の良い西壁付近で約60cmを測る。良好な遺存状態といえるが、北壁の一部は、18号住との重複観察のための試掘坑のため、低く検出されている。

床面は平坦面が築かれるが、北側が僅かながら凹む。東側と北側の一部を除き、貼床がなされており、鈍褐色土塊と黄褐色ローム塊の混土を基調とした。硬化面は、床面中央を中心に広い範囲で確認され、特に竈前に顕著に認められた。

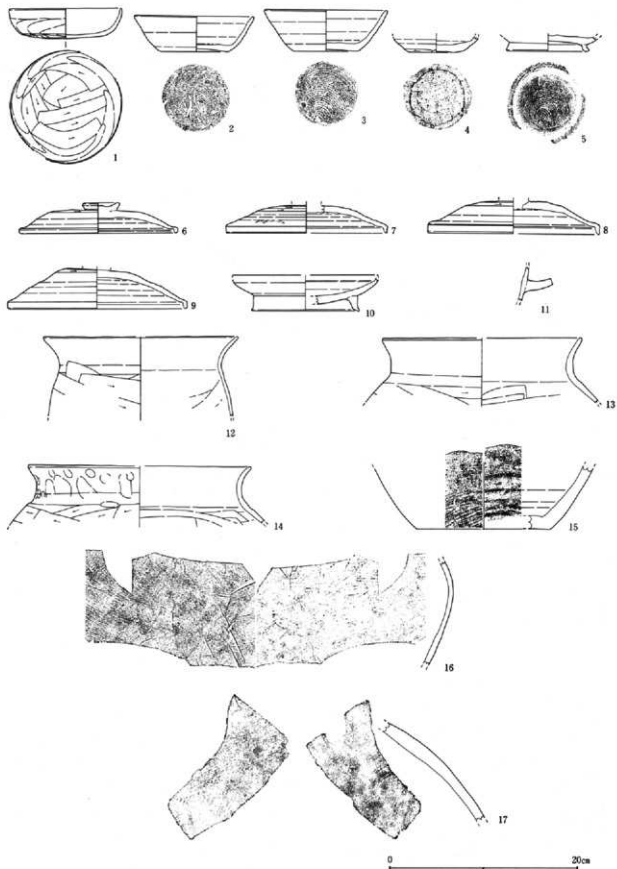
壁周溝は見られなかった。柱穴も妥当性のあるも

のは無かったが、北壁際で検出された小ピットは、補助柱穴あるいは入口部の梯子穴としての機能が想起される。

貯蔵穴も検出されていない。ただ、東南隅に、土師器甕口縁部が正位に置かれており、この周辺が、貯蔵穴様の空間として位置づけられる可能性を秘める。須恵器甕の「置き台」等と同等の用途も考えて置きたい。

竈は、東壁南寄りに設けられる。馬蹄状の煙道部を壁外に突出し、燃焼部～焚口部には掘り込みを持たない。燃焼部壁と袖には自然石が列状に補強されており、良好な遺存を誇る。袖は、自然石を芯材とし、暗灰褐色粘質土が残存していた。天井材は遺存





第122図 36号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

第102表 36号住居跡遺物観察表

図番号 器 種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第122図1 因版 69	口：11.7 坏高：3.2 底：-	ほぼ完形 床直	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③鈍藍色 ④土師器	口縁部直立し体部は扁平。底部は平底。口縁部横撫で体部は斜位指撫で、底部は匙削りを施す。内底面の凹凸は不明瞭。
第122図2 因版 69	口：12.5 坏高：3.8 底：7.2	約3/4 床直上	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁一部部縁やかな丸みを帯び一体化する。底部は若干上げ底。内面見込み部比較的明瞭。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。外面に重ね焼き痕。
第122図3 因版 69	口：13.0 坏高：4.4 底：7.0	約4/5 床直上	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁一部部縁やかな彎曲をもって一体化する。器高やや高く、底部は小径で僅かに上げ底を呈す。内面見込み部は比較的明瞭。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。
第122図4 因版 69	口：- 坏高：- 底：4.9	底部 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部の立ち上がりは直立気味で、内面見込み部明瞭。底部は不安定。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後、匙調整を周縁に施す。おそく手持ち匙削り。
第122図5 因版 69	口：- 坏高：- 底：8.3	底部 床直上	①細 黒色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	やや大型品。体部下半は強く開き高台は開く。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第122図6 因版 69	口：16.3 坏高：3.3 底：3.5	約5/6 床直	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	天井部やや低く小型の塊状溝を付す。溝中央は僅かに突出。肩部下端は彎曲しかえり部は丸みを帯び直立気味。右回転軸輪整形。天井部回転匙調整後横貼付。貼付時周縁撫で。
第122図7 因版 69	口：17.0 坏高：- 底：-	約2/5 床直	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	天井部一部丸みを帯びて肩部に至る。かえり部は彎曲気味に直立し端部は鋭い。右回転軸輪整形。天井部回転匙調整。外面重ね焼きの痕跡。
第122図8 因版 69	口：(18.0) 坏高：- 底：-	約1/4 床直	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部一部丸みを帯びて肩部に至る。かえり部は彎曲気味に直立する。右回転軸輪整形。天井部回転匙調整後横貼付。貼付時周縁撫で。
第122図9 因版 69	口：18.0 坏高：- 底：-	横欠損 竈内	①粗 白色粒・石英 ②還元焰気味 ③灰色 ④須恵器	やや大型品。横割部。天井部高く平坦面を築く。体部一部は直線状に一体化しかえり部は短く直立する。右回転軸輪整形。天井部回転匙調整後横貼付。貼付時周縁撫で。
第122図10 因版 69	口：- 坏高：- 底：(11.2)	約1/5 床直	①粗 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部は縦やかに立ち上がり高台は長く直立気味に付される。右回転軸輪整形。底部切り離し技法不明。高台貼付時周縁～底部撫で。
第122図11 因版 69	口：- 坏高：- 底：-	把手 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	瓶把手。小型の方形を呈し、内彎気味に上位を向く。体部は薄手で輪軸整形。把手は四面とも面取り状の匙削りを施す。
第122図12 因版 69	口：20.6 坏高：- 底：-	約2/3 口縁部 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③鈍藍色 ④土師器	口縁部～頸部外反し一体化する。肩部の張り強い。口縁部横撫で後体部横位・斜位匙削りを施す。体部内面は横位匙撫で。
第122図13 因版 69	口：(21.0) 坏高：- 底：-	約1/2 口縁部 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部外傾し、頸部強く外反する。肩部の張り強い。口縁部横撫で、頸部横撫で強く凹線状をなす。体部は横位・斜位匙削り。体部内面は横位匙撫で。
第122図14 因版 69	口：23.5 坏高：- 底：-	口縁部 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部上位の外傾強く頸部直立気味に外反する。肩部の張りは強い。口縁部横撫で強く指頭直を残す。頸部横撫で強く体部境に横状となす。体部は横位・斜位匙削り。体部内面は横位匙撫で。

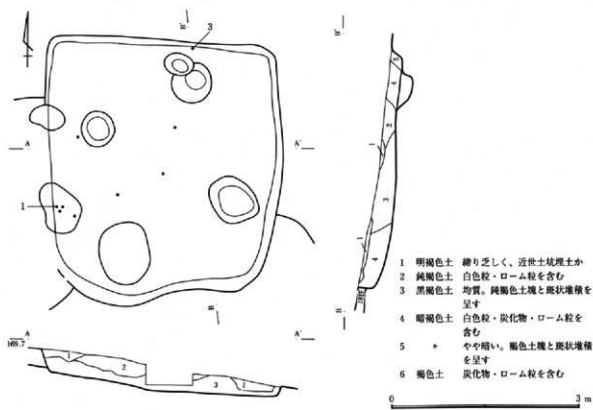
図 器 種	番号 ( )推定値	法量 (cm)	残 存 率 出土 状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第122図 陶版	15 要 69	口: - 高: - 底: (14.0)	底部破片 床直	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部下半は強く開く。底部は平底。轆轤整形後体部外面は平行叩き。底部切り難し技法不明。
第122図 陶版	16 要 70	口: - 高: - 底: -	体部破片 床直	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大甕体部上半破片。外面平行叩き後撫で。内面青海波状当て目残る。器高薄手。
第122図 陶版	17 要 70	口: - 高: - 底: -	体部破片 甕内	①粗 石英 ②酸化還元味 ③灰白色 ④須恵器	大甕体部破片。外面平行叩き。内面青海波状当て目。内面には滑沢面が見られ、あるいは転用甕などの再利用か。

していなかったが、土層で確認された焼土塊等が充当するのであろう。また、笑口部に散乱する自然石も、天井材あるいは袖補強材の一部と考えられる。燃焼部奥には、須恵器皿が逆位で出土している。これは、高さの調整に支脚上部に置かれ、転落した例であろうか。あるいは、煙道部の何等かの施設に伴うのであろうか。支脚は、燃焼部中央やや南よりに設けられている。自然石を用いている。

本住居跡の、西壁には段差が認められている。壁全城に及ぶものではなく、南側約2/3を占めた段差である。棚状遺構であろうか、少量の遺物も出土している。

床下遺構は、床面中央やや北西寄りに、径約1m前後の円形土坑が検出された。その他の床下遺構もないため、第120図の使用面上に図示した。床下土坑と捉えられ、黄褐色ローム塊を埋土としていた。

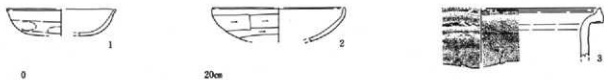
遺物は、多く出土しているが、甕内及び周辺と南西側への集中が目立つ。覆土中よりの出土もあるが、大半が下層～床直であり、本住居跡に帰属する出土遺物として捉えられよう。



第123図 38号住居跡 18住

第103表 38号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cwa-25・26	不整形長方形	425×380×38	N4°W	—		坏2 甌1	18-32住 32坑



第124図 38号住居跡出土遺物

### 38号住居跡

調査区東側のC区東斜面で検出された。緩やかな東斜面地形に立地し、C～D区住居群の北東部にあたる。周辺は住居跡が重複状態で密集しており、本住居跡には、南側に18号住、西に32号・39号住が重複する。土層の確認では本住居跡が最も新しい。その他の近接する住居跡としては、東側に17号住・34

号・65号住が重複して近接し、北側約5mには19号住が20住と重複する。

平面形は、約4.2×3.8mの不整形長方形を呈し、18号住と重なる南壁は大きく彎曲し、整然さを失う。

深さは、西側壁で約40cmを測るが、全体に浅く、壁の立ち上がりも緩やかだった。遺存状態としては不良である。

第104表 38号住居跡遺物観察表

図 番 号 種	法量 (m) ( )推定値	残 存 率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第124図 1 坏 四版 70	口：(11.6) 高：— 底：—	破片 覆土	③褐色 ④土師器	遺存状態不良。口縁部僅かに外反し体部丸みを帯び扁平。底部は平底か、口縁部横溝で体部弱い激で、底部は丸削り。
第124図 2 坏 四版 70	口：(13.8) 高：— 底：—	破片 覆土	③鈍褐色 ④土師器	遺存状態不良。口縁部短く内傾気味に直立し体部は強く凹く。底部は丸底か、口縁部横溝で、体部は横位丸削り。
第124図 3 瓶? 四版 70	口：(25.0) 高：— 底：—	口縁部破片 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③鉄オリーブ 色 ④須恵器	遺存状態不良。口縁部強く外反する。両端部とも鋭く尖る。頸部はやや内傾気味に直立する。輪襷型。回転方向不詳。

床面は、北東方向へ傾斜する。黄褐色ロームを基準とした地床であり、貼床は見られなかった。

壁周溝は見られず、柱穴も良好な配置・深さを示すピットは無い。北壁際の2基と西壁際の円形土坑に可能性を求めたが、確証的ではない。

貯蔵穴も検出されなかった。

竈は、明瞭な痕跡は認められなかったが、東壁やや南寄りに焼土粒の散布が認められ、焚口部相当に不整形の浅い小土坑が検出されたこと、東壁自体も緩やかな彎曲を見せることから、竈あるいは準じる施設の存在は否定できないだろう。調査においても、18号住重複箇所のため、慎重を期したが、煙道部や袖等设施を得られなかった。

遺物は少量が出土した。3点を図示したが、覆土中の出土であり、本住居跡に帰属し得る出土状態ではない。

#### 40号住居跡

調査区中央北よりのD区台地鞍部に位置する。C～D区住居群の西側にあたる。周辺は緩やかな東・北斜面地形で、本住居跡は、ほぼ平坦地形に占地するといえよう。

周辺の住居跡分布は濃密で、南側は43号住居跡、南西に46号住居跡、北約5mに24号住居が位置するが、いずれも単独の検出であり、C～D区住居群東側の重複住居群とは様相を異にする。

平面形は、主軸を北東に持つ不整正方形を呈し、

規模は軸長約3.3m程度の小型の住居である。深さは約70cmを測り、良好な遺存状態を誇る。

床面は、平坦面を築き、中央部分を中心に貼床がなされていた。鈍褐色土塊を主体とした貼床土である。硬化面は、中央部～竈周辺・南西隅にまで広く確認された。

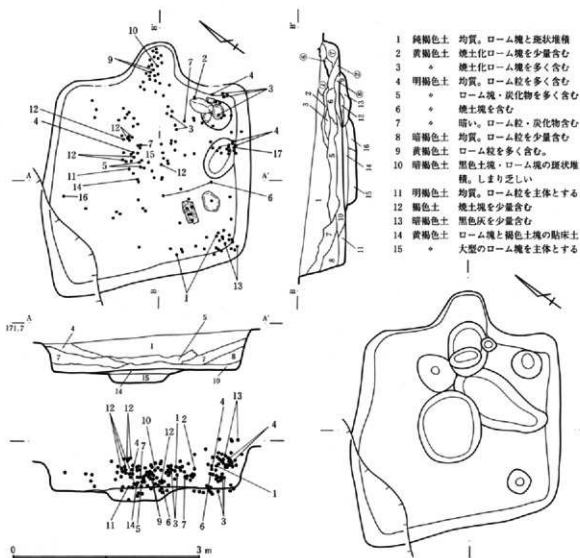
壁周溝はなく、柱穴も良好なものは認められなかった。床下調査で得られた西南隅の小ピットに可能性が求められよう。

貯蔵穴は、東南隅の小型円形土坑を充てたい、径約50cm程度で、深さは約20cmと浅く、掘り込みも弱い土坑だが、周辺には大型の自然石や土器類が散布していた。

竈は、東壁ほぼ中央に設けられる。小型の住居規模に比して、やや大型の竈である。馬蹄状の煙道部を突出し、燃焼部～焚口部には明瞭な掘り込みは無い。袖は、芯材等の明瞭な痕跡は認められなかったが、南側壁の彎曲が強く、壁を利用した袖と思われる。また、北側は粘質土塊主体の袖の痕跡が確認されており、南側に相当する弱い突出が想起されよう。竈焚口部南側～西側にかけて大型の自然石や土師器、燧破片の出土が見られた。構架材と煮沸具の散乱と捉えられよう。住居廃絶時の、竈遺棄行為が位置付けられる。

床下遺構は、床面中央に大型の不整形の土坑が検出された。床下土坑として捉えた。規模は、径約1.1×1.0m、深さ約20cm程度である。黄褐色ローム

第三章 検出された遺構と遺物



第125図 40号住居跡(1) 床下

塊と暗褐色土塊の混土からなる。この中央床下土塊東側にも不整形の土塊が重複状態で検出されたが、竈構築時の掘り込み等が考えられるが、明確な性格は不明である。

その他の遺構としては、南側壁下床面に楕円状の土坑が検出されている。昇降施設あるいは出入口部の施設であろうか。

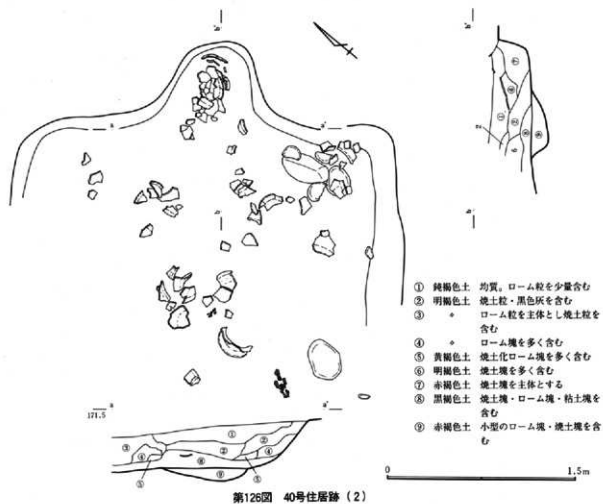
尚、本住居跡には、少量ながら炭化材の出土が南西隅に認められている。1箇所だけの出土のため、焼失住居としての位置づけには積極性を欠くが、南西隅には、先に挙げた柱穴様の小ピットが床下調査で得られており、このピットを原位置としても考え

られる。焼失後に住居内の炭化材を除去したのであろうか。

遺物は、多く出土している。覆土上層～床直に至るまで満遍なく、出土を見るが、下層～床直上に濃密に分布する。平面的には、竈周辺・床面中央・南壁下に集中しており、東南隅の貯蔵穴、西南隅にもまとまった出土が見られる。

特に、竈周辺の土師器器の濃密な出土は、前述の竈遺棄行為に伴う所産と思われ、煮沸具の散乱と捉えた。ただし、袖芯材としての補強材の可能性もあり、全てを一括性や同時性に富む出土と判断できない。

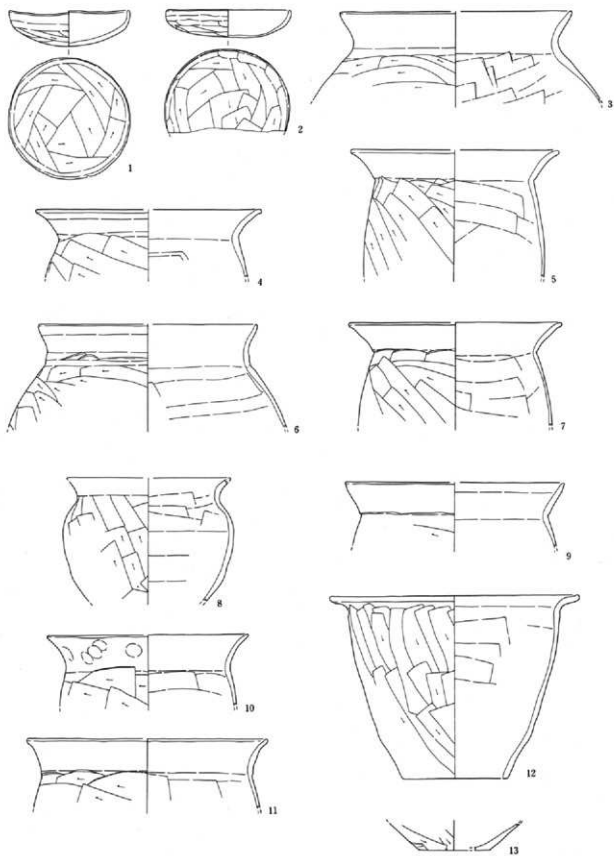
第5節 奈良・平安時代の住居跡



第105表 40号住居跡計測表

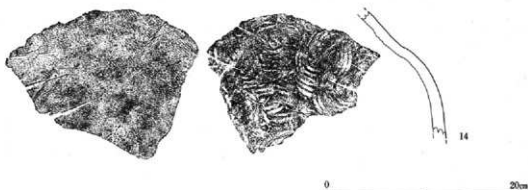
位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dde-26	不整形	333×330×67	N56°E	N56°E	貯蔵穴 床下土坑	埴2 甕11 瓶1 金属器1	

第III章 検出された遺構と遺物



第127図 40号住居跡出土遺物 (1)





第128図 40号住居跡出土遺物(2)

第106表 40号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第127図 1 坏 70	口：12.6 高：3.7	完形 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口縁～体部内彎気味に一体化する。口縁部は短く体部は扁平。底部は尖り気味の丸底。内底面は僅かな凹凸が見られる。口縁部横撫で、体部は弱い撫で。底部は荒削りを施す。
第127図 2 坏 70	口：13.2 高：2.8	約2/3 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁～体部内彎気味に一体化する。口縁部は著しく短く体部は扁平。底部は丸底。内面は刺差するが凹凸が見られる。口縁部横撫で、体部は弱い撫で。底部は荒削りを施す。
第127図 3 甕 70	口：(24.2) 高：— 口縁部 貯穴	約3/4 貯穴	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部外傾し頸部強く彎曲する。肩部の張り強く体部に膨らみを持たせる。口縁部横撫で強く体部境を稜状となす。体部上半は横位荒削り。体部内面は斜位・横位荒撫で。
第127図 4 甕 70	口：24.0 高：— 底：—	口縁部 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部強く外傾し開く。頸部もく字状に屈曲する。肩部の張りはやや弱い。口縁部横撫で強く頸部境で凹線状となす。体部上半は斜位荒削り。体部内面は横位荒撫で。
第127図 5 甕 70	口：22.0 高：— 底：—	口縁部～ 体部破片 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ④土師器	口縁部外傾し強く開く。頸部く字状に屈曲する。肩部の張りは弱く体部上半に緩やかな膨らみを持たせる。口縁部横撫で後体部上半横位・斜位荒削り。下半は縦位か。体部内面は斜位荒撫で。
第127図 6 甕 70	口：(23.0) 高：— 口縁部 覆土	約1/3 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ④土師器	コ字口縁部に近い口縁部形態。口縁部上位外傾し下位は直立気味。肩部は張る。体部中位に膨らみを持たせる。口縁部横撫で強く頸部境で凹線状となす。体部上半横位荒削り、中位は斜位か。体部内面は横位荒撫で。
第127図 7 甕 70	口：(22.2) 高：— 口縁部 覆土	約1/4 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③赤褐色 ④土師器	口縁部外傾し強く開く。頸部く字状に屈曲する。肩部の張りは弱い。口縁部横撫で後体部上半横位・斜位荒削り。体部内面は横位荒撫で。
第127図 8 甕 70	口：— 高：— 底：—	体部破片 覆土	①粗 片岩・石英 ②酸化焰 ③赤褐色 ④土師器	小型甕。口唇部欠損。口縁部外傾し、頸部く字状に屈曲する。肩部は張り体部上半に膨らみを持たせる。口縁部横撫で、体部は縦位・斜位荒削り。内面口縁部下半～体部横位荒撫で。
第127図 9 甕 70	口：(22.9) 高：— 口縁部 甕内	約1/3 甕内	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部強く外傾し頸部く字状に屈曲する。肩部の張りは弱い。口縁部横撫で弱く指頭痕残る。体部横位荒削りし頸部境で強く稜状となす。体部内面横撫で。
第127図 10 甕 70	口：(21.0) 高：— 底：—	口縁部破片 甕内	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部外反気味に開き頸部は彎曲する。体部の張りは弱い。口縁部横撫で弱く指頭痕残る。体部は横位・斜位荒削り。体部内面は横位荒撫で。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第127図 11 要 高: - 底: - 図版 70	口: (25.0)	口縁部破片 床直	①胎土 黒色粒・白色粒 ②酸化胎 ③明黄褐色 ④土師器	口縁部外反気味に開き脚部は彎曲する。体部の張りが高い。口縁部横撫で後体部横位磨削り。弧状の動きが明瞭。体部内面は横位磨撫で。
第127図 12 要 高: 19.4 底: 10.9 図版 70	口: 25.8 高: 19.4 底: 10.9	約2/3 覆土	①胎土 片岩粒・石英 ②酸化胎 ③黄褐色 ④土師器	口縁部強く開く。体部上半に緩やかな膨らみを持たせる。底径は広い。口縁部強い横撫で後体部縦位磨削りを入念に施す。体部内面は横位磨撫で。
第127図 13 要 高: - 底: (8.0) 図版 70	口: - 高: - 底: (8.0)	底部破片 覆土	①胎土 白色粒 ②酸化胎 ③黄灰色 ④土師器	体部下半は強く開く。底径は比較的広い。体部は縦位・斜位磨削り。底面も磨削り。内面は横位磨撫で、平滑。
第128図 14 要 高: - 底: - 図版 71	口: - 高: - 底: -	体部破片 床直上	①堆 砂礫・石英 ②還元胎 ③灰色 ④須恵器	大甕体部破片。歪みあり。外面平行叩き後撫で内面青濁液状当て目。

41号住居跡

調査区東側のC区東斜面に位置する。勾配の強い急傾斜地形に占地しており、そのためか、本住居跡より東側の遺構密度は低い。

周辺遺構としては、東側に15号住と14号住が見られるが、重複はせず単独で検出されている。また西側には、17号住が34号住・65号住と重複して近接する。C-D区住居群の東端にあたる位置である。

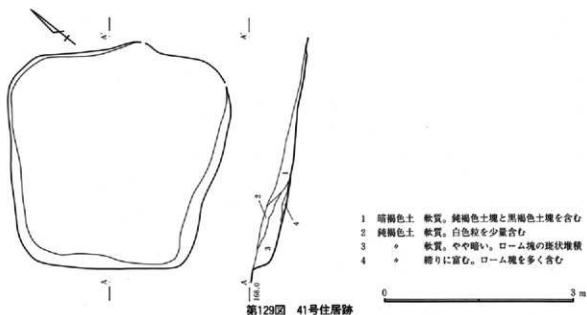
平面形は、約3.5×3.4mの不整正方形を呈し、西辺と東辺の長さの差が著しい。また、南壁の一部は緩やかに彎曲し、整然さを失う。深さも、比較的遺存の良好な西壁付近で30cmで東側あるいは北側の壁高は極めて浅く、遺存状態は不良といえよう。

床面は東側へ傾斜する。貼床は見られず、黄褐色ロームを基盤としている。硬化面も顕著ではない。

壁周溝・柱穴・貯蔵穴は認められない。

竈は東側中央に、僅かな痕跡をとどめる。少量の灰土・炭化物が散布しており、煙道部の突出も短い。補強材・構築材の痕跡も認められなかった。確定的な竈ではない。

遺物は極少量出土しているが、土師器・須恵器の小破片のため図示に至らなかった。



第129図 41号住居跡

第107表 41号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	電方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Ctu-25・26	不整形	352×342×30	N57°E	—			

## 42号住居跡

調査区中央北のD区台地鞍部に位置する。C～D区住居群の北端にあたり、緩やかな東・北斜面地形に占地する。重複する遺構はなく、単独の検出ではあるが、近接する住居跡は多く、東側に21号住、西側には24号住、南東には23号・33号住が近接する。北側は、調査区域外となるため未調査である。

平面形は、長軸を南北に持つやや横長の不整形を呈し、規模は約4.7×4.0mである。各隅が直角に設けられておらず、いびつな形状となる。南壁は緩やかに彎曲する。

深さは、約40cm程度である。東側と北側への傾斜のため、竈周辺の壁の残存状態は悪いが、遺存度は良好といえよう。

床面は、北側へ緩やかに傾斜する。貼床がなされ、黄褐色ローム塊を基調とした、塊状土が主体となっていた。硬化面は床面中央から竈周辺にかけて比較

的狭い範囲で確認された。

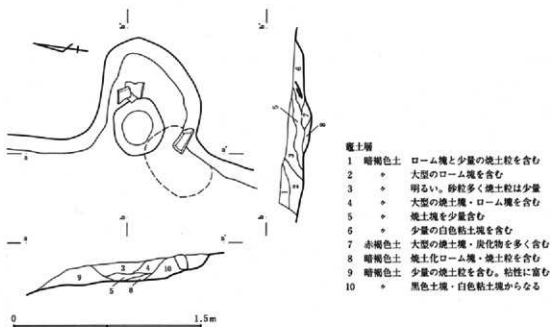
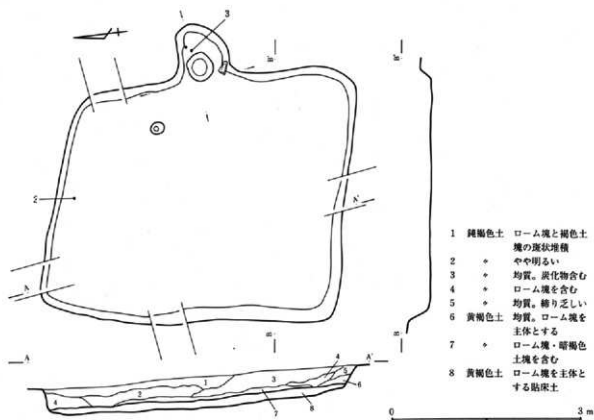
壁周溝・柱穴・貯蔵穴は検出されていない。床面中央やや北東よりに小ピットが確認されたが、規模があまりにも小型で柱穴としても妥当性に乏しい。

竈は、東壁中央に設けられる。不整形な馬蹄状の煙道部を壁外に突出し、燃焼部に小型の掘り込みを持つ。袖は、南側に自然石を芯材とした箇所が相当される。北側には芯材は見あたらず、不明瞭だが、鈍褐色粘質土塊を主体とした、袖が土層で確認されている。

床下遺構は、床下調査を行ったが明瞭な土坑等施設は確認されなかった。

遺物は少量が出土した。遺存状態の良好な割には貧弱である。3個体を図示したが、竈出土の土師器甗(3)以外は、本住居跡の帰属とは判断できない。

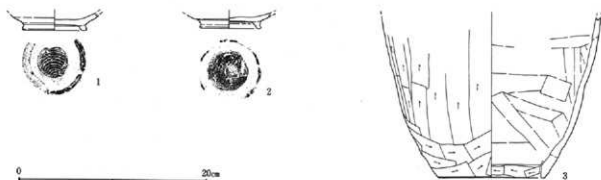
第三章 検出された遺構と遺物



第130図 42号住居跡

第108表 42号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竪方位	主な施設	主な遺物	重要遺構
Dbc-23・24	不整形	474×403×35	N104°E	N80°E		埴1 皿1 甌1	



第131図 42号住居跡出土遺物

第109表 42号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第131図 1 埴 瓦版 71	口: - 高: - 底: 6.3	約1/5 覆土	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	体部下半強く開く。高台は閉き気味に付される。右回軸轆轤形。底部 回転余切り状高台貼付。貼付時周縁撫で。
第131図 2 皿 瓦版 71	口: - 高: - 底: 6.2	約1/3 覆土	①粗 片岩・白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍橙色 ④須恵器	体部下半強く開く。高台は閉き気味に付される。右回軸轆轤形。底部 回転余切り状高台貼付。貼付時周縁撫で。器面摩滅。
第131図 3 甕 瓦版 71	口: - 高: - 底: (11.0)	約1/2 体部一底 覆土部	①細 白色粒・石英 ②酸化焰 ③黄褐色 ④土師器	体部下半は緩やかな彎曲をもって直線状に立ち上がる。底部内面は内傾 する。外面体部中位一下半縦位並列。下半一底部上は横位・斜位並列。内面横位・斜位並列。

## 43号住居跡

調査区中央北よりのD区台地鞍部に位置する。C-D区住居群の西側にあたる。周辺は緩やかな東・北斜面地形で、本住居跡は、ほぼ平坦地形に占地するといえよう。

周辺の遺構分布は濃密で、南側には27号住、北西には40号住、西側は46号住、東側には44号住居跡・25号住居跡が近接する。また土塊も多く群在し、本住居跡には、36号坑・40号坑・44号坑が重複し、41～43号坑が西側から南側にかけて群をなす。さらに、北側には近世の所産と思われる3号民家が台地を削平しており、その影響で、本住居跡東半～北側は著しく逸失されていた。

故に平面形は不明であるが、南西隅の形状から方形を基準とした平面形が窺われよう。深さは約7cmと極めて浅く、遺存状態は不良である。

床面は東側へ傾斜する。貼床はなされず、黄褐色ロームによる地床である。硬化面は床面中央に相当

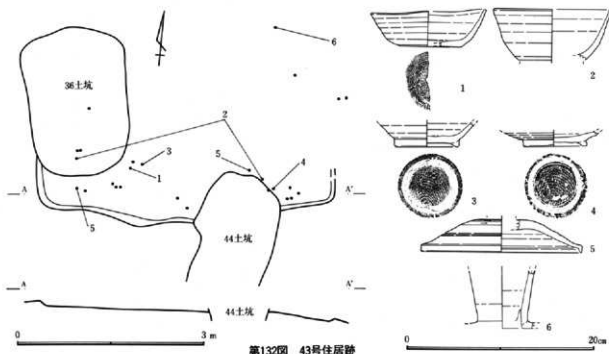
する箇所に狭い範囲で確認された。

壁周溝・柱穴・貯蔵穴・竈は確認されなかった。特に竈は痕跡も見いだせなかった。

遺物は少量が出土しており、ほぼ床直上の出土といえよう。南壁際出土のものが主体であり、6点を個体図示し得た。

以上のように、本住居跡を住居として確定できる材料は少なく、南西隅と南壁・西壁が住居様の形態をとるに過ぎない。床面中央に相応する箇所の硬化面も小範囲である。本書では、住居跡として報告するが、小堅穴遺構としての可能性も充分残る。

第三章 検出された遺構と遺物



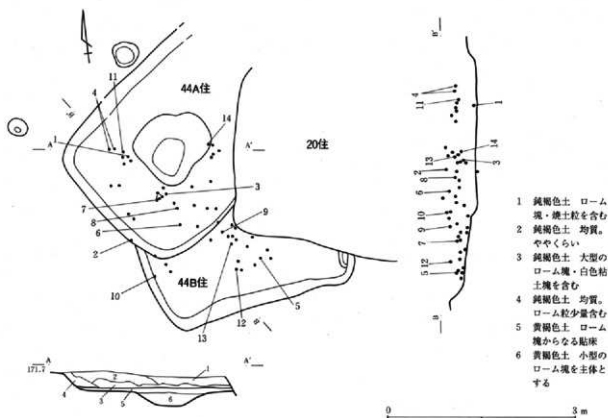
第132図 43号住居跡

第110表 43号住居跡計測表

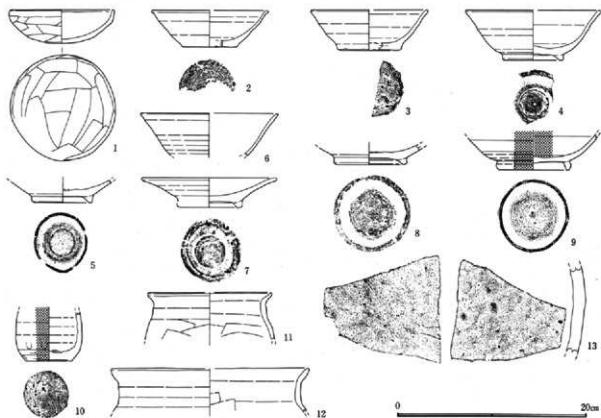
位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dde-27	—	—×—×7	—	—		坏1 埴2 里1 蓋1 長筒 蓋1 金属器7	36・40・ 44坑

第111表 43号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第132図 1 坏 図版 71	口: (12.0) 高: (3.7) 底: (6.5)	約1/4 床直上	①細 白色粒 ②還元焰 ③暗灰色 ④須恵器	口縁部に歪み有り。口縁~体部緩やかな彎曲を帯び一体化する。底部は僅かに上げ底。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第132図 2 埴 図版 71	口: (12.3) 高: — 底: —	口縁部 床直上	①細 白色粒 ②還元焰 ④須恵器	口縁~体部下半緩やかな彎曲を帯び一体化する。下半に強く彎曲を設け丸みを持たせる。右回転轆轤整形。高台貼付時横狭で。
第132図 3 埴 図版 71	口: — 高: — 底: 6.2	約1/3 床直上	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部下丸みを帯び高台はやや開き気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時局縁狭で。
第132図 4 里 図版 71	口: — 高: — 底: (5.5)	約1/3 床直上	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰気味 ③黄褐色 ④須恵器	体部下半は強く開く。高台は短く直立気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時局縁狭で。外面轆轤目強い。
第132図 5 蓋 図版 71	口: 16.9 高: — 底: —	約1/2 床直上	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰気味 ③灰色 ④須恵器	天井部やや高く丸みを帯びる。体部は直線状を呈し裾部はやや彎曲する。かえり部は直立する。右回転轆轤整形。天井部回転調整後強い面を加える。体部に2条の沈線。重お燒きの痕跡有り。
第132図 6 長頸埴 図版 71	口: — 高: — 底: —	頸部破片 床直上	①緻密 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	頸部は直線状に開き肩部は強く張る。左回転轆轤整形。頸部接合部に貫筋有り。内外面に自然輪付着。



第133図 44号住居跡



第134図 44号住居跡出土遺物

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

第112表 44A号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
De-27・28	—	—×215×25	—	—		坏13 埴5 皿1 小瓶1 类3 瓦1 金属器1	26・44B住

第113表 44B号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dbe-28	—	—×—×12	—	—		44A住と同一	26-44A住

第114表 44号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形製・手法等)
第134図 1 坏 71	口：10.8 高：3.5 底：—	ほぼ完形 床直	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰 ③黄褐色 ④土師器	小型の坏。口縁部内傾し体部～底部一体化し丸底を呈す。口縁部横溝で、体部弱い様で、底部見開りを施す。
第134図 2 坏 71	口：(12.2) 高：(3.9) 底：(5.8)	約2/5 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③暗灰色 ④須恵器	口縁部玉縁状をなす。口縁～体部緩やかな彎曲を帯び一体化する。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後無調整。器厚薄手。
第134図 3 坏 71	口：(12.3) 高：(4.3) 底：(6.4)	約2/5 覆土	①粗 砂礫・片岩 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部緩やかに彎曲する。底部は突出する。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後無調整。
第134図 4 坏 71	口：(14.1) 高：5.3 底：(6.1)	約2/5 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部外反し体部下平に強く丸みを設ける。高台は短く開く。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁溝で強い。
第134図 5 埴 71	口：— 高：— 底：6.0	約3/1 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰気味 ③鈍黄色 ④須恵器	体部下平は強く開き高台は直立する。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁溝で。内外面磨減。
第134図 6 坏 71	口：(14.4) 高：— 底：—	約1/3 覆土	①細 白色粒 ②酸化焰気味 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反するが直線状に体部と一体化する。右回転轆轤整形。内外面磨減。
第134図 7 皿 71	口：(14.2) 高：— 底：—	約3/5 高台部欠損 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰気味 ③黄灰色 ④須恵器	口縁～体部直線状に一体化する。高台は直立するか、端部欠損。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁溝で。内外面磨減。
第134図 8 埴 71	口：— 高：— 底：8.0	約1/3 覆土	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰気味 ③黄灰色 ④須恵器	底径広い。体部下平は強く開く。高台は短く開く。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁溝で。
第134図 9 坏 71	口：— 高：— 底：7.2	約1/3 覆土	①密着 ②還元焰 ③灰白色 ③灰釉陶器	体部下平は緩やかに丸みを帯び立ち上がる。高台は内脣しやや三日月状を呈す。施釉は濃く掛け。
第134図 10 小瓶 71	口：— 高：— 底：4.8	体部～ 底部破片 覆土	①密着 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ③灰釉陶器	壺壺状小瓶か。体部中位は緩やかに内脣し下半は強く彎曲し丸みを帯びる。底部はやや上げ底。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後無調整。底部は回転見調整を施す。施釉は不明。



図番号 器種	法量 (cm) ( ) 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形製・手法等)
第134図 4版 11 甕 71	口：(13.0) 高：— 底：—	口縁部破片 覆土	①細 黒色粒・片岩粒 ②酸化焰 ③鈍黄褐色 ④土降器	コ字口縁甕。口縁上位は強く外傾し下位は内傾気味に直立する。肩部の張りは弱い。口縁部横溝で頸部で強い。体部上平横位施陶り。体部内面横位施陶り。
第134図 4版 12 甕 71	口：(21.0) 高：— 底：—	口縁部破片 覆土	①細 黒色粒・片岩粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土降器	コ字口縁甕。口縁上位は強く外傾し下位は直立する。肩部の張りは稍々強い。口縁部横溝で上位と下位で強い。体部内面は横位施陶り。
第134図 4版 13 甕 71	口：— 高：— 底：—	体部破片 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	大甕体部破片。外面平行叩き接合で。自然釉薄く付着。内面円環状当て目施陶り。

## 44号住居跡

本住居跡は、2軒の小型の住居?の重複と捉えた。

調査区中央北のD区台地鞍部に位置する。C～D区住居群の北端にあたり、緩やかな東・北斜面地形で比較的平坦面に占地する。

周辺の住居跡は多く、本住居跡にも25号住・26号住が重複し、西側には27号住・43号住が近接する。本住居跡調査着手時は、25号住と26号住の南西に1軒の浅い住居様の落込みが確認され、これを44号住居跡として認定した。その後、南西部に壁の不整合が認められ、南壁と北壁が平行しないこと、床面中央部に段差が確認され、2軒の住居跡として調査された経緯がある。ただ、遺物は出土地点を資料化したとはいえ、明確な分別は果たし得なかった。そのため本書では2軒を一括して掲載する形態をとった。ご容赦願いたい。

2軒の住居跡の内、北側を44号住A、南側を44号住Bとして報告する。

44号住Aは、単軸長約2.1m程度の小型の長方形を呈するものと思われる。深さは約25cmを測る。床面は黄褐色ロームによる床床であり、東側へ傾斜する。硬化面は顕著ではなかった。壁周溝・柱穴・貯蔵穴・竈は認められなかったが、床面中央に不整形の大型土坑が検出された。床下土坑の可能性が高い。

44号住Bは44号住Aの南東側、26号住南西側に認められた。両住居に挟まれた恰好となり、そのため平面規模は不明である。南側の2箇所の隅の形状か

ら方形を基準とする住居と思われる。深さは10cm前後で遺存状態は不良である。床面は黄褐色ロームを床床とした平坦面を築き、硬化面は認められなかった。壁周溝・柱穴・竈は検出されなかったが、南東隅に小型楕円状の土坑が認められ、これを貯蔵穴として充てたい。

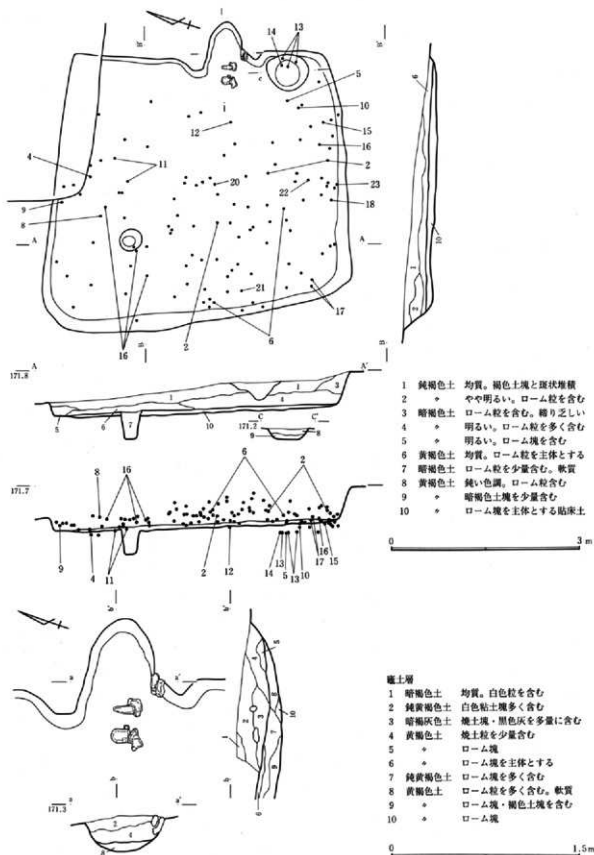
遺物は両住居跡併せて多くの出土が見られたが、分別は果たし得ない。平面・断面分布から、おそらく44号住Bに帰属され得るものと考えられるが、土層の確認等の検証ができないため、確証は得られない。

## 45号住居跡

調査区中央北のC区台地鞍部に位置する。C～D区住居群のはほぼ中央にあたり、緩やかな東・北斜面地形に占地する。

周辺は住居跡が密集し、重複住居が群在する。本住居跡も、34号住と54号住が北側で重複する。近接する住居跡としては、東側に35号住、南側に122号住居跡がある。また南西には2号掘立柱建物が見られる。さらに、北壁には160号坑が重なり、34号住・54号住との重複関係を一層複雑にしている。新旧関係は、34号住が本住居跡を切る様相を呈しており、おそらく160号坑が最も古いものと捉えられた。

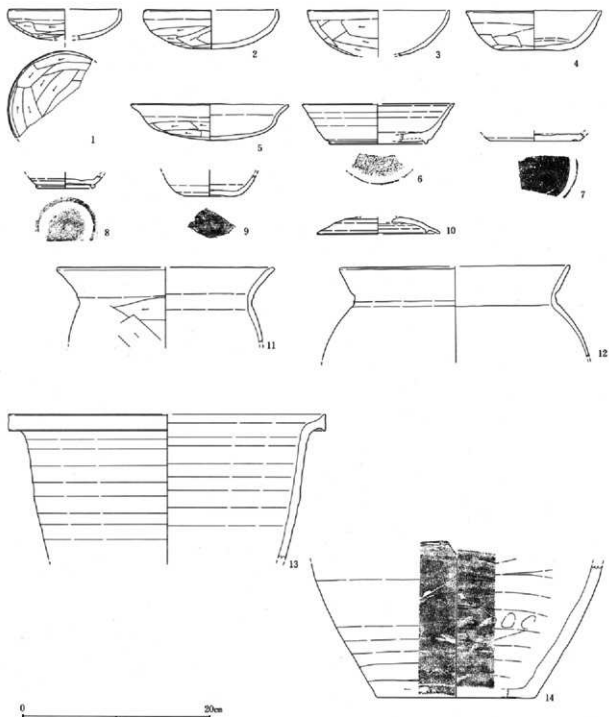
平面形は、約4.9×4.4mの不整形長方形を呈し、長軸を南北に持つやや横長の形態を取る。また、西壁の走行が他の壁とは整った対応ではなく、そのため全体に不整形形状の印象を得る。



第135図 45号住居跡

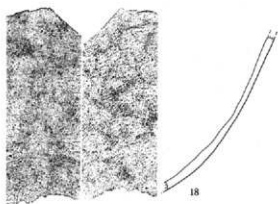
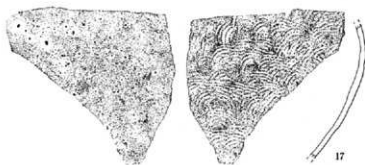
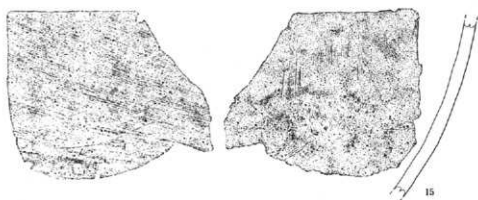
第115表 45号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cxy-29・30	不整形	493×435×33	N71°E	N72°E	貯蔵穴	坏6 埴3 蓋1 瓶1 甕7	



第136図 45号住居跡出土遺物(1)

第III章 検出された遺構と遺物



0 20cm

第137図 45号住居跡出土遺物(2)

## 第5節 奈良・平安時代の住居跡

第116表 45号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )部定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第136図 1 国版 71	口：(11.7) 高：(3.2)	約2/5 覆土下位	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部僅かに内傾する。体部～底部一体化し丸底を呈す。口縁部横撫で、体部～底部磨削りを施す。
第136図 2 国版 71	口：(14.0) 高：4.2	約1/3 覆土	①細 白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口径広い。口縁部短く僅かに内傾し、体部～底部一体化し丸底を呈す。口縁部横撫で、体部弱い撫で、底部磨削りを施す。
第136図 3 国版 71	口：(15.0) 高：—	約1/3 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口径広く器高もやや高い。口縁部短く直立し丸底底部と一体化する。口縁部横撫で、体部～底部磨削りを施す。
第136図 4 国版 71	口：(14.4) 高：4.2 底：6.2	約3/4 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁～体部僅かに内湾矢矧に一体化し底部は平底を呈す。口縁部横撫で、体部横位磨削り、底部磨削り。内面見込み部に凹線が走る。内面に磨紋は施さない。
第136図 5 国版 71	口：16.8 高：3.8	約2/3 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部強く外反し口径広い。体部～底部一体化し、器高は低く扁平な印象。底部は丸底。口縁部横撫で、体部～底部磨削りを施す。
第136図 6 国版 71	口：(16.0) 高：(4.3) 底：(10.2)	破片 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁～体部直線状に一体化し高台は極短く突出する。右回転轆轤整形。底部回転轆調整。高台削出。底面は再度粘土板を重ねた痕跡がある。
第136図 7 国版 72	口：— 高：— 底：(9.2)	底部破片 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ④須恵器	底部のみの残存。右回転轆轤整形。底部回転轆調整。高台削出。
第136図 8 国版 72	口：— 高：— 底：5.8	約2/3 底部 覆土	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ④須恵器	体部下半は直線状に立ち上がる。高台は短く直立する。右回転轆轤整形。底部回転轆素切り後高台貼付。貼付時刷毛撫で。
第136図 9 国版 72	口：— 高：— 底：(5.4)	床直上	①緻密 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部下半は彎曲をもって丸みを帯びる。底部は僅かに上げ底。右回転轆轤整形。底部静止直切りか。
第136図 10 国版 72	口：(13.0) 高：— 底：—	約1/4 床直上	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部低く丸みを帯び体部と一体化する。かえり部は内面に突出する。右回転轆轤整形。天井部回転轆調整。
第136図 11 国版 72	口：(23.0) 高：— 底：—	口縁部破片 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	口縁部強く外傾し頸部ノ字状に屈曲する。肩部の張りはやや弱い。口縁部横撫で後体部横位・斜位磨削り。内面撫では丁寧で平滑。
第136図 12 国版 72	口：(24.0) 高：— 底：—	口縁部破片 床直	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	口縁部強く外傾し頸部ノ字状に屈曲する。肩部の張りは強く体部上半～中位に影みを設ける。口縁部横撫で、体部磨削り。内面撫で。内外部面磨減著しく調整方法は判然としにくい。
第136図 13 国版 72	口：(33.4) 高：— 底：—	口縁部～ 体部破片 貯蔵穴内	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口径広い。口縁部強く外反。頸部～体部直線状に落ちる。左回転轆轤整形か。
第136図 14 国版 72	口：— 高：— 底：(16.5)	体部～ 底部破片 貯蔵穴内	①粗 小礫 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口径広い。体部は緩やかな彎曲を呈し立ち上がる。右回転轆轤整形。体部下半に回転磨削り。内面に磨削痕が看取される。

第3章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (m) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第137図 15 高 72 因版	口: - 高: - 底: -	腰部破片 床直上	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	大甕腰部破片。外面平行印キ、自然軸付着。内面凹環状当て目後撫で。
第137図 16 高 72 因版	口: - 高: - 底: -	腰部破片 床直上	①粗 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大甕腰部破片。外面撫で、内面当て目後撫で。
第137図 17 高 72 因版	口: - 高: - 底: -	腰部破片 床直上	①粗 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大甕腰部破片。外面撫で、自然軸付着。内面青海波状当て目。器厚比較的薄手。
第137図 18 高 72 因版	口: - 高: - 底: -	腰部破片 覆土下位	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③暗赤灰 ④須恵器	大甕腰部破片。外面平行印キ後撫で、自然軸付着。内面青海波状当て目。

深さは、残存状態の良好な西～南壁付近で約30cmを超えており、掘り込みもしっかりしていた。ただし、東壁は傾斜地形の影響を受け、10cm前後の遺存しかない。

床面は、緩やかな東側への傾斜が認められるものの、ほぼ平坦面が意識された貼床がなされていた。貼床は黄褐色ローム塊を主体とし、全域に広がるものである。硬化面は床面中央部に比較的広く確認され、竈周辺や西南隅、北西隅にまで及ぶ。

壁周溝は検出されなかった。柱穴は、明瞭な配置を持たないが、北西隅の小ピット1基を充てたい。

貯蔵穴は、東南隅に小型の円形土坑が検出された。暗褐色土を主体とした埋土である。

竈は、東壁中央やや南寄りに設けられる。馬蹄状の竈道部を突出し、極緩やかな凹みを燃焼部に持つ。袖は壁が利用され、南側と北側が不揃いな突出を見せる。北側の袖内側には自然石が置かれるが、袖芯材として捉えた。また自然石は、燃焼部～焚口部にまとも土出したが、燃焼面より浮いた状態であり、廃棄時の構築材崩落と考えた。

床下遺構は、床下調査を行ったが、明瞭な施設は検出されなかった。

遺物は、比較的多く出土したが、殆どが覆土上層中の出土であり細片が目立った。ただ、下層～床直出土の個体は、完形図示し得る個体であり、これら

を中心に18点を図示した。2・6・8以外は、住居跡断絶時の時期を示唆する。また2・6・8もほぼ同時期と捉えられよう。

#### 46号住居跡

調査区中央北よりのD区台地鞍部に位置する。C～D区住居群の西端にあたる。周辺は緩やかな東・北斜面地形で、本住居跡は、ほぼ平坦地形に占地するといえよう。

周辺の住居跡分布は比較的濃密で、北側～北西側には76号住居跡と89号住居跡が、東側には27号住・40号住が近接する。南側には近接する住居跡は見られず、また本住居跡は単独の検出であり、重複遺構は無い。

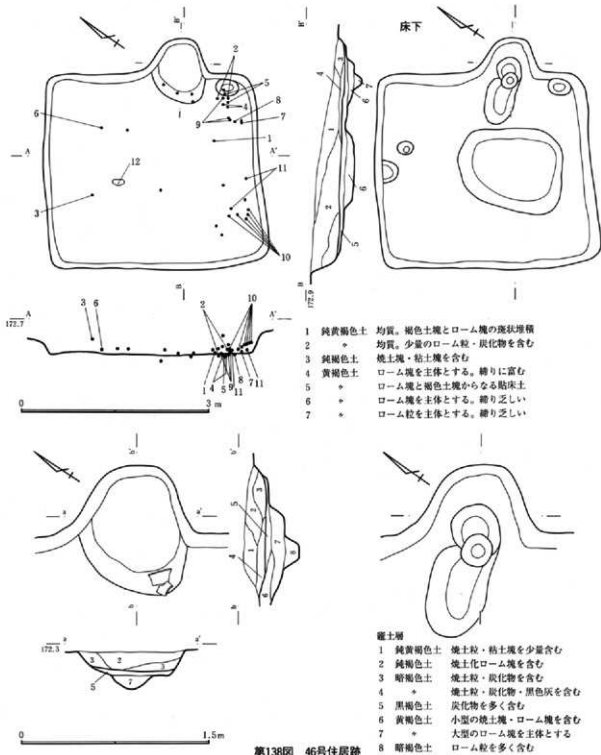
平面形は、約3.5×3.1mの整った正方形を呈し、主軸を東西方向に向く。南壁中位が緩やかに彎曲し、平面形全体に若干の乱れが見られる。

深さは約40cmを測り、良好な遺存状態を誇る。遺存の良い西壁や南壁の掘り込みはしっかりしていた。

床面は、平坦面を築く。黄褐色ローム塊と褐色土塊の混土による貼床が全面になされる。硬化面は北側壁以外に広範囲に認められ、中央部分～竈周辺が特に顕著だった。

壁周溝・柱穴は認められなかった。床下調査で検

第5節 奈良・平安時代の住居跡

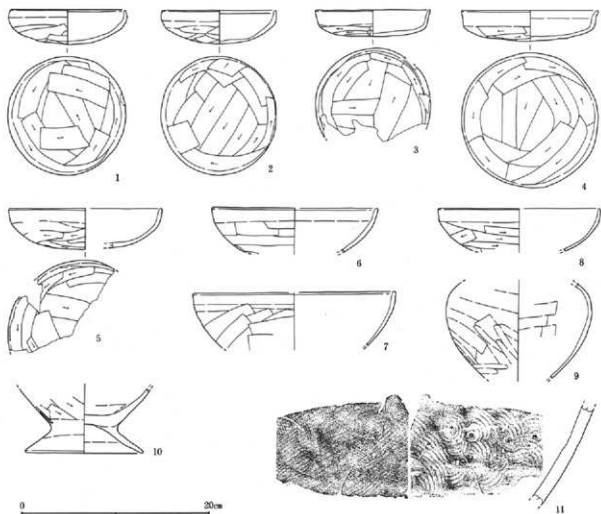


第138図 46号住居跡

第117表 46号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
DI-27・28	正方形	350×310×40	NS3°E	NS7°E	貯蔵穴 床下土塊	坏7 鉢1 台付壺1 类2	

第四章 検出された遺構と遺物



第139図 46号住居跡出土遺物

出された幾つかの小ピットは、規模・配置に妥当性がない。

貯蔵穴は、東南隅で検出された小型楕円状の土坑を充てた。約30cmの深さを測り、周囲には遺物が散乱していた。

竈は東壁中央やや南寄りに設けられる。馬蹄状の煙道部を突出し、燃焼部～焚口部に緩やかな掘り込みを持つ。焼土粒・炭化物の集が見られた。袖は顕著ではないが、壁の彎曲が利用されたものと考えられる。その他の構築材・補強材は、明瞭に検出されておらず、自然石等も見られない。僅かに焚口部に須恵器裏破片が認められたが、補強材として認定はできない。

床下調査によって、床面下中央～南壁にかけて大

型の不整形の土坑を検出した。黄褐色ローム塊を主体とする埋土で、床下土坑として位置付けたい。また、竈使用面下も小型の土坑が複数重複状態で検出されたが、竈構築時の所産と捉え、特に焚口部～燃焼部で検出された小ピットは、支脚等の施設の痕跡であろうか。

遺物は、多く出土した。11点を個体図示した。覆土下層～床直の遺物が目立ち、平面的には、南半に集中する。土師器環の出土が主体であり、本住居跡の時期確定には好資料を提供するが、日常什器と煮沸具の良好な器種組成は明示していない。什器にやや偏った出土である。



第118表 46号住居跡遺物観察表

図 番 号 器 種	法 量 ( ) 推 定 値	残 存 率 出 土 状 態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 ( 形 態 ・ 手 法 等 )
第139図1 環 版 72	口：12.1 高：3.6	ほぼ成形 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土師器	口縁一底部強く内彎し底部丸底を呈す。やや扁平な印象。口縁部横撫で、 体部弱い撫で、底部磨削り。内面器壁割落。
第139図2 環 版 72	口：12.0 高：3.5	一部欠損 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③黒褐色 ④土師器	口縁部僅かに内彎し、体部一底部一体化する。底部丸底を呈す。口縁部 横撫で、体部強い撫で、底部磨削り。内面器壁割落。
第139図3 環 版 72	口：11.8 高：2.9	約3/4 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部外縁気味に直立し体部一底部扁平。口縁部横撫で、底部磨削り。 内面器壁割落。
第139図4 環 版 72	口：14.3 高：3.3	一部欠損 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	口縁・底径とも広くやや大型。口縁部外反気味に直立する。体部一底部 扁平。口縁部横撫で、底部磨削り。内面器壁割落。
第139図5 環 版 72	口：(16.0) 高：4.3	約1/3 貯蔵穴内	①細 白色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部僅かに外傾し、体部一底部一体化し丸底を呈す。口縁部横撫で、 体部一底部磨削り。体部に彫膚状皺が看取される。内面一部割落するも 丁寧な撫で。
第139図6 環 版 72	口：(17.4) 高：-	約1/4 床直上	①細 白色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	身深。口縁一体内彎し一体化する。底部は丸底か。口縁部横撫で、体 部横位磨削り。
第139図7 鉢 環 版 72	口：(21.1) 高：-	約1/5 床直	①細 白色粒・石英 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	身深。口縁部僅かに直立気味だが内彎する体部と一体化する。底部は丸 底か。口縁部横撫で、体部横位・斜位磨削り。
第139図8 環 版 73	口：(17.0) 高：-	約1/4 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	身深。口縁部僅かに直立気味で内彎する体部と一体化する。底部は丸底 か。口縁部横撫で、体部横位・斜位磨削り。内外面器壁割落。
第139図9 甕 環 版 73	口：- 高：- 底：-	体部約1/2 床直	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍黄褐色	小型甕。肩部は強く張り、体部上半に膨らみを設ける。外面横位・斜位 磨削り後下半縦位指撫で。平滑面を持つ。内面横位磨撫で
第139図10 台付甕 環 版 73	口：- 高：- 底：12.3	底部一臀部 覆土下位	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍黄褐色 ④土師器	台付甕臀部。体部下半は内彎気味に立ち上がり、臀部は比較的長く直線 状に開く。体部は斜位磨削り、接合部・臀部は入念な横撫で。体部内面 は横位磨撫で。臀部内面は丁寧な撫で。
第139図11 甕 環 版 73	口：- 高：- 底：-	体部破片 床直上	①粗 石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	大甕体部破片。外面平行叩き後撫でを加える。内面青海波状当て目、弱 い撫でを施す

## 47号住居跡

調査区中央北のC区台地鞍部に位置する。C-D  
区住居群のほぼ中央にあたり、緩やかな東・北斜面  
地形に占地する。

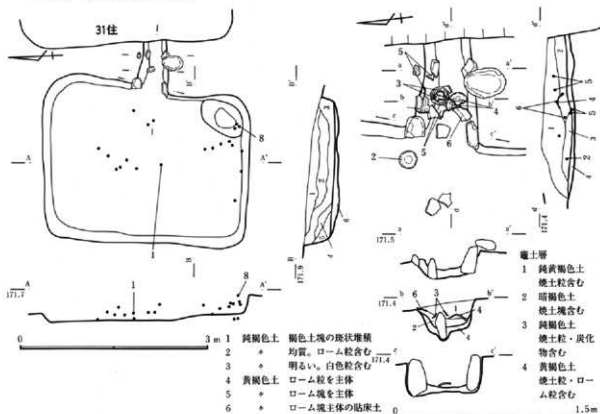
周辺は、住居跡が密集し、重複住居が群在する。  
本住居跡は、竈煙道部東端を31号住西壁と重複し、  
79号住居跡と北東隅が重なる。また、近接する住居  
跡として、26号住が北西約2mに位置する。

平面形は、長軸を南北に持たせる横長長方形を呈  
し、規模は約3.2×2.6mと小型である。北辺と南辺  
の長さに若干の差が見られるが、比較的整然とした  
形態である。

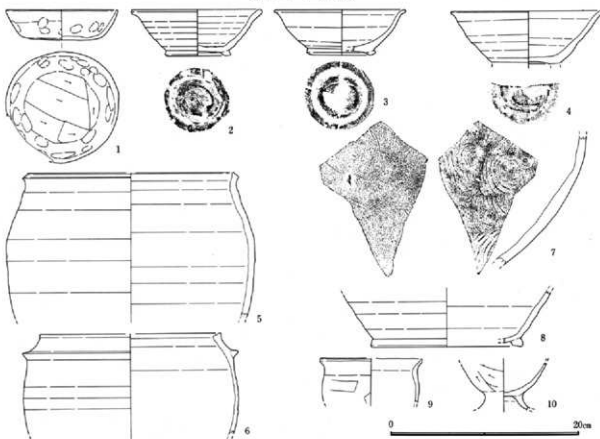
深さは約40cmを測り、北壁の遺存がやや悪いもの  
の、全体にしっかりした掘り込みだった。

床面は、僅かな凹凸が見られるものの、ほぼ平坦  
面を築き、黄褐色ローム塊による貼床が全面になさ

第三章 検出された遺構と遺物



第140図 47号住居跡



第141図 47号住居跡出土遺物

第119表 47号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×高さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dab-28・29	長方形	320×262×38	N96°E	N96°E	貯蔵穴	坏1 埴3 蓋4 羽釜1 台付壺1	31・79住 台付壺1

第120表 47号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第141図 1 坏 73 図版	口：11.7 高：3.1 底：8.0	ほぼ完形 床直上	①粗 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③明褐色 ④土師器	口縁一部はやや彎曲気味に一体化する。底部平底。口縁部横撫で、体部弱い撫で指痕残る。底部見開り。腰部に製膚状痕着。内底面凹凸顯著。見込み部に指痕残。
第141図 2 埴 73 図版	口：13.5 高：4.9 底：6.9	完形 竈内	①粗 片岩・白色粒 ②還元焰気味 ③橙色 ④須恵器	口縁部外反し体部中に僅かな丸みを帯びる。高台は短く開く。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第141図 3 埴 73 図版	口：13.8 高：4.8 底：6.1	ほぼ完形 竈内	①粗 片岩・白色粒 ②還元焰気味 ③灰白色 ④須恵器	口縁部外反し体部中に丸みを帯びる。高台は短く開く。均整のとれた器形。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第141図 4 埴 73 図版	口：15.9 高：— 底：—	約3/5 竈内	①粗 片岩・石英 ②還元焰気味 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部は直線状に開く。高台剥落。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第141図 5 壺 73 図版	口：(21.6) 高：— 底：—	口縁部一 体部破片 竈内	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部短く緩やかに外反する。肩部は張らず体部中に膨らみを設ける。右回転軸輪整形。
第141図 6 羽釜 73 図版	口：(19.0) 高：— 底：—	約1/3 口縁部 竈内	①粗 片岩・石英 ②還元焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	口唇部僅かに外傾。口縁一部強く内彎し一体化する。肩は断面三角でほぼ水平に付される。右回転軸輪整形後磨付。貼付時周縁撫で。器厚薄手。
第141図 7 壺 73 図版	口：— 高：— 底：—	体部破片 覆土	①粗 石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	大壺体部破片。外面平行き後撫で、自然輪付着。内面青海波状当て目。
第141図 8 壺 73 図版	口：— 高：— 底：(16.0)	底部破片 覆土	①敷密 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	体部は直線状に開く。あるいは上端は屈曲部か。高台は短く開き気味に付される。左回転軸輪整形。体部下半は回転鏡調整。底部切り離し技法不明。
第141図 9 壺 73 図版	口：(10.6) 高：— 底：—	約1/4 口縁部 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③橙色 ④土師器	小壺壺。口唇部直上。口縁部は短く開く。肩部屈曲は緩やかで体部の張りも弱い。口縁部横撫で、体部横位見開り後撫でを加える。内面撫で。
第141図 10 台付壺 73 図版	口：— 高：— 底：—	体部一 脚部破片 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	小型の台付壺。あるいは9と同一個体か。体部下半は丸みを帯びて立ち上がり、脚部は彎曲気味に開く。体部は縦位・斜位見開り。接合部・脚部は横位撫で。脚部内面の撫では丁寧。

れていた。

壁周溝・柱穴は検出されなかった。  
貯蔵穴は、東南隅壁際にやや大型の不整楕円状土坑が確認された。暗褐色土を基調とした埋土である。周辺には、遺物の散布も見られた。

竈は東壁ほぼ中央に設けられる。煙道部を強く突

出し、端部は31号住居壁と重複する。新旧関係は不明である。燃焼部一焚口部は緩やかな凹みが見られ、焼土粒・炭化物の集中が見られた。

燃焼部中央やや北寄りには支脚が立てられ、支脚上端には、須恵器柄が逆位に覆っていた。さらにその南側にも、須恵器柄の逆位の出土が見られ、支脚

### 第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

に係わる、高さの調整等が行われていた痕跡と思われる（b-b'）。

袖は、明瞭な突出は見られないが、壁の彎曲ははっきりしており、袖芯材として自然石が立てられていた（c-c'）。

その他の構築材・補強材として、燃焼部奥の両壁にも自然石が補強され、大型の自然石が上端に置かれていた。大型の自然石は天井材の可能性が高い。また、燃焼部壁には、須恵器甕・羽釜破片が見られ、これらは、煮沸具としてよりも、補強材として位置付けられよう。

床下調査を行ったが、床下遺構として明瞭な掘り込みも認められなかったため、図示には至っていない。

遺物は比較的多く出土したが、多くが竈内の出土である。前述の支脚に係わる須恵器碗（3・4）、補強材として須恵器甕（5）、羽釜（6）、さらに焚口部には須恵器碗（2）が出土している。土師器杯（1）は床面中央床直上から出土した。

#### 48号・64号住居跡

調査区東側のC区東斜面に位置する。C～D区住居群の東側にあたる。

周辺は、斜面地形とはいえ、台地頂部の緩やかな斜面地形であり、本住居跡周辺には、多数の住居跡が密集して検出されている。

48号住居跡（以下本住居跡）西側には64号住居跡が重複し、本書で一括して報告する。その西側には36号住、東側には17号住・34号住が重なる。また北側には18号住が、南側約5mには35号住や113号住居跡が近接する。

本住居跡は調査当初、64号住を含んだ平面形を確認し、縦長の単独住居跡として調査を進めた。その結果、段差が認められ、2軒の重複住居であることが判明した。本書では2軒を一括して掲載するが、両住居の関連性は極めて薄いものである。

（48号住）

平面形は、主軸を東西の長軸に一致させる縦長の

隅丸方形である。規模は、約4.1×3.9mの比較的大型の部類に入る。南壁中に緩やかな彎曲が見られるが、整った形状である。

深さは、約70cmであり、重複遺構はあるものの良好な遺存状態を誇る。東壁北側部分の壁が逸失しているが、他の壁の掘り込みもしっかりしていた。

床面は、中央から東側にやや傾斜が認められるが、ほぼ平坦面が意識される。黄褐色ローム塊による貼床が全域になされ、硬化面も中央部分を中心に広い範囲で確認された。特に竈周辺の床面は硬く締められた様相を呈す。

壁周溝・柱穴は認められなかった。貯蔵穴も適当な掘り込みが無く、検出されていない。ただし、東南隅の壁の彎曲が著しく、あるいは貯蔵穴相当の施設が存在していた可能性はある。

竈は、東壁中央やや南寄り に設けられる。煙道部を壁外に突出し、壁を利用した袖が確認された。燃焼部～焚口部の凹みは無かったが焼土・炭化物・黒色灰の堆積は顕著だった。

遺物は比較的多く出土した。覆土下層～床直の個体が多く、13点を図示した。土師器杯（2）・土師器甕（5）・須恵器甕体部破片（13）以外は、概ね本住居跡廃絶時期を現わすものである。竈焚口部出土の土師器甕（5・6）は煮沸具としての位置付けが可能である。

尚14は鉄器刀子、15～18はこも網石である。

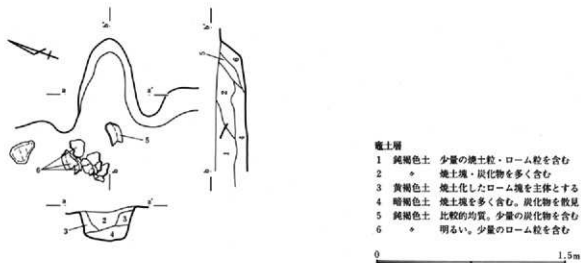
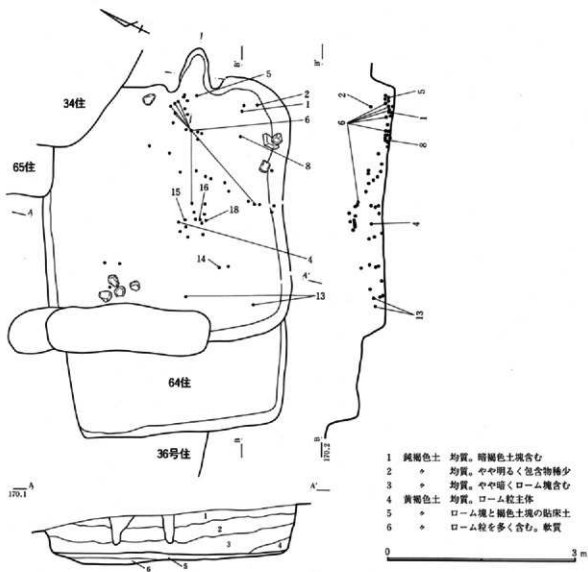
（64号住居跡）

48号住西側に検出された住居跡である。単軸長約3.5m、深さ約50cmを測る。壁の掘り込みもしっかりしていた。

床面は、黄褐色ロームを地床とする。硬化面は認められなかった。柱穴・貯蔵穴等の施設も検出されなかった。

遺物は極少量が出土したが細片であり、図化し得なかった。

48号住との新旧は、判然としない部分が多いが、おそらく、48号住が64号住を切る関係と思われる。



第142図 48・64号住居跡

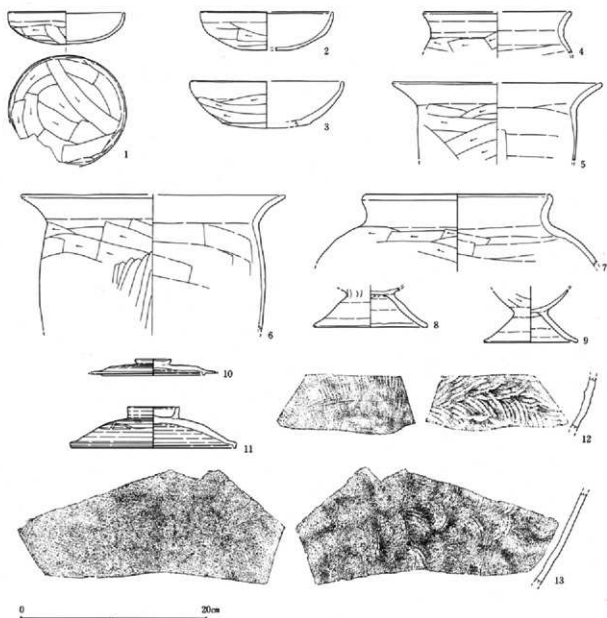
第三章 検出された遺構と遺物

第121表 48号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cw-27・28	隅丸長方形	415×387×69	N63°E	N71°E		坏3 釜2 甕6 台付甕 2 金属器1	34・36・64 ・65住

第122表 64号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cw-27・28	—	—×350×48	—	—			36・48住



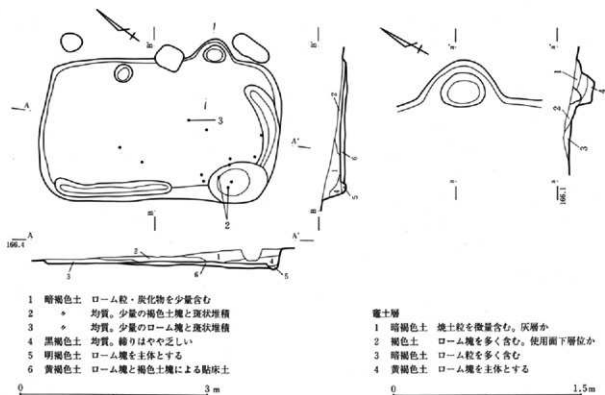
第143図 48号住居跡出土遺物

## 第5節 奈良・平安時代の住居跡

第123表 48号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第143図 1 坏 図版 73	口：12.4 高：3.5	約4/5 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部僅かに内彎し、体部一底部一体化して扁平。底部丸底を呈す。口縁部横溝で、体部弱い撫で、底部丸削り。内底面凹凸顯著。
第143図 2 坏 図版 73	口：(14.0) 高：(4.1)	約1/4 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ③褐色 ④土師器	口縁部内彎し体部上半と一体化する。体部下半は直線状に開く。底部は丸底か。口縁部横溝で、体部弱い撫で、底部丸削り。
第143図 3 坏 図版 73	口：(16.0) 高：(5.0) 底：(9.4)	約1/3 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	器高高い。口縁一内部内彎気味に一体化する。底部は平底ながら不安定。口縁部横溝で体部横溝・斜位丸削り。底部丸削り。内面磨盤状落。
第143図 4 美 図版 73	口：(15.4) 高：— 底：—	約1/4 口縁部 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	やや小型。口縁部外傾し頸部緩やかに屈曲する。肩部の張りはやや強い。口縁部横溝で後体部上半横位丸削り。体部内面横位丸削り。
第143図 5 美 図版 73	口：(22.0) 高：— 底：—	口縁部破片 壺内	①細 白色粒・石英 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部強く外傾し頸部緩やかに屈曲する。肩部の張りは弱く、脚らみを設けない体形懸か。口縁部横溝で、体部横溝・斜位丸削り。体部内面横位丸削り。器面磨減。
第143図 6 美 図版 73	口：28.0 高：— 底：—	体部1/2 口縁部下 位	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部強く外傾し頸部緩やかに屈曲する。肩部の張りは弱く体部の膨らみも少ない。口縁部横溝で、体部上半横位丸削り、中位一下半横位丸削りが加わる。体部内面横位丸削り。
第143図 7 美 図版 73	口：(19.4) 高：— 底：—	口縁部破片 覆土	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	口唇部内面に僅かに突出。口縁部外傾し頸部緩やかに屈曲する。肩部の張りは強く球脚状の体部器形小。口縁部横溝で体部横位丸削り。体部内面は横位丸削り。器厚厚手。
第143図 8 台付美 図版 73	口：— 高：— 底：(11.8)	脚部1/4 底部一 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③純褐色 ④土師器	台付美脚部。脚部はやや短く強く開く。脚部内外面とも横位丸削り。接合部内外面とも指面痕残る。内底面凹凸顯著。
第143図 9 台付美 図版 73	口：— 高：— 底：(9.8)	脚部1/4 底部一 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③純褐色 ④土師器	台付美脚部。体部下半は丸みを帯びて開く。脚部はやや長く彎曲をもって広がる。体部下半横位丸削り、脚部横位丸削り。脚部内面横位丸削り。
第143図 10 美 図版 73	口：(10.6) 蓋高：(1.8) 横：3.7	約1/5 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	天井部低く環状溝を付す。天井部平出で腹部彎曲する。腹部端は突出し鋭く、かえり部は内面に設けられる。右回転縦軸整形。天井部回転縦調整後横貼付。
第143図 11 蓋 図版 74	口：(17.3) 高：4.4 横：(5.3)	約1/2 覆土	①粗 白色粒石英 ②還元焰 ③明オリーブ 灰色 ④須恵器	天井部高く柱状溝を付す。天井部平出で体部一腹部緩やかに彎曲しかえり部は短く内傾する。右回転縦軸整形。天井部回転縦調整後横貼付。重ね焼き痕及び穴挿痕明瞭。
第143図 12 美 図版 74	口：— 高：— 底：—	体部破片 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大薬体部破片。外面平形明き後弱い撫で。内面青海波状当て目明瞭。
第143図 13 美 図版 74	口：— 高：— 底：—	体部破片 覆土	①粗 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大薬体部破片。外面平形明き。内面青海波状当て目、面い撫でが加わる。

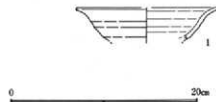
第11章 検出された遺構と遺物



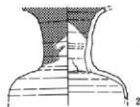
第144図 50号住居跡

第124表 50号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	電方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cno-29・30	隅丸長方形	392×357×22	N56°E	N60°E	壁周溝	陶1 長形壺1	



第145図 50号住居跡出土遺物



第125表 50号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(cm) ( )標定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第145図 陶版 74	口：(14.6) 高：— 底：—	約1/5 床直上	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化値気味 ③純黄褐色 ④肌患部	口縁部強く外反し、体部中位に丸みを持たせる。右回転軸線整形。
第145図 長頸壺 陶版 74	口：— 高：— 底：—	頸部—肩部 —床直上	①緻密 ②還元焰 ③灰白色 ④灰軸陶器	口縁部外反し頸部緩やかに開く。肩部は張る。右回転軸線整形。頸部は潰け掛りか。



## 50号住居跡

調査区東側のC区東斜面裾部に位置する。周辺は東側から北側への急斜面地形であり、遺構密度も少ない。

単独の検出であり、周辺の住居跡としては、西側に51号住居跡が近接する以外に見あたらない。南側に10m程の距離をおいて130号住が立地する程度である。ただ、土坑群は26～29号坑が北側に群在する。

平面形は、主軸を南北方向に向く、横長の隅丸長方形で、規模は約3.9×3.5mの小型の住居である。

深さは、約20cm前後で、西壁と南壁の掘り込みはしっかりしていたが、全体に浅く、遺存状態はやや悪い。

床面は、ほぼ平坦面を築く。黄褐色ロームと暗褐色土塊の混土による貼床が全面になされ、硬化面は、中央部分を中心に若干狭い範囲で確認された。

壁周溝は、西壁の北半及び南壁で検出された。南壁の周溝は彎曲が強く、南東隅部で壁から離れる走行を取る。

柱穴は、無柱穴と判断できるが、東壁際北側に、小ピットが検出されている。可能性はある。

貯蔵穴は、南西隅で検出された、やや大型の不整形円状の土坑を充てたい。少量ながら遺物の散布も認められた。

竈は、東壁南寄りに設けられる。小型で、半円状の煙道～燃焼部を壁外に突出する。燃焼部には小型の土坑状の凹みを設ける。袖・構築材の痕跡・出土は無かった。

床下調査では、緩やかな凹みや小穴が検出されたが、人為的な所産とは認められず、床下土坑等は検出されなかった。

遺物は、少量が出土した。遺存状態からほぼ床直に相当する出土状況だが、細片が多く、2個体が図示し得たのみである。磨石状の円礫(3)も出土している。

## 51号住居跡

調査区東側のC区東斜面裾部に位置する。周辺は東側から北側への急斜面地形であり、遺構密度も少ない。

50号住と同様に単独の検出であり、近接する住居跡は、東約3mに位置する50号住のみである。

平面形は、主軸を長軸に持つ、若干縦長の正方形で、規模は3.1×3.0と小型住居である。各辺とも直線状をなし比較的整った形態といえよう。

深さは約40cmだが、斜面地形の影響を受けた東壁及び北壁は、僅か数cmに過ぎず、遺存状態は良好とは判断できない。

床面は、僅かな凹凸が見られるものの、ほぼ平坦面を築き、黄褐色ローム塊と鈍褐色土塊の混土による貼床が全面になされていた。硬化面は、中央部分一帯周辺にかけて、比較的広い範囲で確認された。

壁周溝は、南壁西半より西壁・北壁西端にかけて半周する形態で確認された。しっかりした掘り込みである。

柱穴は、妥当性を帯びる配置として、床面中央西南寄りなもの、中央やや北寄りなもの2基が挙げられる。また、北東隅の小ピット、北側中央の斜線のピットも可能性はある。

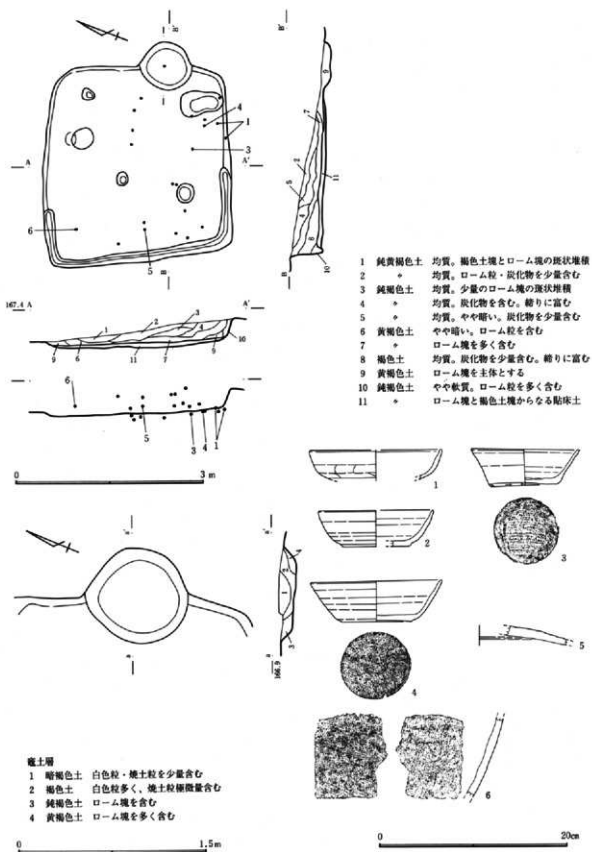
貯蔵穴は、東南隅に南北を長軸にする不整形円上の土坑が検出されている。炭化物を含む暗褐色土を基調とした埋土である。

竈は、東壁中央南寄りに設けられる。半円状の煙道～燃焼部を壁外に突出し、焚口部にかけて浅い掘り込みを有す。袖・天井材等の構築物や補強材は検出されなかった。

床下遺構は、調査の結果、良好な施設は得られなかった。

遺物は、少量が覆土下位～床直で出土している。中央部分から南西にかけて分布が広がるが、特に濃密な箇所は無い。土師器環(1)や須恵器環(3・4)が貯蔵穴南の床直より出土している。

第三章 検出された遺構と遺物



第146図 51号住居跡

第126表 51号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×高さ	住居方位	方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cp4-29・30	正方形	315×300×37	N67°E	N72°E	貯蔵穴 壁周溝	坏1 蓋1 甕1	

第127表 51号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(m) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第146図 1 坏 底版 74	□:(15.0) 高: - 底: -	破片 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化胎 ③褐色 ④土師器	口縁部は外傾し体部は扁平。底部は丸底か。口縁部横溝で、体部弱い溝で、底部丸削り。体部に型潰しの痕を看取。
第146図 2 坏 底版 74	□:(12.1) 高:(3.8) 底:(7.1)	約1/4 覆土	①密着 ②還元胎 ③灰色 ④須臾器	口唇部尖り、口縁一体部僅かに内彎気味に一体化する。体部下手に彎曲を持たせ底部やや突出する。内面見込み部明瞭。右回転軸調整形。底部回転調整後溝を加える。
第146図 3 坏 底版 74	□:11.3 高: 3.8 底: 6.9	約3/4 床直	①細 石英 ②還元胎 ③暗灰色 ④須臾器	口縁一体部僅かに外彎気味に一体化する。底部若干上げ底。内面見込み部明瞭。右回転軸調整形。底部静止承り後外縁及び腹部に手持ち丸削りが及ぶ。
第146図 4 坏 底版 74	□: 1.8 高: 4.3 底: 7.3	約1/2 床直	①細 石英 ②還元胎 ③灰白色 ④須臾器	やや大振りの坏。口縁一体部直線状に一体化して開く。体部下手に彎曲を持たせ、底部若干上げ底を呈す。左回転軸調整形。底部回転調整。
第146図 5 蓋 底版 74	□: - 高: - 底: -	破片 覆土下位	①細 白色粒 ②還元胎 ③灰色 ④須臾器	大型の蓋。遺存は不良。天井部低く、扁平な印象。桶形状は不明。右回転軸調整形。天井部回転調整後溝横付。外面に薄く自然釉付着。
第146図 6 甕 底版 74	□: - 高: - 底: -	体部破片 覆土下位	①粗 白色粒・石英 ②還元胎 ③灰色 ④須臾器	外面平行押き後溝を加える。内面青海波状当て、撫で。

## 52号住居跡

調査区東-C区東斜面部の裾部下位に位置する。周辺はほぼ平坦地形ともいえる東斜面地形ながら本住居跡南も若干傾斜が強くなる。

重複する住居跡として後述する53号住居跡が、本住居跡の西側に重なる。他の周辺住居跡は単独の占拠地であり、近接する住居跡として、10号住が北側に、11号住が北西に位置する。

平面形は、比較的整然とした隅丸正方形を呈し、規模は約3.4×3.2m程のやや小型の住居跡である。深さは約20cm程度で浅く、壁の立ち上がりも緩やかである。特に南壁は、傾斜地形のため、立ち上がりを確認できなかった。

床面は、僅かな凹凸が見られるものの、ほぼ平坦面を築く。黄褐色ローム塊主体の貼床が全面にさ

れていた。硬化面は床面中央に比較的狭い範囲で確認された。

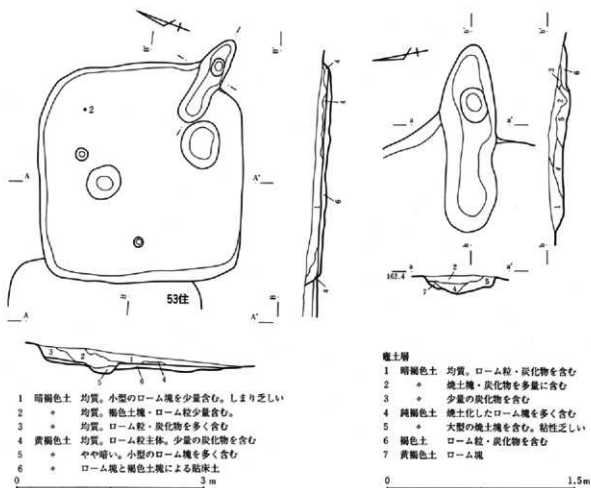
壁周溝・柱穴は検出されなかった。中央北西寄りに小型の土坑1基と小ピット2基が確認されたが、柱穴としては確定できない。

貯蔵穴は、竈焚口部の西に設けられる。住居南東隅からややずれた箇所であり、特徴的である。不整円形の浅い土坑である。

竈は、南東隅に煙道部を壁外に強く突出して設けられる。焚口部にかけて長楕円形の掘り込みを持つ。燃焼部中央やや南側には、小ピットが検出されたが支脚抜き穴であろうか。尚、袖・天井材等の構築物は顕著ではなかった。

遺物は少なく、覆土中より数点の土師器小破片が出土した。坏1点のみが図示し得た。

第三章 検出された遺構と遺物



第147図 52号住居跡

第128表 52号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cde-26・27	正方形	345×324×18	N70°E	N101°E		坏1	53住 49坑

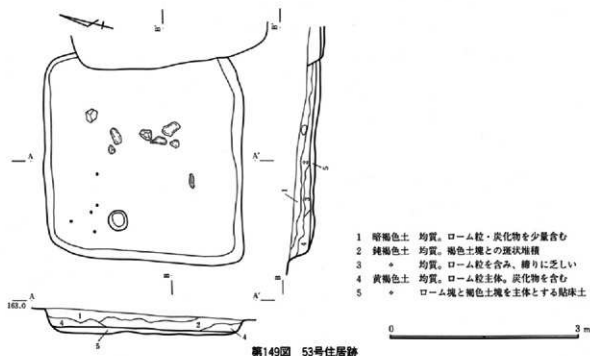


0 20cm

第148図 52号住居跡出土遺物

第129表 52号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形製・手法等)
第148図 1 図版 74	口:(12.1) 高:-	破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化磁 ①橙色 ④土脚部	遺存不良。口縁部直立し体部一底部開く。口縁部横溝で、体部一底部施 刷り。



第149図 53号住居跡

第130表 53号住居跡計測表

位置 (市東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	庭方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cef-27	不整形	—×316×30	N74°E	—			

## 53号住居跡

52号住の西側に重複して検出された。調査区東一C区東斜面部の裾部下位に位置し、周辺はほぼ平坦地形ともいえる東緩斜面地形ながら、本住居跡南も若干傾斜が強くなる。

10号住が北側に近接し、その他では、北西に近接する11号住との間に48号坑が見られる。

平面形は、52住との重複のため判然としないが、辺長約3m前後の隅丸長方形を呈すると思われる。深さは、約30cmと比較的深く、壁の掘り込みもしっかりしていた。

床面は、ほぼ平坦面を築くが極僅かな南側への傾斜が見られる。黄褐色ローム塊と褐色土塊による貼床が全面になされていた。硬化面は認められなかった。

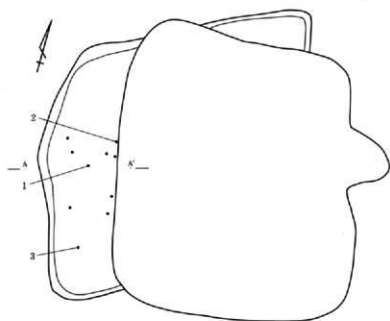
壁周溝・柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。柱穴

に関しては、北西隅に見られる小ピットに可能性が求められるが、やや浅く確定的ではない。

竈も、52住に切られる重複関係のため確認できなかった。

遺物は、少量が出土した。須恵器・土師器細片であり、図化には至らなかった。高、覆土中より自然石が中央やや東寄りにまとまって出土した。藁網石ではなく、自然石の流入・あるいは廃棄と捉えた。

第10章 検出された遺構と遺物



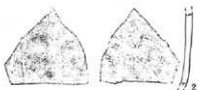
第150図 54号住居跡

- 1 黄褐色土 ローム粒を多く含む  
 2 黄褐色土 均質。褐色土塊と斑状埋積  
 3 + 均質。2よりやや明るい  
 4 \* 均質。ローム粒主体

0 3m

第131表 54号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dxy-28・29	不整長方形	—×—×38	—	—		坏1 壺1	30-45・78 住



0 20cm

第151図 54号住居跡出土遺物

第132表 54号住居跡遺物観察表

図番号 器種	流量(cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴(形態・手法等)
第151図 1 坏 図版 74	口:(12.9) 高:(3.8) 底:(7.4)	約1/5 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	遺存不良。口縁部僅かに外反し。体部緩やかな丸みを帯びる。右回転軸線 整形。底部回転未切り後無調整。
第151図 2 壺 図版 74	口:— 高:— 底:—	体部破片 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③オリーブ灰 色 ④須恵器	外面平行引き後擦でを加える。内面背薄波状当て目。

## 54号住居跡

調査区中央北のC区台地鞍部に位置する。C～D区住居群のほぼ中央にあたり、緩やかな東・北斜面地形に占地する。

周辺は住居跡が密集し、重複住居が群在する。本住居跡も、30号住と45号住が重複する。また、南東には35号住が、北東には36号住、北西には31号住・78号住居跡が近接する。

30号住との新旧は、30号住が本住居跡を切る土層を確認した。

30号住との重複のため、平面形は判然としない。北東・北西・南西の隅が確認されているが、いずれも、各辺が整然とした対応関係ではなく、不整形方形の平面形と思われる。

規模は、辺長約4.3m前後と思われる、やや大型である。深さは、約40cmと深く掘り込みもしっかりしているが、遺存部分は非常に少ない。

床面も判然としないが、黄褐色ロームの地床と思われる。硬化面は確認されていない。

壁周溝・柱穴・貯蔵穴とも確認できなかった。

遺物は、西壁際の覆土中より数点の須恵器破片を見たが、細片が主体であり、本住居跡に伴う遺物ではない。30号住等からの流入によるものと考えた。2点を図示した。

## 55号住居跡

調査区中央北側の台地鞍部で検出された。周辺は緩やかな北側への斜面で、本住居跡より西側は西斜面地形が続く。西斜面には、数軒の住居跡がまとめて検出されており、これをD区西斜面住居群として位置付けた場合、本住居跡は東群に位置する。

周辺の住居跡は、東側に76号住居跡と89住居跡が、南西に56号住が近接する。また、その他の遺構として、西側には2号溝が南北に走行し、北側は112号～114号坑が群在する。本住居跡自体は単独の検出となった。

平面形は、比較的整然とした隅丸正方形を呈し、規模が約3.0×2.7mの小型の住居跡である。北辺と

南辺長にやや差がみられるため、若干不整形を呈するが、全体には整った形状である。

深さは、約50cmを測り、壁もしっかりした立ち上がりを見せる。遺存状態は、非常に良好な住居跡である。遺存状態が良好なため、平面形確認時に、明確な線が確定できず、特に北東側が判然としなかった。試掘坑を設定し北東隅を確認したため、住居跡北壁は他の壁に比して浅く検出した。

床面は、緩やかに北側へ傾斜するが、平坦面は意識されている。黄褐色ローム塊を主体とした貼床が全面になされ、硬化面も床面中央を中心に比較的広い範囲で検出された。特に竈周辺が顕著だった。

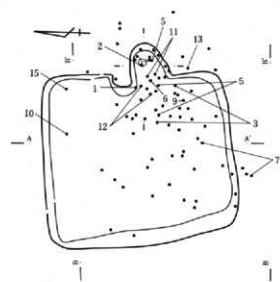
壁周溝・柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、東壁中央やや南よりに設けられる。主軸方位を住居主軸方位と差を持たせ、馬蹄状の煙道部を壁外に突出し、北側袖を壁の突出で防ぐ形態である。煙道部奥壁際がやや凹むものの、燃焼部～焚口部はほぼ平坦である。焼土粒・炭化物の堆積が顕著だった。また、燃焼部中央やや北寄りには自然石が立位で出土した。支脚と捉えられる。その他の構築材・補強材は明瞭な状態ではないが、出土した須恵器壺破片等は燃焼部の補強材と考えられる。伴出する土師器壺・須恵器坏類は煮沸具・什器として位置付けられるが、支脚の高さの調整材としても、考えを巡らせておく必要はあろう。

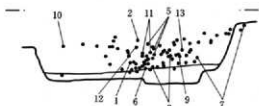
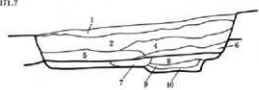
床下遺構は、南側で径約1.3mの不整形の土坑が検出された。床下土坑である。

遺物は、覆土上層より床面まで、比較的多く出土した。竈周辺一中央・南西隅に散布する傾向が顕著されよう。また、上層と床直の出土遺物の時間的な差が見られず、住居跡廃絶時の遺物一括廃棄が想定されよう。13点を図示した。

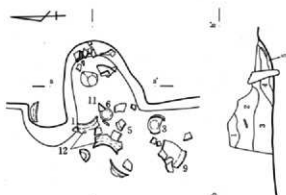
第三章 検出された遺構と遺物



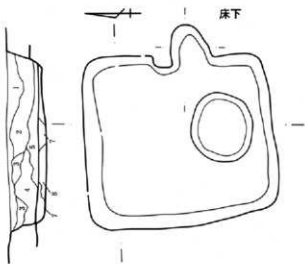
171.7



0 3 m



171.8



- |    |      |                         |
|----|------|-------------------------|
| 1  | 暗褐色土 | 砂質。やや締り乏しく暗い。ローム粒を含む    |
| 2  | *    | 均質。ローム塊と褐色土塊の斑状埋積、炭化物含む |
| 3  | *    | 均質。硬く締まる。塊状の埋積。ローム粒含む   |
| 4  | 鈍褐色土 | 均質。ローム粒・炭化物を多く含む        |
| 5  | *    | 均質。明るい。ローム粒を多く含む        |
| 6  | 黄褐色土 | 均質。ローム粒を主体とする。炭化物を少量含む  |
| 7  | *    | 暗褐色土塊・ローム塊を多量に含む。締り乏しい  |
| 8  | *    | ローム塊主体の結床土              |
| 9  | *    | 暗褐色土塊とローム塊からなる床下土埋埋土    |
| 10 | *    | ローム塊主体の床下土埋埋土           |

礎土層

- |   |      |                 |
|---|------|-----------------|
| 1 | 暗褐色土 | ローム塊と炭化物を含む     |
| 2 | 鈍褐色土 | ローム粒・炭化物・焼土粒を含む |
| 3 | 黄褐色土 | 炭化物を少量含む。締りに富む  |
| 4 | 赤褐色土 | 焼土塊を主体とする。炭化物含む |
| 5 | *    | 焼土粒・灰を主体とする     |

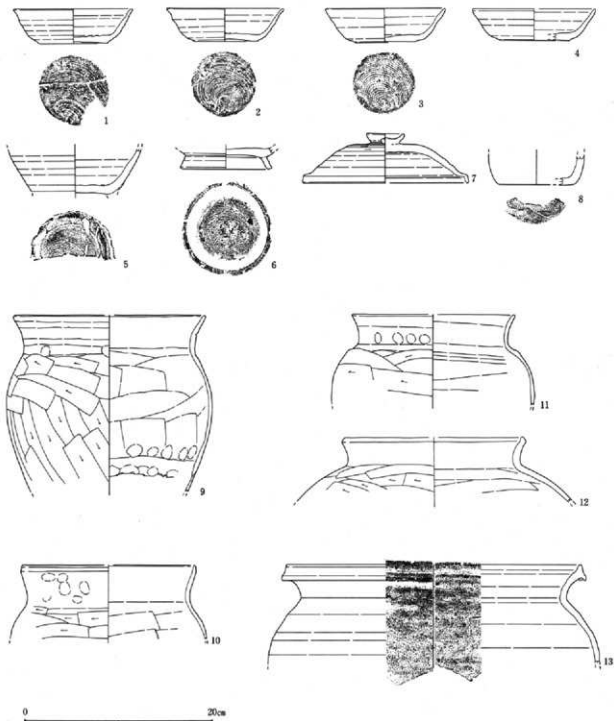
0 1.5 m

第152図 55号住居跡



第133表 55号住居跡計測表

位 置 (市東隅)	平 面 形	規 模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	風 方 位	主 な 施 設	主 な 遺 物	重複遺構
Dh1-25	不整形	308×273×50	N86°E	N83°E	床下土坑	坏4 埴1 蓋1 瓶2 甕5 金属器1	

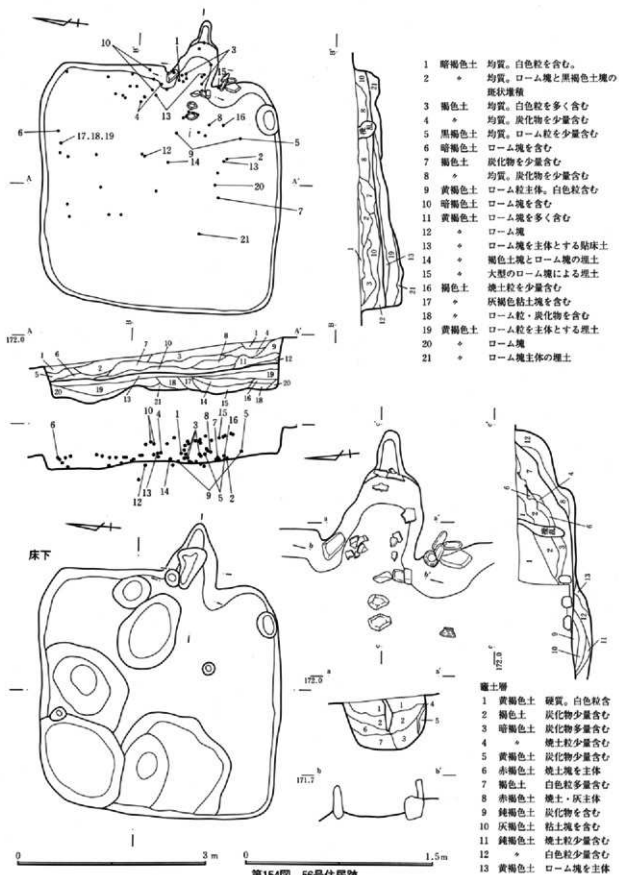


第153図 55号住居跡出土遺物

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

第134表 55号住居跡遺物調査表

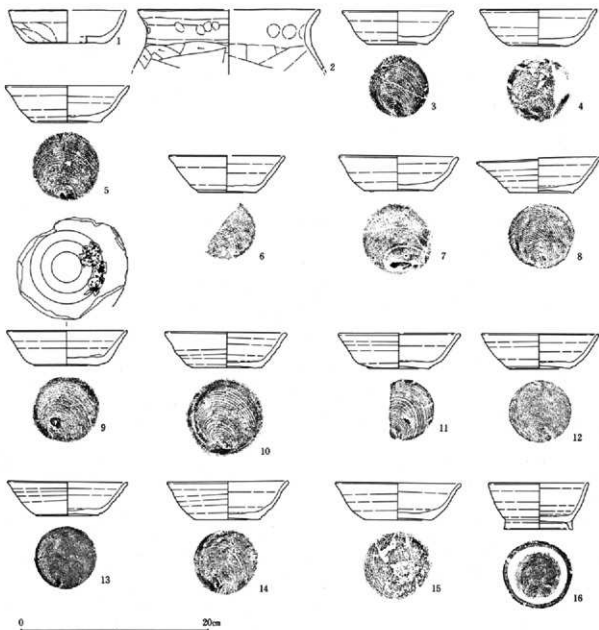
図 番 号 器 種	法 量 ( ) 測定 値	残 存 率 出 土 状 態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 ( 形 態 ・ 手 法 等 )
第153図 1 坏 図版 74	口：12.4 高：3.7 底：7.1	約3/4 壺内	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し体部下下に緩やかな丸みを持たせる。底部若干上げ底。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後無調整。
第153図 2 坏 図版 74	口：(12.2) 高：3.5 底：6.7	約3/5 壺内	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し体部下下に緩やかな丸みを持たせる。底部僅かに突出し上げ底を呈す。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後無調整。外面轆轤目強い。
第153図 3 坏 図版 74	口：12.5 高：3.6 底：6.4	ほぼ定形 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰気味 ③純黄色 ④須臾器	口縁部一休部上半直線状に一体化する。体部下下に緩やかな丸みを持たせ底部僅かに突出する。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後無調整。体部に撫でを加える。
第153図 4 坏 図版 74	口：(12.8) 高：(3.3) 底：(7.3)	約1/3 覆土	①粗 石英 ②還元焰 ③暗灰色 ④須臾器	口唇部若干内彎し、口縁一休部緩やかな彎曲を呈す。下平で丸みを持たせ底部は僅かに突出する。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後無調整。体部下下に撫でを加える。
第153図 5 瓶 図版 74	口：— 高：— 底：—	約3/5 壺内	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③暗灰色 ④須臾器	体部中位に緩やかな彎曲を持たせる。高台割落。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第153図 6 塊 図版 74	口：— 高：— 底：(9.0)	約1/4 壺内	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③暗灰色 ④須臾器	高台は比較的高く強く。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。内底面に滑沢面を持つ。
第153図 7 蓋 図版 74	口：(17.4) 高：(5.2) 横：3.3	約2/5 床直上 壁外	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	環状橋を付す。天井部高く、体部緩やかに丸みを帯びる。裾部の彎曲顕著。かえり部は直立する。右回転轆轤整形。天井部回転調整後橋貼付。
第153図 8 瓶? 図版 74	口：— 高：— 底：(7.9)	底部破片 覆土	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	平底で体部は緩やかな彎曲を持って直立する。轆轤整形後撫でをくわえる。回転方向不詳。
第153図 9 壺 図版 74	口：(20.0) 高：— 底：—	胴部の1/4 口縁部— 壺内	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③純赤褐色 ④土師器	口縁部外反し頸部彎曲する。口縁部内面形状はコ字状。肩部の張りはやや高く体部上半に膨らみを設ける。口縁部横撫で強く頸部で凹線状となす。体部上半横位磨削り、下半横位磨削り。体部内面横位磨削り。
第153図 10 壺 図版 74	口：(18.0) 高：— 底：—	口縁部破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③純赤褐色 ④土師器	口縁部緩やかに外反し頸部彎曲する。口縁部内面形状はコ字状。肩部の張り強く体部上半に膨らみを設ける。口縁部横撫で強く頸部で凹線状となす。体部上半横位磨削り。内面横位磨削り。
第153図 11 壺 図版 74	口：(17.0) 高：— 底：—	口縁部破片 壺内	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰 ③純黄色褐色 ④土師器	口唇部内面短く突出。口縁部直立気味に外傾。頸部屈曲し肩部強く張る。口縁部横撫で、肩部横位磨削り後一休部撫でが加わる。体部上半横位・斜位磨削り。体部内面横位磨削り。
第153図 12 壺 図版 74	口：(19.5) 高：— 底：—	口縁部破片 壺内	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③明褐色 ④土師器	口唇部に浅い沈線が走る。口縁部外傾し頸部彎曲する。肩部の張りはやや高い。口縁部横撫で、指痕直成る。体部上半横位磨削り。体部内面横位磨削り。
第153図 13 壺 図版 74	口：(31.0) 高：— 底：—	口縁部破片 壁外	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁部内傾。頸部緩やかに彎曲し、肩部はやや弱く張る。轆轤整形、おそらく左回転か。肩部に斜位の撫でが加わる。



第三章 検出された遺構と遺物

第135表 56号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重機遺構
Dj-26	正方形	388×385×40	N87°E	N96°E		坏14 埴1 3 要1 金属器 2溝	



第155図 56号住居跡出土遺物

## 第5節 奈良・平安時代の住居跡

第136表 56号住居跡遺物観察表

図 器 種	番号	法量 (cm) ( ) 測定値	残 存 率 出土 状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第155図 図版	1 75	口：(12.2) 高：(3.5) 底：(8.0)	約1/4 壺内	①細 白色粒 ②還元焰 ③明黄褐色 ④土師器	口縁一体部縁やかな彎曲をもって一体化する。底部平底か。口縁部横溝で、体部斜位側で、底部陥凹り後無調整。
第155図 図版	2 75	口：(19.2) 高：— 底：—	口縁部破片 床直	①粗 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④土師器	コ字口縁裏。口縁部上位外側下位は直立する。肩部の張り弱い。口縁部横溝で、上位に指痕が残る。体部上半は横位・斜位陥凹り。体部内面横位・斜位陥凹で。
第155図 図版	3 75	口：11.6 高：3.6 底：6.2	ほぼ完形 壺内	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部縁やかな丸みを帯びる。底部は若干上げ底。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第155図 図版	4 75	口：12.2 高：3.9 底：5.8	約4/5 覆土下位	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③暗灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部縁やかな丸みを帯びる。底部は僅かに上げ底。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。内面割落。外器面厚減。
第155図 図版	5 75	口：12.8 高：3.9 底：6.7	ほぼ完形 覆土下位	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部丸みを帯びる。底部は僅かに上げ底。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。外器面厚減。
第155図 図版	6 75	口：(12.0) 高：3.9 底：6.0	約2/5 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁一体部縁やかな彎曲をもって一体化する。底部僅かに突出する。内面見込み部明瞭。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第155図 図版	7 75	口：12.3 高：3.7 底：7.1	約3/4 床直上	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部屈曲気味に丸みを帯びる。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。内外器面厚減。
第155図 図版	8 75	口：12.9 高：3.6 底：6.8	完形 覆土	①粗 小礫・白色粒 ②還元焰 ③暗灰色 ④須恵器	張り有り。口縁一体部一体化して開く。底部僅かに上げ底。内面見込み部明瞭。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。やや薄手の器厚。
第155図 図版	9 75	口：(12.7) 高：3.7 底：6.8	約3/5 床直	①細 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁一体部直線状に一体化する。底部は僅かに上げ底。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。内面見込み部は明瞭で油煙が付着する。
第155図 図版	10 75	口：12.7 高：3.8 底：7.0	完形 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部縁やかに丸みを帯びる。底部僅かに上げ底。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。外面重ね焼きの痕跡。
第155図 図版	11 75	口：(12.6) 高：3.3 底：6.3	約1/3 覆土	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁一体部上半直線状に一体化する。下半は丸みを帯び彎曲し底部は僅かに突出する。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。器厚薄手。
第155図 図版	12 75	口：12.2 高：3.7 底：6.5	一部欠損 床直	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	均整の取れた器形。口縁一体部一体化し縁やかに彎曲する。底部僅かに突出し上げ底を呈す。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。轆轤目比較的強く轆轤は鋭い。
第155図 図版	13 75	口：12.5 高：3.6 底：6.4	ほぼ完形 壺内	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	均整の取れた器形。口縁一体部直線状に一体化して開く。底部僅かに突出し上げ底を呈す。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第155図 図版	14 75	口：12.6 高：4.0 底：6.7	ほぼ完形 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	均整の取れた器形。口縁部僅かに外反しほぼ体部と一体化する。底部は僅かに上げ底。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。

### 第三章 検出された遺構と遺物

図番号 器 種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第155図 15 陶版 75	口：13.1 坯高：3.9 底：6.8	約4/5 南袖上	①緋 白色粒・石英 ②酸化焰気味 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部緩やかな丸みを帯びる。底部は僅かに上げ底。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。内面器壁剥落。
第156図 16 陶版 75	口：10.4 輪高：4.9 底：7.2	完形 床直	①緋 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	小型の碗。口縁一体部緩やかな内彎をもって一体化する。高台は開く。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時間緑無で、丁寧な作り。

#### 56号住居跡

調査区中央北側の台地鞍部に検出された。周辺は緩やかな西側と北側への斜面で、本住居跡より西側は急斜面地形が続く。55号住と同様、D区西斜面住居群の東群に位置するといえよう。

周辺の住居跡としては、北東に55号住、西側に59号住居跡・72号住居跡、南側にやや距離をおいて73号住居跡が近接する。重複遺構としては、本住居跡の西側を2号溝が南北に走る。

平面形は、辺長約3.8mの中型の隅丸正方形を呈し、比較的整然とした形状を見せる。

深さは、約40cmを測り、壁の掘り込みもしっかりした立ち上がりである。

床面は、北西側へ緩やかに傾斜するものの、平坦面は意識される。黄褐色ローム塊と鈍褐色土塊を主体とした貼床で、全面に及ぶ。硬化面は、竈焚口部周辺を中心として、床面中央部に及ぶ。特に焚口部周辺が顕著だった。

壁周溝・柱穴は見られなかった。床下調査で得られた小ピットも妥当性を帯びない。

貯蔵穴は、南東隅壁際の小型の楕円状土坑を充てたい。浅く、壁の立ち上がりは緩やかで、褐色土を埋土としていた。

竈は東壁南寄りに設けられる。主軸方位は、住居主軸と差が見られ、煙道部を強く壁外に突出する形態を取る。

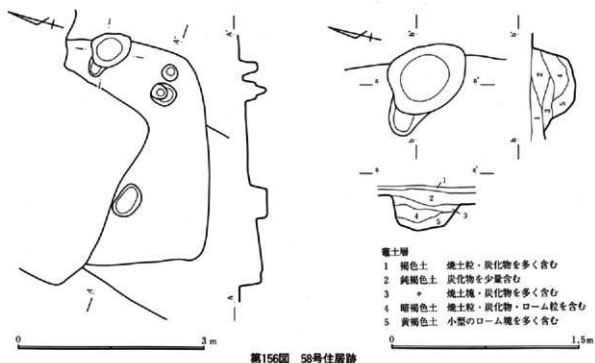
袖は、壁の短い突出を利用し、北側袖・南側袖とも自然石を芯材として立て、褐色粘質土を補強しており、特に北側袖で顕著だった。使用面においては、燃焼部～焚口部の凹みは見られなかった。使用面下

では、燃焼部に不整形の土坑が検出され、北側袖石下の小ピットも確認されている。

その他の構築材・補強材としては、焚口部周辺に散布する自然石や土器片が考えられる。また、煙道部奥壁にかかる土器片も、補強材として位置づけた。

床下遺構は、多数検出された。東壁際の小型の土坑と西に接する不整形楕円状の土坑は、床下土坑として位置づけたい。また、北西隅にやや大型の不整形土坑が重複状態で群在する。床下土坑ないし住居構築時の掘削坑と捉えられよう。

遺物は、比較的多く出土した。覆土上層～床直にかけて見られたが、下層～床直出土が目立つ。床面中央～竈周辺に分布が広がるが、西壁・北壁周辺は稀薄である。出土器種は、土師器杯・甕が各1点見られるが、須恵器杯・碗類の完形・半完形品の出土に偏る。日常什器を中心とした出土傾向と言えよう。覆土中と床直出土の遺物の時期差が顕著ではないことから、住居廃絶時の一括出土遺物と捉えられる。



第156図 58号住居跡

第137表 58号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dno-25・26	—	353×—×32	N70°E	N80°E			62・63住

## 58号住居跡

調査区中央の台地鞍部西側の傾斜面で検出された。周辺は、西側～北側への傾斜地形だが、西側で展開する急斜面地形に比して、やや緩やかな傾斜である。

東側斜面に見られる住居群より密度は低いが、数軒の住居跡群が群をなす。D区西斜面住居群の西端にあたる。

本住居跡には、北側に63号住居跡、南側に62号住居跡が重複する。さらに南には61号住居跡が、東側には60号住居跡と87号住居跡が近接する。

63号住に切られる、重複関係のため、平面形は判然としない。おそらく辺長約3.5m程度の方形～正方形の小型住居跡であろう。

また、遺存度も極めて悪く、壁の立ち上がりも西側の一部で30cm程を測るが、他の壁は、僅かな痕跡

をとどめるのみである。

床面の施設としては、東南隅に相当する箇所には2基のピットが検出され、西側のやや大型の1基を貯蔵穴としたい。

竈は、東壁中央付近で確認した。円形の土坑状の掘り込みを持つが、使用面下の掘り込みと捉えた。焼土粒等が確認できたが、残存状態は極めて悪い。焚口部に浅い溝状の落込みを確認したが、焼土塊を埋土としており、廃棄時の所産と考えた。

床下遺構も判然としないが、中央やや北西寄りに検出された小型の土坑は、あるいは床下土坑としての可能性を持つ。

遺物は、須恵器細片が見られるのみで、図示に至らなかった。

59号住居跡

調査区中央北側の台地鞍部西で検出された。周辺は緩やかな西側と北側への斜面で、北側への傾斜が若干強い。また、本住居跡より西側は急斜面地形が展開する。

D区西斜面住居群の中央にあたり、72号住居跡と重複する。東側には56号住居が、西側には60号住居跡と87号住居跡が、また、北側には77号住居跡が近接する。南側の住居密度はやや稀薄で、距離を置いて73号住居跡が見られる。その他の遺構では、東側で56号住と重複して2号溝が南北に走る。

尚、72号住居跡との重複関係は、本住居跡が72号住居土を切る。

平面形は、南辺と北辺の差があるものの、各辺は直線状をなし、比較的整った若干横長の長方形を呈す。ただ、東南隅の形状は他の隅の形状とは異にしており、大きく彎曲する。規模は、4.7×4.4m程度のやや大型の住居である。

深さは、約50cmを測り、良好な遺存状態を誇る。四辺の壁の掘り込み・立ち上がりもしっかりしている。

床面は、ほぼ平坦面が意識されるものの、周辺地形の傾斜に影響を受けたのか、北側への傾斜が見られる。黄褐色ローム塊による貼床がなされるが、中央部分と壁周辺には及んでいない。硬化面は、竈周辺が顕著で中央部にかけて比較的広い範囲で確認された。

壁周溝が確認された。南壁中央～西壁中央にかけての小規模なもので、掘り込みもやや浅かった。

柱穴は検出されなかった。西壁中央の壁隙～壁周溝の端部に小ピットを確認したが、柱穴としては確認を持たない。出入口部施設の支柱としての可能性が高い。

貯蔵穴は、見られなかった。ただし、相当する東南隅の形状が、大きく彎曲した隅丸形状であり、何等かの施設の存在が想起できよう。

竈は、東壁の南寄りにつけられる。煙道部は溝状に強く壁外へ突出し、燃焼部は馬蹄状をなす。

袖は北側・南側とも壁を住居内に突出しており、袖芯材として自然石が立てられていた。袖石の周囲は黄褐色ローム塊を主体とした袖構築土が補強されていたが、広範囲ではなく、袖周囲にとどまる。

燃焼部は、緩やかに凹み、煙道部に至る立ち上がりは比較的強く上がる。また、焚口部にかけては、若干の傾斜を持たせるが、平坦面に近く、掘り込みを有しない。

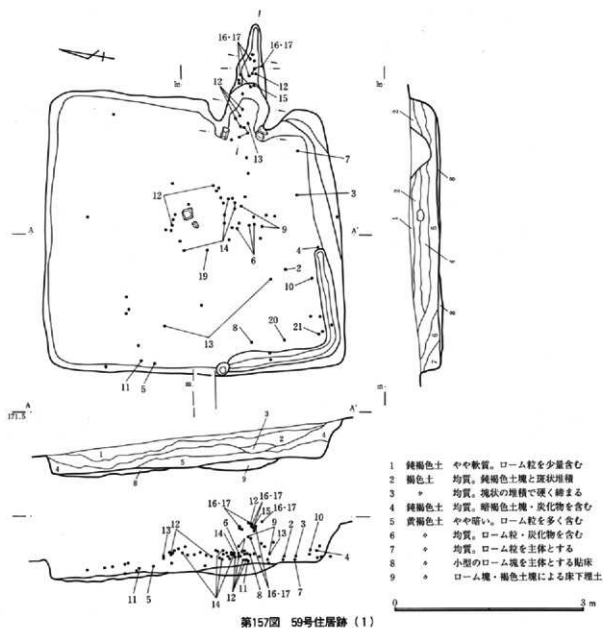
その他の構築材としては、燃焼部～焚口部にかけて出土した須恵器変体部破片や煙道部に見られた自然石・須恵器甕口縁部破片が、燃焼部壁や天井部の補強材あるいは煙道部上部の構築材・補強材として位置付けられよう。

床下遺構は、明瞭なものは検出されなかった。しかしながら72号住居跡との重複のため、本住居跡の床下の状態は、非常に検出し難く、確証を持たない。

遺物は、良好な遺存状態の割には少ない。17点を個体図示したが、完形個体は須恵器杯(3・4)だけである。覆土上層～下層よりの出土が目立つが、床直出土の個体も良好である。平面的には、住居跡中央部及び竈周辺に集中が見られた。また、南西隅周辺にも少量ながら出土の偏りが見られた。

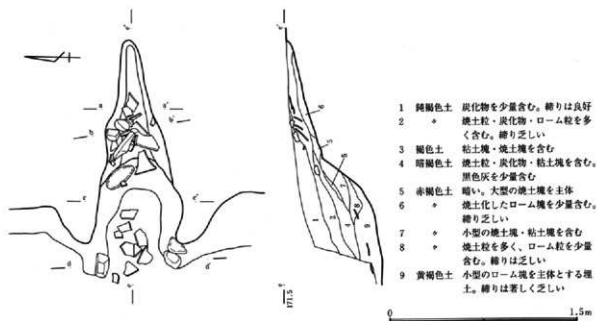
竈内の遺物は、構築時の所産と思われ、その他の遺物の大半が居住にともなうものと捉えた。尚、円面硯が出土している。



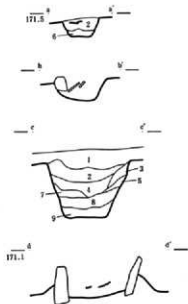


第138表 59号住居跡計測表

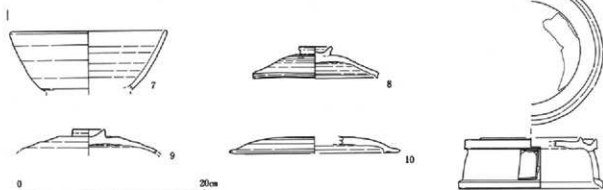
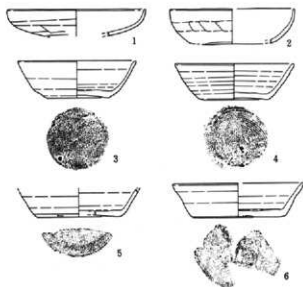
位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複建構
D61-26・27	不整形	478×442×48	N81°E	N86°E	壁周溝	坏6 碗1 蓋3 円面硯 1 壺5 瓶1 金属器1	72住



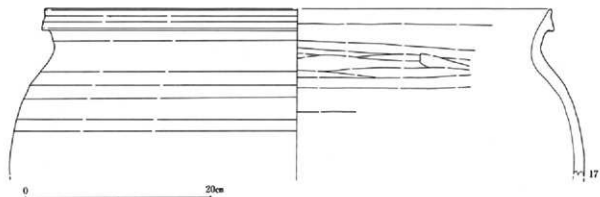
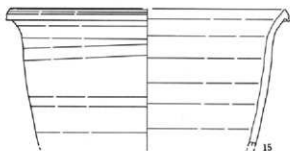
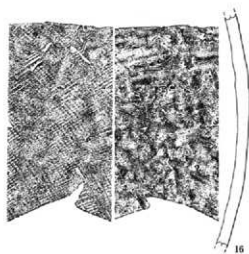
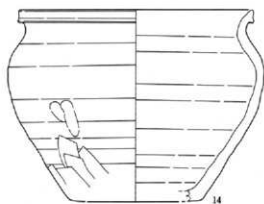
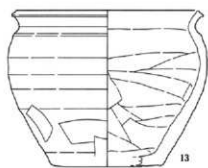
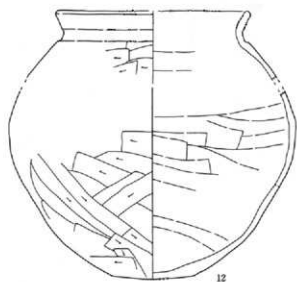
- 1 黄褐色土 炭化物を少量含む。締りは良好
- 2 \* 焼土粒・炭化物・ローム粒を多く含む。締り乏しい
- 3 褐色土 粘土塊・焼土塊を含む
- 4 暗褐色土 焼土粒・炭化物・粘土塊を含む。黒色灰を少量含む
- 5 赤褐色土 暗い。大型の焼土塊を主体
- 6 \* 焼土化したローム塊を少量含む。締り乏しい
- 7 \* 小型の焼土塊・粘土塊を含む
- 8 \* 焼土粒を多く、ローム粒を少量含む。締りは乏しい
- 9 黄褐色土 小型のローム塊を主体とする壤土。締りは著しく乏しい



第158図 59号住居跡(2)



第159図 59号住居跡出土遺物(1)



第160図 59号住居跡出土物(2)

第三章 検出された遺構と遺物

第139表 59号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (m) ( )推定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第159図1 円版 75	口:(14.6) 高: -	約1/3 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土跡器	口縁～底部内壁をもって一体化する。体部は扁平で底部は丸底。口縁部横撫で、体部弱撫で、底部鈍削り。内外面器壁滑溜。
第159図2 円版 75	口:(13.2) 高: -	約1/5 床直上	①細 白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土跡器	口縁～体部内壁をもって一体化する。底部形状不明。平底か。口縁部横撫で、体部鈍削り後弱撫でを加える。底部は鈍削りか。
第159図3 円版 75	口:12.3 高: 3.9 底: 6.7	ほぼ定形 床直上	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部中位に丸みを持たせる。底部は上げ底。内面見込み部は比較的顕著。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。
第159図4 円版 75	口:12.3 高: 3.8 底: 6.5	ほぼ定形 覆土下位	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁～体部僅かな内壁をもって一体化する。底部は若干上げ底。内面見込み部は明瞭。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。
第159図5 円版 75	口: - 高: - 底: 8.6	破片 床直上	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部僅かな彎曲を帯び直線状に開く。腰部に丸みを持たせる。底部上げ底。右回転軸輪整形。底部回転鈍削り後撫でを加える。鈍削りと撫では腰部にまで見よ。
第159図6 円版 75	口:(13.6) 高: 3.6 底: (9.2)	約2/5 覆土下位	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部縦やかな彎曲を呈し体部外反する。体部下半は直線状に開く。底径はやや広く安定した器形。右回転軸輪整形。底部静止磨削り後撫でを加える。
第159図7 丸 版 75	口:16.3 高: - 底: -	底部欠損 床直上	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	やや大型品。口縁～体部縦やかな彎曲をもって一体化する。下半に丸みを持たせ整った形態を呈す。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸輪整形。
第159図8 蓋 版 75	口:13.1 高: 3.4 溝: 3.4	約2/3 覆土下位	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	やや小型。天井部比較的高く環状溝を付す。天井～体部境に僅かな段を有し、裾部は直線状を呈す。かえり部は鋭く内傾し短い。右回転軸輪整形。天井部回転鈍削り後横貼付。
第159図9 蓋 版 75	口: - 高: - 溝: (3.3)	約1/3 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部平坦面を築き環状溝を付す。体部は直線状を呈す。右回転軸輪整形。天井部回転鈍削り後横貼付。外面に自然輪付着し、質感に差がある。
第159図10 蓋 版 75	口:18.0 高: - 底: -	破片 覆土下位	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	天井部低く平坦面を築く。体部～裾部彎曲を持ち広がる。かえり部は丸みを帯び、内面に設けられる。右回転軸輪整形。天井部回転鈍削り。外面に自然輪付着。内面滑沢面を持ち転用後の可能性を持つ。
第159図11 円形鏡 版 5	口:(10.4) 高:(5.4) 底:(15.0)	約1/6 床直上	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部種縁によって海部と陸部を分別する。天井部外縁直立し体部縦やかな丸みを持たせる。下縁部は僅かに広がる。体部に方形の透かし孔。海部は滑沢面を有す。右回転軸輪整形。
第160図12 丸 版 75	口:(20.0) 高:(28.4) 底:(8.8)	体～底の 1/6 口縁部破片	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰 ③鈍黄褐色 ④土跡器	口縁部外傾し頸部縦やかに彎曲する。肩部は張り体部中位に膨らみを持たせ底部はやや不安定。口縁部横撫で、体部上半は横位鈍削り、下半斜位鈍削り。体部内面横位・斜位横撫で。
第160図13 丸 版 76	口:(19.0) 高:(16.5) 底:(11.5)	約1/2 壺内	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口唇部内傾し口縁部短く外傾する。頸部は縦やかに彎曲し肩部は強く張る。体部上半に膨らみを設け、底径はやや広い。右回転軸輪整形。体部下半は不定方向の鈍撫で。
第160図14 丸 版 76	口:24.6 高:(22.0) 底:(14.0)	約2/3 覆土	①粗 小礫石英 ②還元焰 ③暗灰黄色 ④須恵器	口唇部直立し口縁部短く外反する。頸部は縦やかに彎曲し肩部はやや張る。体部上半に膨らみを設け、底径はやや広い。右回転軸輪整形。体部下半に縦位横撫で。

図 番 号	法量 (cm) ( )推定値	残 存 率 出土 状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第160図 15 版 図版 76	口：(29.0) 高：— 底：—	口縁部破片 壺内	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	口唇部内傾し、口縁一部部破りやかな彎曲をもって外傾して一体化する。 左回転軸線整形か。
第160図 16 壺	口：— 高：— 底：—	体部破片 壺内	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大甕体部破片。外面平行叩きによる格子目。内面塌状で日後倒い撫で。
第160図 17 壺 図版 76	口：(54.0) 高：— 底：—	口縁部破片 壺内	①粗 小礫・石英 ②還元焰 ③灰褐色 ④須恵器	大甕口縁部。口唇部僅かに内傾。口縁部外反し頸部破りやかな彎曲する。 肩部はやや張り体部上半に膨らみを持たせる。腰線整形か。体部に平行 叩き目が僅かに垂直される。内面斜位の撫で。

## 60号住居跡

調査区中央北側の台地較部西で検出された。周辺は緩やかな西側と北側への傾斜で、北側への傾斜が若干強い。また、本住居跡より西側は急斜面地形が展開する。

D区西斜面住居群の中央に位置する。重複住居跡は無く、単独の検出となった。周辺の住居跡としては、東側に59号住・72号住居跡、北側に87号住居跡、西に61号住居跡が近接する。南側の住居跡分布は稀薄で、かなり距離をおいて97号住居跡が見られる。

平面形は、西辺と東辺の差が若干見られるものの、比較的整然とした長方形を呈す。各辺は僅かな彎曲を持つがほぼ直線状をなす。平面規模は約4.0×3.6m程の中型の部類にはいる住居跡である。

深さは、約60cmを測る。壁の掘り込みもしっかりしており良好な遺存状態である。ただ北側への傾斜のため、北壁の遺存がやや悪く、立ち上がりも若干緩やかだった。

床面は、僅かな凹凸は見られるものの、ほぼ平坦面を築き、黄褐色ローム塊を主体とした貼床が全面になされていた。硬化面は、床面中央～南側へ顕著で、北東隅・竈周辺にまで及ぶ。

壁周溝は見られなかった。柱穴は、中央やや北寄りに間く小ピット2基を充てたい。両者とも深さ約35～40cmで、配置からも妥当である。

貯蔵穴は、南東隅の不整形の土坑である。南壁際に設けられており、規模は約50×70cm、深さ約40cm

を測る比較的掘り込みもしっかりした土坑であり、鈍褐色土を埋土としていた。

西壁際に小ピットが2基、対の状態を確認されている。おそらく、出入口部の昇降施設(梯子)の支柱として考えられよう。

竈は、東壁中央やや南寄りに設けられる。馬蹄状の煙道部を壁外に突出し、僅かな壁の彎曲を袖としていた。燃焼部～焚口部は緩やかに凹むものの、掘り込みを有しない。

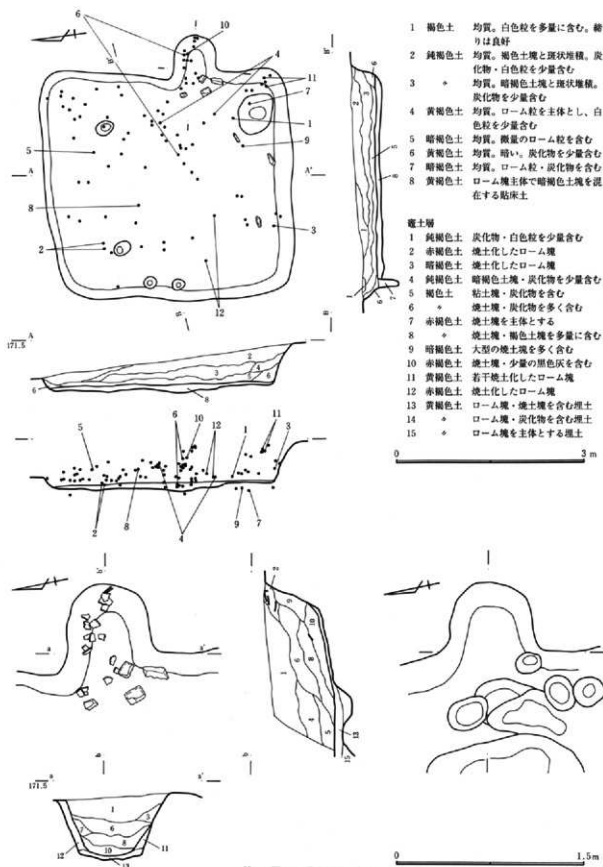
袖は北側・南側とも壁を利用しており、北側袖が顕著に張り出す。南側は緩やかであるが、袖抜取り穴と自然石の検出が見られたことから、袖石を芯材とした構築物が存在していたのであろう。周辺には自然石が散乱しており、補強材として位置付けられよう。

燃焼部～煙道部にかけて土師器小型甕破片が出土したが、煮沸に伴うものと考えた。

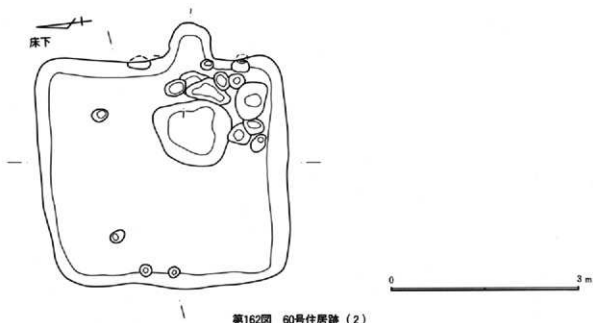
床下遺構は、中央やや東寄りに不整形の大型土坑を確認した。床下土坑として位置付けたい。また、床下土坑東側と南側には不整形の小ピットが群在する。さらに東壁北側と南側2箇所に斜位のピットを検出した。いずれも性格は不明である。

遺物は、比較的多く出土したが、破片状態のものが主体で、完形は貯蔵穴内出土の須恵器坏(7)1点のみである。覆土上層～床直にかけての出土であり、平面的にもまとまりを持たない。流入であろうか。

第三章 検出された遺構と遺物



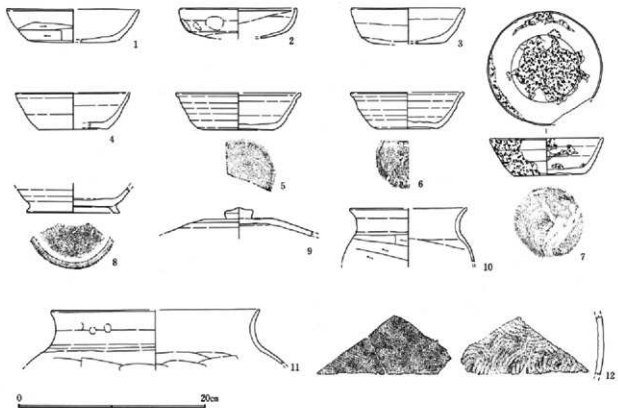
第161図 60号住居跡 (1)



第162図 60号住居跡(2)

第140表 60号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	方位	主な施設	主な遺物	重箱遺構
Dim-27	不整形	395×360×55	N94°E	N96°E	貯蔵穴 床下土城	坏7 埴1 蓋1 甕3	



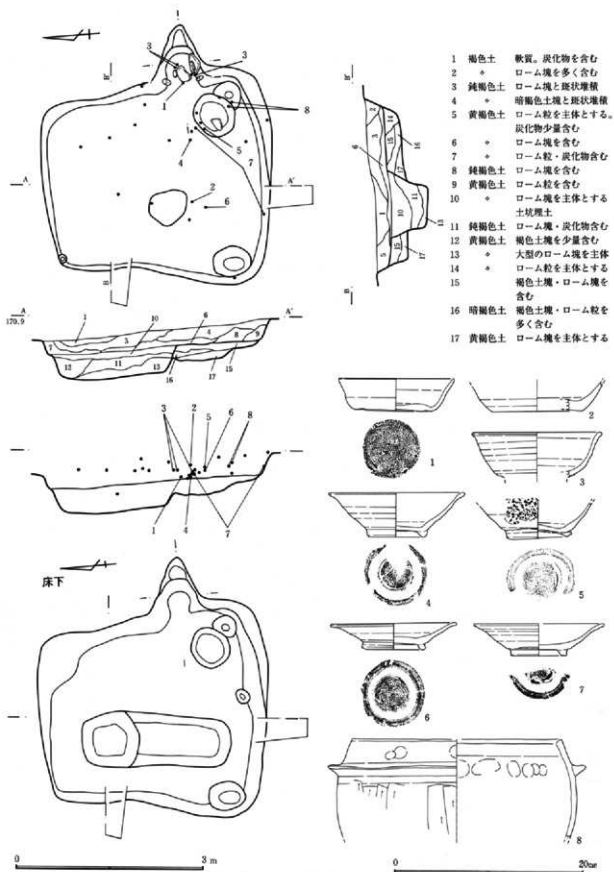
第163図 60号住居跡出土遺物

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

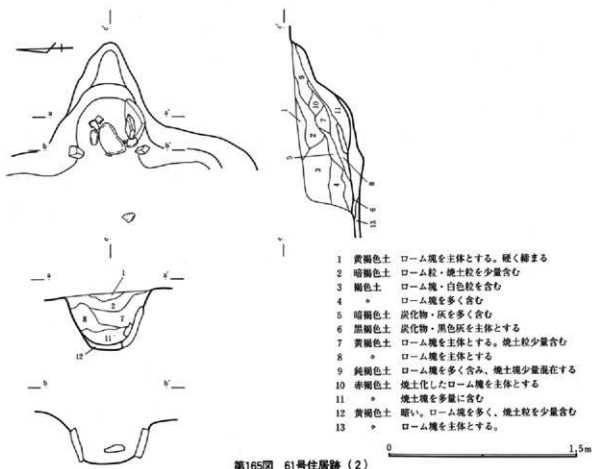
第141表 60号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(m) ( )指定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第163図 1 坏 図版 76	口:(13.8) 高:(3.5) 底:(9.6)	約1/4 床直上	①細 白色粒・石英 ②燻化焰 ③褐色 ④土師器	口唇部尖る。口縁-体部内彎気味にほぼ一体化する。底部不安定な平底を呈す。口縁部横撫で、体部横位丸削り、底部丸削り。器厚やや厚手。器面摩滅。
第163図 2 坏 図版 76	口:(12.2) 高: -	約1/2 床直	①細 片岩粒・白色粒 ②燻化焰 ③褐色 ④土師器	口唇部内面玉縁状をなす。口縁-体部内彎気味に一体化する。体部は比較的偏平で底部丸底を呈す。口縁部横撫で体部指頭残る弱い撫で、底部丸削り。内面斜位・横位撫で。
第163図 3 坏 図版 76	口:(12.0) 高: 3.8 底:(8.1)	約1/2 覆土下位	①細 片岩粒・白色粒 ②燻化焰 ③褐色 ④土師器	口唇部尖る。口縁-体部内彎気味に一体化する。底部は平底。口縁部横撫で、体部-底部丸削り後撫でか。華成のため割れとしない。器厚やや厚手。
第163図 4 坏 図版 76	口:(12.0) 高:(3.9) 底:(7.2)	約1/4 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁-体部内彎気味に一体化する。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部器厚やや薄手。
第163図 5 坏 図版 76	口:(13.1) 高: 3.9 底:(7.4)	約1/4 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部直線状に開く。腰部丸みを帯びる。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第163図 6 坏 図版 76	口:(11.7) 高: - 底:(6.3)	約1/4 甕内	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部緩やかな丸みを持たせる。底部僅かに上げ底。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第163図 7 坏 図版 76	口:(11.8) 高: 3.9 底: 7.2	ほぼ完形 貯蔵穴内	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁-体部僅かに内彎気味に一体化する。底部僅かに上げ底。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部に補修粘土の痕跡。内外面油煙付着。
第163図 8 坏 図版 76	口: - 高: - 底:(9.7)	底部破片 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部下内彎気味に開く。高台はやや長く開く。内面見込み部は比較的明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時局縁撫で。
第163図 9 甕 図版 76	口: - 高: - 筒: 3.0	約1/3 床直	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③浅黄色 ④須恵器	天井部低く平坦面を築く。擬室床状構を付す。体部-底部直線状を呈す。右回転轆轤整形。天井部回転丸削り後横位撫で。
第163図 10 甕 図版 76	口:(12.2) 高: - 底: -	口縁部破片 甕内	①細 黒色粒・白色粒 ②燻化焰 ③褐色 ④土師器	遺存不良。口縁部外反し頸部緩やかに屈曲する。肩部はやや張る。口縁部横撫で強く頸部に稜状となす。体部上半横位・斜位丸削り。体部内面横位丸撫で。
第163図 11 甕 図版 76	口:(21.8) 高: - 底: -	口縁部破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②燻化焰 ③赤褐色 ④土師器	遺存不良。口縁部外反し頸部緩やかに屈曲する。肩部の張りは強い。口縁部横撫で中位に指頭残る。体部上半横位丸削り。体部内面横位弧状丸撫で。
第163図 12 甕 図版 76	口: - 高: - 底: -	体部破片 覆土下位	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大甕体部破片。外面平行叩き。内面青海波状当て目。





第164図 61号住居跡 (1)



第165図 61号住居跡(2)

第142表 61号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dno-27・28	不整形	369×344×38	N91°E	N90°E	貯蔵穴 床下土坑	坏2 陶3 皿2 羽釜1 金属器1	

### 61号住居跡

調査区中央北側の台地鞍部西で検出された。周辺は西側と北側への斜面で、北側への傾斜が若干強い。また、本住居跡より西側は急斜面地形が展開し、遺構密度も稀薄となる。

D区西斜面住居群の西側にあたる。本住居跡は、単独の検出であるが、近接する住居跡は多く、一帯をなす。北側に58号住居跡・62号住居跡・63号住居跡が重複状態で位置する。また、東側には先に述べた60号住が見られる。

平面形は、やや横長の不整形長方形を呈す。西壁及

び南壁に整いが見られず、彎曲した壁となっている。規模は、約3.7×3.4m程の小型の住居跡である。

深さは、約40cmを測り遺存状態は良好といえよう。各壁の掘り込みもしっかりしており、明瞭な立ち上がりを呈す。

床面は、緩やかな北側への傾斜が見られるが、ほぼ平坦面を築く。黄褐色ローム塊と暗褐色土塊による貼床が全面になされていた。硬化面は、床面中央～竈周辺の比較的狭い範囲で認められた。

床面中央やや西寄りに、狭い範囲ながら焼土粒の散布が認められた。用途は不明である。

第143表 61号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (m) ( ) 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第164図 1 国版 76	口： 12.2 高： 3.5 底： 6.2	ほぼ完形 壺内	①粗 片岩・石英 ②酸化焰気味 ③灰色 ④須臾器	底部大きく歪み周縁が凹む。口縁一体部僅かに外反気味に一体化し、下半に丸みを持たせる。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後黒調整。
第164図 2 国版 76	口： — 高： — 底： (9.7)	底部破片 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	大型の坏か。体部下丸みを持たせて開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後黒調整を加える。
第164図 3 国版 76	口： 13.4 高： — 底： —	約3/4 底部欠損 壺内	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰黄色 ④須臾器	口縁部強く外反し口唇部玉縁状をなす。体部下半に丸みを持たせる。右回転轆轤整形。
第164図 4 国版 76	口： (14.3) 高： 4.7 底： 5.6	約1/2 床直	①細 砂粒・石英 ②酸化焰気味 ③暗灰黄色 ④須臾器	口縁部外反し体部中位に緩やかな丸みを持たせる。高台は短く直立する。内面見込み部は明確。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時黒調整で。
第164図 5 国版 76	口： — 高： 2.8 底： 5.8	約1/2 覆土	①粗 砂粒・石英 ②酸化焰気味 ③純黄褐色 ④須臾器	高台に歪みあり。体部下半は直線状に開く。内面見込み部は比較的明確。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時黒調整で。
第164図 6 国版 76	口： (13.2) 高： 2.8 底： 6.1	約1/2 覆土下位	①細 砂粒・片岩粒 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須臾器	口縁部外反し、体部直線状に開く。高台は短く開き気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時黒調整で。
第164図 7 国版 76	口： 13.7 高： 3.4 底： (5.6)	約1/3 覆土下位	①粗 砂粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須臾器	口縁部外反し、体部下半に緩やかな丸みを持たせる。高台は直立気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時黒調整で。
第164図 8 国版 76	口： (22.0) 高： — 底： —	口縁部破片 覆土	①粗 砂粒・石英 ②酸化焰気味 ③純黄褐色 ④須臾器	角張った口唇部。口縁部内傾し内彎する体部とはほぼ一体化する。肩は水平に付される。右回転轆轤整形。黒調整、貼付時黒調整で。口縁部横線で、指頭痕が残る。体部回転轆轤整形が両下より施される。内面横線で。

壁周溝は見られなかった。柱穴も良好な配置・深さを呈するものは見られない。

貯蔵穴は、南東隅に重複状態で検出された小型の土坑2基と西南隅に開く小型の土坑を完てたい。南東隅の2基の土坑の新旧は不明である。

床下調査において、南壁際中央に小ビットを1基検出した。梯子穴であろうか。

竈は、東壁南寄りに設けられる。煙道部を壁外に突出し、馬蹄状の燃焼部を有す。燃焼部から焚口部は緩やかな凹みが見られ、焼土粒・炭化物が薄く堆積していた。

袖は、両側とも僅かな壁の突出を利用し、角礫状の自然石を袖石として立てていた。補強材としての粘質土は確認されなかった。

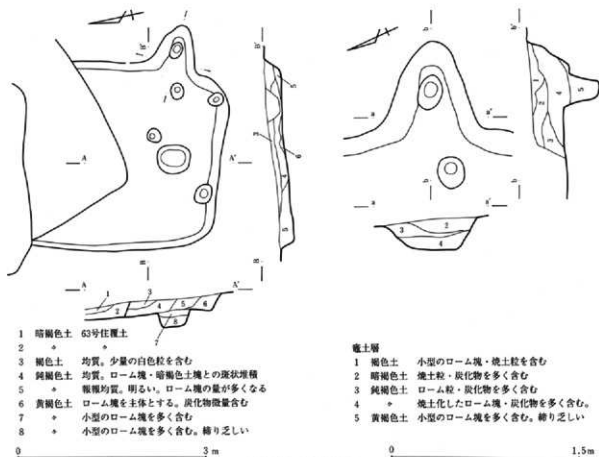
その他の補強材としては、燃焼部北壁に板石状の

自然石が2箇立位で出土した。壁の補強と考える。また、両袖石間に大型の川原石が横位に出土しているが、天井材として捉えたい。

床下遺構は、中央西寄りの長楕円形土坑と重複する円形土坑を床下土坑として位置付ける。

遺物は、良好な遺存状態の割には少ない。8点を個体図示した。覆土下層一床直の出土が見られ、平面的には、壺内及び東南隅の貯蔵穴周辺に偏る。器種組成はやや、坏・埴類に比重が重かれ、良好な出土状態とはいえない。覆土中と床直上の出土遺物に時間的な差は大きくはなく、住居跡廃絶時の廃棄と思われる。

第三章 検出された遺構と遺物



- 1 暗褐色土 63号住居土  
 2 \*  
 3 褐色土 均質。少量の白色粒を含む  
 4 鈍褐色土 均質。ローム塊・暗褐色土塊との斑状堆積  
 5 \* 粗粒均質。明るい。ローム塊の量が多くなる  
 6 黄褐色土 ローム塊を主体とする。炭化物微量含む  
 7 \* 小型のローム塊を多く含む  
 8 \* 小型のローム塊を多く含む。締り乏しい

- 甕土層  
 1 褐色土 小型のローム塊・焼土粒を含む  
 2 暗褐色土 焼土粒・炭化物を多く含む  
 3 鈍褐色土 ローム粒・炭化物を多く含む  
 4 \* 焼土化したローム塊・炭化物を多く含む。  
 5 黄褐色土 小型のローム塊を多く含む。締り乏しい

第166図 62号住居跡

第140表 60号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dno-26・27	—	300×—×25	N105°E	N115°E	貯蔵穴		58・63住

62号住居跡

調査区中央北の台地較部西側の傾斜面で検出された。周辺は、西側～北側への傾斜地形だが、西側で展開する急斜面地形に比して、やや緩やかな傾斜でを形成し、数軒の住居跡が一群をなす。東側斜面に見られる住居群より密度は低い。D区西斜面住居群の西端にあたる。

本住居跡は58号住と重複する。重複関係は58住に切られる土層を観察したが、58号住の出土遺物等判然としな部分が多く、確定的ではない。

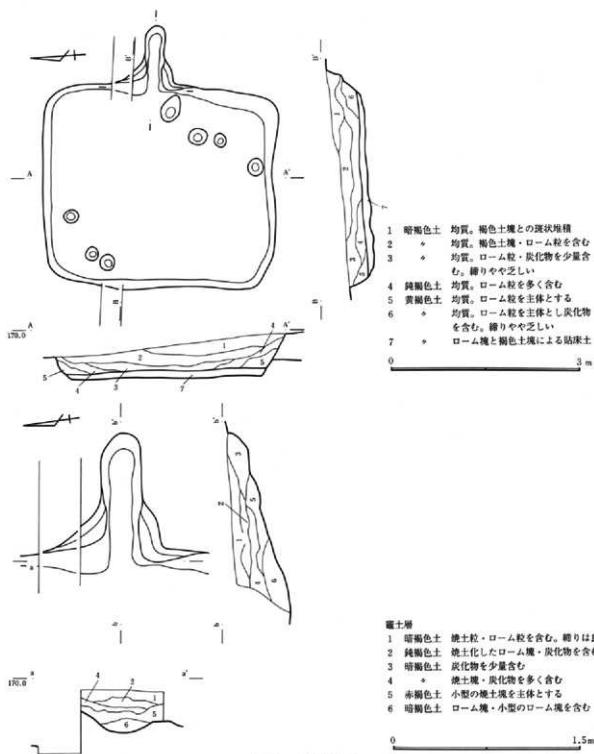
近接する住居跡としては、58号住と重複する63号住が北に、前述した61号住が南に接する。また、東

には60号住が単独で位置する。西側には近接する住居跡は無い。

平面形は、58号住との重複のため、北側が逸失し、詳細は不明だが、おそらく主軸長3m程度のやや横長長方形の小型の住居跡と考えられる。高、北側傾斜のため、東壁北半分は壁の確認が困難であり、推定線を施した。

深さは、約25cm程度で比較的浅く、遺存状態は良好とはいえない。

床面は緩やかな凹凸を持ち、若干ながら北側へ傾斜する。黄褐色ロームによる地床で、硬化面は竈周辺の狭い範囲で確認されたのみである。



第167図 63号住居跡

第145表 63号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dno-25・26	長方形	372×318×53	N98°E	N99°E		金属器1	58・62住

### 第III章 検出された遺構と遺物

壁周溝は無く、柱穴は南壁際で確認された小ピットに妥当性がある。

貯蔵穴は相当する箇所を検出されず、床面中央やや南寄りて確認した小型の土坑に可能性を求めた。

竈は、東壁南寄りに設けられる。煙道部を壁外に突出し、燃焼部～焚口部はほぼ平坦である。袖は顕著ではないが、南東隅の彎曲の延長を利用したものと考えたい。燃焼部奥には小ピットが検出されたが、支脚採取穴と捉えた。

遺物は微量出土したが、細片であり図示に至らなかった。

#### 63号住居跡

調査区中央北の台地鞍部西側の傾斜面で検出された。周辺は、西側～北側への傾斜地形だが、西側で展開する急斜面地形に比して、やや緩やかな傾斜を形成する。数軒の住居跡が一群をなすが、東側斜面に見られる住居群より密度は低い。D区西斜面住居群の北西端にあたる。

本住居跡は、南側に58号住と62号住が重複する。さらに南側には61号住が接し、東側には87号住と60号住が近接する。土層による重複関係では58号住に切られる新旧と観察された。

平面形は、南壁が緩やかに彎曲する不整長方形で、規模は、約3.7×3.2m程度の小型の住居跡である。深さは、約50cmを超え、良好な遺存状態を誇る。壁の立ち上がり等もしっかりしていた。

床面は、僅かな凹凸が見られるもののほぼ平坦面を築き、黄褐色ローム塊による貼床が全域になされていた。硬化面は中央部分の狭い範囲で確認された。

壁周溝は無く、柱穴・貯蔵穴も特定できない。南東隅に4基と北西隅に3基の小ピットが群在するが、柱穴としての配置・深さに妥当性を帯びず、確認は得ない。

竈は、東壁中央やや西寄りに設けられる。溝状の煙道部を壁外に大きく突出し、燃焼部も狭い。袖は壁の彎曲を利用したものと考え、焚口部に掘り

込み等の施設を有しないため、判断としない。

床下遺構は、顕著な掘り込みも見られず、床下図は割愛した。

出土土器も、出土量が貧弱であり、図示には至らなかった。鉄器1点を図示した(336図)。

#### 66号住居跡

調査区南側の高標高部分の台地頂部で検出された。頂部住居群の一隅である。頂部は北側や東西への傾斜地形が発達する地点であるが、本住居跡周辺は、比較的平坦で、緩やかな北斜面を形成する。

遺構密度も高く、特に縄文時代前期～中期の住居跡・土壇が群在する箇所である。周辺の奈良・平安時代の遺構としては、本住居跡南側に70号住が重複する。他では、67号住居跡が南西に、69号住居跡が北西に見られるが、密度は稀薄といえよう。

平面形は、約3.6×3.4mの不整正方形を呈す。各辺は緩やかな彎曲を持ち、やや不整の印象を得る。

深さは、約70cmを測るが、北壁は斜面地形のため掘り込みも浅く、立ち上がりも緩やかだった。

床面は、僅かな凹凸が見られるがほぼ平坦面を築く。黄褐色ローム塊による貼床が全面になされる。硬化面も、床面中央を中心に広い範囲で確認された。特に竈周辺～南壁東半に顕著に見られた。

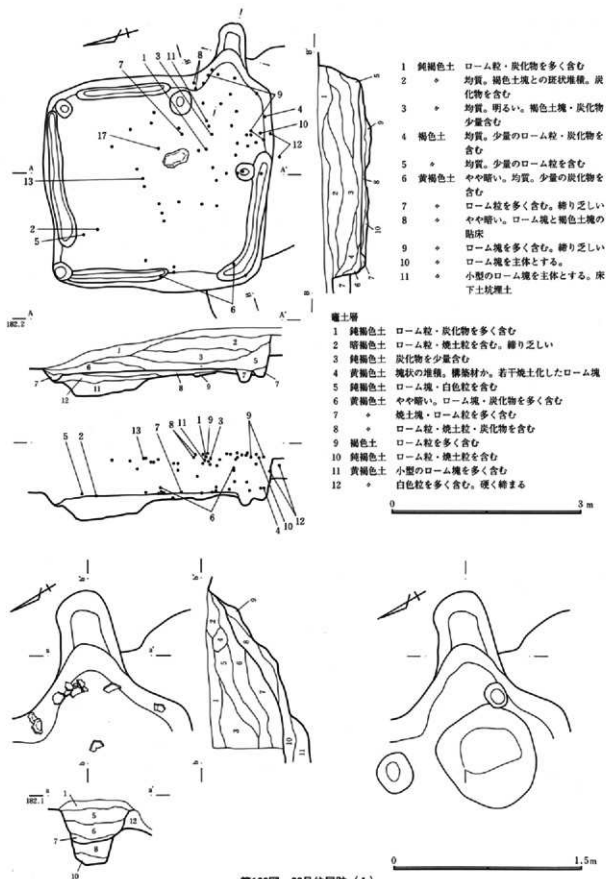
壁周溝は、南壁の東半及び西壁の南側には設けられてはいないが、各壁際に検出されている。

柱穴は、北東隅と北西隅及び南壁際中央の小ピットを充てたい。20～30cm程度の浅いピットだが、配置的に妥当である。

貯蔵穴は、竈焚口部北側のピットを充てる。径約40cm程の不整形の平面形で、深さは約10cmと浅い。

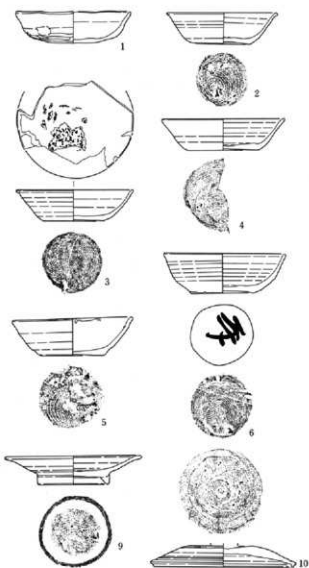
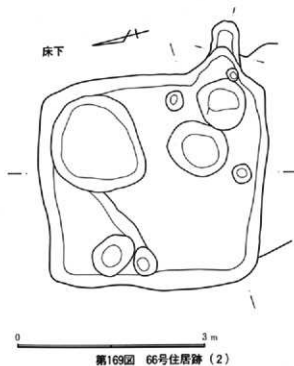
竈は、東南隅に設けられる。煙道部を壁外に大きく突出し、緩やかな凹みを持つ燃焼部である。袖は壁の彎曲を利用するが、芯材等の出土はなかった。ただ、使用面下において燃焼部南壁際に小ピットが検出されている。袖石の採取穴の可能性は高い。

床下遺構は、径1.5m前後の大型不整形の土坑を北東隅に検出した。床下土坑であろうか。また竈



第168図 66号住居跡(1)

第三章 検出された遺構と遺物



第146表 66号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dbc-45・46	正方形	362×340×68	N106°E	N114°E	壁周溝 床下土坑	坏6 埴2 皿1 蓋1 壺1 甕1 瓦1	70住 67坑



第147表 66号住居跡遺物観察表

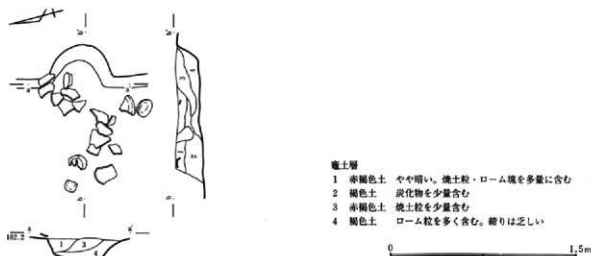
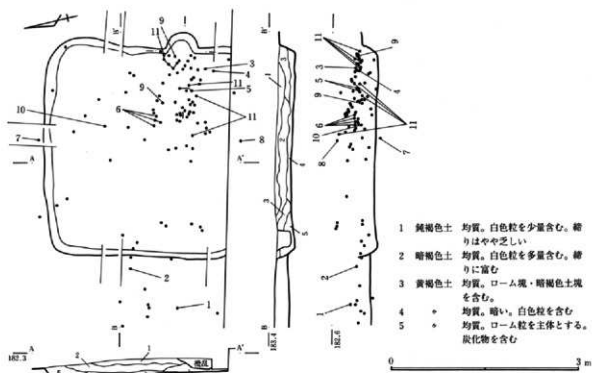
図番号 器種	法量 (cm) ( ) 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第170図 1 坏 図版 76	口： 12.0 高： 3.4	約1/3 覆土	①細 白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部彎曲を帯びて外傾し体部は扁平。底部は不安定ながら平底を呈す。口縁部横撫でやや強い。体部弱い撫で、指頭痕残る。底部幾何形。内面器壁割落。
第170図 2 坏 図版 76	口： 11.6 高： 3.3 底： 5.7	定形 床直	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ③暗灰色 ④須恵器	比較的整った器形を呈す。口縁部外反し体部中位に丸みを帯びる。下半の彎曲強い。底皿上げ底。内面見込み部比較的顕著。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第170図 3 坏 図版 76	口： (12.2) 高： 3.3 底： 6.2	約3/5 覆土	①細 白色粒・石英 ②還元焰気味 ③鈍藍色 ④須恵器	口唇部僅かに玉縁状をなす。口縁部一帯部緩やかな内彎をもつて一体化する。底部若干上げ底。内面見込み部やや緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。内面油煙付着。
第170図 4 坏 図版 76	口： (13.0) 高： 3.3 底： 7.4	約1/2 床直	①細 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③浅黄色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部下半に緩やかな彎曲を持たせる。内面見込み部顕著。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。器厚薄手。
第170図 5 坏 図版 76	口： 12.6 高： 3.9 底： 6.4	ほぼ定形 床直	①粗 片岩粒・白色粒 ②還元焰気味 ③橙色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部ほぼ直線状に開く。腹部に明瞭な彎曲を持たせる。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部に撫でが加わる。口唇部に油煙付着。
第170図 6 坏 図版 76	口： 12.7 高： 4.2 底： 6.5	約4/5 床直上	①粗 白色粒・石英 ②還元焰気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器 墨書土器	口縁一帯部内彎気味に一体化する。体部下半に整った丸みを持たせ、底部は僅かに上げ底を呈す。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。外底面に墨書。「木」か。
第170図 7 坏 図版 77	口： - 高： - 底： 6.4	約1/4 床直	①粗 片岩・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	体部は丸みを帯び緩やかに開く。高台はやや長く開き気味に付される。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。体部器厚薄手。
第170図 8 坏 図版 77	口： - 高： - 底： 6.5	約1/2 壺内	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	体部下半は丸みを帯びて緩やかに開く。高台は短い。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第170図 9 坏 図版 77	口： 14.2 高： 3.0 底： 7.3	約3/5 壺内	①粗 片岩粒・白色粒 ②還元焰気味 ③灰色 ④須恵器	口縁部強く外反し体部僅かに丸みを帯び開く。高台は直立する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第170図 10 坏 図版 77	口： 14.8 高： - 底： -	補欠損 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部低く体部一帯部直線状に開く。かえり部は短くやや内面に設計られる。右回転轆轤整形。天井部回転糸切り後周縁手持ち地調整。割れ落。断面の轆轤目強く全体に鋭利な印象。
第170図 11 坏 図版 77	口： - 高： - 底： (13.4)	底部破片 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部一帯部一体化する。高台はやや長く外反気味に直立する。左回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第170図 12 坏 図版 77	口： - 高： - 底： -	体部破片 壺外	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大妻体部破片。外面平ら引き、弱い撫で。自然粘付着。内面青海敢状当て目。

焚口部西に2基の土坑が連なるが、これも床下土坑としたい。

遺物は、比較的多く出土した。12点を図示したが、覆土上層の出土も目立つ。須恵器坏(2・4・5)、埴(7)が床直出土だが、上層の出土遺物との時期

的な差は少ない。住居跡廃絶時の廃棄であろうか。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第171図 67号住居跡

第148表 67号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dde-46・47	—	343×—×27	N104°E	N104°E		坏 6 埴 1 蓋 1 盤 1 甕 3	

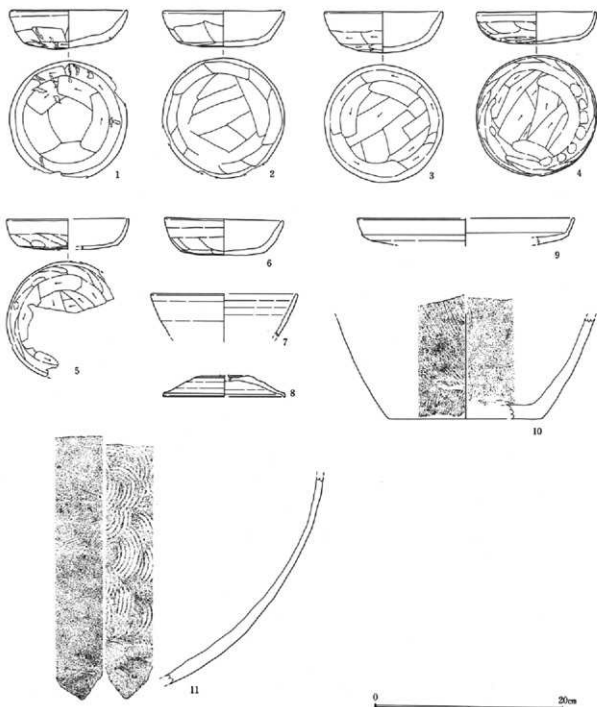
67号住居跡

調査区南側の高標高部分の台地頂部で検出された。頂部住居群の一隅である。本遺跡の調査で最も

高標高地点の住居跡である。

周辺の住居跡としては、前述の66号住居が東側に、69号住居跡が北側に近接する。

第5節 奈良・平安時代の住居跡



第172図 67号住居跡出土遺物

本住居跡は南側を調査区域外に延ばし、調査では、北側約3/4の検出となった。

平面形は判然としないが、主軸長3.4mのやや小型の不整長方形を呈する住居と考える。

深さは、約30cmと若干浅い。各壁は比較的しっかりした掘り込みで、遺存状態は良好の部類にはいる。

床面は、ほぼ平坦面を築く。貼床はなされず、黄褐色ロームの地床である。

壁周溝・柱穴は検出されなかった。貯蔵穴も相当する箇所が未調査のため確認できなかった。

竈は、東壁に設けられる。馬蹄状の煙道部を壁外に突出し、ほぼ平坦な燃焼部～焚口部を有す。袖・

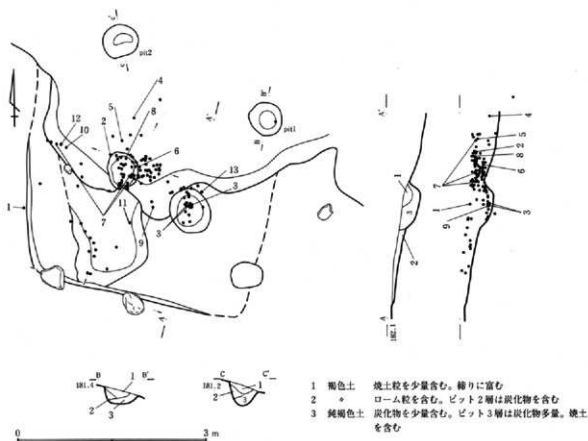
### 第三章 検出された遺構と遺物

第149表 67号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第172図 1 陶版 77	口：12.3 高：4.1	ほぼ定形 住居外	①細 片岩粒 ②燻化焰 ③鈍黄褐色 ④土師器	口唇部尖り口縁部緩やかに内彎する。体部中位で僅かに屈曲し底部は不安定。口縁～体部上半横撫で、下半横位彫削り。底部彫削りは外縁に集中し中央部では稀薄。体部下～底部型磨状観が見られる。器厚は厚手
第172図 2 坏 陶版 77	口：12.6 高：3.8	ほぼ定形 住居外	①細 片岩・石英 ②燻化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口唇部尖り口縁部緩やかに内彎する。体部中位で僅かに屈曲し底部は不安定ながら平底。口縁～体部上半横撫で、下半及び底部は彫削り後撫でを加える。体部上半に型磨状観が見られる。器厚は厚手
第172図 3 坏 陶版 77	口：12.5 高：4.3	ほぼ定形 覆土	①燻 片岩・白色粒 ②燻化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口唇部尖り口縁部緩やかに内彎する。体部中位で僅かに屈曲し底部は平底。口縁部～体部上半横撫で、下半は横位彫削り。底部彫削り。器厚は厚手。
第172図 4 坏 陶版 77	口：12.5 高：3.4	ほぼ定形 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②燻化焰 ③鈍赤褐色 ④土師器	口唇部丸みを帯びる。口縁～体部内彎し一体化する。底部緩やかな丸底。口縁部横撫で。体部斜位の高い撫で、指頭残存。底部彫削り後外縁撫で。薄手の器厚。
第172図 5 坏 陶版 77	口：(12.8) 高：(3.2)	約2/5 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②燻化焰 ③鈍黄褐色 ④土師器	口唇部僅かに丸みを帯びる。口縁～体部内彎し一体化する。底部は平底。口縁部横撫で。体部斜位の高い撫で。底部彫削り。器厚は薄手
第172図 6 坏 陶版 77	口：12.5 高：3.8	約4/5 覆土	①細 片岩粒・白色粒 ②燻化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口唇部尖り口縁部緩やかに内彎する。体部中位で僅かに屈曲し底部は不安定な平底。口縁～体部上半横撫で、下半横位彫削り後撫で、底部彫削り。体部下～底部型磨状観が見られる。厚手の器厚
第172図 7 坏 陶版 77	口：(15.3) 高：— 底：—	約1/4 床直	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁～体部緩やかな彎曲をもって一体化する。右回転轆轤整形。
第172図 8 蓋 陶版 77	口：(13.0) 高：— 底：—	約1/4 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部平坦面を築き縁が付される。横欠損。体部～頸部緩やかな彎曲をもって直線状を呈す。かえり部は短く外縁する。右回転轆轤整形。天井部回転彫削り。外面に自然軸付着。
第172図 9 盤 陶版 77	口：(22.8) 高：— 底：—	破片 覆土	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外傾し、体部縁に外縁を設ける。体部は強く圓く偏平。右回転轆轤整形。
第172図 10 蓋 陶版 77	口：— 高：— 底：(16.0)	底部破片 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部下～下半は彎曲気味に立ち上がる。外面平行引き。内面円環状当て目。横撫でが加わる。外面に自然軸付着。
第172図 11 蓋 陶版 77	口：— 高：— 底：—	体部破片 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大體体部破片。恐らく下半部か。外面平行引き後撫でが加わる。内面青海波状当て目。内外面に自然軸付着する。

天井材等の構築物は検出されず、焚口部に土師器坏や須恵器蓋体部破片が散乱していた。廢絶時の竈破壊行為によるものであろうか。

遺物は、竈焚口部周辺を中心に多く出土した。層的には上層出土が目立つ。また、西壁外にも数点の出土がみられ、本住居跡の帰属と報告した。



第173図 69号住居跡(1)

第150表 69号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	窟方位	主な施設	主な遺物	重機遺構
Def-44	—	—×395×7	N11°E	—	地床 <sup>1)</sup>	坏3 壺1 釜1 羽口4 金属器3	108・109 坑

## 69号住居跡

調査区南側の高標高部分の台地頂部で検出された。頂部住居群の一隅である。周辺地形は、北側への斜面を主としており、一部急激な崖状の段差も東西に走る。

周辺の住居跡としては、距離をおいて南東に67号住・66号住が見られる。その他の住居跡・土坑は縄文時代の所産である。

本住居跡は小鍛冶遺構である。住居跡として調査された経緯を踏まえて、本項で報告する。

本住居跡は、北側への傾斜と、東西に走る段差のため、南西隅のみに立ち上がりが確認された。遺構

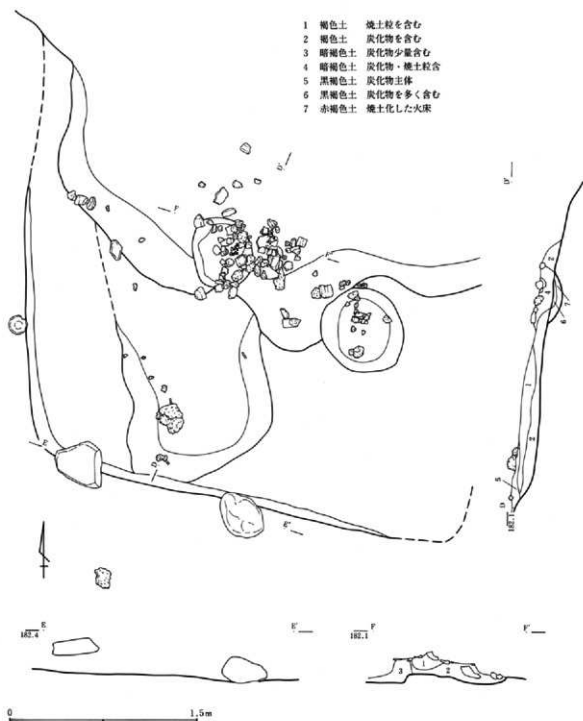
規模については、遺物の広がりや平坦面の範囲から可能な限り平面形を推定し、破線で示したが、北側の段差下の範囲に関しては、確証を得られなかった。

平面規模は、軸長約4.0m程の不整形を呈するものと考えられる。深さは、壁が確認された南東隅で約7cmと極めて遺存状態は不良である。

床面は、北側へ緩やかに傾斜し、貼床・硬化面は確認されなかった。

壁周溝・柱穴・貯蔵穴・竈は検出されなかった。灰を2基検出している。床面中央部にあたる段差上に設けられており、2基とも焼土塊・炭化物・鉄滓・羽口等が検出された。

第III章 検出された遺構と遺物



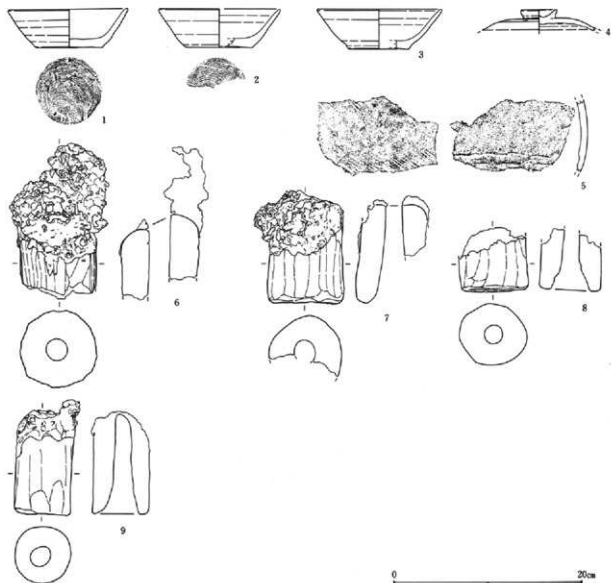
第174図 69号住居跡（2）

また、南壁上に大型の自然石が2箇出土したが、南西隅の石は上面に平坦面を持ち、作業台としての台石の機能が想起されよう。

段差下には、小型の土坑が2基検出された。埋土中に少量ながら、焼土粒・鉄滓が散布しており、本

住居跡との関連は深いものと考えた。

が址南西部には、浅い緩やかな溝状の掘り込みが確認された。土層は本住居跡埋土との差は無く、多遺構の可能性は乏しい。用途は不明だが、小鍛冶作業に伴う施設と考えた。



第175図 69号住居跡出土遺物

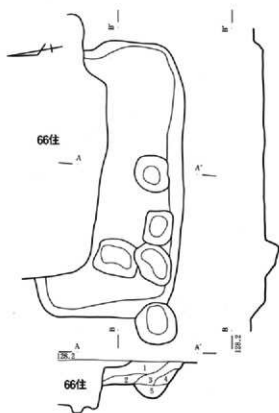
遺物は、鉄滓が広い範囲で覆土上層より出土している。また、須恵器坏(1～3)は床直・床直上の出土であり、本住居跡に伴う遺物と捉えた。羽口は2基の炉周辺出土である。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

第151表 69号住居跡遺物観察表

図番 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第175図 1 坏 図版 77	口：12.6 高：4.1 底：7.0	ほぼ完形 覆外	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口唇部やや尖り気味。口縁～体部緩やかな彎曲をもって一体化する。内面見込み部やや顕著。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。器厚やや厚手。
第175図 2 坏 図版 77	口：(12.8) 高：(5.1) 底：(7.0)	約1/4 伊周辺	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口唇部やや尖り気味。口縁～体部緩やかな彎曲をもって一体化する。内面見込み部やや顕著。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。器厚やや厚手。
第175図 3 坏 図版 77	口：(13.2) 高：(4.3) 底：(6.4)	約1/4 伊内	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰 ③黒色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し、体部中に緩やかな丸みを帯び、底部僅かに突出する。内面見込み部緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第175図 4 蓋 図版 77	口：－ 高：－ 底：(3.7)	約1/6 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部丸みを帯び、環状溝を付す。体部下半で外反する。右回転轆轤整形。天井部回転鋭削り後溝貼付。
第175図 5 羹 図版 77	口：－ 高：－ 底：－	体部破片 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大羹体部破片。外面平行叩き後弱い撫で。内面円環状当て目強く残る。
第175図 6 羽口 図版 77	長：(16.6) 径：8.1 重：848.1g	約2/3 伊周辺	①粗 片岩・砂礫 ②還元焰 ③橙色 ④土製品	棒付。比較的大型品。外面縦位置で。先端部鉄屑付着。
第175図 7 羽口 図版 77	長：12.1 径：7.9 重：574.3g	約2/3 伊内	①粗 片岩・砂礫 ②還元焰 ③橙色 ④土製品	棒付。比較的大型品。外面縦位置で。先端部も丁寧な撫で調整。中位に鉄屑付着。
第175図 8 羽口 図版 77	長：(6.9) 径：7.2 重：250.3g	約1/2 伊内	①粗 片岩・砂礫 ②還元焰 ③橙色 ④土製品	棒付。やや小型。外面縦位置で。先端部丁寧な撫で調整で強く開く。
第175図 9 羽口 図版 77	長：12.2 径：6.0 重：396.1g	完形 伊周辺	①粗 片岩・砂礫 ②還元焰 ③橙色 ④土製品	棒付。やや小型。外面縦位置で。先端部丁寧な撫で調整で開く。中位に鉄屑付着。





第176図 70号住居跡

- 1 鈍褐色土 均質。暗褐色土塊と斑状堆積。締りに富む
- 2 暗褐色土 均質。ローム粒を少量含む。締り乏しい
- 3 褐色土 均質。ローム粒を主体に炭化物を含む
- 4 黄褐色土 均質。ローム粒を主体とする
- 5 \* 小型のローム塊を主体とする。締りは乏しい

0 3 m

第152表 70号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	羅方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dbc-46・47	隅丸長方形	435×—×37	N103°E	—			66住

## 70号住居跡

調査区南側の高標高部分の台地頂部で検出された。頂部住居群の一隅である。

北側に66号住が重複し、本住居跡を切る新旧関係である。

平面形は、縦長の不整形長方形を呈す。規模は、長軸長約4.3×短軸長約2.2mの極めて小型で異形である。深さは、約40cmを測るが、壁の立ち上がりはやや緩やかである。

床面は、ほぼ平坦で黄褐色ロームの地床である。硬化面は見られなかった。

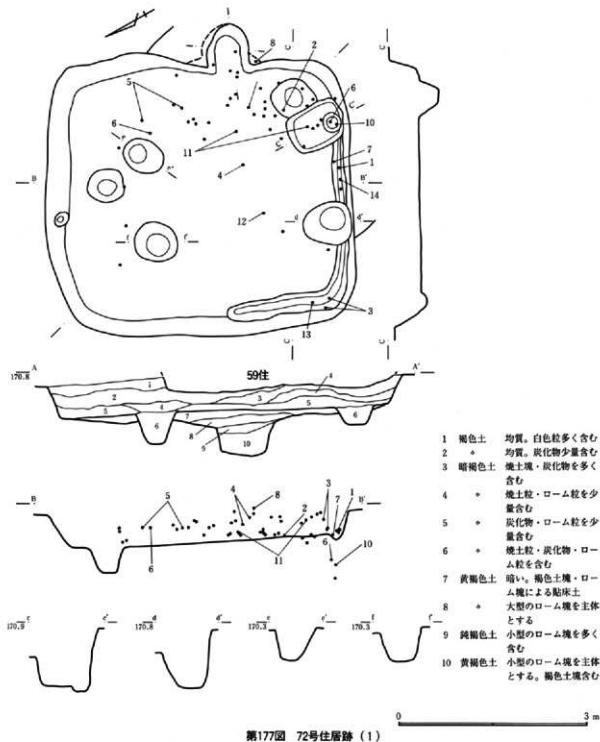
南壁際と南西隅上に5基の不整形の土坑を確認したが、柱穴・貯蔵穴等は妥当性のある土坑・ピット

は検出されなかった。竈も認められなかった。

遺物は土師器破片が出土しているが、細片であり、図示には至らなかった。

本住居跡は、住居特有の竈・炉・柱穴などが見られず、規模も縦長の小型なため、住居跡としての性格付けよりも小堅穴遺構として捉えられよう。時期は、調査当初、縄文時代の所産と考えたが、土師器破片の出土、土層の特徴から、奈良・平安時代の遺構として考えた。

第III章 検出された遺構と遺物



第153表 72号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	扉方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dk1-25・26	隅丸正方形	487×450×55	N117°E	N116°E	貯蔵穴 壁間溝 床下土坑	坏4 埴1 甕1 甕4 土付甕1	59住

## 72号住居跡

調査区中央北側の台地鞍部西で検出された。周辺は緩やかな西側と北側への斜面で、北側への傾斜が若干強い。また、本住居跡より西側は急斜面地形が展開する。

D区西斜面住居群の中央にあたり、59号住と重複する。周辺の住居跡としては、北側に77号住居跡、西側に87号住居跡と60号住、東側に56号住が近接する。また2号溝が、東側を南北に走る。

平面形は、やや横長の隅丸正方形で、東壁に緩やかな彎曲を見せるが、比較的整然とした形状を呈す。規模は約4.9×4.5mでやや大型の住居である。

深さは約50cmを超え、各壁の掘り込みもしっかりしており、良好な遺存状態を誇る。

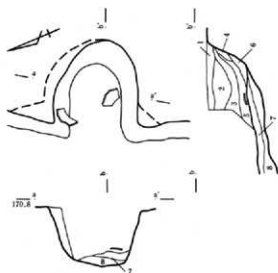
床面は、僅かな凹凸を持つもののはほぼ平坦面を築き、貼床が全面になされていた。黄褐色ローム塊と黒褐色土塊の混土による。硬化面は、床面中央に顕著で、竈周辺等比較的広い範囲に及ぶ。

壁周溝は南壁～西壁中位で確認された。浅い緩やかな立ち上がりを見せる。

柱穴は、南壁際の2基、床面北側の3基に可能性が求められる。また、あるいは南壁際東側の方形のビットを貯蔵穴と考え、東南隅の不整円形のビットを柱穴とする考えもある。調査において、いずれの土層にも柱痕が確認されず、貯蔵穴と柱穴の分別が果たし得なかった。反省点である。

その他の施設としては、北側壁に小ビットが検出されている。昇降施設の支柱とも考えたが、配置に問題があり、検討を要する。

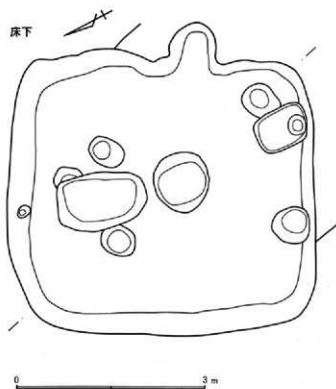
竈は、東壁ほぼ中央に設けられる。馬蹄状の煙道部を壁外に突出し、燃焼部～焚口部は僅かな凹凸を持つ平坦面である。袖は両側とも、壁の彎曲を利用するが、一部、褐色粘土塊が補強されており、図では破線でその範囲



## 層土層

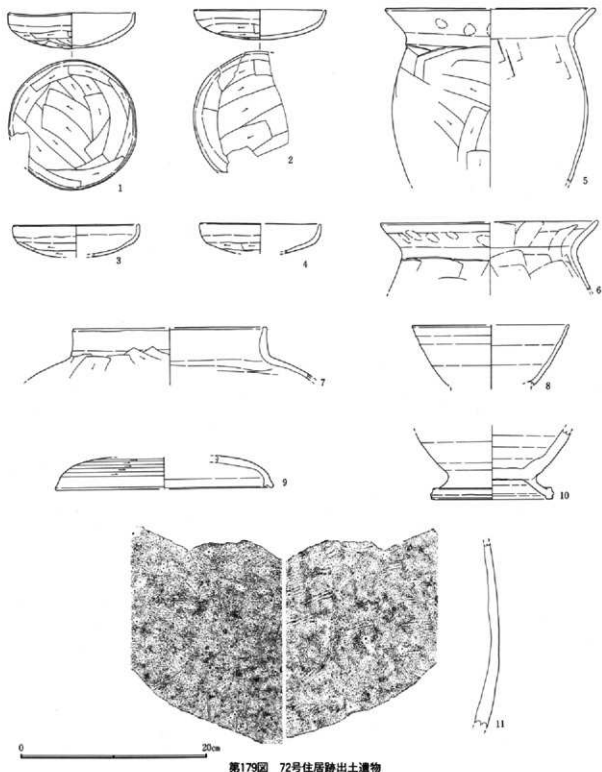
- 1 鈍褐色土 ローム塊・褐色土塊を含む。締りは乏しい
- 2 〃 ローム粒・褐色土塊を含む。締りは乏しい
- 3 灰褐色土 粘土塊を主体とし硬く締まる。焼土粒を少量含む
- 4 鈍褐色土 焼土化したローム塊を主体とする
- 5 赤褐色土 焼土粒・灰を多量に含む
- 6 灰褐色土 灰色粘土塊を主体とする。
- 7 褐色土 ローム粒を多量に含む。締りは乏しい
- 8 黄褐色土 ローム塊を主体とする。締りは乏しい

0 1.5m



第178図 72号住居跡(2)

第III章 検出された遺構と遺物



第179図 72号住居跡出土遺物

を示した。

床下遺構は、床面中央にやや小型の不整形形の土坑、その北に不整形円状の土坑検出された。床下土坑として位置付けたい。

遺物は、比較的多く出土した。上層から出土が見られるが、東南隅を中心とした床直・床直上の出土が安定する。土師器甕（5・6）や坏（4）、は上層出土であるが、他は、下層～床直・貯蔵穴内の出

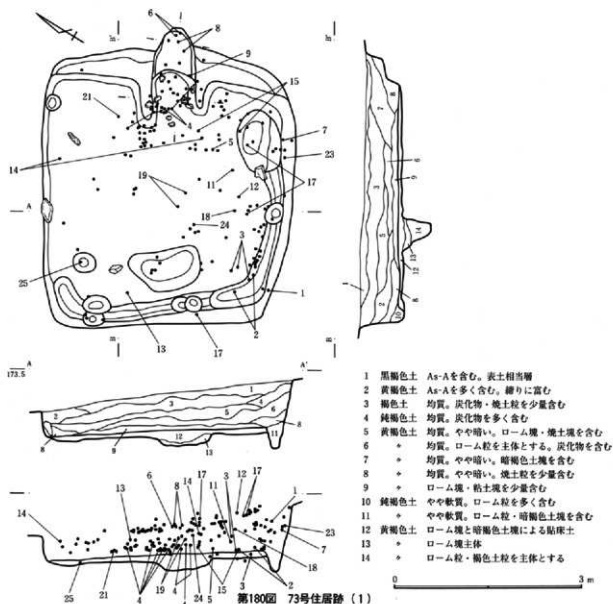
第154表 72号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (m) ( ) 測定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第179図 1 坏 図版 77	口：13.2 高：3.8	ほぼ完形 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部直立し、体部は底部と一体化し偏平。底部は丸底。口縁部横撫で、内底面の凹凸比較的顕著。体部弱い撫で。底部鋭削り。
第179図 2 坏 図版 77	口：13.2 高：3.8	ほぼ完形 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部若干外傾し、体部は底部と一体化し偏平。底部は丸底。口縁部横撫で。体部弱い撫で。底部鋭削り。
第179図 3 坏 図版 78	口：13.2 高：—	約1/2 雙階	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部若干内傾し、体部は底部と一体化し偏平。底部は尖り気味の丸底。口縁部横撫で。体部弱い撫で。底部鋭削り。体部外面に肌積状態を看取
第179図 4 坏 図版 78	口：12.6 高：—	約2/5 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部若干外傾し、体部は底部と一体化し偏平。底部は尖り気味の丸底。口縁部横撫で。体部弱い撫で。底部鋭削り。内底面の凹凸比較的顕著。
第179図 5 甕 図版 78	口：(22.0) 高：— 底：—	口縁部一 体部破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土師器	口縁部外傾し頸部緩やかな屈曲を呈す。肩部の張りは弱く体部上半に膨らみを設ける。口縁部横撫で指痕が残る。体部鋭削り強く、上半は横位・斜位、下半は縦位に施される。体部内面の横位横撫では上半に顕著。
第179図 6 甕 図版 78	口：(23.0) 高：— 底：—	約1/4 口縁部 貯蔵穴	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部外傾し頸部緩やかな屈曲を呈す。肩部の張りはやや弱い。口縁部横撫で上位と下位で強く中位に指痕が残る。体部上半は横位鋭削り強い。口縁部内面一部に縦位横撫で、体部内面は横位横撫で。
第179図 7 甕 図版 78	口：(20.3) 高：— 底：—	口縁部破片 階溝内	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰 ③鈍橙色 ④土師器	口唇部内面に丸みを帯びる。口縁部は直立し頸部緩やかに屈曲する。肩部は強く張る。口縁部横撫で後体部上半縦位鋭削り。体部内面横位横撫で。
第179図 8 埴 図版 78	口：(16.3) 高：— 底：—	破片 軸上	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	遺存不良。口縁一体部緩やかな彎曲をもって一体化する。内面見込み部緩やか。右回転軸輪整形。
第179図 9 甕 図版 78	口：(22.8) 高：— 底：—	約1/5 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部一体部緩やかな丸みをもって一体化する。裾部外反し、かえり部は受け口状に端部に設けられる。左回転軸輪整形。天井部一体部回転鋭削り。
第179図 10 台付甕 図版 78	口：— 高：— 底：11.8	底部一脚部 貯蔵穴	①粗 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	台付甕脚部。体部下半は緩やかな彎曲をもって開く。脚部は短く端部に段を持つ。右回転軸輪整形。脚部接合部撫で丁寧。体部厚薄手ながら、脚部はやや薄手。
第179図 11 甕 図版 78	口：— 高：— 底：—	体部破片 覆土	①粗 石英 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	大甕体部破片。外面平打ち。自然転行者。内面青褐色状当て目。

土である。本住居跡に帰属し得る遺物である。

土師器甕(6)の破片は貯蔵穴からも出土しており、住居廃絶時一括性を想起させよう。

第三章 検出された遺構と遺物



第155表 73号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dij-28・29	隅丸長方形	438×400×61	N60°E	N62°E	貯蔵穴 壁周溝 床下土坑 竈	坏8 埴3 蓋4 短頸壺1 栗8 紡錘車1 金属器1	

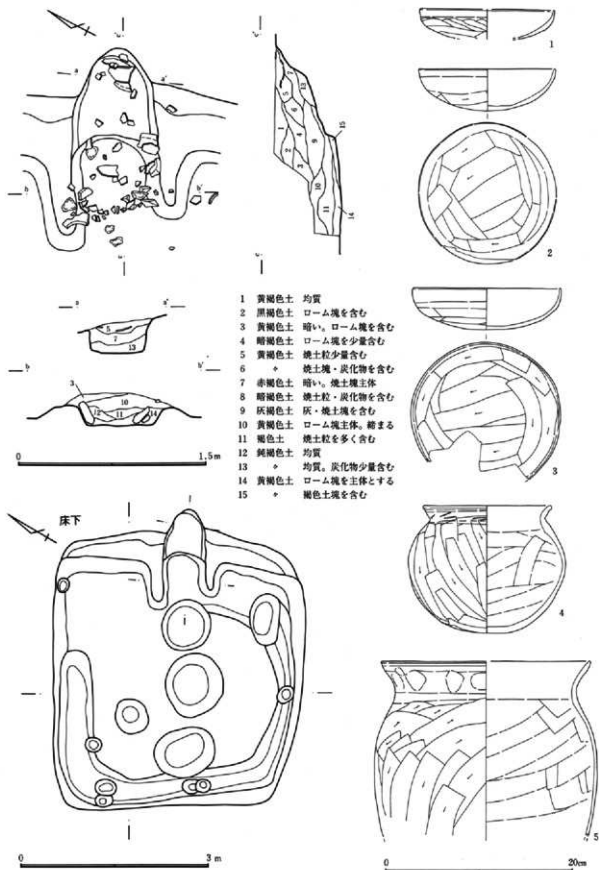
73号住居跡

調査区中央やや西よりの台地鞍部西側に位置する。周辺は緩やかな北側への斜面地形で、比較的平坦面に近い安定した地点である。

56号住・72号住等の、D区西斜面住居群とは南に距離を保つ位置である。2号溝と重複し、2号溝と

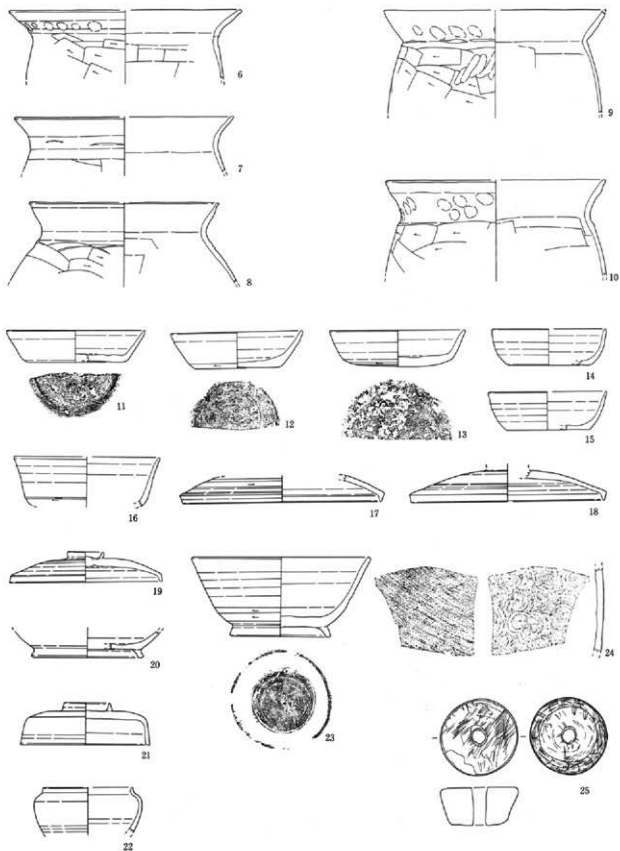
6号溝が接する箇所でもある。

本住居跡は、調査当初、57号住と重複する住居跡として確認されている。東側に重複し、竈位置・住居主軸をほぼ同一とする住居跡としていたが、土層の均一性、出土遺物の接合関係から、単独の住居跡として認定した。東側の張り出しは、棚状の施設と



第181図 73号住居跡(2)

第三章 検出された遺構と遺物



第182図 73号住居跡出土遺物



第156表 73号住居跡遺物観察表

図 番 号	法 量 ( ) 定 値	残 存 率 出 土 状 態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第181回 図版 78	1 口：(14.0) 高：— 78	破片 覆土	①細 白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	口縁部直立し体部扁平。底部は丸底か。口縁部横溝で、体部斜位指撫で、底部丸削り。
第181回 図版 78	2 口：14.6 高：— 78	ほぼ完形 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	やや大型品。口徑広く、口縁一体部内彎し一体化する。体部はやや扁平な印象。底部は丸底を呈す。口縁部横溝で、体部弱い撫で。底部丸削り。
第181回 図版 78	3 口：15.8 高：4.4 78	約3/4 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	大型品。口徑広く、口縁一体部内彎し一体化する。底部は丸底を呈す。口縁部横溝で、体部弱い撫で。底部丸削り。内底面の凹凸顯著。
第181回 図版 78	4 口：13.5 高：13.5 78	ほぼ完形 甕内	①細 片岩・白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	小型甕。口唇部下凹縁起る。口縁部短く外傾し、頸部緩やかに屈曲する。肩部はやや張り体部中位に膨らみを設け球脚状を呈す。底部丸底。口縁部横溝で後体部斜位・斜位丸削り。体部内面は横位・斜位丸撫で。
第181回 図版 78	5 口：(22.0) 高：— 底：— 78	～体部1/2 口縁部 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部外傾し頸部屈曲は緩やか。肩部の張りは弱く体部上半に膨らみを設ける。口縁部横溝で上位と下位で強く中位に指頭痕残る。体部上半は横位・斜位丸削り、下半は斜位丸削り。体部内面は横位・斜位丸撫で。
第182回 図版 78	6 口：(24.4) 高：— 底：— 78	約1/4 口縁部 甕内	①粗 白色粒・石英 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部強く開く。頸部屈曲はやや弱く肩部の張りも弱く、口縁に最大径。口縁部横溝で、中位に指頭痕。体部上半横位・斜位丸削り。体部内面横位丸撫で。
第182回 図版 78	7 口：(23.0) 高：— 底：— 78	約1/3 口縁部 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部外傾し頸部緩やかに屈曲する。肩部の張りも緩やか。口縁部横溝で頸部に及ぶ。体部上半は横位丸削り。体部内面は横位丸撫で。
第182回 図版 78	8 口：(19.8) 高：— 底：— 78	口縁部破片 甕内	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部外傾し中位に僅かな丸みを帯びる。頸部は緩やかに屈曲し、肩部はやや強く張る。口縁部横溝で後体部上半横位丸削り。丸削りは強く頸部で稜状となす。体部内面は横位丸撫で。
第182回 図版 78	9 口：— 高：— 底：— 78	頸部破片 甕内	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部外傾し中位に僅かな丸みを帯びる。頸部屈曲は比較的強く肩部の張りはやや弱い。口縁部横溝で、指頭痕残る。頸部横溝で強い。体部上半は横位・斜位丸削り後一部斜位丸撫でが加わる。体部内面横位丸撫で。
第182回 図版 78	10 口：(23.0) 高：— 底：— 78	口縁部破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部外傾し中位に僅かな丸みを帯びる。頸部は緩やかに屈曲し、肩部の張りは弱い。口縁部横溝で上位と下位で強く中位に指頭痕残る。体部上半は横位・斜位丸削り。体部内面は横位丸撫で。
第182回 図版 78	11 口：(14.7) 高：(3.4) 底：(9.8) 78	約2/5 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁一体部一体化し外傾する。底部は極僅かに上げ底。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転丸削り後撫でを加える。外面に薄く自然輪付着。
第182回 図版 78	12 口：(13.8) 高：3.8 底：9.0 78	約2/5 覆土	①粗 砂礫石英 ②還元焰 ③黄灰色 ④須恵器	口縁一体部彎曲気味に一体化する。腰部で極僅かに屈曲する。見込み部器厚やや厚手。右回転轆轤整形。底部回転丸削り。丸削りは腰部にまで及ぶ。
第182回 図版 78	13 口：14.2 高：3.9 底：10.2 78	約1/2 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁一体部直線状に一体化する。腰部で極僅かに屈曲し底部は丸底。見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転丸削り。丸削りは腰部にまで及ぶ。外器面剥落。
第182回 図版 78	14 口：(11.9) 高：(3.9) 底：(9.0) 78	約1/4 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁一体部内彎気味に一体化する。見込み部はやや緩やか。右回転轆轤整形。底部回転丸削り。

第三章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	質量 (g) 測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第182図 15 因版 79	口: (12.4) 坯高: (4.1) 底: (8.8)	約1/4 床直上	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁一体部内彎気味に一体化する。見込み部はやや緩やか。右回転軸轆整形。底部回転乾削り。体部外面轆轤目強い。
第182図 16 因版 79	口: (15.3) 高: - 底: -	破片 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	あるいは高台付坏か。口縁部は緩やかに外反し体部下下で丸みを帯びる。右回転軸轆整形。体部下半は回転乾削りを施す。器厚薄手。
第182図 17 因版 79	口: (20.7) 蓋高: - 柄高: -	約1/4 覆土	①粗 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	やや大型。緩やかな丸みを帯びる体部。かえり部は内傾する。右回転軸轆整形。天井部回転乾削り。外面に自然軸付着。
第182図 18 因版 79	口: (20.3) 蓋高: - 柄高: -	約1/3 覆土	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	やや大型。天井部一体部緩やかな丸みを帯びる。肩部は直線状でかえり部はやや内傾する。右回転軸轆整形。天井部回転乾削り後撫でが加わる。損貼付。外面に自然軸限量付着。
第182図 19 因版 79	口: (16.1) 蓋高: 3.2 柄高: 3.7	約3/4 覆土	①粗 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	円環状柄が付される。天井部やややく体部一帯部彎曲気味に一体化する。かえり部は外傾する。右回転軸轆整形。天井部回転乾削り後損貼付。貼付時周縁撫で。
第182図 20 因版 79	口: - 柄高: - 底: (11.8)	破片 覆土	①細 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	底径広く、体部下半は彎曲をもって強く開く。高台はやや短く開く。右回転軸轆整形。底部回転乾削り後高台貼付。貼付時周縁撫で。乾削りは腰部にまで及ぶ。
第182図 21 因版 79	口: 13.6 蓋高: 4.5 柄高: 4.8	約1/2 床直上	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	天井部丸みを帯び円環状の柄を付す。体部は僅かな彎曲をもって内傾し、かえり部肩部は狭小な面を持つ。右回転軸轆整形。天井部回転乾削り後損貼付。外面に自然軸及び蓋片付着。
第182図 22 因版 79	口: (9.2) 短頸高: - 頸底: -	口縁部一 体部破片 覆土	①細 石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口頸部短く直立する。肩部は張り体部上半に影らみを設ける。右回転軸轆整形。体部下半回転乾削り後撫でを施す。
第182図 23 因版 79	口: 18.7 柄高: 8.4 底: 10.3	ほぼ定形 覆土	①粗 小礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大型品。口縁一体部上半内彎気味に一体化する。体部下半に彎曲を持たせ、高台は強く開く。安定感ある器形。右回転軸轆整形。底部回転乾削り後高台貼付。貼付時周縁撫で。乾削りは体部下半にまで及ぶ。
第182図 24 因版 79	口: - 蓋高: - 底: -	体部破片 覆土	③灰色 ④須恵器	大壺体部破片。外面平行叩き。自然軸付着。内面円環状当て目。
第182図 25 因版 79	径: 4.1 柄高: 2.0 底: 56.35g	定形 ビット内	①純紋岩	中壺品。断面台形状を呈し光沢を放つ。上面に入念な同一方向の擦痕。同様な擦痕は側面にも看取される。側面に縦刻の可能性あるが判然としない。

して位置付けた。この箇所は2号溝と重複する箇所でもあり、そのため、確認に手間取った経緯がある。尚、2号溝は当地点では掘り込みも浅くなり、住居土層での確認はできなかった。

近接する住居跡としては、前述のD区西斜面住居群が北側に距離をおいて展開する。南側では、98号住居跡・107号住居跡・108号住居跡が単独で占地している。D区鞍部住居群としたい。これらの本住居

跡南側に位置する住居跡は、単独の検出が主であり、住居密度は稀薄である。該期の居住地点としては、台地鞍部よりも東側の斜面地形を遊ぶ傾向が看取された。

平面形は、やや縦長の隅丸長方形を呈す。西辺と東辺の差が若干見られるため、やや不整の感を抱くが、四隅の在り方、直線状の各壁の様相から、比較的整った形状といえよう。規模は、約4.4×4.0mの

中型の住居である。

深さは、約60cmを測る。壁の立ち上がりもしっかりしており、良好な遺存状態を誇る。

床面は、僅かな凹凸が見られるが平坦面を築き、黄褐色ローム塊と暗褐色土塊による貼床が全面になされていた。硬化面は床面中央より竈周辺にかけて顕著であり、南側壁際にまで及ぶ比較的大範囲に確認されている。

壁周溝は、南壁と西壁際で検出された。浅い掘り込みで、小ピットを重複する。この小ピットは、南壁に1基、西壁に2基1対の2箇所を確認されているが、柱穴あるいは昇降施設の支柱と考えられる。

その他の小ピットとしては、北西隅と北東隅に1基検出した。配置的には柱穴の可能性を帯びるが、確証的ではない。

貯蔵穴は、東南隅で検出された不整形円形土坑を充てたい。また、床面中央西側に不整形の土坑が位置するが、これは性格が不明である。

竈は、東壁ほぼ中央に設けられる。馬蹄状の煙道部を強く突出し、緩やかな燃焼部と笑口部の傾斜を見せる。袖は、黄褐色ロームを基盤としており、やや低く検出された。実際は、粘質土等が補強されたものと考えられる。袖の内側壁・燃焼部壁、煙道部には、自然石・土師器瓦が散乱していたが、補強材・あるいは構築材としての使用が主と思われる。土師器瓦の一部は、煮沸具としての本来の機能を考えたいが、出土状態からは補強材としての位置付けが妥当である。

さて、竈煙道部南北には、狭小な平坦面が広がる。57号住として調査された箇所だが、欄状の施設として考えたい。土器片も少量ながら出土している。

床下遺構としては、中央に南北に連なる円形の土坑を床下土坑として捉えた。また、周溝の外縁を巻くように、同様の溝状の掘り込みがある。中央部を高く盛り上げる効果ともなっており、住居構築時の掘り込みの痕跡と考えられよう。

遺物は、覆土上層～床直にかけて多く出土した。住居廃絶時の一括廃棄として捉えられよう。

#### 74号住居跡

調査区西端部にあたるD区 wx-24・25グリッドで検出された。西側への急傾斜地形ではあるが、若干緩やかな傾斜となる地点である。本住居跡より西側及び北側は急激な崖状の斜面地形となり、換言すれば台地縁辺部にあたる。

周辺の遺構は稀薄で、北側に88号住居跡が近接するのみである。ただし、台地縁辺部であること、若干ながら傾斜が緩やかになること等を勘案すると、北側への住居跡分布は広がる傾向は想定するべきである。縁辺部に展開する住居群南端にあたる可能性は高い。

平面形は、約3.7×3.6mの比較的整った隅丸正方形を呈す。南壁に緩やかではあるが彎曲が見られる。尚、北壁西半と西壁北半は斜面地形のため流失していたため、推定線を施した。

深さは、約30cm程で東側と南側の遺存状態が良好である。壁も東・南壁の掘り込みはしっかりしていた。西壁は緩やかな浅い立ち上がりである。

床面は、ほぼ平坦面を築くが北側が緩やかに凹む。黄褐色ローム塊を主体とした貼床が全面になされていた。

壁周溝は検出されなかった。

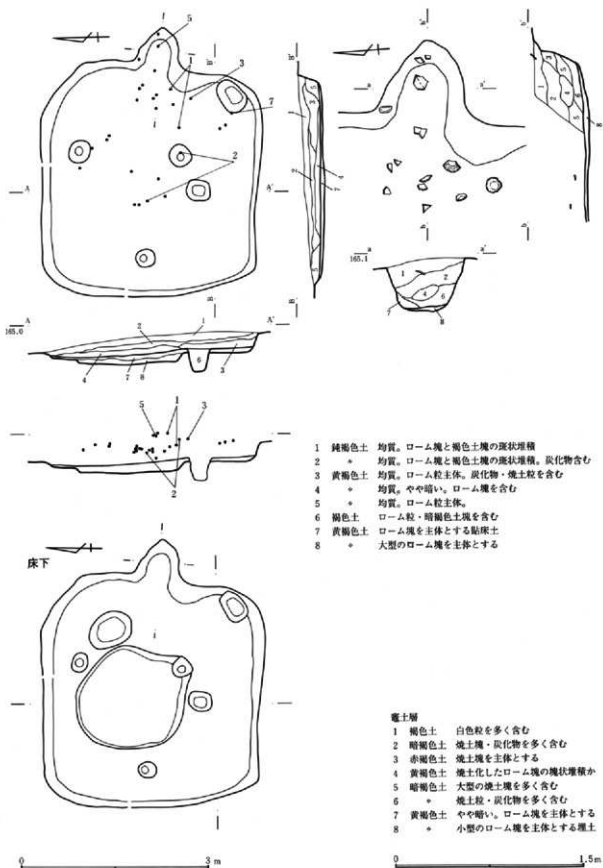
柱穴として、床面中央周辺で確認された4基の小ピットに可能性を求めたが、配置的にやや問題があり、4基全てを柱穴として確定できない。

貯蔵穴は、東南隅に不整形円状の土坑を充てたい。炭化物を混入する暗褐色土を埋土としていた。

竈は、東壁ほぼ中央に設けられる。馬蹄状の煙道部を壁外に突出し、燃焼部～笑口部の凹みは顕著ではなかった。袖は、南側が壁の彎曲を利用していった。北側は不明である。構築材・補強材として、袖や笑口部に散乱する、土器・自然石を考えたが、土器は坏類であり、自然石は小型で積極的な補強は果たせ得ないものである。

遺物は、比較的少量が出土した。覆土上層～下層の遺物が目立ち、竈周辺の須恵器坏類が本住居跡に伴う遺物と判断した。

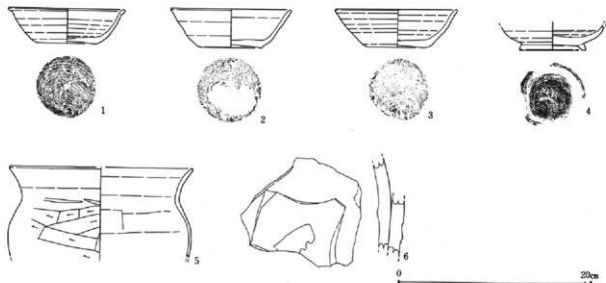
第三章 検出された遺構と遺物



- 1 純褐色土 均質。ローム塊と褐色土塊の深状堆積
- 2 \* 均質。ローム塊と褐色土塊の深状堆積。炭化物含む
- 3 黄褐色土 均質。ローム粒主体。炭化物・焼土粒を含む
- 4 \* 均質。やや暗い。ローム塊を含む
- 5 \* 均質。ローム粒主体。
- 6 褐色土 ローム粒・暗褐色土塊を含む
- 7 黄褐色土 ローム塊を主体とする堅硬土
- 8 \* 大型のローム塊を主体とする

- 礫土層
- 1 褐色土 白色粒を多く含む
  - 2 暗褐色土 焼土塊・炭化物を多く含む
  - 3 赤褐色土 焼土塊を主体とする
  - 4 黄褐色土 焼土化したローム塊の塊状堆積か
  - 5 暗褐色土 大型の焼土塊を多く含む
  - 6 \* 焼土粒・炭化物を多く含む
  - 7 黄褐色土 やや暗い。ローム塊を主体とする
  - 8 \* 小型のローム塊を主体とする礫土

第183図 74号住居跡



第184図 74号住居跡出土遺物

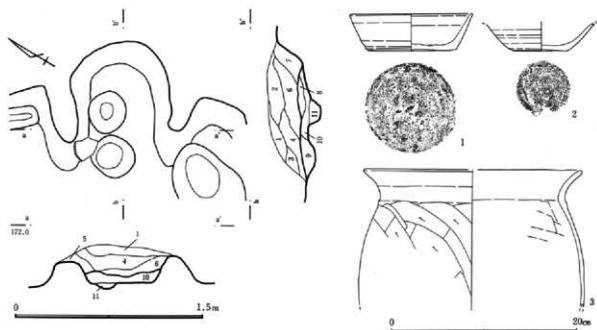
第157表 74号住居跡計画表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dw-24・25	隅丸正方形	370×355×32	N93°E	N103°E	貯蔵穴・床下土坑	坏3 壺1 甕2	

第158表 74号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(cm) ( )鑑定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴(形態・手法等)
第184図 1 坏 79 図版	口：12.2 高：3.7 底：6.3	完形 覆土	①粗 砂漉・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須忠器	口唇部突出し玉縁状をなす。口縁部一体部縁やかな丸みを帯び整った器形を呈す。底部は僅かに上げ底。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。
第184図 2 坏 79 図版	口：(12.7) 高：4.1 底：6.7	約2/3 覆土	①粗 砂漉・石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須忠器	口唇部やや肥厚し、口縁部一体部縁やかな彎曲を持って一体化する。底部は上げ底。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。
第184図 3 坏 79 図版	口：12.9 高：4.0 底：6.3	約4/5 覆土	①粗 小礫・石英 ②還元焰気味 ③灰色 ④須忠器	口縁部僅かに外反し体部中位は若干丸みを帯びる。底部僅かに突出し上げ底。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。
第184図 4 壺 79 図版	口：— 高：— 底：6.9	底部 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須忠器	体部は丸みを帯びて開く。高台は壁く開き気味に付される。内面体部中位に強い段を有す。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁無で。
第184図 5 甕 79 図版	口：(19.2) 高：— 底：—	口縁部破片 壺内	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③鈍褐色 ④須忠器	口縁部は外傾し頸部屈曲は緩やか。唇部の張りは弱く体部上半に膨らみを設ける。口縁部横撫で上で強い。体部上半は横位削り、中位は斜位削りを実施す。体部内面横位無で。
第184図 6 甕 79 図版	口：— 高：— 底：—	体部破片 覆土	①粗 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須忠器	覆着する須忠器大甕体部破片。別個体同士の覆着。下位の破片は外面平行叩き後撫で、内面環状状で目後削り無で。上位の破片は自然軸が著しく付着する。

第III章 検出された遺構と遺物



第185図 76号住層跡

第159表 76号住跡跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	電方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dfg-26・27	長方形	—×281×44	N56°E	N69°E	貯蔵穴 壁周溝	坏2 要1 金属器1	89住

第190表 76号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (m) ( ) 測定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第185図 1 版 79	口： 12.8 高： 3.9 底： 9.4	完形 床直	①粗 白色粒・石英 ②還元胎 ③灰色 ④須恵器	口唇部僅かな丸みを帯び、口縁～体部は直線状に一体化する。底径広く僅かに上げ底。内面見込み部は比較的明瞭。右面転輪軸整形。底部回転施削り後撫でを加える。
第185図 2 版 79	口： - 高： - 底： 5.6	約1/2 床直	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化塩気味 ③暗灰色 ④須恵器	口縁下に外反の走し。体部丸みを帯び比較的強く開く。底部は上げ底。右面転輪軸整形。底部回転赤切り後撫調整。内面割落著しい。体部器厚薄手
第185図 3 壺 版 79	口： (23.0) 高： - 底： -	体部約1/3 口縁部一 壺内	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化胎 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部外傾し頸部の部曲は緩やか。肩部の張りは弱く体部上半に緩やかな膨らみを設ける。口縁部横撫で強い。体部上半横位・斜位施削り、中位は斜位施削り。体部内面横位施削り。

## 76号住居跡

調査区中央北よりのD区台地鞍部に位置する。C～D区住居群の西端にあたる。周辺は緩やかな東・北斜面地形で、本住居跡は、ほぼ平坦地形に占地するといえよう。

周辺の住居跡分布は比較的濃密で、本住居跡も89号住居跡と南西側が重複する。南側には46号住が、東側には40号住が近接する。北側には住居跡が分布しないが、これは、未調査区存在のため確定的ではない。尚、89号住との新旧関係は、土層観察からは、89号住が本住居跡を切る。

平面形は、89号住との重複部分を推定すると、比較的整然とした縦長の長方形を呈し、各辺も直線状に設けられる。深さは、約40cmを超え、各壁の立ち上がりもしっかりしていた。重複住居はあるが、遺存状態は良好といえよう。

床面は、ほぼ平坦面を築く。黄褐色ローム塊と鈍褐色土塊の混土による貼床が全面に認められた。硬化面は、床面中央に顕著で、若干狭い範囲で確認された。

壁周溝は北東隅と南西隅で確認された。やや浅い掘り込みである。

柱穴は、床面北東よりと南壁際の小ピットに可能性がある。89住重複部分に対応する柱穴が推定されよう。

貯蔵穴は、南東隅で検出された不整形円状の土坑を充てたい。約20cmの深さで、壁の立ち上がりは緩

やかである。

竈は、東壁南寄り設けられる。馬蹄状の煙道部を壁外に突出する。袖はロームを基盤とし両袖とも強く突出する。燃焼部北側に小ピットが連なるが、袖石・支脚取穴の可能性もある。

遺物は、少量が出土した。土器器壺(3)は壺内、須恵器坏(1・2)は床直である。

## 77号住居跡

調査区中央北側の台地鞍部西で検出された。周辺は緩やかな西側と北側への斜面で、北側への傾斜が若干強い。また、本住居跡より西側と北側は斜面地形が強くなる。

D区西斜面住居群の北側にあたるが、北側は調査区域外となり、住居群の延長は充分想定されよう。近接する住居跡は、南側に72号住と87号住居跡が見られる。

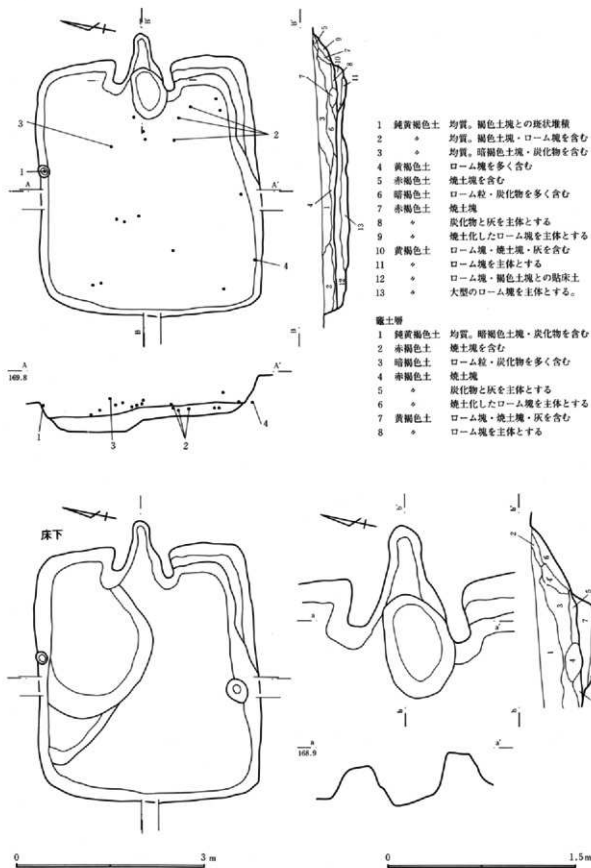
平面形は、縦長の隅丸長方形を呈し、各辺は緩やかな彎曲を持つが、比較的整った平面形である。規模は、約4.3×3.5mで中型の住居である。

深さは、約30cmを測り、各壁の立ち上がりは若干緩やかである。重複遺構もなく、遺存状態は良好といえよう。

床面は平坦面が意識されるが、北側から西側にかけて僅かな凹みが見られた。

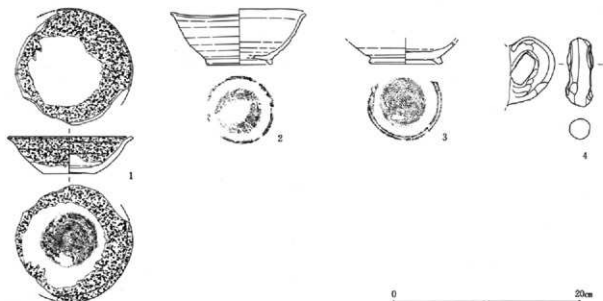
壁周溝は認められなかった。柱穴は、北壁際の小ピットと床下調査で得られた南壁際の小ピットに可

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第186図 77号住居跡





第187図 77号住居跡出土遺物

第161表 77号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dk1-23・24	長方形	403×355×32	N78°E	N75°E		坏1 瓿2 把手1	

第162表 77号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第187図 1 坏 図版 79	口：(13.0). 坏高：3.9 底：5.9	約4/5 ピット上	①細 片岩・石英 ②還元焰 ③黄灰色 ④須臾器	口縁部強く外反し体部丸みを帯びる。底部は小径で若干上付底。右回転 輪軸整形。底部回転未切り後無調整。内外面口縁一体部上半著しく油煙 が付着する
第187図 2 瓿 図版 79	口：14.3 瓿高：5.5 底：6.3	約3/4 床直	①粗 片岩・白色粒 ②酸化焰気味 ③純橙色 ④須臾器	口縁一体部上半に歪み有り。口縁部短く外反し体部中位に丸みを帯びる。 高台は短く直立する。右回転輪軸整形。底部回転未切り後高台貼付。貼 付時周縁無。外面体部及び内面体部下半輪軸目強い。
第187図 3 瓿 図版 79	口：— 瓿高：— 底：7.0	約2/5 埋土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	体部下半は緩やかな彎曲をもって強く開く。高台は短く開く。右回転 輪軸整形。底部回転未切り後高台貼付。貼付時周縁無
第187図 4 瓿? 図版 79	口：— 瓿高：— 底：—	把手 埋埋	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	壺・甕種の肩部一体部上半に付される把手か。比較的太身で縦位方向 の無でが施される。接合部の割落顯著。

能性が求められるが、出入口部の昇降施設支柱坑も考慮しておきたい。

貯蔵穴も検出されなかったが、東南隅の壁の彎曲が著しく、また壁中位に段が設けられる様相から、土坑状の貯蔵穴ではなく、相当する施設の存在を推

定できよう。

竈は、東壁中央に設けられる。溝状の煙道部を強く壁外に突出し、燃焼部～焚口部に浅い土坑状の掘り込みを有す。袖は、北側・南側とも黄褐色ロームを基盤とするしっかりした作りで「ハ」字状に突出

### 第三章 検出された遺構と遺物

する。袖石・補強材の出土は見られなかった。

床下遺構は、北側に大型の土坑を検出したが、不整形で、壁に沿った形態から、住居構築時の所産と考えた。

遺物は少量出土している。1の須恵器坏は北壁ピット上から、2は竈南の床直から、3は覆土、4は南壁際から出土した。いずれも、居住にともなう所産とは確定し難いが、1・2は住居廃絶時期を現わす出土状態といえよう。

#### 78・79号住居跡

調査区中央北のC区台地鞍部に位置する。C～D区住居群のほぼ中央にあたり、緩やかな東・北斜面地形に占地する。

周辺は住居跡が密集し、重複住居が群在する。本住居跡は、31号住・47号住・54号住と重複し、いずれにも切られる土層観察を得た。その他の近接する住居跡としては、西側には25号住・26号住が、東側には30号住・45号住が見られる。

本住居跡は調査当初は1軒の大型住居として捉えていた。平面精査を重ね、床面の状態から2軒の重複住居として捉えた。しかしながら、その他の重複する住居跡から、78号住南壁の検出が果たし得ず、本住居跡の規模は不明となった。

78号住と79号住の新旧関係は、土層観察から、78号住が79号住を切る位置にある。

平面形は、78住は計測箇所も定まらず、判然としないが、方形を基調としたプランと思われる。79号住も主軸長は不明で、短軸長約4.6mの方形を基調とした大型住居と考えられる。深さは78住が約30cm、79住が約15cmと遺存状態は不良である。

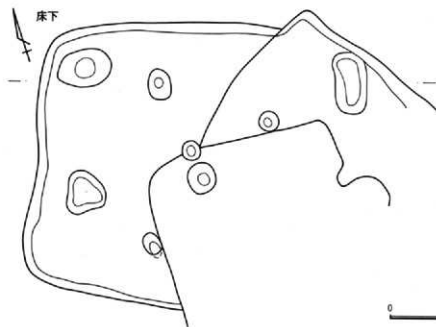
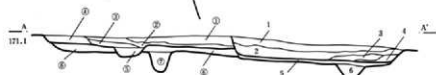
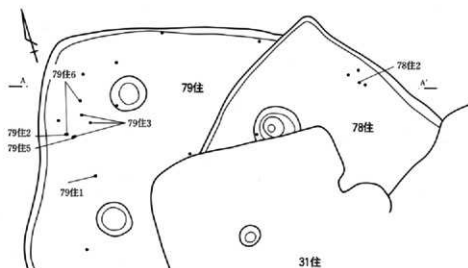
床面は、両住居跡とも若干東へ傾斜するが、ほぼ平坦面を築く。貼床がなされ、78号住は小型の黄褐色ローム塊で、79号住はローム塊と褐色土塊を構成としていた。

柱穴は、78号住は特定できず不明である。79号住は、西壁寄りに円形のピットが設けられており、78号住と31号住部分においても対応するピットが検出されている。おそらく四本柱の良好な配置と考えられよう。

竈は両住居跡とも確認できなかった。

床下調査で数基の土坑・小ピットを検出したが、性格は特定できない。

遺物は、79号住西壁際で、土師器変類のまとまった出土を見た。同時に富むものながら、居住痕跡か廃棄の所産か確定的ではない。



78号住土層

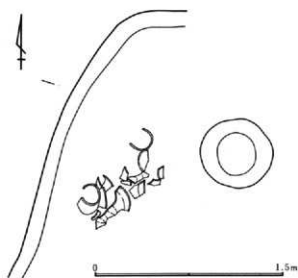
- |   |      |               |
|---|------|---------------|
| 1 | 黄褐色土 | 均質。白色粒含む      |
| 2 | *    | 均質。やや暗い       |
| 3 | *    | ローム塊を主体       |
| 4 | *    | やや暗い          |
| 5 | *    | ローム塊を主体とした貼床土 |
| 6 | *    | ローム粒を含む       |

79号住土層

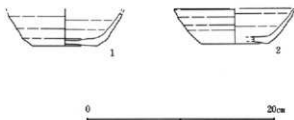
- |   |       |                |
|---|-------|----------------|
| ① | 純黄褐色土 | 均質             |
| ② | *     | 均質。やや暗い        |
| ③ | 暗褐色土  | ローム塊・灰を含む      |
| ④ | 黄褐色土  | 焼土粒少量含む        |
| ⑤ | 純黄褐色土 | ローム粒を多く含む      |
| ⑥ | 黄褐色土  | ローム塊と褐色土塊主体の貼床 |
| ⑦ | 純黄褐色土 | 小型のローム塊を含む     |



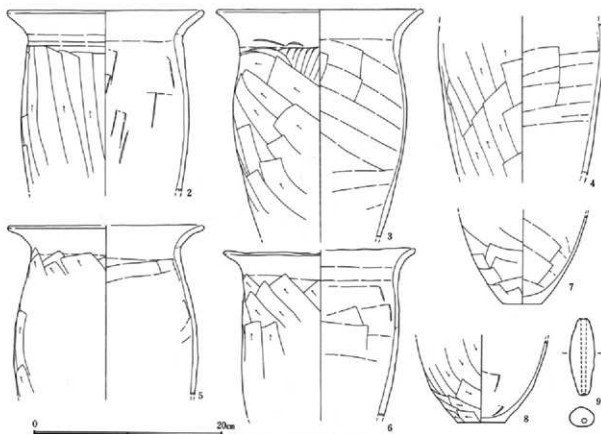
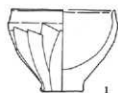
第三章 検出された遺構と遺物



第189図 79号住居跡



第190図 78号住居跡出土遺物



第191図 49号住居跡出土遺物

第163表 78号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cy-28	—	—×—×27	—	—		坏2	31-54-79 住

## 第5節 奈良・平安時代の住居跡

第164表 79号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
CyDa-27・28	—	—×460×15	N69°W	—	柱穴	坏1 罌7 土埴1	31・47・78 住

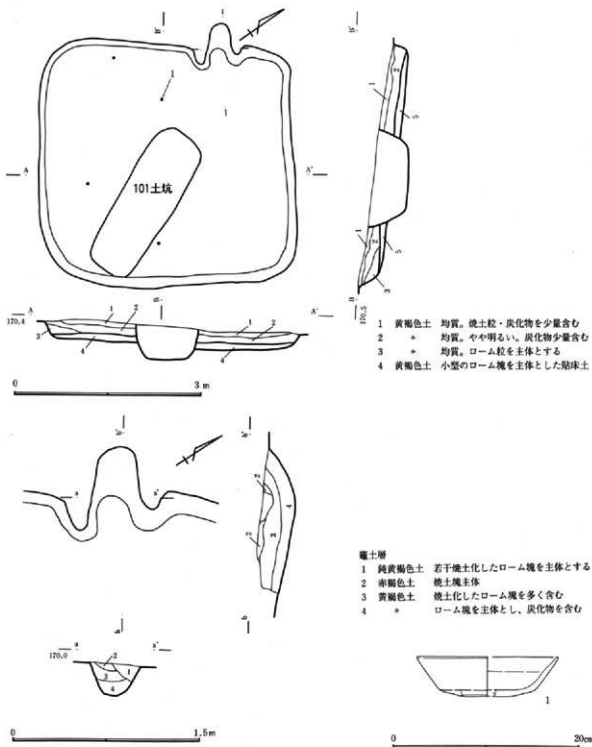
第165表 78号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(m) ( )推定積	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴(形態・手法等)
第190図1 坏 図版 79	口: — 高: — 底: 6.9	破片 覆土	①細 白色粒・石英 ②酸化還元味 ③鈍黄褐色 ④須臾器	遺存状態不良。腰部下半で彎曲を持たせる。右回転輪軸整形。底部回転糸切り後無調整。
第190図2 坏 図版 79	口:(12.5) 高:(3.7) 底:(7.0)	約1/8 覆土	①細 砂漣・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	遺存状態不良。口縁一体部直線状に開く。右回転輪軸整形。底部回転糸切り後無調整。

第166表 79号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(m) ( )推定積	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴(形態・手法等)
第191図1 坏 図版 80	口: 10.8 高: 4.3 底: 8.2	一部欠損 床直	①粗 片石・石英 ②酸化焰 ③明黄褐色 ④土師器	口縁部縁やかに内彎し腰部丸みを帯びる。底部は強く突出し、端部張り出す。口縁部横溝で、体部縦位寛削り。内面丁寧な横溝で。
第191図2 罌 図版 80	口: 20.2 高: — 底: —	約1/2 床直	①細 白色粒・石英 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口唇部丸みを帯び口縁部強く外傾する。頸部も強く屈曲するが肩部の張りは弱く体部中に緩やかな膨らみを設ける。口縁部横溝で強い。体部上半より縦位寛削りが施される。内面は横位寛削り。
第191図3 罌 図版 80	口: 21.3 高: — 底: —	約4/3 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	口縁部外反し頸部縁やかに彎曲する。肩部の張りは弱く体部上半に緩やかな膨らみを設ける。口縁部横溝で、体部上半は横位、下半は縦位・斜位寛削り。体部内面は横位・斜位寛削り。
第191図4 罌 図版 80	口: — 高: — 底: —	約1/3 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明赤色 ④土師器	長胴形の体部形態。上半に僅かな膨らみを設ける。外面縦位・斜位寛削り。内面横位寛削りで施す。
第191図5 罌 図版 80	口: 20.4 高: — 底: —	約1/4 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③赤褐色 ④土師器	口縁部強く外反し、頸部も強く屈曲するが肩部の張りは弱い。体部の膨らみは中位にやや強く設けられる。口縁部横溝で、体部上半より縦位・斜位寛削り。体部内面は横位寛削り。
第191図6 罌 図版 80	口: 19.8 高: — 底: —	約1/3 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部外反し、頸部の屈曲は弱く、肩部も不明瞭。体部の膨らみは緩やかでやや長胴形の形態。口縁部横溝で、体部上半斜位寛削り、中位は縦位寛削り。体部内面は横位寛削り。
第191図7 罌 図版 80	口: — 高: — 底: (4.0)	底部破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	底部小径で体部は緩やかな彎曲を帯びて開く。体部下半横位・斜位寛削り。底面は厚減する。体部内面は横位寛削り。3と同一個体か。
第191図8 罌 図版 80	口: — 高: — 底: 5.0	底部破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③暗赤褐色 ④土師器	底部小径で体部は強い彎曲を帯びて開く。体部下半縦位・斜位寛削り。底面も寛削り。体部内面は横位寛削り。
第191図9 土埴 図版 80	長: 4.1 径: 1.4 重: 4.83g	完形 覆土	①細 白色粒 ②酸化焰 ③浅黄褐色 ④土師器	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。中位が膨らみ両端が小径の錐錐状ながらやや細身の形態。外面縦位寛削り。

第三章 検出された遺構と遺物



第192図 87号住居跡

第167表 87号住居跡計画表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重要遺構
D1m-24~26	正方形	408×393×25	N57°W	N57°W		坏1	101坑

第168表 87号住居跡遺物観察表

図 番 号 種	法量 (cm) ( )推定値	残 存 率 出 土 状 態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第192図 1 環 図版 80	口：(14.8) 高：(4.2) 底：(10.0)	約1/4 覆土	①細 白色粒 ②酸化焙 ③褐色 ④土師器	口縁部と底部一体化し長く外傾する。底部は扁平で丸底を呈す。口縁部積層で。底部微彫り。内面は丁寧な面などで平滑。

## 87号住居跡

調査区中央北側の台地鞍部西で検出された。周辺は緩やかな西側と北側への斜面で、北側への傾斜が若干強い。また、本住居跡より西側は急斜面地形が展開する。

D区西斜面住居群の中央に位置する。重複住居跡は無く、単独の検出となった。周辺の住居跡としては、西側から南側にかけて58号住・60号～63号住、東側には59号住・72号住、北側には77号住が近接する。単独の検出とはいえ、密接する住居群にある。また、本住居跡床面中央～北西にかけて101号土坑が重複する。

平面形は、約4.0×3.9mの整った隅丸正方形を呈する。各辺も直線状で、長さも比較的等しく設けられる。

深さは、約25cm程度でやや浅いが、各壁の掘り込みはしっかりしていた。遺存状態は良好といえよう。

床面は、北側へ傾斜する。黄褐色土ローム塊を主体とした貼床が床面全面になされる。硬化面は、竈焚口部周辺に顕著にみられたが、範囲は狭く、やや不明瞭な箇所が多い。

壁周溝・柱穴・貯蔵穴は確認されなかった。床下調査においても、明瞭な掘り込みは見られなかった。

竈は、北壁東よりに設けられる。煙道部を壁外に突出し、燃焼部奥が緩やかに凹む。袖はロームを基盤とし、住居内に若干突出する形態をとる。

遺物は、貧弱な出土量である。僅かに、土師器坏(1)1点のみが図示し得た。

## 88号住居跡

調査区西端部にあたるD区vw-24グリッドで検出された。周辺は西側への急傾斜地形ではあるが、若干緩やかな傾斜となる地点である。本住居跡より

西側及び北側は急激な崖状の斜面地形となり、言い換えれば、台地縁辺部に占地する住居である。

周辺の遺構は稀薄で、74号住が南側に近接するのみである。ただ、本住居跡の北側は調査区域外であり、台地縁辺という要素を重視すると、生活領域として適当な地点である。あるいは、北側に住居跡群が存在する可能性も考えておきたい。

本住居跡は、北側を調査区域外に延ばす。未調査のため、平面形は判然としないが、おそらく軸長約2.5～3.0m程度の方角を基準とするものと考えられる。

深さは、約43cmを測り、遺存度は比較的良好である。東西壁の掘り込みはしっかりしているが、南壁の西半は、西側への傾斜のため確認が果たせず、推定線を施した。

床面は、僅かな凹凸を持つものの、ほぼ平坦面を築き、鈍褐色土ローム質土塊による貼床が床面全面を占める。

柱穴・貯蔵穴等の床面上の施設は確認されなかった。床下調査においても、明瞭な土坑等は検出していない。

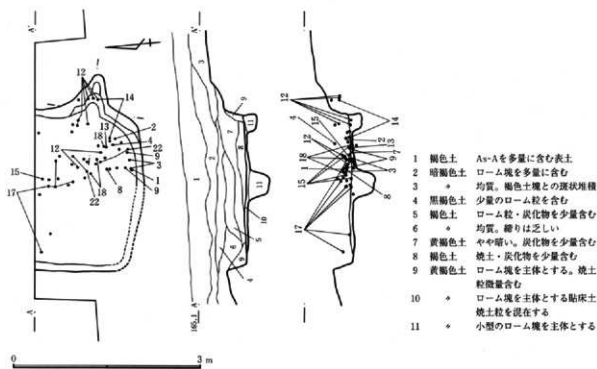
竈は、東壁南寄りに設けられる。煙道部を壁外に強く突出し、燃焼部は緩やかな凹みを持つ。

袖は検出されなかった。構築材や補強材の痕跡も明瞭ではなく、判然としない。燃焼部一煙道部に須恵器羽釜が立位で出土したが、煮沸具としての用途を充てたい。

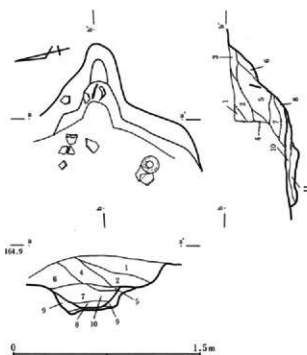
遺物は、比較的多く出土した。覆土上層～床直にかけて満遍無く見られたが、平面的には中央部～南東隅にかけて集中する傾向がみられた。

出土器種は、什器・煮沸具と揃いも良好であり、覆土下層～床直の遺物は本住居跡に帰属し得る遺物として評価を与えたい。

第三章 検出された遺構と遺物



- 1 褐色土 Aa-Aを多量に含む表土
- 2 暗褐色土 ローム塊を多量に含む
- 3 \* 均質。褐色土塊との斑状堆積
- 4 黒褐色土 少量のローム粒を含む
- 5 褐色土 ローム粒・炭化物を少量含む
- 6 \* 均質。締りは乏しい
- 7 黄褐色土 やや暗い。炭化物を少量含む
- 8 褐色土 焼土・炭化物を少量含む
- 9 黄褐色土 ローム塊を主体とする。焼土粒微量含む
- 10 \* ローム塊を主体とする粘床土。焼土粒を混在する
- 11 \* 小型のローム塊を主体とする



- 磁土層
- 1 褐色土 焼土粒・炭化物を少量含む
  - 2 暗褐色土 炭化物少量含む。締りは良好
  - 3 赤褐色土 焼土塊を主体とする
  - 4 黄褐色土 ローム粒主体。締りは乏しい
  - 5 褐色土 焼土塊を多量に含む
  - 6 黄褐色土 ローム粒主体。焼土粒を少量含む
  - 7 \* 焼土化したローム塊を含む
  - 8 赤褐色土 焼土塊を主体とする
  - 9 暗褐色土 ローム塊を少量含む
  - 10 鈍褐色土 小型のローム塊・炭化物を多く含む
  - 11 \* ローム塊・焼土粒を含む

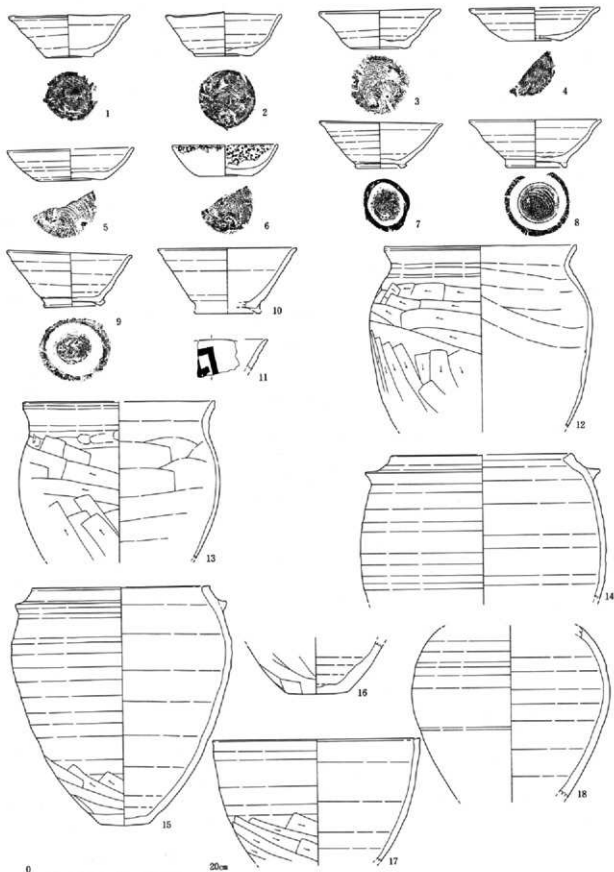
第193図 88号住居跡

第169表 88号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重要遺構
Dw1-24	—	255×—×43	N96°E	N105°E		坏6 埴5 甌1 鉢1 壺3 羽蓋2	



第5節 奈良・平安時代の住居跡



第194図 88号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

第170表 88号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第194図 1 口 環 底 図版	口：12.9 高：4.5 底：5.0	完形 床直	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③鈍黄色 ④須恵器	体部に歪み有り。口縁部肥厚し外反する。体部中位に丸みを帯び底部は小径。内面見込み部やや不明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部横溝で強い。
第194図 2 口 環 底 図版	口：12.3 高：4.5 底：6.1	完形 床直	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	口縁一帯部に歪み有り。口縁部外傾し体部に緩やかな丸みを帯びる。底部は僅かに突出。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。全体に歪みなく。
第194図 3 口 環 底 図版	口：(13.0) 高：4.1 底：5.4	約2/3 床直	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	口縁部に歪み有り。口縁部外反し体部直線状を呈す。内面見込み部やや不明瞭。腰部に緩やかな丸みを帯びる。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。
第194図 4 口 環 底 図版	口：(13.0) 高：(3.5) 底：(5.6)	約1/3 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄色 ④須恵器	口縁部肥厚し外反する。体部中位に丸みを帯び底部は小径。内面見込み部はやや不明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。
第194図 5 口 環 底 図版	口：(13.2) 高：3.3 底：(6.8)	約1/4 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ④須恵器	底径やや広く身浅の環。口縁一帯部内彎気味に一体化する。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。
第194図 6 口 環 底 図版	口：(11.1) 高：3.3 底：5.6	約1/4 覆土	①細 片岩粒・黒色粒 ②還元焰 ③橙黄色 ④須恵器	小型の環。口縁一帯部内彎気味に一体化する。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。内外面油滲着。
第194図 7 口 環 底 図版	口：12.9 高：4.9 底：4.5	約3/4 床直	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③黒褐色 ④須恵器	口縁部外反し体部緩やかな丸みを帯びる。底部は小径で高台は短い。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁隆起。
第194図 8 口 環 底 図版	口：(13.7) 高：5.1 底：6.2	約1/2 覆土下位	①粗 片岩・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部上半に丸みを帯びる。高台は短く開く。内面見込み部は緩やか。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁隆起。
第194図 9 口 環 底 図版	口：13.2 高：5.7 底：5.8	約2/3 床直	①粗 片岩・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰黄褐色 ④須恵器	口縁部外反し体部上半に丸みを帯びる。高台は短く開く。内面見込み部は明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁隆起。
第194図 10 口 環 底 図版	口：14.6 高：— 底：—	約1/3 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部は直線状に開く。高台は剥落するが開き気味の貼付。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁隆起。
第194図 11 口 環 底 図版	口：— 高：— 底：—	口縁部破片 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄色 ④須恵器 墨書土器	外反する口縁部破片。墨書が施されるが判読不能。
第194図 12 口 環 底 図版	口：20.2 高：— 底：—	約1/4 口縁一帯部 壺内	①細 白色粒 ②還元焰 ③橙黄色 ④土師器	口縁部は短く外傾し頸部は緩やかに彎曲する。肩部はやや張り体部上半に膨らみを設ける。口縁部横溝で、頸部も2条の溝で横。体部上半横位丸削り、下半縦位丸削り。体部内面は横位丸削り。
第194図 13 口 環 底 図版	口：(20.2) 高：— 底：—	口縁部～ 体部破片 床直	①細 白色粒 ②還元焰 ③鈍黄色 ④土師器	口縁部は短く外傾し頸部は緩やかに彎曲する。肩部はやや張り体部上半に膨らみを設ける。口縁部横溝で、頸部も2条の溝で横。体部上半横位丸削り、下半縦位丸削り。体部内面は横位丸削り。
第194図 14 口 環 底 図版	口：(19.0) 高：— 底：—	口縁部～ 体部破片 壺内	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰気味 ③鈍黄色 ④須恵器	口唇部は角頭状で突出気味に外傾する。口縁一帯部上半は内彎し、肩が水平に付される。口縁部内面直曲は緩やか。右回転軸彎整形後焼付貼付。貼付時横位隆起。

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形製・手法等)
第194図 15 羽釜 図版 81	口: 19.0 高: (25.2) 底: (5.0)	口縁部~底 部 約1/3 床直	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③明黄色色 ④須恵器	口唇部は角頸状を呈す。口縁~体部上半は内彎し、短い脛が外縁欠味に付される。底部小径。口縁部内面部曲は緩やか。右回転轆轤整形後押貼付。貼付時横位状態で、体部下半横位・斜位置り。
第194図 16 壺 図版 81	口: - 高: - 底: 6.5	底部 覆土	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄色色 ④須恵器	底径やや広く体部下半は緩やかな彎曲を帯びて開く。右回転轆轤整形。体部下半斜位置り。
第194図 17 鉢 図版 81	口: 22.0 鉢 高: - 底: -	口縁部~体 部 約2/3 覆土下位	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄色色 ④須恵器	器高ある鉢。口縁~体部緩やかな彎曲をもって一体化する。右回転轆轤整形。体部下半斜位置り。
第194図 18 壺 図版 81	口: - 壺 高: - 底: -	体部破片 覆土下位	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	あるいは長頸瓶か、胴部の張りはやや密く体部中に影を有する。右回転轆轤整形。体部下半は置り方がよぶが割落のため判然としない。

## 89号住居跡

調査区中央北よりのD区台区鞍部に位置する。C~D区住居群の西端にあたる。周辺は緩やかな東・北斜面地形で、本住居跡は、ほぼ平坦地形に占地するといえよう。

周辺の住居跡分布は比較的濃密で、本住居跡も76号住居跡と東側が重複する。南側には46号住が、東側には40号住が、西側にはやや距離をおいて55号住と56号住が位置する。

平面形は、東南隅の彎曲が他の隅と形状を異にするが、比較的整った隅丸正方形を呈す。規模は、約3.2×2.9m程度でやや小型の住居である。

深さは、約50cmを測り、良好な遺存といえよう。壁の立ち上がりはやや緩やかだが、しっかりした掘り込みである。

床面は、極僅かな北側への傾斜が見られるものの、ほぼ平坦面を築き、黄褐色ローム塊を主体とした貼床が全面になされていた。硬化面は床面中央を中心に比較的広い範囲で確認され、北側壁際にまで及ぶ。

壁間溝・柱穴・貯蔵穴は認められなかった。貯蔵穴は、相当する東南隅の彎曲形状が他の隅形状と違うことから、掘り込みを持たない貯蔵穴様の施設の存在も考えておきたい。

竈は、東壁ほぼ中央に設けられる。煙道部を強く壁外に突出し、両側の袖を張り出す。燃焼部は、凹

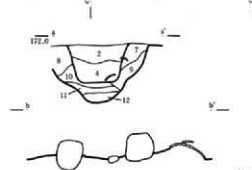
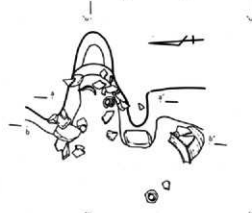
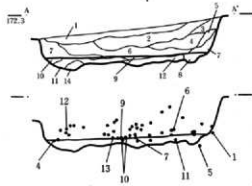
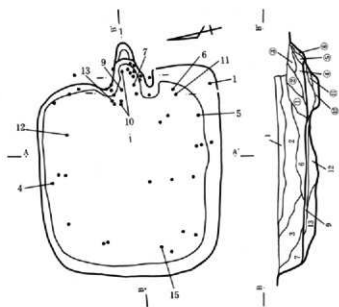
凸を持つが平坦で、明瞭な掘り込みを有しない。

袖は黄褐色ロームを基盤としており、粘質土等の補強材は確認されなかった。北袖は、壁の彎曲と連繋しており、両袖とも自然石の袖石を芯材としていた。燃焼部~煙道部の立ち上がりにかけて、自然石・須恵器碗等が散乱していたが、いずれも燃焼部壁の補強材・あるいは支脚高調整材としての2次利用と考えられる。

床下調査を行ったが、凹凸が群在するのみで、明瞭な掘り込みや床下土坑は検出されなかったため、図示には至らなかった。

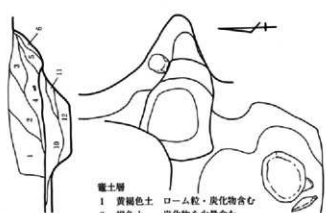
遺物は竈周辺に多く出土したが、他は特に濃密な集中は見られなかった。層別的には覆土下層~床直にかけて出土しており、下層~床直が目立つ。図示し得た遺物は13個体だが、概ねが、住居跡廃絶時の廃棄に伴う遺物と判断できよう。

第三章 検出された遺構と遺物



- 1 純褐色土 均質。ローム塊の塊状堆積。少量の炭化物を含む
- 2 暗褐色土 均質。ローム塊状堆積。炭化物・白色粒を含む
- 3 褐色土 均質。ローム塊・炭化物を少量含む
- 4 \* 大型のローム塊・炭化物を多く含む
- 5 純褐色土 均質。ローム粒を少量含む
- 6 褐色土 均質。ローム粒・白色粒を少量含む
- 7 黄褐色土 均質。ローム塊を主体に炭化物・白色粒を含む
- 8 \*
- 9 \* 暗い。ローム粒を多量に含む。締りは乏しい
- 10 \*
- 11 褐色土 大型のローム塊を含む。む締りは乏しい
- 12 \* 大型のローム塊・白色粘土塊を含む
- 13 黄褐色土 ローム粒を主体に炭化物・褐色土塊を含む
- 14 \*

0 3 m

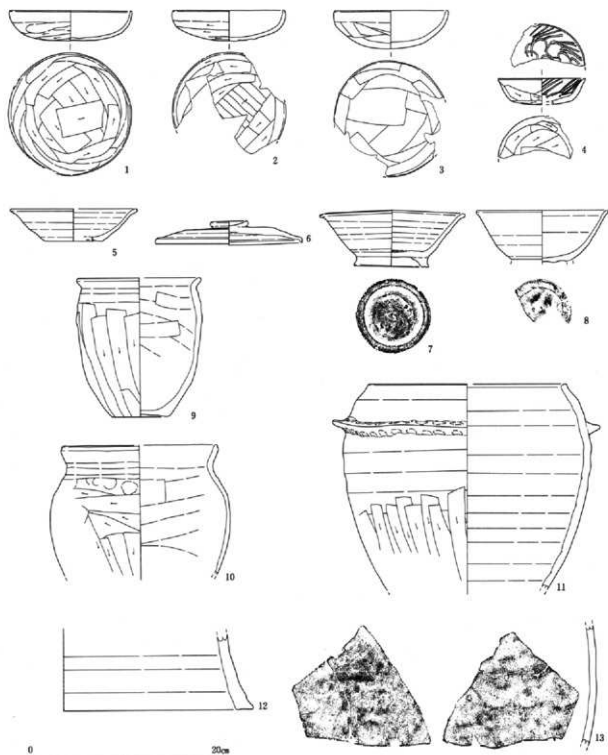


竈土層

- 1 黄褐色土 ローム粒・炭化物含む
- 2 褐色土 炭化物を少量含む
- 3 \* 焼土粒含む
- 4 黄褐色土 焼土塊を多く含む
- 5 \* ローム塊を含む
- 6 \* 炭化物を少量含む
- 7 褐色土 炭化物を少量含む
- 8 赤褐色土 炭化物・焼土粒含む
- 9 黄褐色土 焼土粒少量含む
- 10 灰褐色土 焼土塊・炭化物含む
- 11 黒褐色土 灰・焼土塊を含む
- 12 黄褐色土 ローム塊を主体とする

0 1.5 m

第195図 89号住居跡



第196図 89号住居跡出土遺物

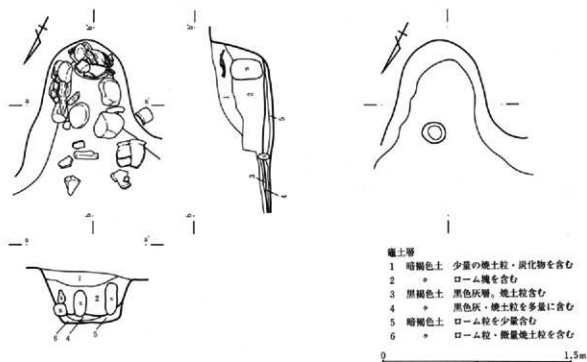
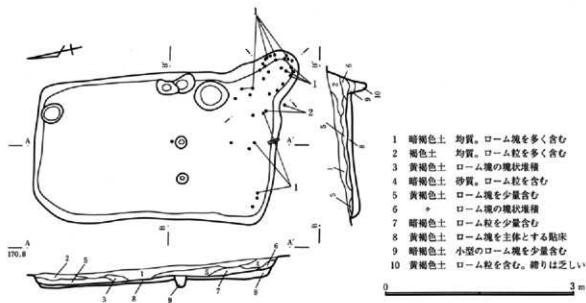
第171表 89号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dg-26・27	隅丸正方形	319×292×48	N97°E	N92°E		坏5 罎2 蓋1 甕4 羽釜1	76住

第三章 検出された遺構と遺物

第172表 89号住居跡遺物観察表

図番号 器種	質量(m) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第196図 1 器種 81	口：12.9 坏高：3.2 底：-	ほぼ完形 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	器形は扁平で、口縁一体部内彎し底部九底を呈す。口縁部横撫で、体部 腕削り後弱い横撫で、底部腕削り。内底面の凹凸顯著。
第196図 2 器種 81	口：(11.6) 坏高：3.3 底：-	約1/2 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	器形は扁平で、口縁一体部内彎し底部九底を呈す。口縁部横撫で、体部 横位腕削りで底部腕削りの延長。内底面は平滑。
第196図 3 器種 81	口：12.2 坏高：4.0 底：-	約3/4 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	やや器高ある器形。口縁部は緩やかに内彎し底部は失り気味の九底。口 縁部横撫で、体部一部腕削り。内底面は平滑。
第196図 4 器種 81	口：(9.0) 坏高：- 底：(6.4)	約1/4 床直	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍黄褐色 ④土師器	口縁一体部一体化し外傾す。底部は不安定ながら平底を呈す。口縁部 横撫で、体部斜位腕削り、底部腕削り。内面に螺旋状暗紋。
第196図 5 器種 81	口：13.2 坏高：(3.4) 底：(6.0)	約2/5 床下	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部外反し体部器高高低く直線状に開く。内面見込み部は極めて緩やか、 右回転轆轤整形。底部牽成のため切り離し技法不明。
第196図 6 器種 81	口：15.5 壺高：2.5 底：3.7	約2/3 床直上	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	扁平な器形で天井部低く平坦。環状柄。体部は直線状を呈しかえり部は 短く直立する。右回転轆轤整形。天井部回転腕削り後横貼付。
第196図 7 器種 81	口：15.2 壺高：6.0 底：7.8	約5/6 壺内	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部外反し体部直線状に開く。高台は聞き気味に付される。内面見 込み部はやや緩やか。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付 時周縁撫で、体部下半にも撫でが加わる。
第196図 8 器種 81	口：(13.7) 壺高：- 底：-	約1/4 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部外反し体部丸みを帯びる。高台は剥落する。内面見込み部は緩やか、 右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。体 部下半にも撫でが加わる。
第196図 9 器種 81	口：(13.0) 壺高：14.6 底：6.0	約1/3 壺内	①粗 砂礫・片岩 ②還元焰 ③鈍黄褐色 ④土師器	小型壺。口縁部短く頸部屈曲する。肩部の張りはやや強く体部中位に緩やかな 丸みを持たせる。底径はやや広い。轆轤整形。体部縦位腕削り。内面 横位撫で。
第196図 10 器種 81	口：(16.1) 壺高：- 底：-	口縁部一 体部破片 壺内	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③鈍赤褐色 ④土師器	コ字壺。口縁部外傾し頸部屈曲する。肩部の張りはやや強く体部上半に 膨らみを設ける。口縁部横撫で、頸部2条の撫で横。肩部に指頭痕。体 部上半横位腕削り、下半縦位腕削り。体部内面横位撫で。
第196図 11 器種 81	口：20.8 羽釜 高：- 底：-	約1/4 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁一体部強く内彎し。上半は球脚状を呈す。器は水平にやや乱雑に付 される。右回転轆轤整形。体部下半は縦位腕削り。髑貼付時の指頭痕顯 著。
第196図 12 器種 81	口：- 壺高：- 底：(36.6)	脚部破片 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	遺存不良。緩やかに内傾する脚部形態。轆轤整形。
第196図 13 器種 81	口：- 壺高：- 底：-	体部破片 壺内	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰褐色 ④須恵器	器厚やや薄手。内外面撫で。内面円環状当て目残る。

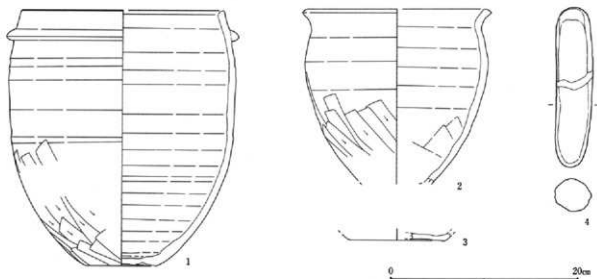


第197図 90号住居跡

第173表 90号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Ds-32・33	長方形	388×230×28	N107°E	N148°E	貯蔵穴	甕2 羽釜1 石1	

第三章 検出された遺構と遺物



第196図 90号住居跡出土遺物

第174表 90号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第196図 1 羽釜 図版 82	口：(21.4) 高：27.0 底：7.6	約1/3 壺内	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須臾器	口縁部内傾する。踵は短く内傾。体部上半は直立気味に長割化し下半は緩やかに開く。底径やや広い。口縁部内面屈曲は不明瞭。右面乾輪軸整形後髹貼付。貼付時横位強で、体部下半縦位・斜位焼割り。
第196図 2 壺 図版 82	口：18.2 高：— 底：—	約1/2 床直	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③褐色 ④須臾器	口唇部角頭状を呈し口縁部外傾する。頸部は緩やかに彎曲し肩部の張りはやや弱い。体部中位に膨らみを設ける。右面乾輪軸整形。体部下半斜位焼割り。内面体部下半には斜位焼割強を施す。
第196図 3 壺 図版 82	口：— 高：— 底：(10.0)	底部約1/4 覆土	①細 白色粒 ②酸化焰気味 ③褐色 ④須臾器	遺存状態不良。底径広い。器高やや薄手。
第196図 4 煮幅み石 図版 121	長：16.9 幅：4.0 厚：3.5	完形 覆土	①雲母石英破片 ④37.09g	乳棒状の自然石を素材とし、両端に僅かな敲打痕が見られる。中位は僅かな擦痕状の痕跡があり、巻縁を想起させる。

90号住居跡

調査区西側のD区 s-32・33グリッドで検出された。周辺は、西側への急斜面地形で、必ずしも居住に適した地形ではない。遺構密度も比較的低い。

本住居跡も単独の検出であり、重複する遺構は無かった。周辺の住居跡としても、西約8mに92号住居跡が、北西約12mに91号住居跡が見られるが、距離を保ち群をなさない。疎らな散布状況といえよう。他の遺構としては、本住居跡の東側には164～170号土坑が群在している。

平面形は、北辺と南辺長に僅差が見られ、西壁が

緩やかに彎曲を見せるものの、比較的整った横長長方形を呈す。規模は、約3.3×2.3mで小型の部屋に数えられよう。

深さは、約30cmを測るが、西壁が急斜面地形のため浅く、また各壁の立ち上がりもやや緩やかで、遺存状態はやや悪い。

床面は、中央が高い起伏は見られるが、ほぼ平坦面が意識される。黄褐色ローム塊と鈍褐色ローム塊の混土による貼床が全面になされていた。硬化面は床面中央～竈周辺に顕著で、比較的狭い範囲で確認された。



壁周溝は見られなかった。柱穴も良好な配置を呈するピットは確定し難いが、中央に東西に連なる2基の小ピット、及び東壁際と北東隅のピットに妥当性が求められよう。

貯蔵穴は、東壁南よりの竈燃焼部脇で検出された円形の土坑を充てたい。緩やかな壁の立ち上がりで深さは約20cm程度である。

竈は、東南隅に設けられる。馬蹄状煙道部～燃焼部を壁外に突出する、やや大型の印象の竈である。

袖は、明瞭には検出されなかったが、壁の彎曲が緩やかに袖状に形成されており、壁利用の袖と捉えた。粘質土等の補強材は検出されなかった。

燃焼部は、緩やかに凹むが焚口部にかけて平坦になる。焼土粒・炭化物が明瞭に堆積していた。また、燃焼部両壁には川原石が立てられ、補強がなされていた。川原石は、入念に立てられており、煙道部にまで続く。竈本体は大型だが、川原石内縁は通常の竈規模と差はない。

煙道部端部には川原石と須恵器羽釜が集中しており、煙出し様の施設が想起された。

燃焼部中央やや北寄りに、壁補強石とずれた箇所でも、やはり自然石が検出された。やや大型ではあるが、使用面下調査において、小ピットが検出されたことから、支脚として位置づけられよう。

南側袖壁際に、小型甕が出土しているが、袖芯材としての用途も考えたが、粘質土の存在が無いことから、煮沸具としての本来の用途を充てたい。

床下調査を行ったが、ほぼ平坦であり、明瞭な床下土坑等の掘り込みが見られなかった。図示には至らなかった。

遺物は、竈内及び周辺に集中する。竈構築・使用に伴う出土状態と考えられよう。覆土中よりの出土は極めて貧弱である。

#### 91号住居跡

調査区西側のD区tu-36・37グリッドで検出された。周辺は、西側への強い急斜面地形であり、遺構密度も比較的低い。

本住居跡も単独の検出であり、重複する遺構は見られなかった。周辺の住居跡は、北側に90号住・92号住居跡が10m前後の距離をおいて見られる程度であり、群をなさない。本住居跡南側も、かなりの急傾斜地形が連続しており、遺構密度は稀薄になるものと捉えられる。

平面形は、東辺と西辺長に差が見られる不整形正方形を呈す。規模は、約2.5×2.6m程度の極めて小型の住居である。

深さは、遺存の良好な東壁付近で約15cm前後で、斜面地形に影響される西壁は、極僅かな立ち上がりで確認できたのみである。遺存状態は、不良といえよう。

床面は、強い凹凸や起伏は見られないが、西側へ傾斜する。周辺地形の影響と考える。貼床が全面になされ、黄褐色ローム塊と鈍褐色土塊によるものである。硬化面は、顕著な箇所がなく、竈周辺や床面中央に点在する程度である。

壁周溝は確認されなかった。柱穴は、床面中央から西側にかけて2基の小ピットを検出している。柱痕は確認されず、配置上にもやや難点があるが、深さは良好であり、柱穴としたい。

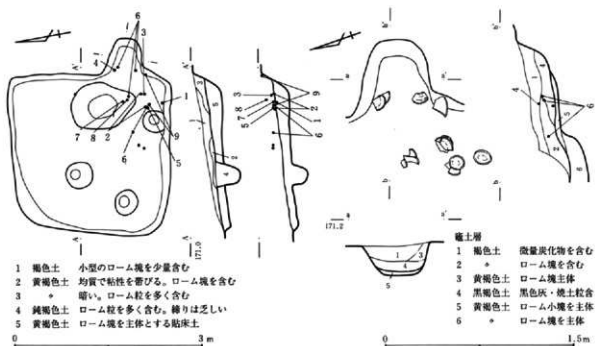
貯蔵穴は、南壁際やや東寄りの円形の小ピットを充てる。竈焚口部北に見られる不整形土坑も考えたが、床下遺構の可能性が高い。

竈は、東壁南寄りに設けられる。煙道部を壁外に突出し、袖・構架材の痕跡は確認されなかった。燃焼部～焚口部に散乱する土器類も構架材・補強材としては確定できない。

床下遺構は、前述の竈焚口部北の不整形土坑がある。東壁は住居壁と一致し、西側の立ち上がりは極めて弱いことから、住居跡構築時の所産としたい。

遺物は竈～貯蔵穴周辺に集中する。床直一床直上の出土であり、居住に伴う例と考えた。

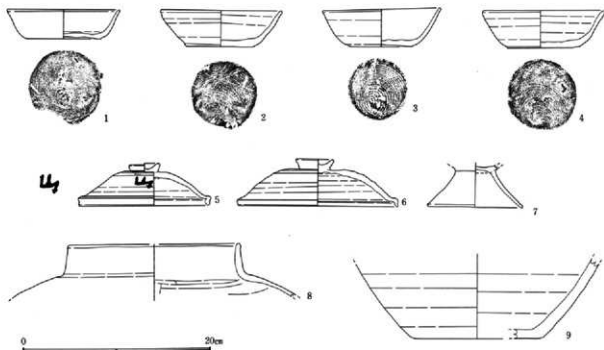
第19章 検出された遺構と遺物



第199図 91号住居跡

第175表 91号住居跡計測表

位置 (市東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dru-36・37	不整正方形	249×263×14	N100°E	N106°E	貯蔵穴・柱穴・床 下土坑	坏4 壺2 甕2 台付甕 1	



第200図 91号住居跡出土遺物

第176表 91号住居跡遺物観察表

図番号 器種	流量 (cm) ( ) 測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第200図 1 版 82	口：11.9 坯高：3.1 底：7.7	ほぼ完成 床直	①粗 白色粒・石英 ②酸化焰気味 ③黒褐色 ④須恵器	底径広くやや扁平な器形。口縁部僅かに外反し、体部丸みを帯びる。底部やや上げ底。内面見込み部はやや顕著。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部には撫でが加わる。底面及び内面色調褐色。
第200図 2 版 82	口：12.8 坯高：3.8 底：6.7	完成 床直	①粗 砂漣・石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	口縁一部縁やかに内彎し一体化する。底部は傾僅かに突出する。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後一部に撫で。口縁部外面に重ね焼きの黒斑。
第200図 3 版 82	口：12.3 坯高：4.0 底：6.5	完成 床直上	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ③黒褐色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し、体部丸みを帯び下平に顕著。底部は傾僅かに突出する。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部外面には撫でが加わる。内面器壁割著。
第200図 4 版 82	口：12.7 坯高：4.0 底：6.9	完成 甕内	①粗 砂漣・白色粒 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	口縁一部一体化し緩やかに内彎する。下平丸みを帯び底部僅かに突出する。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部外面には撫でが加わる。
第200図 5 版 82	口：13.5 蓋高：4.0 蓋径：3.0	完成 床直上	①粗 砂漣・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器 墨書土器	天井部比較的高く小型の環状溝を付す。体部一帯部は緩やかに彎曲をしかえり部は内傾し溝部丸みを帯びる。右回転轆轤整形。天井部回転糸切り後周縁回転鋭削り。墨書判読不能。
第200図 6 版 82	口：16.8 蓋高：5.0 蓋径：4.0	完成 甕内	①粗 漣・片岩 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	やや大型品。天井部高く環状溝を付す。体部一帯部丸みを帯び、かえり部は内傾する。右回転轆轤整形。天井部回転糸切り後周縁回転鋭削り。外面重ね焼きの黒斑。
第200図 7 版 82	口：— 台付裏高：— 版 82 底：(9.8)	脚部一部 約1/3 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	台付裏脚部。体部は比較的低く開く。脚部は長く外反気味に開く。内外面とも丁寧な横撫で。器厚薄手。
第200図 8 版 82	口：(18.0) 裏高：— 版 82 底：—	口縁部破片 覆土下位	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ③明黄褐色 ④土師器	口唇部端部丸みを帯びる。口縁部内傾気味に直立し、肩部は強く張る。外面磨減著しく調整技法は不明。内面口縁部横撫で、体部横位撫で。
第200図 9 版 82	口：— 裏高：— 版 82 底：(13.6)	底部破片 床直	①粗 片岩・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	体部下平強く開く。腰部に丸みを帯び底部は平底。轆轤整形。

## 92号住居跡

調査区西側のD区uv-33・34グリッドに位置する。周辺は西側への急斜面地形で、遺構密度は比較的低い。近接する住居跡は無く、南西に93号住居跡、南東に91号住居跡が10m前後の距離をおいて占地する。

遺構密度は低いものの、本住居跡は3軒の重複住居である。故に、居住への集中度は高いものと考えられ、斜面地形においても、居住の必要性が求められる要因を考えねばならないだろう。

本住居跡の重複状況は、調査当初確認されておらず、図示した92A号住のみの1軒と捉えていた経緯

がある。その後3基の竈を確認するに至り、3軒以上の重複住居として、調査を進めたが、既に大半の埋土は除去されたため、竈等の埋土観察は一部のみにとどまった。

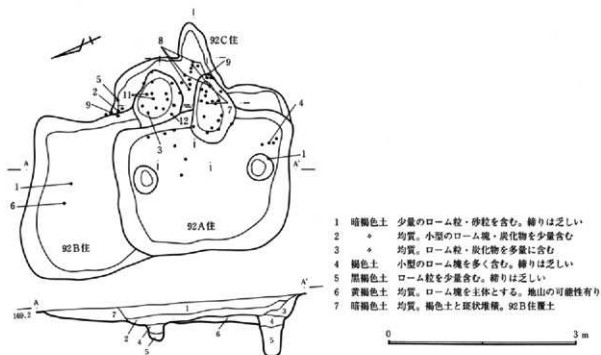
新旧関係は、C→B→Aの順と捉えた。以下A→Cの概略を述べる。

## (92A号住)

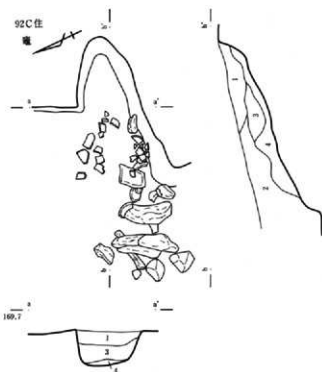
平面形は、約2.8×2.3mの小型の横長不整形である。深さは約20cm程度で浅く、西側壁の立ち上がりは緩やかである。

床面は、やや南西に傾斜し、黄褐色ローム層を基盤とする地床である。

第三章 検出された遺構と遺物



- 1 暗褐色土 少量のローム粒・砂粒を含む。締りは乏しい
- 2 \* 均質。小型のローム塊・炭化物を少量含む
- 3 \* 均質。ローム粒・炭化物を多量に含む
- 4 褐色土 小型のローム塊を多く含む。締りは乏しい
- 5 黒褐色土 ローム粒を少量含む。締りは乏しい
- 6 黄褐色土 均質。ローム塊を主体とする。地山の可能性有り
- 7 暗褐色土 均質。褐色土と炭状堆積。92B住居土

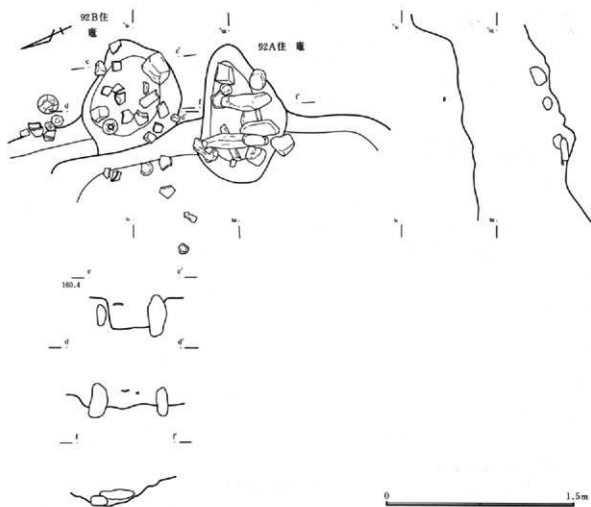


- 礫土層
- 1 暗褐色土 暗い。砂質。ローム粒・焼土粒を微量含む
  - 2 \* 明るい。焼土粒を少量含む
  - 3 褐色土 ローム塊を多く含む。焼土粒少量
  - 4 黄褐色土 ローム粒を主体とし黒色灰を少量含む

第201図 92号住居跡(1)

第177表 92A号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Duv-33・34	不整形	277×225×23	N110°E	N108°E	柱穴	埴6 羽釜3 瓦3	92B・ 92C住



第202図 92号住居跡(2)

第178表 92B号住居跡計測表

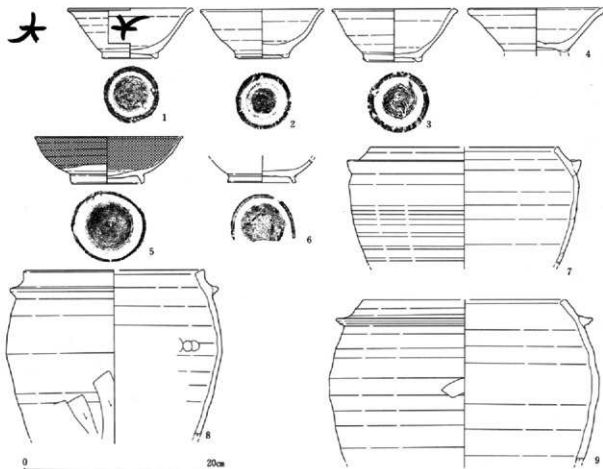
位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dav-33	—	—×257×20	N113°E	N106°E		92A住と同一	92A・ 92C住

第179表 92C号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dav-33・34	—	—×273×—	—	N106°E		92A住と同一	92A・ 92B住

柱穴が北・南壁際に対応した位置で確認された。深さがやや不揃いではあるが、良好な配置である。貯蔵穴・壁周溝は見られなかった。竈は東壁中央で確認された。煙道部を強く壁外に

突出し、燃焼部—焚口部に弱い掘り込みを持つ。袖は顕著ではなかったが、焚口部に横位に出土した自然石を天井材と捉え、その両脇の自然石を袖石と考えた。天井材は、燃焼部にも設けられているが、燃



第293図 92号住居跡出土遺物

焼部に崩落していた。出土したその他の自然石は、  
 焼焼部壁の補強材と考えられよう。

(92B号住)

平面形は、主軸長約2.6m程度の不整形を呈す。  
 恐らく92A号住と同等の規模と思われる。深さは、  
 浅く20cm程度である。壁の立ち上がりは、北側と西  
 側で緩やかで、浅い印象を加味する。

床面は、南西に傾斜した黄褐色ローム層を基盤と  
 する地床である。

柱穴・貯蔵穴は確認されなかった。

竈は、東壁に設けられる。煙道部を壁外に突出し、  
 不整形桶状の掘り込みを持つ。焼土塊が堆積してい  
 た。袖等の構築材は確定し難いが、自然石や土器片  
 の散布は、竈破壊行為の存在を想起できよう。

(92C号住)

92A・B号住の東側で検出された。当初本住居跡

の竈1基のみの残存と捉えた経緯がある。

平面形は、竈を挟み南側と北側の平面形の差が顕  
 著で、不整形を呈す。規模は副軸長2.7m程度の  
 小型の住居と考えられる。

床面の状態は判然とせず、東側壁の立ち上がりも  
 やや弱い状態である。

竈は東壁中央に設けられる。南側と北側の壁の走  
 行に著しい差があり、南側は袖としての機能を想起  
 させる。溝状の煙道部を壁外に強く突出し、緩やか  
 に焼焼部〜焚口部に至る。袖材等の構築物は検出さ  
 れず、焼焼部に散乱する遺物と焼土塊を確認したの  
 みである。尚、201図下の竈図焚口部の自然石は、  
 92A号住の構築物である。

以上のように本住居跡に含まれる3軒の住居は、  
 すべて小型の住居跡と思われ、本来ならば、居住に

第180表 92号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第203図 1 陶版 82	口: (13.0), 高: 5.3, 底: 5.9	約1/2 92A床直上 92B床直上	①粗 片岩・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰白色 ④須臾器	口縁部外反し体部緩やかな丸みを帯びる。高台は短く直立する。内面見込み部は緩やか。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。撫では体部に及ぶ。体部内面に墨書。逆立「大」か。
第203図 2 陶版 82	口: 12.8, 高: 5.2, 底: 5.2	約2/3 92C床直上	①細 片岩・石英 ②酸化焰気味 ③灰色 ④須臾器	口縁部外反し体部中位に丸みを帯びる。高台は短く直立する。内面見込み部は緩やか。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。撫では体部に及ぶ。
第203図 3 陶版 82	口: 12.7, 高: 5.6, 底: 5.3	ほぼ完形 92B直上	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須臾器	口縁部外反し体部中位に丸みを帯びる。高台は短く直立する。内面見込み部やや明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。撫では体部に及ぶ。
第203図 4 陶版 82	口: (14.2), 高: - 底: -	約1/2 92A床直上	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③純黄褐色 ④須臾器	口唇部肥厚し口縁部外反する。体部は直線状に開く。高台は剥着後接着時の痕跡明瞭。内面見込み部緩やか。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。撫では体部に及ぶ。
第203図 5 陶版 82	口: 15.5, 高: 5.0, 底: 7.2	約4/5 92C床直上	①緻密 ②還元焰 ③灰白色 ④灰輪陶器	口徑広く整った器形を呈す。口縁部僅かに外反し体部丸みを帯びる。高台は三日状を呈す。内底面中央凹む。左回転軸彎整形。底部回転乾削り後高台貼付。輪縁は潰け掛ける。
第203図 6 陶版 82	口: - 高: - 底: 7.2	約1/3 92B直上	①細 白色粒 ②酸化焰気味 ③褐色 ④須臾器	強く開く体部下平。高台は開く。右回転軸彎整形。底部切り難し技法不明。高台貼付。内面黒色処理。内面体部は横位。底面は一定方向の磨きを施す。
第203図 7 羽釜 陶版 82	口: 20.0, 高: - 底: -	口縁部一体部 約1/4 92A直上	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③純黄褐色 ④須臾器	口縁部一体部上半内押し一体化する。器は短く外傾気味に付される。右回転軸彎整形。外面輪縁目強い。
第203図 8 羽釜 陶版 82	口: 19.2, 高: - 底: -	口縁部一体部 約1/2 92C床直上	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰黄色 ④須臾器	口縁部外反し体部上半丸みを帯びる。器は短く若干外傾気味に付される。右回転軸彎整形。外面体部下平位乾削り。内面体部中位に指頭痕。
第203図 9 羽釜 陶版 82	口: (21.2), 高: - 底: -	口縁部一体部破片 92C床直上	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③淡黄色 ④須臾器	口縁部一体部内押しする。器はやや長く水平気味に付される。右回転軸彎整形。体部中位に弱い撫で。

不適当な西側斜面への集中は、この3軒の住居跡相互に関連性を持つものと考えられる。建て替えによる重複と捉えたい。

### 93号住居跡

調査区西側のD区w-35・36で検出された。周辺は西側への急斜面地形で、遺構密度は比較的低い。近接する住居跡は無く、東側に91号住居・92号住居が10m前後の距離をおいて占地する。本住居跡は、今回の調査では、最南西端で確認された住居である。南側及び西側は傾斜が極めて強く、おそらく、集落においても端部に位置すると思われる。

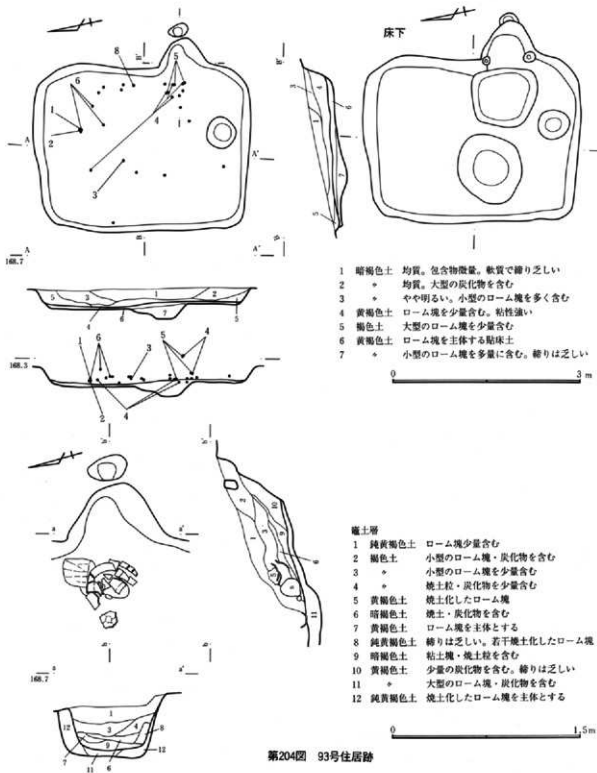
平面形は、比較的整然とした横長長方形を呈す。規模は、約3.9×2.6m程度のやや小型の住居である。深さは、約30cmと周辺の住居跡深度に比して良好な遺存度である。ただ同様に西側壁は斜面地形のため流失しており、浅く立ち上がりも弱い。

床面も、傾斜地形に影響を受けたのか西側へ傾斜する。僅かではあるが起伏・凹凸も見られ、平坦な印象は受けにくい。貼床は黄褐色ローム塊と暗褐色土塊の混合土で全面になされていた。

壁周溝・柱穴は確認されなかった。

貯蔵穴は、南壁際で検出された不整形の小型の土坑を充てたい。通常の東南隅に設けられる配置と

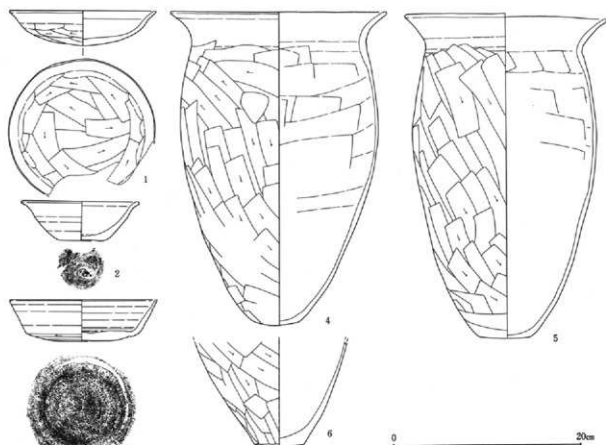
第三章 検出された遺構と遺物



第181表 93号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dw-35・36	隅丸長方形	292×265×33	N101°E	N101°E	貯蔵穴・床下土坑	坏3 婁3	





第205図 93号住居跡出土遺物

第182表 93号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (m) ( ) 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第205図 1 口径 83	口：15.4 高：3.7	一部欠損 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍橙色 ④土師器	口径広い。口縁部外反し、体部～底部扁平で一体化する。底部は丸底。口縁部横撫で、体部縦削り後撫で底部艶削り。内底面削落。
第205図 2 口径 83	口：12.2 高：4.2 底：4.7	約3/4 床直上	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	底部小径。口縁部に歪み有り。口縁部外反し体部丸みを帯びる。底部は僅かに上げ底。内面見込み部は緩やか。右回転軸整形。底部回転弁切り後無調整。
第205図 3 口径 83	口：(15.6) 高：4.4 底：11.6	約4/5 床直上	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口径広い。口唇部尖り、口縁～体部外傾し一体化する。底部は丸底。内面見込み部明瞭。左回転軸整形。底部回転艶削り。体部器厚薄手。
第205図 4 口径 83	口：23.4 高：33.0	約3/4 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口唇部肥厚する。口縁部外反し頸部緩やかに屈曲する。肩部の張りは弱く体部中位に膨らみを設ける。口縁部横撫で、体部上半横位、下半縦位艶削り。体部内面横位・斜位艶撫で。外面底部黒底。
第205図 5 口径 83	口：21.3 高：34.0 底：5.4	約3/4 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部外反し頸部緩やかに屈曲する。肩部の張りは強く体部中位に膨らみを設ける。口縁部横撫で、体部上半斜位、下半は縦位艶削り。体部内面横位艶撫で。外面底部黒底。
第205図 6 口径 83	口：— 高：— 底：5.2	体部～底部 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	底部小径。緩やかな彎曲を帯びて固く体部下半。体部中位斜位、下半縦位艶削り。底面も艶削りを施す。内面撫で、器壁剥落著しい。

### 第三章 検出された遺構と遺物

異にするが、床面上で確認された土坑はこの1基のみであり、貯蔵穴としての位置づけが妥当と考えた。

竈は、東壁南寄りに設けられる。煙道部の遺存が良好で狭小ながら、黄褐色ローム層を基盤とする、煙道天井部が残存していた。煙道部の立ち上がりは、比較的強く天井部下で僅かに屈曲する。

燃焼部～焚口部は緩やかに傾斜し、焼土塊・焼土粒・炭化物が堆積していた。

袖は、粘質土等の構築材の痕跡は認められなかったが、使用面下の調査において、対になる小ピットが確認された。袖石等の芯材採取穴と捉えたい。

焚口部には、大型の自然石を主体に土師器甕等の遺物の集見が見られた。おそらく自然石は、構築物・補強材に使用されたと思われ、火熱を受けた痕跡が明瞭だった。また、土師器甕は2個体分が集中している。煮沸具としての用途が妥当な例ではあるが、袖芯材としての再利用も考えておきたい。

天井部が残存する良好な遺存状態を呈す竈ではあるが、焚口部の遺物の散乱状況から、住居跡廃絶時の破壊行為が伴う可能性が高い。

床下遺構は、床面中央の東側と西側に2基の大型不整形の土坑が連なる。両者とも床下土坑として位置付けたい。

遺物の出土状況は、前述の竈周辺の出土が目立つが、全体に散漫な平面分布を示す。層位的には、竈焚口部より出土した土師器甕(4・5)は床直と捉えられるが、その他の土師器杯(1)や須恵器杯(2・3)は床直上の出土である。住居跡廃絶の一括性にはある程度富むが、居住に伴う組成とは考えられない。

### 94号住居跡

調査区南西部にあたるD区m-39グリッドで検出された。周辺は北側と西側への傾斜地形で、特に本住居跡西側で傾斜が強くなり、段差が南北に走る箇所もある。

周辺の住居跡としては、北約2mに95号住居跡、西側の段差を挟んで、101号住居跡・102号住居跡が位置する。南側と東側には近接する遺構は無く、特に南側の調査区域外は斜面地形が発達しており、遺構密度は極端に低くなるものと考えられる。

平面形は、各壁に僅かな小彎曲が見られるものの、比較的整然とした正方形を呈する。規模は、軸長3.5m前後のやや小型の住居である。

深さは、約30cm程度でやや浅い掘り込みである。各壁の立ち上がりは、若干緩やかながら、しっかりとしていた。遺存状態は良好といえよう。

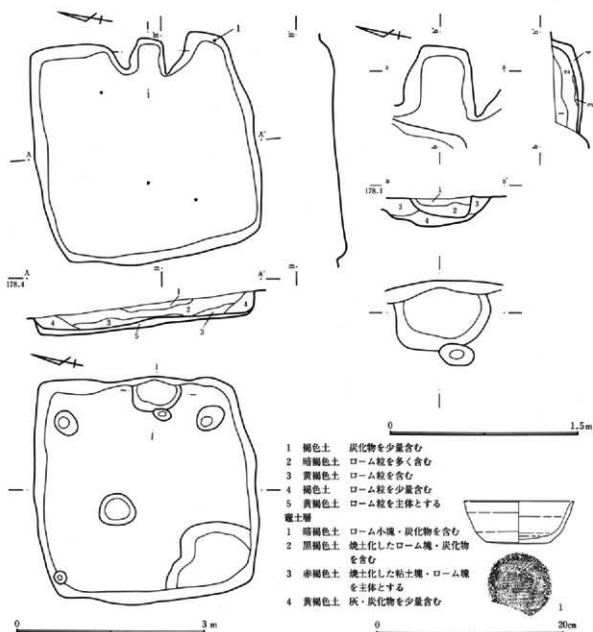
床面は、凹凸・起伏が見られ、北西側への傾斜が顕著である。黄褐色ローム塊を主体とした貼床が全面に認められ、硬化面の範囲は狭く、竈周辺にとどまる。

壁周溝は検出されなかった。柱穴は、床面上では確認できなかったが、床下調査において、北西隅と北東隅に検出された小ピットに可能性がある。尚、南東隅のピットは貯蔵穴と位置付けた。

竈は、東壁やや南寄りに設けられる。煙道部は、壁外に突出せず、馬蹄状の燃焼部を持つ。燃焼部～焚口部は緩やかに凹み、少量の焼土・炭化物が堆積していた。袖は、北側・南側とも黄褐色粘質土を主体にしており、強く張り出す。芯材は検出されなかった。

床下調査は、前述の柱穴・貯蔵穴の他、中央やや北西寄りに小型の土坑を検出した。小型ながら、黄褐色ローム塊を埋土としており、床下土坑と考えたい。また、南西隅に不整形の浅い凹みを検出したが、住居構築時の掘り込みと位置付けた。

遺物は、貧弱な出土であり、覆土下層出土の須恵器杯1点を図示し得たのみである。



第206図 94号住居跡・出土遺物

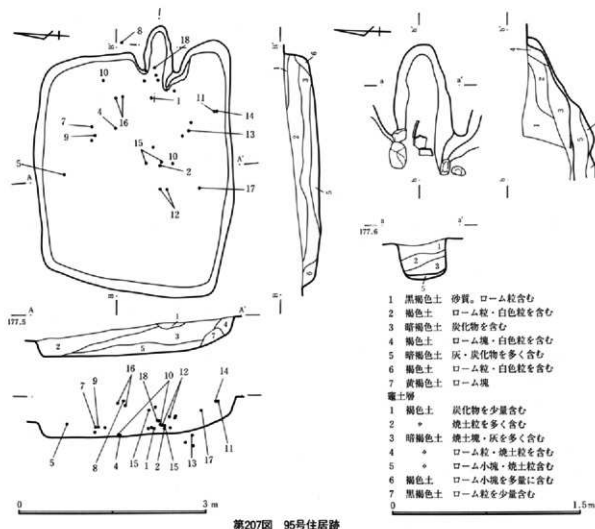
第183表 94号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	方位	主な施設	主な遺物	重葺遺構
Dm-39	正方形	352×350×27	N73°E	N83°E	貯蔵穴・柱穴・床 下土坑	環1	

第184表 94号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(m) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第206図 1 環 図版 83	口: 11.4 高: 4.5 底: 6.6	約3/4 覆土下位	①細 白色粒・石英 ②薄光焰 ③灰白色 ④須臾器	口縁部一体部彎曲気味に一体化する。底径やや広く、腰部に僅かな丸みを帯びる。内面の見込み部は緩やか。右回転離縁形状。底部静止距離リ。

第三章 検出された遺構と遺物



第207図 95号住居跡

第185表 95号住居跡計画表

位置 (南東隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	窠方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dm-38・39	不整形長方形	403×315×45	N87°E	N91°E		坏12 埴3 妻1 砥石1 瓦1	

95号住居跡

調査区南西部にあたるD区m-38・39グリッドで検出された。周辺は北側と西側への急傾斜地形で、特に本住居跡西側で強くなり、段差が南北に走る。

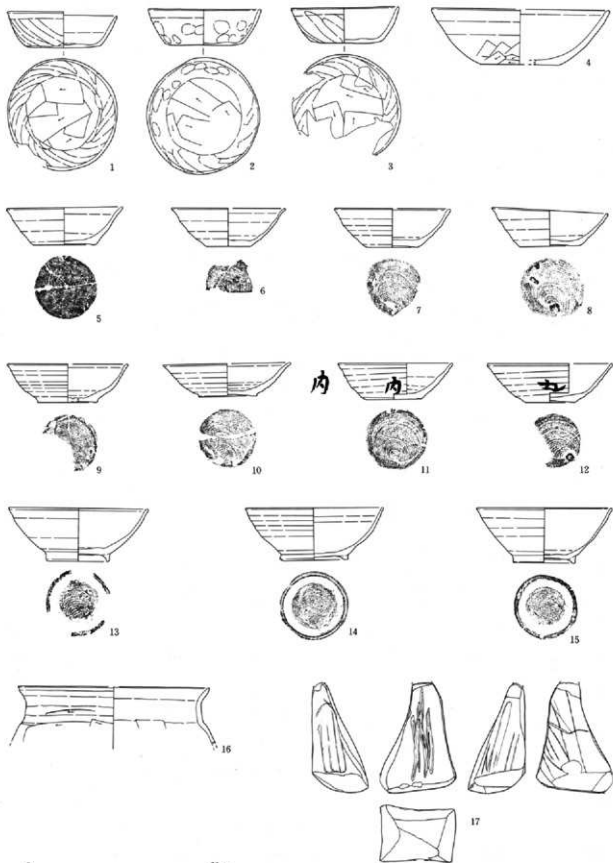
周辺の住居跡としては、南約2mに94号住、西側の段差を挟んで101号住居跡、102号住居跡が位置するが、単独の検出であり、重複住居も見られないことから、希薄な住居跡分布といえよう。北側及び東側も住居跡は近接しない。

平面形は、南辺と北辺に差がみられ、南東隅の彎曲が著しく、各壁にも弱い彎曲が見られる不整形長方形を呈す。規模は、約4.0×3.1m程度の中型の住居である。

深さは、約50cmを測り、良好な遺存状態を誇るが、各壁の立ち上がりはやや弱い印象を受ける。

床面は起伏を持ち緩やかながら北側へ傾斜する。貼床はなされず、黄褐色ローム層を基盤とする地床であった。

第5節 奈良・平安時代の住居跡



第208図 95号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

第186表 95号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第208図 図版	1 口：11.5 環高：3.8 底：7.8	一部欠損 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②燻化焙 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部僅かに外反するが、口縁一部僅かな内彎をもって一体化する。底部は平底。口縁部横撫で、体部斜位指撫で、底面は磨削りを施す。内面比較的平滑。
第208図 図版	2 口：11.8 環高：3.8 底：7.9	ほぼ完形 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②燻化焙 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部僅かに外反するが、口縁一部僅かな内彎をもって一体化する。底部は平底。口縁部横撫で、体部斜位指撫で、指痕残存。底面は磨削りを施す。内面比較的平滑。
第208図 図版	3 口：11.5 環高：3.7 底：7.5	約2/3 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②燻化焙 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部僅かに外反するが、口縁一部僅かな内彎をもって一体化する。底部は平底。口縁部横撫で、体部斜位指撫で、底面は磨削りを施す。内面比較的平滑。
第208図 図版	4 口：(18.6) 環高：(5.9) 底：(8.0)	破片 床直	①細 白色粒 ②燻化焙 ③鈍黄褐色 ④土師器	口縁一部一体化し内彎気味に強く開く。底部平底。口唇部内面に浅い稜をなす。口縁部横撫で、体部斜位磨削り後撫でを加える。底面磨削り。内面、黒色磨粉。
第208図 図版	5 口：12.1 環高：3.9 底：6.4	完形 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②燻化焙 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反、体部緩やかに丸みを帯びる。内面見込み部緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後体部下二底面撫でを加える。
第208図 図版	6 口：11.9 環高：4.1 底：4.8	約1/3 覆土	①細 白色粒 ②燻化焙 ③オリーブ灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し、体部中に丸みを帯びる。内面見込み部はやや緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部内面に重ね焼きの痕跡。
第208図 図版	7 口：(12.0) 環高：4.1 底：5.2	約1/3 覆土	①細 白色粒 ②燻化焙 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し、体部緩やかに丸みを帯びる。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。外面轆轤目強い。
第208図 図版	8 口：12.0 環高：3.8 底：6.2	完形 壁外	①粗 白色粒・石英 ②燻化焙 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口縁一部はほぼ一体化し直線状に開く。底部に整形後の粘土粒が付着し器形を不安定にする。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部上半に補修粘土充填の痕跡有り。
第208図 図版	9 口：(12.6) 環高：4.1 底：6.2	約1/3 覆土	①細 片岩粒・白色粒 ②燻化焙気味 ③鈍褐色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部丸みを帯びる。下手で彎曲がやや強く底部は僅かに突出する。内面見込み部は緩やかだが轆轤目強い。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。器厚薄手。
第208図 図版	10 口：(13.3) 環高：3.4 底：6.0	約1/3 覆土	①細 片岩粒・白色粒 ②燻化焙気味 ③鈍赤褐色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部丸みを帯びる。下手で彎曲がやや強く底部は僅かに突出する。内面見込み部は緩やかだが轆轤目強い。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。器厚薄手。
第208図 図版	11 口：12.0 環高：3.8 底：5.9	一部欠損 覆土	①細 白色粒・石英 ②燻化焙 ③灰白色 ④須恵器 墨書土器	口縁一部緩やかな内彎をもって一体化する。底部僅かに突出する。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部外面に墨書。「内」であろう。
第208図 図版	12 口：(13.0) 環高：4.1 底：5.6	約1/3 覆土	①細 白色粒 ②燻化焙 ③灰白色 ④須恵器 墨書土器	口縁部外反し体部中に丸みを帯びる。底部若干上げ度。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部外面に墨書。判読不能。
第208図 図版	13 口：(14.8) 環高：5.6 底：6.4	約1/2 床直	①粗 砂礫・白色粒 ②燻化焙気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し、体部丸みを帯びる。高台は直立する。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁及び底面撫で。
第208図 図版	14 口：14.5 環高：5.5 底：7.2	完形 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②燻化焙 ③灰白色 ④須恵器	比較的整った器形を呈す。口縁一部内彎をもって一体化する。高台は長く開き気味に付される。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第208図 15 埴 皿 83	口: 14.2 高: 5.8 底: 6.5	約3/4 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	器厚薄比較的整った器形を呈す。口縁～底部内彎をもって一体化する。高台は短く直立する。内面見込み部は緩やか。右回転縦輪彫。底部回転車切り後高台貼付。貼付時間短縮で。
第208図 16 壺 皿 83	口: (20.0) 高: - 底: -	口縁部破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③鈍赤褐色 ④土師器	コ字壺。口縁部上位外傾、下位は直立する。胴部の張りはやや強い。口縁部横撫で強く、下位で凹線状となす。体部は横位彫削り。体部内面は横位彫削で。
第208図 17 砥石 皿 83	長: 11.8 幅: 8.2 高: 6.0	一部欠損 覆土	①牛伏砂岩 ④387.9g	やや大形で各面に磨痕が認められる。特に西正面は溝状の研磨痕が縦位に走り、刃先など対象物の性格が想起される。

壁周溝・柱穴・貯蔵穴は見られなかった。貯蔵穴については、南東隅の壁の彎曲が著しく、相應の施設を想定しておきたい。

竈は、東壁中央やや南寄りに設けられる。煙道部を強く壁外に突出し、燃焼部は僅かに凹み、焼土粒・炭化物が堆積していた。

袖は、黄褐色ローム及び粘質土を充て強く張り出す。北側の袖は芯材として、自然石を2箇配す。南袖も、先端部に自然石を芯材としており、袖構築の入念さが窺われる。

その他の構築材・補強材としては、燃焼部で出土した瓦破片は、燃焼部壁あるいは天井部の補強材として考えられよう。

遺物は、住居跡中央部分～竈周辺にかけて、比較的散漫な分布を見せる。層位的にも覆土上層～床直にかけて、出土しており、特定層位に偏らない。しかしながら、出土土器片の接合率は良好であり、17点が図示し得た。什器類に比重が置かれ、煮沸具の出土は稀少である。おそらく、住居跡廃絶時の一括廃棄と思われるが、特定器種に偏る要因は判然としなない。

### 96号住居跡

調査区西側の斜面地形に占地する。周辺は、北側から西側へかけての急傾斜地形を呈し、本住居跡西側は特に顕著となる。周辺の住居跡密度も低く、本住居跡も単独の検出となった。

近接する住居跡は東側約4mに97号住居跡が見られるのみである。

平面形は、南壁と西壁が彎曲するやや縦長の不整形長方形を呈する。また、南東隅の形状も極めて不揃いである。規模は、約3.0×2.7mと若干小型の住居である。深さは、約25cm程度で、西壁と北壁は斜面地形の影響を受け、立ち上がりも僅かだった。遺存状態は悪い。

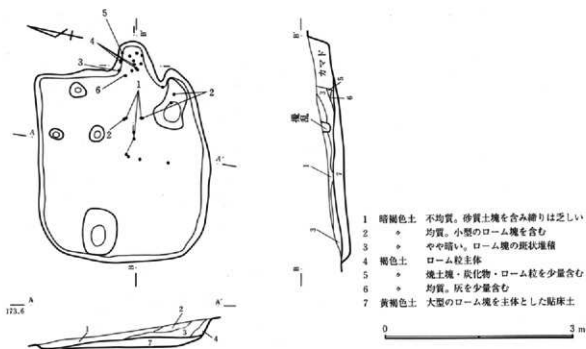
床面は緩やかに北側へ傾斜するが、平坦面が意識される。黄褐色ローム塊を主体とした貼床が全面を覆い、硬化面は、中央部分に狭い範囲で確認された。

壁周溝は検出されなかった。柱穴は、北東隅にまともな検出された3基の小ピットに可能性を求めたが、確証に乏しい。

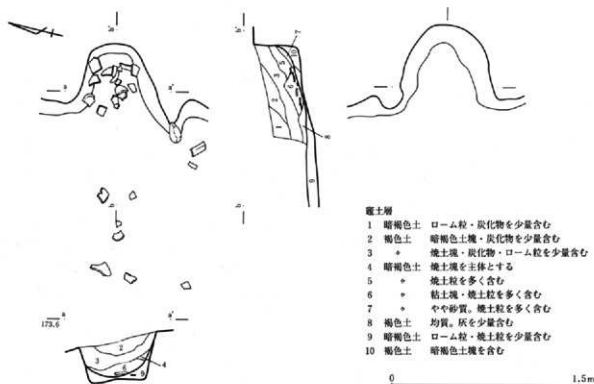
貯蔵穴は、東南隅に検出された不整形土坑を充てる。彎曲する壁と一体化しており、東南隅の形態と貯蔵穴の関係性を窺わせる様相である。

竈は、東壁南寄りに設けられる。煙道部を壁外に突出し、燃焼部は僅かに凹む。袖は南袖が短く張り出し、先端部に自然石を充てる。北袖は顕著ではなく、壁の彎曲のみを確認した。その他の構築材としては、燃焼部使用面に散布する須臾器破片が、燃

第三章 検出された遺構と遺物



- 1 暗褐色土 不均質。砂質土塊を含み締りは乏しい  
 2 \* 均質。小型のローム塊を含む  
 3 \* やや暗い。ローム塊の斑状堆積  
 4 褐色土 ローム粒主体  
 5 \* 焼土塊・炭化物・ローム粒を少量含む  
 6 \* 均質。灰を少量含む  
 7 黄褐色土 大型のローム塊を主体とした粘床土



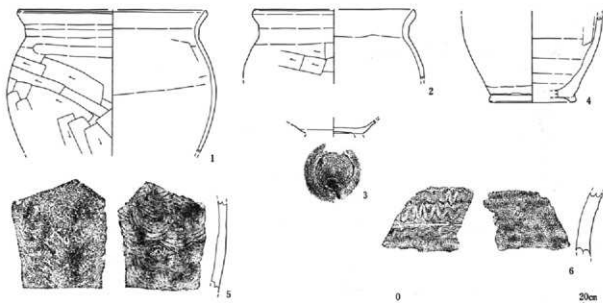
- 覆土層
- 1 暗褐色土 ローム粒・炭化物を少量含む  
 2 褐色土 暗褐色土塊・炭化物を少量含む  
 3 \* 焼土塊・炭化物・ローム粒を少量含む  
 4 暗褐色土 焼土塊を主体とする  
 5 \* 焼土粒を多く含む  
 6 \* 粘土塊・焼土粒を多く含む  
 7 \* やや砂質。焼土粒を多く含む  
 8 褐色土 均質。灰を少量含む  
 9 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を少量含む  
 10 褐色土 暗褐色土塊を含む

第209図 96号住居跡

第187表 96号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竪方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dno-32	不整形方形	305×274×25	N75°E	N75°E	貯蔵穴	陶1 葺1 罫4	





第210図 96号住居跡出土遺物

第188表 96号住居跡遺物観察表

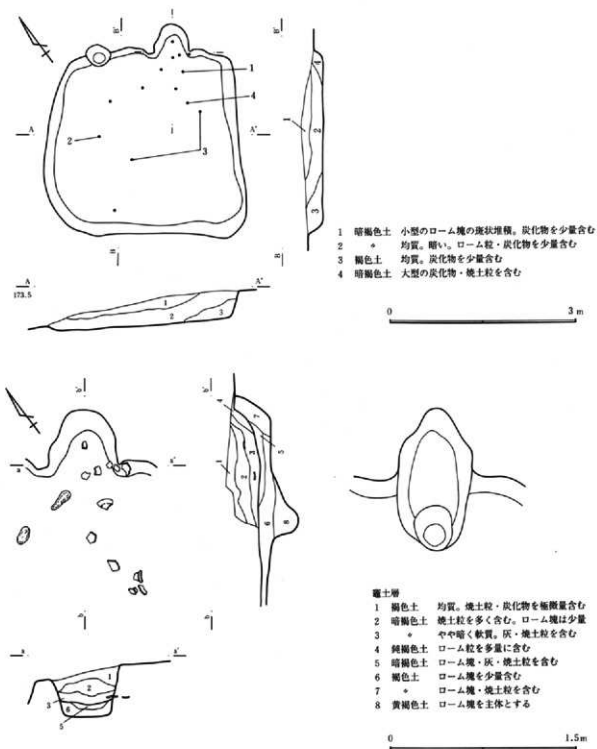
図 番 号 器 種	法量 (cm) ( )推定値	残存半 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第210図 1 壺 84 図版	口: (19.8) 高: - 底: -	口縁部一 体部破片 壺内	①粗 砂粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	コ字壺。口縁部上位外傾、下位は直立気味に内傾。肩部の張りはやや強く 体部中位に膨らみを設ける。口縁部横溝で強く頸部凹縁状となす。肩 部弱い横溝で。体部上半斜位丸削り、下半縦位丸削り。内面横位丸削り
第210図 2 壺 84 図版	口: (16.8) 高: - 底: -	口部破片 床直上	①粗 砂粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	コ字壺。口縁部上位外傾、下位は直立気味に内傾。肩部の張りはやや強い。 口縁部横溝で強く頸部で横状となす。肩部弱い横溝で。体部上半は 横位・斜位丸削り。内面横位丸削り
第210図 3 桶 84 図版	口: - 高: - 底: -	底部破片 壺内	①粗 砂粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③淡黄色 ④須恵器	高台欠損。体部下半は彎曲を帯びて固く。右回転轆轤整形。底部回転糸 切り後高台貼付。貼付時周縁溝で。
第210図 4 蓋 84 図版	口: - 高: - 底: (9.1)	体部一 底部破片 壺内	①粗 片岩・白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄色色 ④須恵器	体部下半緩やかな丸みを帯びる。底径はやや広く高台は開き気味に付き れる。轆轤整形。回転方向不詳。高台貼付。体部外面溝でを加える。
第210図 5 壺 84 図版	口: - 高: - 底: -	体部破片 壺内	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	外面平行引き後接で。自然軸付着。内面青濁液状目目。
第210図 6 壺 84 図版	口: - 高: - 底: -	口縁部破片 壺内	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	頸部波状文3段。下位の波状文は緩やかな施文。横位沈線も走る。轆轤 整形。

焼部壁・天井部の補強材と考えられよう。

床下遺構として、西壁際北寄りで検出された不整楕円状の土坑を床下土坑として充てたい。

遺物は壺内及び床面中央に散布する。量的には少なく、6点を図示し得たのみである。

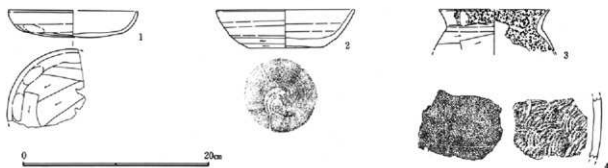
第三章 検出された遺構と遺物



第211図 97号住居跡

第189表 97号住居跡計測表

位 置 (南東隅)	平 面 形	規 模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈 方 位	主 な 施 設	主 な 遺 物	重 複 遺 構
Dmn-30・31	不整形	317×294×35	N37°E	N38°E		坏2 甕2	



第212図 97号住居跡出土遺物

第190表 97号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第212図 1 碗 84	口：(13.6) 高：2.8	約1/4 床直	①粗 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁一体部内彎をもって一体化し扁平。底部不安定ながら平底。口縁部横撫で、体部弱い撫で。底部削削り。内表面凹凸顯著。
第212図 2 碗 84	口：14.5 高：4.0 底：7.8	約4/5 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③純褐色 ④須臾器	口径やや広い。口縁一体部内彎をもって一体化する。底部僅かに上げ底を呈す。内面見込み部は緩やか。右側回転軸整形。底部回転削削り。削削りは体部下半に及ぶ。
第212図 3 碗 84	口：(11.6) 高：— 底：—	口縁部破片 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	小型寛。口縁部外傾し頸部は緩やかに屈曲する。肩部の張りはやや弱い。口縁部横撫で後体部横位削削り。外面口縁部と内面口縁一体部上半に油煙付着。
第212図 4 碗 84	口：— 高：— 底：—	体部破片 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③黄灰色 ④須臾器	外面平行叩き後撫で。内面青海波状当て目。

## 97号住居跡

調査区西側の斜面地形に占地する。D区 mn-30・31に位置する。周辺は、北側から西側へかけての急傾斜地形を呈し、本住居跡西側は特に顕著となる。

周辺の住居跡密度も低く、本住居跡も単独の検出となった。近接する住居跡は西側約4mに96号住が見られる。

平面形は、西壁と南壁が大きく彎曲する不整形を呈する。規模は、約3.1×2.9mの小型の住居である。尚、本住居跡主軸方位は、北東を向き、他の住居跡の主軸方位と若干差がある。

深さは、良好な残存の東壁付近で約35cmを測るが、西壁は斜面地形のため、立ち上がりは僅かだった。

床面は、僅かな凹凸を持つものの、ほぼ平坦面が築かれる。貼床はなされず、黄褐色ローム層を基盤とする地床である。

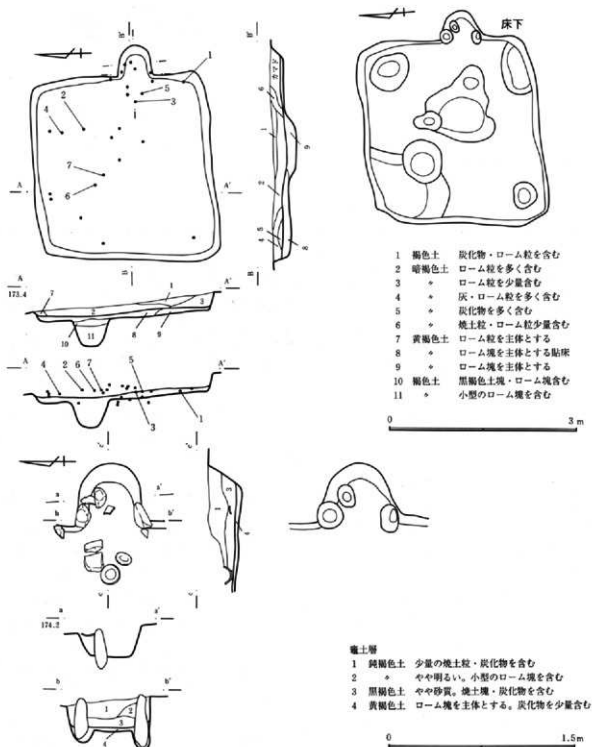
壁周溝・柱穴・貯蔵穴は見られなかった。北壁西よりの小ピットを柱穴として可能性を考えたが、確証に乏しい。

竈は、北壁中央東寄りに設けられる。煙道部は壁外に突出し、燃焼部は極僅かに凹む。袖は、壁の意識的な突出を利用しており、袖石等の補強材を充填していない。その他の構築材・補強材も妥当な遺物は見られなかった。

竈使用面下の調査において、不整形円状の掘り込みを確認した。焚口部相当の箇所には円形の土塊が検出されたが、用途は不明である。

遺物は、少量出土した。覆土中の出土が目立ち、平面的な分布も特定の集中は無い。3点を図示した。

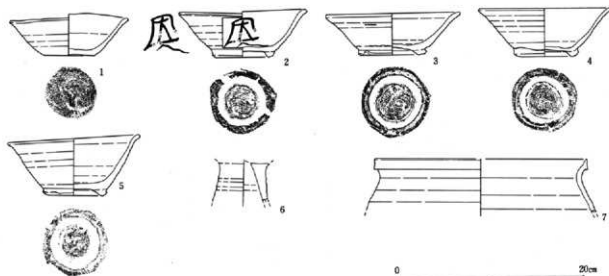
第三章 検出された遺構と遺物



第213図 98号住居跡

第191表 98号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dij-31	正方形	295×288×22	N89°E	N91°E	貯蔵穴・床下土坑	坏1 埴4 釜1 甕1	



第214図 98号住居跡出土遺物

第192表 98号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第214図 1 碗 84	口： 12.2 高： 3.8 底： 5.2	完形 床直	①粗 砂礫・石英 ②酸化塩気味 ③灰黄色 ④須恵器	口縁一部著しく歪む。口縁部は外反し体部直線状に開く。底部は小径。内面見込み部は緩やか。右回転軸盤整形。底部回転糸切り後高台貼付。
第214図 2 碗 84	口： 13.0 高： 5.0 底： 5.7	ほぼ完形 床直上	①粗 片岩・砂礫 ②酸化塩気味 ③鈍黄色 ④須恵器 墨書土器	口縁部僅かに外反し体部緩やかな丸みを帯びる。底部は小径で高台は短い。内面見込み部緩やか。右回転軸盤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時間線盤で。腹では体部下平に及ぶ。体部内部に墨書。判読不能。
第214図 3 碗 84	口： 14.1 高： 4.4 底： 6.2	ほぼ完形 床直	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化塩気味 ③黒色 ④須恵器	口縁部に歪みあり。口縁部外反し体部直線状に開く。高台は短い。内面見込み部は緩やか。右回転軸盤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時間線盤で。腹では体部下平に及ぶ。
第214図 4 碗 84	口： 13.6 高： 5.1 底： 5.6	約3/5 床直上	①粗 砂礫・石英 ②酸化塩気味 ③鈍藍色 ④須恵器	口縁部外反し体部緩やかな丸みを帯び開く。高台は短い。内面見込み部は比較的明瞭。右回転軸盤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時間線盤で。腹では体部下平に及ぶ。
第214図 5 碗 84	口： 13.7 高： 6.0 底： 5.8	ほぼ完形 床直	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化塩気味 ③橙色 ④須恵器	口縁部は短く外反し体部は緩やかな丸みを帯びる。底部は小径で高台は短い。右回転軸盤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時間線盤で。腹では体部にまで及ぶ。
第214図 6 盤? 84	口： - 高： - 底： -	脚部破片 床直上	①細 白色粒 ②還元焰 ③鈍黄色 ④須恵器	上半部のみの残存。緩やかに開く脚部形盤か。右回転軸盤整形。内面接合部の腹で顯著。接合部の欠損箇所に向巻状の圧痕?が残る。
第214図 7 羹 84	口： (22.3) 高： - 底： -	口縁部破片 床直上	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部直立し端部鋭い。頸部は緩やかに彎曲し肩部の張りは弱い。左回転軸盤整形。器厚薄手。

98号住居跡

調査区中央やや西よりの台地鞍部西側に位置する。周辺は緩やかな北側への斜面地形で、比較的平坦面に近い安定した地点である。ただ西側に至ると、徐々に斜面地形が強くなる。

近接する住居跡としては、東側約4mに107号住居跡・108号住居跡が、北側約5mに73号住居跡が見られる。その他の遺構としては、西側に6号溝、東側に3号溝が本住居跡を挟んで南北に走る。

平面形は、比較的整った正方形を呈す。北辺と南辺長の差が見られるが、各壁とも直線状に設けられる。規模は、約3.0×2.9mとやや小型の住居である。

深さは、約20cmと浅く各壁の立ち上がりもやや緩やかだが、掘り込みはしっかりしていた。

壁周溝は見られなかった。柱穴・貯蔵穴も床面調査では検出されなかったが、床下調査で、柱穴は中央やや北西寄りと南西隅、さらに北東隅に可能性の高いピットを得た。貯蔵穴も南東隅に不整形円形状の土坑が検出された。

竈は、東壁中央やや南寄りに設けられる。馬蹄状の煙道部-燃焼部を壁外に突出し、燃焼部-焚口部は平坦で掘り込みを有しない。

袖は、住居内に張り出さず、自然石を両側に袖石として立てていた。使用面下の調査で、掘り取り穴も検出されている。

燃焼部北壁際に乳棒状の自然石が設けられていた。支脚として位置付けられよう。使用面下においても小ピットが確認され、支脚掘り取り穴として捉えられた。

その他の補強材・構築材としては、焚口部に大型の自然石が2箇出土している。天井材等の補強材と考える。

遺物は、少量出土した。竈焚口部で出土した須恵器埴（3・5）、東南隅の坏（1）は居住に伴う可能性がある。その他の遺物も床直上出土であり、住居廃絶時期を現わすものである。

99号住居跡

調査区中央D区ef-36・37で検出された。周辺は緩やかながら北側への斜面地形が続き、頂部の平坦地形と鞍部平坦地形の中間点にあたる。

周辺の住居跡の分布は稀薄で、南約7mに109号住居跡、西約12mに100号住居跡が位置するが、群をなさない。その他の遺構としては、北西に4号溝が東西に走る。

平面形は、西辺と東辺頂差が著しい、不整形長方形を呈す。南壁・北壁とも緩やかながら彎曲しており、整いを失う。

深さは、約30cmを測るが、北側壁は斜面地形のため浅く立ち上がりも緩やかである。遺存度は悪い。

床面は、僅かながら凹凸・起伏が見られ、北側へも緩やかに傾斜し安定していないが、黄褐色ローム塊と暗褐色土塊の混合土による粘床が全面になされる。硬化面は、床面中央東寄りに狭い範囲で確認された。

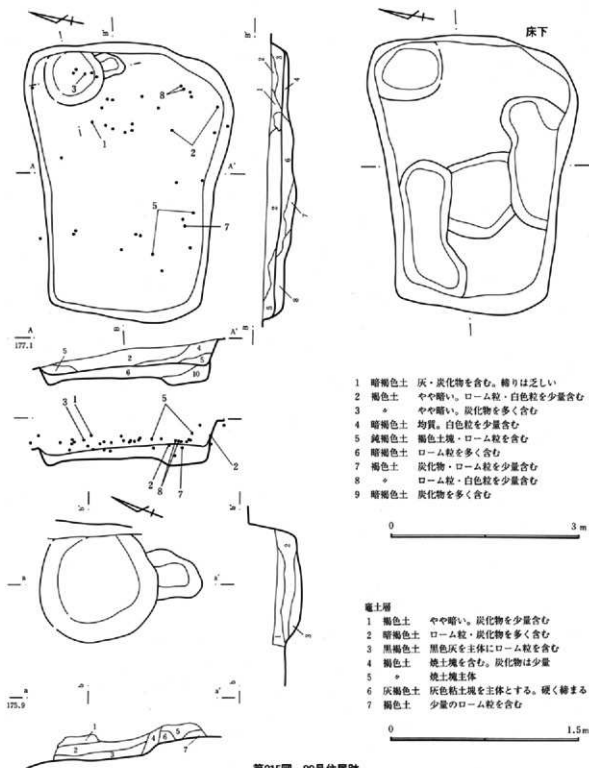
壁周溝・柱穴は見られなかった。

貯蔵穴も良好な例を見いだせなかったが、東南隅の彎曲に相当する箇所、あるいは北東隅で検出された竈南に付随する浅い不整形の土坑を考えたい。

竈は、北東隅に焼土塊の散布が見られ、円形の浅い土坑が検出されたことから、当地点を竈と捉えた。おそらく、北側斜面地形に影響を強く受け、竈本体は流失し、使用面下の掘り込みのみが残存したものと考えられよう。明瞭な構築材等の出土も無かった。

床下遺構は、中央に大型の不整形の土坑が検出された。床下土坑として位置付ける。この床下土坑の南北に不整形円形状の土坑が壁に沿って確認された。構築時の掘り込みであろうか。配置等も検討を要する。黄褐色ローム塊を多く含む埋土である。

遺物は、少量ながら東半に集中する。また、南西側にも若干の集中が見られ、全域の出土と言えよう。層位的には、覆土上層-床直にかけて出土しており、住居跡廃絶絶時の一括廃棄の可能性が高い。

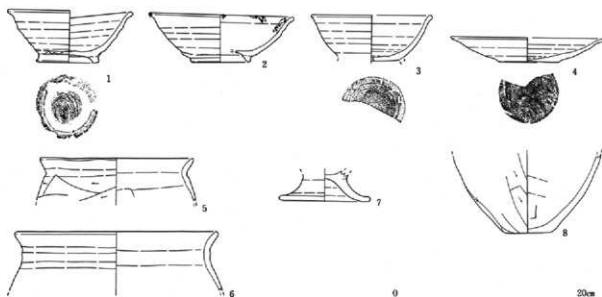


第215図 99号住居跡

第193表 99号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	電方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Def-36・37	不整形	425×336×32	N80°E	N75°E	床下土坑	埴3 皿1 壺3 台付壺1	

第三章 検出された遺構と遺物



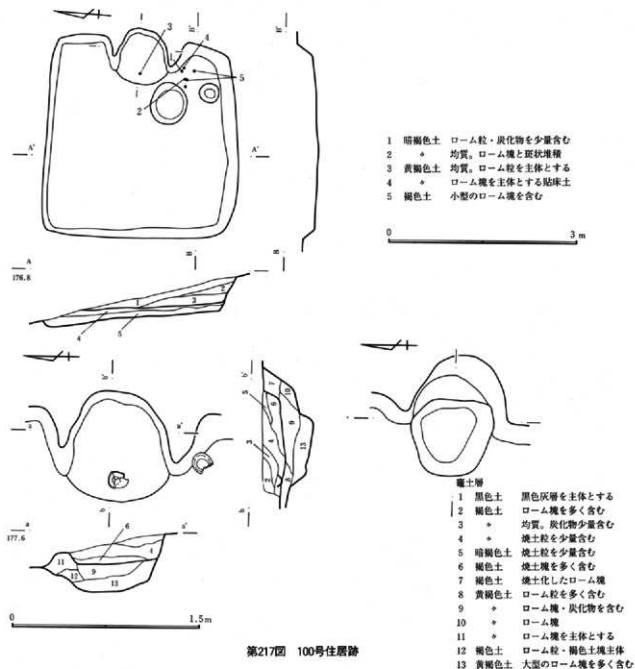
第216図 99号住居跡出土遺物

第194表 99号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②硬成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第216図 1 碗 84 底: 5.8	口: 13.0 高: 5.5	ほぼ完形 覆土	①胎土 砂礫・片岩 ②還元焰 ③灰色 ④灰土器	口縁一体部著しい歪み。口縁部外反し体部上半に丸みを帯びる。高台は開く。内面見込み部縁やか。右回転轆轤整形。底部回転余切り後高台貼付。貼付時周縁強で。外面轆轤目強い。
第216図 2 碗 84 底: 5.2	口: (15.0) 高: 5.0	約3/5 床直上	①胎土 砂礫・石英 ②還元焰気味 ③黒褐色 ④灰土器	全体に歪みあり。口縁部外反し体部縁やかな丸みを帯びる。高台は短く開く。右回転轆轤整形。底部回転余切り後高台貼付。貼付時周縁強で。口縁部内外面に塗層付着。内面器壁割落著しい。
第216図 3 碗 84 底: -	口: (12.4) 高: -	約1/2 覆土	①胎土 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④灰土器	口唇部肥厚し玉縁状をなす。口縁部外反し体部下平に丸みを帯びる。高台割落。内面見込み部縁やか。右回転轆轤整形。底部回転余切り後高台貼付。貼付時周縁強で。
第216図 4 皿 84 底: 6.0	口: (16.0) 高: 2.6	約2/5 覆土	①胎土 砂礫・白色粒 ②還元焰気味 ③鈍黄褐色 ④灰土器	黒台の扁平な皿。口縁部僅かに外反し体部縁やかな丸みを帯びる。底部は僅かに突出。右回転轆轤整形。底部回転余切り後無調整。内面は強でにより平滑。
第216図 5 羹 84 底: -	口: (16.1) 高: -	口縁部破片 覆土下位	①胎土 白色粒・黒色粒 ②還元焰 ③鈍赤褐色 ④土師器	小型羹。口縁部は短く外傾し頸部は縁やかに屈曲する。肩部の張りは弱い。口縁部横強で強く凹縁状となす。体部は横位・斜位寛削り。体部内面は横位寛削り。
第216図 6 羹 84 底: -	口: (21.0) 高: -	口縁部破片 覆土	①胎土 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③橙褐色 ④土師器	コ字羹。口縁部上位外傾し下位は直立する。肩部の張りは弱い。口縁部横強で強く2条の凹縁状となす。体部は横位寛削り。内面は寛削り。
第216図 7 台付羹 84 底: 9.6	口: - 高: -	脚部 床直	①胎土 石英・白色粒 ②還元焰 ③明赤褐色 ④土師器	台付羹脚部。体部は縁やかに立ち上がり、脚部は短く外反気味に開く。短脚。脚部内外面とも丁寧な横強で。接合部は入念。底部内面に寛削りが着取される。
第216図 8 碗 84 底: 5.0	口: - 高: -	底部約1/2 床直	①胎土 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③鈍褐色 ④土師器	底部小径。体部は内彎気味に立ち上がり、膨らみを中位に設ける。外面縦位寛削り。底面も寛削り。内面横位・斜位寛削り。



第5節 奈良・平安時代の住居跡



第217図 100号住居跡

第195表 100号住居跡計測表

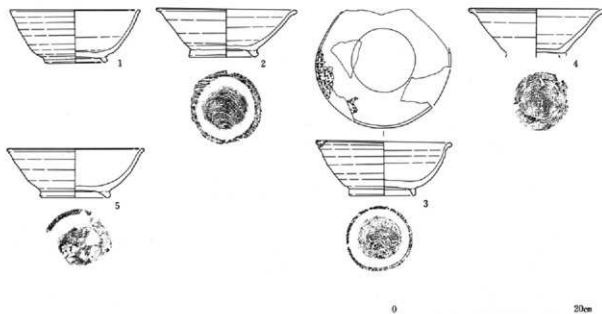
位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dij-37・38	正方形	316×311×37	N89°E	N89°E		埴5	

100号住居跡

調査区中央D区ij-37・38で検出された。周辺は緩やかながら西側と北側への斜面地形が続き、頂部の平坦地形と鞍部平坦地形の間点にあたる。

傾斜地形のためか、周辺の住居跡の分布は稀薄で、本住居跡は単独の検出である。東約12mに99号住、北約8mに103号住居跡が位置するように、他の住居跡とはおおく距離を保つ。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第218図 100号住居跡出土遺物

第196表 100号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 測定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第218図 1 壺 図版 84	口: 13.6 高: 5.7 底: 5.9	ほぼ定形 床直	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部下半に丸みを帯び安定感ある器形を呈す。高台は短く開く。内面見込み部緩やか。右回転軸線形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で、粘土に藕状粘土が看取される。
第218図 2 壺 図版 84	口: 14.7 高: 5.1 底: 6.9	約4/5 床直上	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③黒色 ④須恵器	口縁部強く外反し体部直線状に開く。高台は短く開く。内面見込み部は緩やか。右回転軸線形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で、撫では体部に及ぶ。
第218図 3 壺 図版 84	口: 14.1 高: 5.7 底: 6.6	約2/3 壺内	①細 白色粒 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部外反し体部下半に丸みを帯び安定感ある整然とした器形を呈す。高台は彎曲気味に開く。内面見込み部は緩やか。右回転軸線形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で。
第218図 4 壺 図版 85	口: (14.2) 高: - 底: -	約1/2 床直	①細 片岩粒・石英 ②酸化焰気味 ③オリーブ黒色 ④須恵器	口縁部強く外反し体部直線状に開く。高台は刺落。内面見込み部は比較的明瞭。右回転軸線形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で、撫では体部に及ぶ。
第218図 5 壺 図版 85	口: 14.3 高: 5.2 底: 7.0	約3/5 床直上	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍褐色 ④須恵器	口縁部外反し体部下半に丸みを帯び安定感ある器形を呈す。高台は開く。内面見込み部は緩やか。右回転軸線形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で。内面磨製顯著しい。

平面形は、南壁と東壁の一部に若干の彎曲が見られ、南東隅の形状もやや不整ながら、比較的整然とした正方形を呈す。規模は、軸長約3.1m前後のやや小型の住居跡である。

深さは、南壁付近で約40cmを測るが、北側は斜面地形のため流失しており、平面形の把握は床下の状態で判断した。南壁の掘り込みはしっかりとしてい

たが、他の壁は緩やかな立ち上がりであり、遺存状態は不良といえよう。

床面は、僅かに北側へ傾斜するものの、平坦面を築き、黄褐色ローム塊と鈍褐色土塊を主体とした貼床がなされていた。硬化面は、床面中央を中心に比較的広い範囲で確認され、竈周辺へ北側で顕著だった。

壁周溝・柱穴は確認されなかった。

貯蔵穴は、東南隅やや西寄りで見出された小型のピットを充てたい。浅く緩やかな立ち上がりで、褐色土を埋土としていた。

竈は、東壁中央で見出された。小型住居に比してやや大型の竈である。馬蹄状の燃焼部～煙道部は僅かに壁外に突出し、燃焼部～笑口部は僅かに凹む。

袖は、両袖とも強く張り出す。黄褐色ローム層を基盤としており、ローム塊を主体とした粘質土で補強されていた。尚、袖石等の補強材は見出されなかった。その他の構築材・補強材は確認されず、壺等の煮湯具の出土も見られなかった。

また、竈使用面下の燃焼部～笑口部に土坑状の掘り込みを見出した。竈構築時の所産と思われるが、焼土・炭化物も堆積しており、使用時の攪拌も影響しているようだ。

床下遺構は、竈笑口部南西部に接して径60cm程度の不整形円形を呈する小型土坑を見出した。床下土坑と位置付けた。

遺物は、少量である。平面的にも貧弱な分布を見せ、竈～東南隅にかけて少量がまとまる。すべて床直上～床直で出土しており、かつ須恵器壺類のみの偏った器種組成である。遺存も良好であり、居住に伴う所産とする考えも念頭におきたい。

#### 101号住居跡

調査区南西部の西側斜面に位置する。該当するグリッドは、D区Pq-40～42にあたる。周辺の西側斜面は急傾斜を呈し、本住居跡東は段差も認められ、本住居跡は段差下にあたる。この段差のため、周囲は平坦面となるが、後述する1号礎石建物構築の際に、削平されたテラス状平坦面の可能性が高い。尚、本住居跡は、南側を調査区域外に延ばし、未調査部分を持つ。

周辺の住居跡としては、北東約5mに102号住居跡が近接する。04号住・95号住は段差を挟んで、10m以上の距離を保つ。また、北側には1号礎石建物跡が見られる。本住居跡の西側は急斜面地形のため、遺構密度は極めて稀薄である。また、南側の区域外に関しても、斜面地形が著しく、濃密な住居跡等の居住痕跡は望めない。しかしながら、礎石建物等の削平が連続する場合は、この限りではなく、寺院跡等の存在も想定できよう。

さて、本住居跡の平面形は主軸長約3.7mの、おそらく横長長方形を呈する。僅かながらの壁の彎曲は見られるが、ほぼ直線状の壁を見せ、整った形状と考えられる。

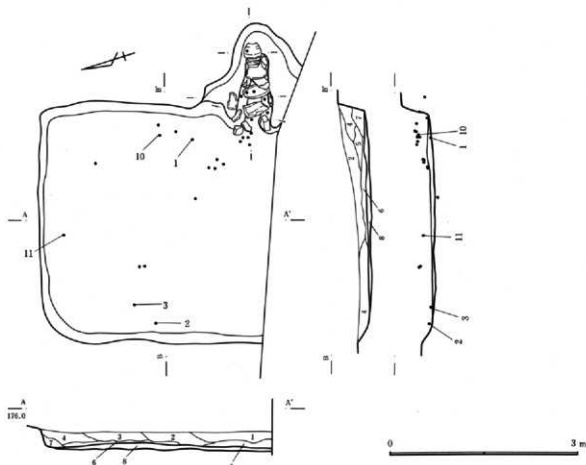
深さは、遺存の良好な東壁付近で約40cmを測るが、傾斜の影響を受けた西壁は、立ち上がりも緩やかで約20cm程度の深さである。傾斜の影響を受ける箇所は比較的少なく、遺存状態は良好といえよう。

床面は、僅かな凹凸が見られるもののほぼ平坦面を築く。黄褐色ローム塊と暗褐色土塊を主体とする貼床が西壁際を除く大半で認められた。硬化面も床面中央を中心とし北壁際にまで及ぶ比較的広い範囲で確認され、竈笑口部周辺が特に顕著に認められた。

壁周溝・柱穴は認められなかった。貯蔵穴は相当する箇所が調査区域外のため不明である。

竈は東壁に設けられる。煙道部を強く壁外に突出し、さらに浅い掘り込みが煙道部外縁を囲む。煙道部～燃焼部は緩やかな傾斜を見せ、笑口部はほぼ平坦である。

袖は、黄褐色ローム層を基盤とし、やや短く張り



第219図 101号住居跡(1)

第197表 101号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×高さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dpq-40-42	長方形	—×370×38	N108°E	N112°E		埴2 皿1 耳皿1 羽釜 6 瓦1	

出す。両軸とも自然石を立てた袖石を内壁に設けているが、竈長軸と直交せず、北東へややずれる位置にある。

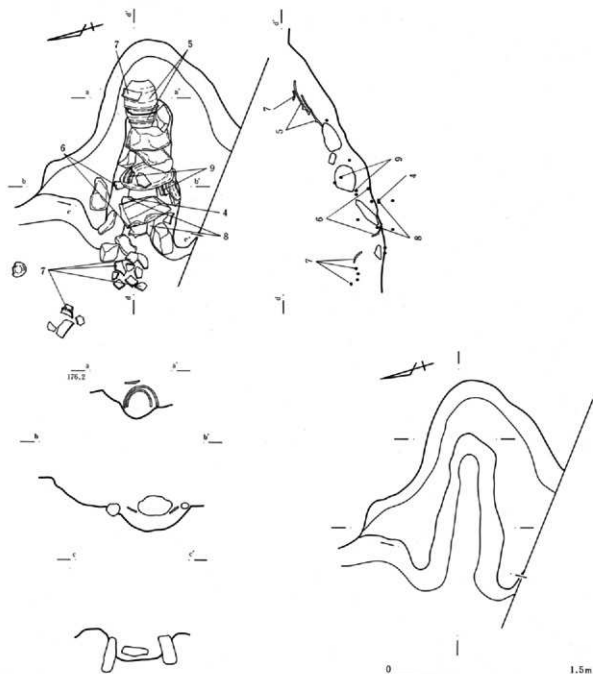
構築材として、煙道部上部の天井材が特筆される。自然石と須恵器羽釜からなり、袖石部分から、煙道部端部にまで大型の自然石が横位に連なる。一部は燃焼部に崩落する石もあるが、左右壁上部には補強の自然石も充てられ、入念な構築が想起される。さらに、煙道部端部には須恵器羽釜1個体が縦位分割され再利用されていた。

床下遺構は、明瞭な掘り込み・土坑が検出されず、

図示には至らなかった。

遺物は、良好な遺存の割には少量である。竈周辺からは、前述の煙道部須恵器羽釜(6)がある。また(5・7)も竈内構築材と捉えた。須恵器小型碗(1)は東側床直上で、(2)は西側床直上で、両者とも多量の油煙を付着する。灰軸陶器(3)も西側床直上出土である。尚、線刻文字瓦(11)も床直上より出土している。

竈構築材と日常什器類の时期的な差はあるが、出土状況から、本住居跡の出土遺物は居住時の組成を良好に現わす例と考えたい。



第220図 101号住居跡(2)

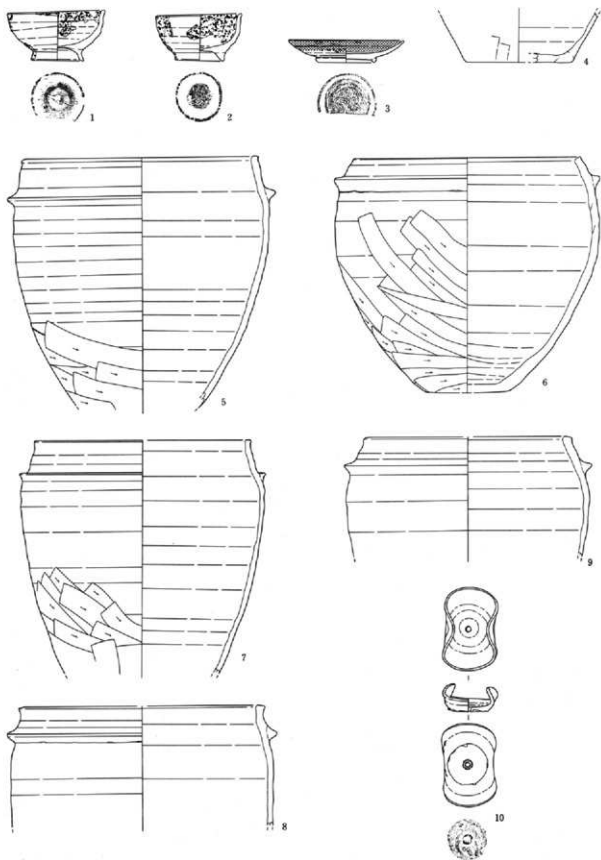
住居跡、土層

- 1 鈍褐色土 均質。少量の炭化物・白色粒を含む
- 2 暗褐色土 均質。やや明るい。少量の炭化物を含む
- 3 \* 均質。小型のローム塊を少量含む
- 4 \* 均質。大型のローム塊からなる
- 5 \* 均質。ローム粒を極微量含む
- 6 褐色土 明るい。ローム塊を多く含む
- 7 \* やや暗い。大型のローム塊からなる
- 8 黄褐色土 ローム塊・暗褐色土塊を主体とする粘床土

竈土層

本住居跡の竈調査では、土層輪の設定を誤り竈内の土層堆積状況や構築状況を明確に提示できなかった。調査所見によれば、煙道部の羽釜周辺には褐色粘質土が、また燃焼部や焚口部には焼土塊の著しい堆積が認められている。おそらく、天井材に使用された羽釜・自然石は粘質土やローム塊によって補強されたものと考えられる

第三章 検出された遺構と遺物



第221図 101号住居跡出土遺物

第198表 101号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (m) ( ) 測定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第221図 1 埴 版 85	口: 10.2 高: 5.2 底: 5.4	約7/8 床直	①細 白色粒 ②酸化焰 ③鈍黄褐色 ④須恵器	横軸整形酸化焰焼成の小型埴。口縁部は直立気味、体部は彎曲を帯びて開く。高台はやや長く開き気味に付される。右回転軸整形。底部切り難し技法不明。高台貼付時に周縁部で、油塗付着。
第221図 2 埴 版 85	口: 9.0 高: 4.9 底: 5.0	定形 床直	①粗 砂礫・黒色粒 ②酸化焰 ③鈍黄褐色 ④須恵器	1に比しやや小型。横軸整形酸化焰焼成の小型埴。口縁部は直立気味、体部は彎曲を帯びて開く。高台はやや長く直立気味に付される。右回転軸整形。底部切り難し技法不明。高台貼付時に周縁部で、油塗付着。
第221図 3 皿 版 85	口: 12.3 高: 2.4 底: 6.0	約3/5 床直上	①緻密 ②還元焰 ③灰白色 ④灰軸肉器	口縁一体部僅かな内彎をもって一体化する。高台は短く丸みを帯びる。右回転軸整形。底部切り難し技法不明。高台貼付。地輪研毛磨削。内底面に滑沢面を持ち転用後の可能性を持つ。外面露付着。
第221図 4 羽釜 版 85	口: - 高: - 底: (11.0)	底部破片 壺内	①粗 砂礫・黒色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④須恵器	横軸整形酸化焰焼成か。底径広く縁やかに立ち上る体部器形。外面に露部で。
第221図 5 羽釜 版 85	口: 25.0 高: - 底: -	口縁部一 体部 壺内	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器	口縁部長く僅かに内傾する。罎は短く水平に付され、体部上半に縁やかな膨らみを設ける。内面口縁部下に屈曲。底部は小径か。右回転軸整形後罎貼付。貼付時横撫で。体部下半に斜位丸削り。
第221図 6 羽釜 版 85	口: 24.0 高: 25.0 底: 9.0	約1/2 壺内	①粗 小礫 ②酸化焰気味 ③褐色 ④須恵器	口縁部は短く、内彎する体部と一体化する。罎は短く外傾する。体部上半に膨らみを設け、下半は彎曲気味に開く。底部は増々広い。右回転軸整形後罎貼付。貼付時横撫で。体部上半より斜位・横位丸削り。
第221図 7 羽釜 版 85	口: (23.0) 高: - 底: -	口縁部一 体部約1/4 壺内	①粗 砂礫・黒色粒 ②酸化焰気味 ③明褐色 ④須恵器	口縁部やや長く外反する。罎は短く僅かに外傾。体部は上半に膨らみを設ける。内面口縁部下に屈曲を持つ。右回転軸整形後罎貼付。貼付時横撫で。体部下半斜位・縦位丸削り。
第221図 8 羽釜 版 85	口: (26.0) 高: - 底: -	口縁部 約1/2 壺内	①細 白色粒・石英 ②酸化焰気味 ③褐色 ④須恵器	口唇部僅かに突出。口縁部短く外反し、罎は水平気味に付される。体部の張り・膨らみは固く、彎曲を帯びて長頸化する。右回転軸整形後罎貼付。貼付時横撫で。
第221図 9 羽釜 版 85	口: (20.3) 高: - 底: -	口縁部破片 壺内	①細 白色粒・石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器	口唇部僅かに突出。口縁部彎曲を帯びて外反し、罎はやや外形気味に付される。体部上半に膨らみを設けるが顕著ではない。右回転軸整形後罎貼付。貼付時横撫で。
第221図 10 耳皿 版 85	口: 8.6×3.8 高: 2.9 底: 4.2	ほぼ完成 覆土	①粗 片岩・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	口縁一体部短く、対称性を保ち強く内彎する。底部は僅かに突出し小径。底部中央に焼成前の小孔を穿つ。右回転軸整形。底部回転車切り。

## 102号住居跡

調査区南西部の西側斜面に位置する。該当するグリッドは、D区OP-28・29グリッドにあたる。周辺の西側斜面は急傾斜を呈し、北側への傾斜も展開する。本住居跡東は段差にも接し、本住居跡は段差直下にあたる。

周辺の住居跡としては、前述の101号住が南西約5mに近接する。段差上には、94号住と95号住が約6m程の距離を空いて位置する。

平面形は、約3.1×2.8mのやや横長の不整形を

呈す。西壁北半が大きく彎曲し北壁と一体化する。

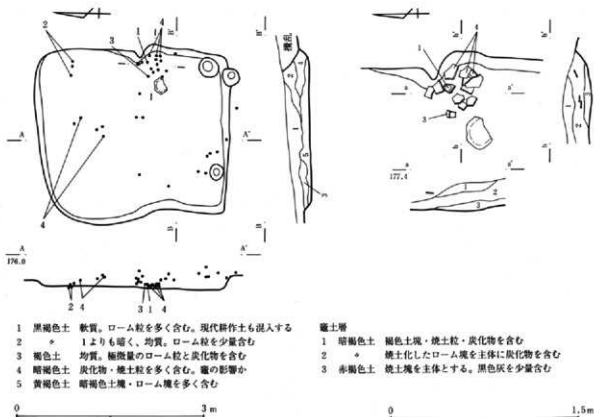
北壁・西壁とも残存状態は思わしくなく、平面規模に関しては不確定な要素が多い。

深さは、平均的には約20cm程度だが、遺存の良好な東南隅付近では約40cmの掘り込みを誇る。ただし斜面地形の影響で、東壁北半の壁や西壁は僅かな立ち上がりを呈する。

床面は、黄褐色ローム層を基盤とする地床で、緩やかに西側へ傾斜するが、ほぼ平坦面を築く。

壁周溝は見られなかった。

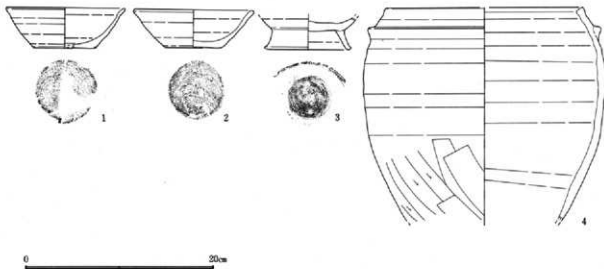
第四章 検出された遺構と遺物



第222図 102号住居跡

第199表 102号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dop-28・29	不整形方形	311×277×20	N88°E	N83°E	貯蔵穴	坏2 埴1 羽釜1	



第223図 102号住居跡出土遺物



第200表 102号住居跡遺物観察表

国 器 種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第223器 1 環 図版 85	口: (12.4) 高: 4.3 底: 6.3	約1/2 壺内	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し、体部中位に丸みを帯びる。口縁部内面は肥厚し、絞状となす。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第223器 2 環 図版 85	口: 12.3 高: 4.0 底: 5.6	約3/5 床直	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し、体部緩やかな彎曲を帯び開く。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第223器 3 環 図版 85	口: - 高: - 底: (8.2)	底部破片 壺内	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器	体部下半は彎曲を帯びて開く。長足の高台で外反気味に開く。縮端部は強く開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁及び底面撫で。
第223器 4 羽釜 図版 85	口: (20.9) 高: - 底: -	口縁部一 体部破片 壺内	①粗 砂粒・石英 ②酸化焰気味 ③鈍褐色 ④須恵器	口縁部短く内傾し、筒は短く外傾気味に付される。体部上半に膨らみを設ける。右回転轆轤整形後周縁貼付。貼付時横撫で。体部下半は縦位・斜位寛削り。

柱穴は、南壁際西と南壁東寄り上端に検出された小ピットに可能性がある。

貯蔵穴は、東南隅の壁際に位置する小型の土坑を充てたい。

竈は東壁中央やや南寄りに検出された。燃焼部一煙道部を僅かに壁外に突出し、燃焼部は若干凹む。袖は、北側袖が顕著に張り出すが、南袖は痕跡も見いせなかった。ローム層を基盤とする。

その他の竈構築材としては、焚口部で出土した大型の自然石は天井材等の可能性を持つ。また、燃焼部にまとまって出土した須恵器羽釜は、煮沸具としてよりも構築材として位置付けたい。

遺物は、少量が出土した。竈周辺及び北側、南西隅に僅かながらの集見られる。南西隅の集中は覆土層における集中であり、残存状態も悪い。本住居跡と有機的な関連を持つ遺物は、竈周辺出土の須恵器環・埴 (1・3)、須恵器羽釜 (4) と北東隅の須恵器環 (2) が挙げられる。おそらく住居築絶時の所産と考えられるが、一括性は量的にも乏しく疑問が残る。

#### 103号住居跡

調査区中央D区 i j-35・36グリッドで検出された。周辺は緩やかながら西側と北側への斜面地形が続き、頂部の平坦地形と鞍部平坦地形の中間点にあたる。

傾斜地形のためか、周辺の住居跡の分布は稀薄で、本住居跡は単独の検出である。南約8mに100号住居が、北側約8m程に98号住と107号住居跡が位置するが、距離を保つ占地状況である。その他の遺構では、東に4号溝が東西方向に、北東には3号溝、北西には6号溝が南北方向に走行する。

平面形は、西壁に彎曲がみられるものの、比較的整った横長の長方形を呈す。規模は、約4.0×2.5mの中型の住居跡である。高、主軸方位は周辺の住居とは異にしており、北東を向く。

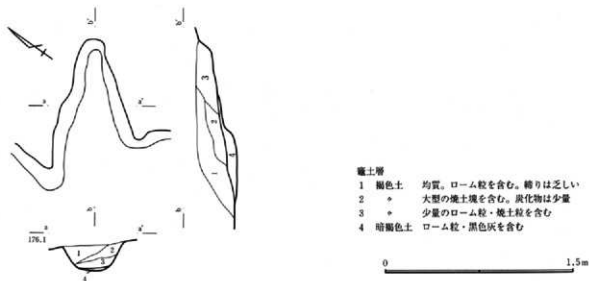
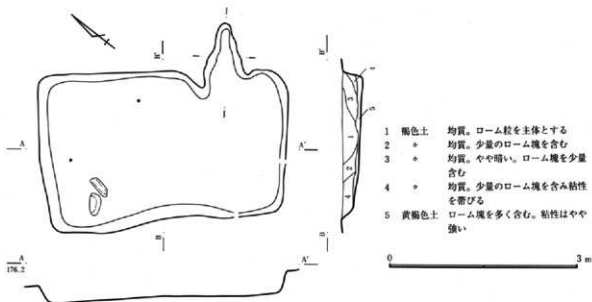
深さは、約30cm程度であり、また西壁の一部は斜面地形のため流失しており、推定線の図示を施した。遺存状態は不良である。

床面は、緩やかに西側へ傾斜するがほぼ平坦面が意識されて築かれる。貼床はなされず、黄褐色ローム層を基盤とする地床であった。硬化面は竈周辺及び中央部分に点在して認められた。

壁周溝・柱穴・貯蔵穴は確認されなかった。

竈は、東壁南東隅よりに設けられる。煙道部を強

第三章 検出された遺構と遺物



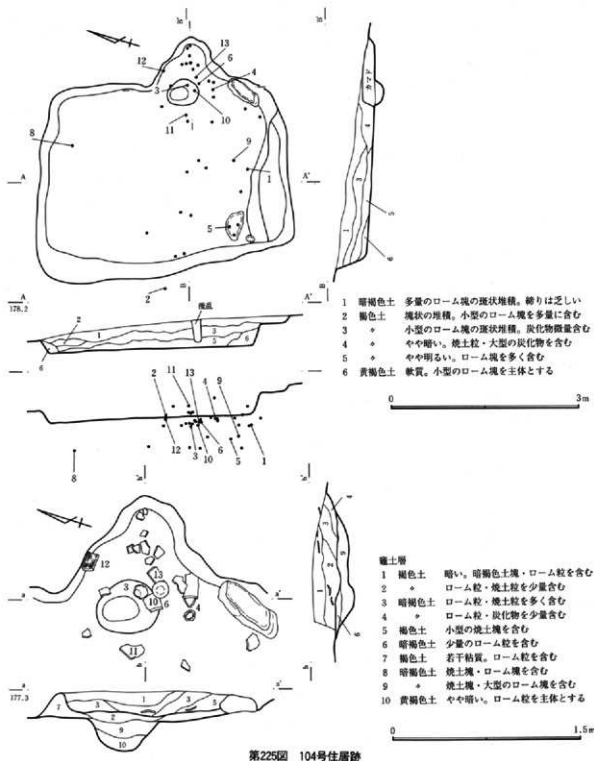
第224図 103号住居跡

第201 103号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
DJ-35・36	長方形	400×252×32	N49°E	N52°E			

く壁外に突出し、ローム層を基礎とする袖を張り出す。袖は不揃いで、北側袖が長く、南側は短い。その他の構築材・補強材は検出されなかった。

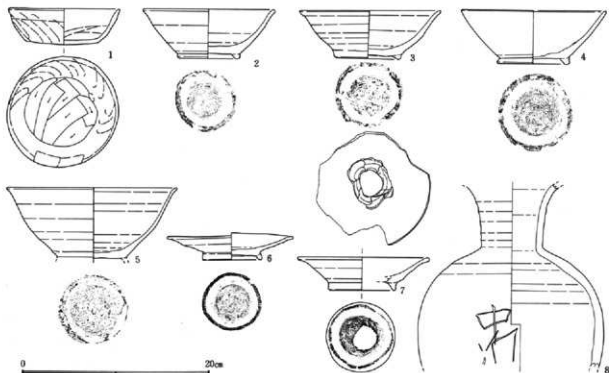
遺物は、須恵器片等の細片が極少量出土しており、貧弱な出土量である。図示は果たし得なかった。



第202表 104号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
CyDa-40・41	隅丸長方形	410×307×44	N74°E	N75°E	竈?	環1 埴4 皿2 長楕壺 1 瓦5	

第三章 検出された遺構と遺物



第203表 104号住居跡遺物観察表

第226図 104号住居跡出土土遺物

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 測定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第226図 1 碗 底版	口: 11.8 坯高: 3.8 底版: 85	完形 床直	①粗 黒色粒・白色粒 ②酸化焙 ③明褐色 ④土師器	口縁一部緩やかな彎曲を帯びて一体化する。底部平底。口縁部横撫で、体部斜位指撫で。底部削片削り。体部内面撫で。内底面は僅かな凹凸ある。
第226図 2 碗 底版	口: (13.7) 坯高: 5.2 底版: 85	約1/2 壁外	①粗 砂礫・石英 ②還元焙 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し、体部丸みを帯びる。高台は短い。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。体部に弱い撫でを加える。
第226図 3 碗 底版	口: 14.8 坯高: 5.1 底版: 86	約4/5 壺内	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焙気味 ③暗灰色 ④須恵器	口径やや広い。口縁部僅かに外反し、体部中位は若干丸みを帯びる。高台は短い。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第226図 4 碗 底版	口: (15.2) 坯高: 5.7 底版: 86	約2/5 壺内	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焙気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器	口縁一部内彎気味に一体化する。高台は短く圓き気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。内外面器壁割落著しい。
第226図 5 碗 底版	口: (17.8) 坯高: - 底版: -	約3/5 床直	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焙 ③灰色 ④須恵器	大型品。口縁部外反し、体部中位に丸みを帯びる。高台割落。内面見込み部や明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。器厚厚手。
第226図 6 皿 底版	口: 13.2 坯高: 2.5 底版: 86	ほぼ完形 壺内	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焙 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部に歪み有り。口縁部外反し体部中位に丸みを帯びて強く開く。高台は内彎気味に開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第226図 7 皿 底版	口: (13.7) 坯高: (3.5) 底版: 86	約1/2 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焙 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部外反し体部直線状に強く開く。高台は直立する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で強く外縁状となす。底部孔は焼成後故意の穿孔。
第226図 8 長頸壺 底版	口: - 坯高: - 底版: -	頸部一 体部破片 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焙 ③鈍黄色 ④須恵器 割着土器	頸部上半外反し下半は直立気味に外傾する。屈曲部は緩やかで肩部はやや強く張る。体部上半～中位に膨らみを設ける。左回転轆轤整形。体部下半に撫で。体部に焼成後の縦刺。「中口」。

## 104号住居跡

調査区中央南東寄りの台地頂部際で検出された。C区とD区の境界を跨ぐ。

周辺は、北側と東側への緩やかな斜面地形であるが、本住居跡より東は傾斜が強くなる。また南側と西側は頂部平坦面との変換点で傾斜がやや発達する箇所である。

周辺地形は、居住には適しているとは言えず、住居密度も低い。本住居跡も単独の検出となった。近接する住居跡としては、東約5mに105号住居跡、北約7mに106号住居跡が位置するが、疎らな分布であり群をなさない。

平面形は、各壁に緩やかな小彎曲が見られ、東辺長と西辺長に差があるために、やや不整の横長方形を呈す。また、南壁には段を持ち、内側の壁は大きく彎曲している。

深さは、約40cmを測るが、東側への傾斜のため東壁及び竈周辺は浅い立ち上がりを呈す。遺存度は概ね良好としたい。

床面は、東側へ緩やかに傾斜する。黄褐色ローム層を基盤とする地床で貼床は認められなかった。硬化面は床面中央を中心に比較的広い範囲で確認され、竈突口部周辺が顕著だった。

壁周溝・柱穴・貯蔵穴は見られなかった。

また、西南隅の壁際に大型の自然石が床直で出土している。棚状遺構との関連、昇降利用の石等と用途は判然としない。

竈は、東壁やや南よりに設けられる。馬蹄状の煙道部を壁外に突出し、燃焼部は緩やかに凹む。袖材は顕著ではなく、壁の彎曲が併用されたものと考えられる。構架材・補強材も明瞭な出土ではないが、東南隅の壁際に床直で出土した大型の自然石は、天井材として位置づけられよう。また、突口部に散乱する瓦も補強材として再利用されたものであろう。

遺物は、竈周辺及び中央～西南隅に少量ながら集積が見られる。床直および竈内の出土が目立ち、居住に伴う什器類の出土と捉えた。

## 105号住居跡

調査区中央南東寄りの台地頂部際で検出された。C区南西端にあたる。

周辺は、北側と東側への緩やかな斜面地形であり、特に、本住居跡より東は傾斜が強くなる。また南側と西側は頂部平坦面との変換点で傾斜がやや発達する箇所である。

急斜面地形のためか、住居密度は低く、周辺の住居跡は点在する程度である。近接する住居跡としては、西約5mに104号住居跡が、北東約8mに120号住居跡が見られる程度である。その他の遺構としては、1号配石や2号配石が東に連なり、北側には距離を置いて123号土坑がある。

尚、本住居跡は南側約1/3を調査区域外に延ばし未調査部分を残す。特に竈は約1/2を残す。

平面形は判然としないが、主軸長約3.1m程度の不整形と思われる。各壁は緩やかに彎曲を呈し、直線状ではない。特に南西隅の形状は調査区域外に延長するため、確定性に乏しい。

深さは、約40cmを測るが、東側への斜面地形の影響を受け、東壁及び北壁東半の立ち上がりは浅く緩やかである。遺存状態は概ね良好である。

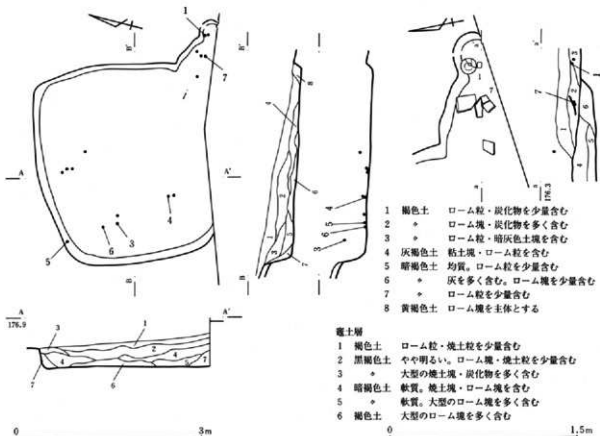
床面は、緩やかな東側への傾斜を見せるが、ほぼ平坦面を築く。黄褐色ローム層を基盤とする地床で貼床をなさない。

壁周溝・柱穴・貯蔵穴は認められない。

竈は、東壁に設けられる。おそらく、住居主軸方位と異にしており、平面的には南側へ傾く。煙道部を強く壁外に突出し、燃焼部は若干凹む。袖は、壁の緩やかな彎曲を利用し、袖石等を持たない。その他の補強材としては、燃焼部で出土した瓦は、壁補強材として位置づけられよう。

遺物は、竈周辺及び中央西・北よりに少量出土した。7個体を図示した得たが、須恵器坏・碗(3・4・5)は床直出土である。土師器坏・壺(1・2・7)も竈内及び周辺出土であり、居住に伴う什器・煮沸具の組成をなすものと評価を充てたい。

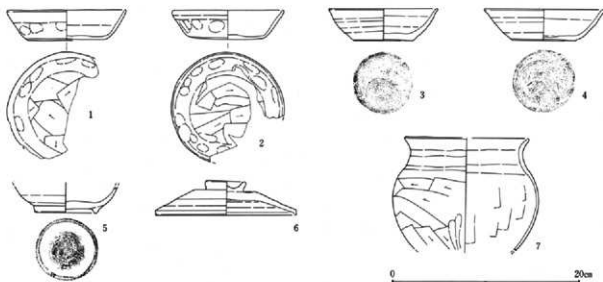
第三章 検出された遺構と遺物



第227図 105号住居跡

第204表 105号住居跡計画表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cwm-41・42	—	315×—×43	N73°E	—		坏4 壺1 釜1 甕1 瓦2	



第228図 105号住居跡出土遺物

第205表 105号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (m) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第228図 1 坏 図版 86	口：(12.6) 高：4.2 底：8.2	約1/2 壺内	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口唇部僅かに内彎し口縁部外開する。体部は直線状に開き底部平底を呈す。口縁部横撫で、体部弱い撫で指痕が残る。底部彫削り。内面凹凸は不明瞭。器厚薄手。
第228図 2 坏 図版 86	口：11.8 高：3.1 底：8.0	約3/4 壺内	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部短く内彎する。体部は直線状に開き底部平底を呈す。口縁部横撫で、幅狭ながら強く下端で凹線状となす。体部弱い撫で指痕が残る。底部彫削り。内面凹凸底面に顕著。器厚薄手。
第228図 3 坏 図版 86	口：11.3 高：3.4 底：6.2	ほぼ完形 床直	①粗 砂漚・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	整った器形を呈す。口縁部外反し体部上半に丸みを帯びる。底部は若干上げ底。内面見込み部は緩やか。右回転軸線形。底部回転糸切り後無調整。
第228図 4 坏 図版 86	口：12.5 高：3.3 底：6.8	定形 床直	①粗 砂漚・石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	整った器形を呈す。口縁部僅かに外反し体部直線状に開く。底部は若干上げ底。内面見込み部は緩やか。右回転軸線形。底部回転糸切り後無調整。
第228図 5 埴 図版 86	口： - 高： - 底：6.6	約1/3 床直	①粗 砂漚・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部下半丸みを帯びる。高台は短く直立気味に付される。内面見込み部は緩やか。右回転軸線形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第228図 6 蓋 図版 86	口：14.9 高：3.6 横：3.9	定形 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部平坦で環状溝を付す。体部は直線状に落ち、かえり部は短く直立する。右回転軸線形。体部上半回転彫削り。天井部回転糸切り後環貼付。天井部器厚厚く量感に重む。
第228図 7 壺 図版 86	口：(13.0) 高： - 底： -	口縁部一 体部破片 壺内	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③純褐色 ④土師器	小型コ字壺。口縁部上位外傾し下位は彎曲気味に直立する。肩部の張りはやや弱く体部中に膨らみを設ける。口縁部横撫で強く、下位で凹線状となす。体部上半は横撫で、下半は縦位置彫削り。体部内面横撫で。

## 106号住居跡

調査区中央南東寄りの台地頂部際で検出された。C区とD区の境界を跨ぐ。

周辺は、北側と東側への緩やかな斜面地形であるが、本住居跡より傾斜角度は強くなる。また南側と西側は頂部平坦面との変換点で傾斜がやや発達する箇所である。

急斜面地形のためか、住居密度は低く、周辺の住居跡は点在する程度である。近接する住居跡としては、南約7mに106号住居跡が位置するが、疎らな分布であり群をなさない。本住居跡も単独の検出となった。

平面形は、軸長約3.7m程度の不整正方形を呈する。北東隅及び東壁の形状が不整であり、全体の整いを崩す。

深さは、約50cmを測り良好な遺存状態を誇るが、東壁は、斜面地形のため浅く立ち上がりも緩やかで

ある。

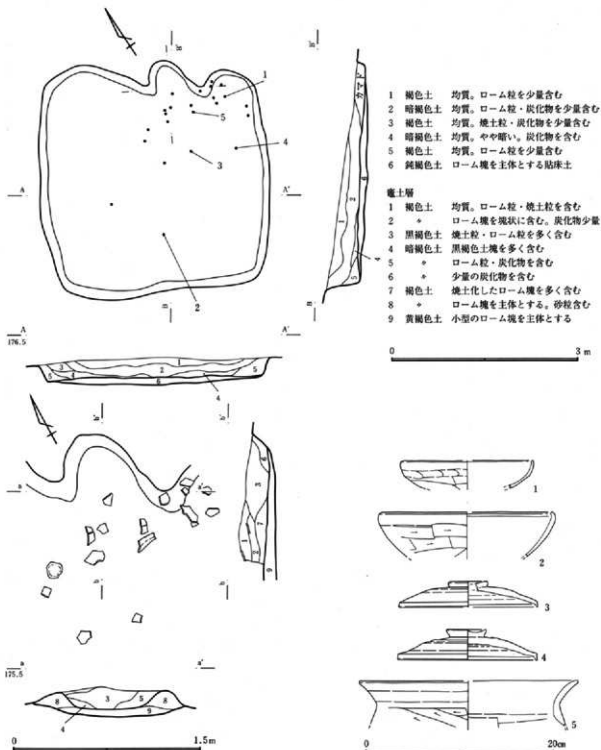
床面は、僅かに東側へ傾斜を見せるものの、ほぼ平坦面を築き、黄褐色ローム塊を主体とする貼床が全面になされていた。硬化面は竈周辺の狭い範囲で確認された。

壁周溝・柱穴・貯蔵穴は認められなかった。貯蔵穴は、相当する箇所の東南隅の彎曲が強く、相応の施設の存在を想起したい。

竈は、東壁中位に設けられる。馬蹄状の燃焼部～煙道部を壁外に突出し、燃焼部～焚口部はほぼ平坦である。袖は、ローム塊を主体とする粘質土で形成され、張り出しは小規模である。その他の構築材・補強材は明瞭ではなかった。

遺物は竈周辺及び東南隅に集中が見られるが、少量である。図示し得た5個体は、床直あるいは床直上の出土である。良好な組成ではないが、住居廃絶時期を現わす遺物と捉えた。

第III章 検出された遺構と遺物



第229図 106号住居跡・出土遺物

第206表 106号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	扉方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
C <sub>7</sub> Da-37・38	正方形	368×367×50	N29°E	N17°E		坏1 鉢1 蓋2 壺1	



第207表 106号住居跡遺物観察表

図 番 号 種	法量 (cm) ( ) 測定値	残 存 率 出土 状 態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第229図 1 版 86	口：(13.8) 高：— 底：—	破片 床直上	①細 白色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	遺存状態不良。口縁一部内彎をもつて一体化する。口縁部横撫で、体部弱い横位指撫で、底部丸削り。
第229図 2 鉢 版 86	口：(17.8) 高：— 底：—	約1/5 床直上	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	遺存状態不良。口部広い。口縁部内彎し、体部彎曲を帯びて強く開く。口縁部横撫で、体部上半横位丸削り、下半斜位丸削り。内面は丁寧な撫でにより平滑。
第229図 3 版 86	口：(14.6) 高：(2.8) 底：(4.0)	約1/5 床直上	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	遺存状態不良。天井部低く平坦面に環状撫を付す。体部は丸みを帯び腕部横やかに彎曲する。かえり部は短くやや内傾する。右回回転丸削り後換貼付。外面自然釉多量に付着。
第229図 4 版 86	口：14.7 高：3.2 横：4.0	ほぼ成形 床直	①細 白色粒 ②還元焰 ③浅黄色 ④須恵器	天井部低く平坦面に環状撫を付す。体部は丸みを帯び腕部横やかに彎曲する。かえり部は短くやや内傾する。右回回転丸削り後換貼付。貼付時の撫では天井部に及ぶ。内面天井部に僅かな滑沢面。
第229図 5 版 86	口：(22.8) 高：— 底：—	口縁部破片 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	口縁部強く外傾し頸部く字状に屈曲する。肩部の張りは弱い。口縁部横撫で。体部上半横位・斜位丸削り。体部内面横位丸削り。

## 107号住居跡

調査区中央やや西よりの台地較部西側に位置する。周辺は緩やかな北側への斜面地形で、比較的平坦面に近い安定した地点である。ただ西側に至ると、徐々に斜面地形が強くなる。

近接する住居跡としては、西側約4mに98号住が、北側約5mに108号住居跡、南西約8mには103号住居跡が位置する。住居跡同士の重複はなく、すべて単独の検出となっている。本住居跡も、住居跡の重複はなく、3号溝が東側を重なるのみである。

平面形は、軸長約3.3m程度の整った正方形を呈す。ただ、南壁～西壁に段が設けられており、これを加えると南北軸長は約3.7mを測り、全体の形状はやや横長となる。

深さは、約50cmを測り良好な遺存状態を誇る。ただ、東側壁及び竈は3号溝の重複のため残存は僅かである。

床面は、極僅かに北側へ傾斜するものの、平坦面が意識され構築される。黄褐色ローム塊と鈍褐色土塊による貼床が全面に貼られる。硬化面は床面中央に比較的広い範囲で確認され、特に竈周辺が顕著だった。

壁間溝は、北壁西半より西壁を経て南壁中位に検出された。しっかりした掘り込みであり、検出は容易だった。

柱穴・貯蔵穴は認められなかった。床下調査で得られた土坑等にその可能性を求めたが、貼床が上面を覆うため、床面上の施設は無いものと考えた。

東南隅に自然石の集中が見られた。意図的な集中かあるいは廃絶時の集中廃棄か不明なため、性格付けはできないが、無穴の貯蔵穴様の施設が存在したとすれば、関連性は窺えよう。

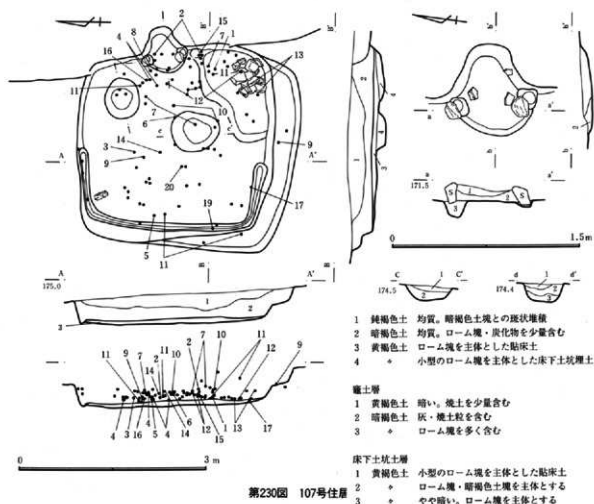
さらに、本住居跡は、焼失住居の可能性を秘める。北西隅床面上に少量ながら、炭化材の出土を見た。広がりを持たないが、焼失後の精査行為で炭化材の除去が行われた可能性もある。

竈は、東壁や北寄りに設けられる。3号溝との重複のため遺存状態は悪いが、馬蹄状の燃焼部～煙道部を壁外に突出し、燃焼部は緩やかに凹む。

袖は、両袖とも自然石を立て、袖石としていた。周囲の補強土が検出されず、芯材とするかは不明である。使用面下には、袖穴が開く。

前述の南壁～西壁に至る段差を欄状遺構と捉えた。土層には重複の痕跡は無く、出土遺物の接合面

第三章 検出された遺構と遺物



第230図 107号住居

第208表 107号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	電方位	主な施設	主な遺物	取壊遺構
D6i-32・33	正方形	355×325×48	N92°E	N80°E	壁厨跡・床下土坑 欄	坏1 埴7 葺2 羽釜5 甌 1 壺1 不明1 金属器2	

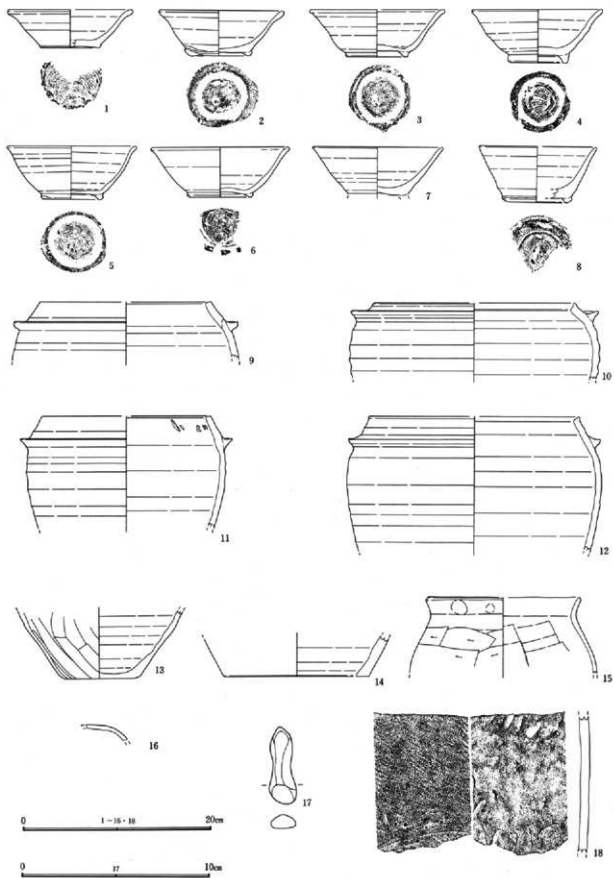
係も見られたことから、住居跡に帰属し得る施設として考えた。

床下遺構としては、中央と北東隅の径約60cm程度の不整形の土坑？を床下土坑として充てたい。また、東南隅には浅い不整形の土坑を検出した。貯蔵穴としての性格付けも考えたが、粘床下であり、構築時の所産と捉えた。

遺物は、多量に出土した。覆土上層～床直に満遍無く出土し、平面的にも全域にわたる。遺物の接合関係を見ても、上層の出土土器片と床直の破片が接

合することから同時性の高い廃棄と考えられよう。焼失住居としての位置づけも考慮し、住居廃絶後の一括廃棄行為を想起したい。

第5節 奈良・平安時代の住居跡



第231図 107号住居跡出土遺物

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

第209表 107号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第231図1 坏 図版 86	口：(13.0) 高：(4.1) 底：(6.1)	約2/5 床直	①粗 砂礫・黒色粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器	口縁部強く外反し体部中位に若干丸みを帯びる。底部は僅かに突出する。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時に撫でを加える。器厚やや厚手。
第231図2 埴 図版 86	口：13.0 高：4.9 底：6.2	約5/6 壺内	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ④須恵器	口縁部強く外反し体部中位～下半に丸みを帯びる。高台は短い。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。体部に強い撫でを加える。
第231図3 埴 図版 86	口：(14.0) 高：5.0 底：6.0	約1/3 床直上	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部下半に丸みを帯びる。高台は短い。内面見込み部やや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。撫では体部にまで及ぶ。
第231図4 埴 図版 86	口：13.7 高：5.6 底：5.9	約4/5 覆土	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③黒褐色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部丸みを帯びる。高台は若干開く。内面見込み部は比較的明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第231図5 埴 図版 86	口：13.5 高：5.7 底：6.0	約3/5 床直上	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③黒褐色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位に丸みを帯びる。高台は短い。内面見込み部は比較的明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。体部下半に弱い撫でを加える。器厚薄手。
第231図6 埴 図版 86	口：(14.4) 高：5.3 底：(6.4)	約1/4 覆土	①粗 片岩粒・砂礫 ②酸化焰気味 ⑤灰黄褐色 ④須恵器	口縁部外反し体部下半に丸みを帯びる。高台は短い。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。体部に撫でを加える。
第231図7 埴 図版 86	口：13.7 高：— 底：—	約1/2 覆土	①粗 片岩・砂礫 ②酸化焰気味 ③黒褐色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部緩やかな丸みを帯びる。高台は割落。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。体部に撫でを加える。
第231図8 埴 図版 86	口：(12.3) 高：(4.9) 底：(6.2)	約1/4 覆土	①粗 片岩・白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍褐色 ④須恵器	やや身溜の塊。口縁部僅かに外反し体部は直線状に開く。高台は短い。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。撫では体部に及ぶ。
第231図9 羽釜 図版 87	口：(18.0) 高：— 底：—	口縁部破片 底面	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③褐色 ④須恵器	口縁部内傾し、内彎する体部と一体化する。罫は若干外傾気味に付される。内面口縁下に僅かな筋出。右回転轆轤整形。
第231図10 羽釜 図版 87	口：(21.0) 高：— 底：—	口縁部破片 覆土	①粗 砂礫・片岩 ⑤還元焰 ⑥灰色 ④須恵器	口縁部強く内傾し体部と一体化する。罫は外傾気味に付される。体部上半に筋らみを持たせる。右回転轆轤整形。
第231図11 羽釜 図版 87	口：(17.8) 高：— 底：—	口縁部～ 体部破片 床直	①粗 砂礫・片岩 ⑤還元焰 ③黄灰色 ④須恵器	口縁部内傾し体部と一体化する。罫は外傾気味に付される。体部上半に緩やかな筋らみを持たせる。右回転轆轤整形。
第231図12 羽釜 図版 87	口：(22.2) 高：— 底：—	口縁部～ 体部破片 床直	①粗 砂礫・石英 ⑤還元焰 ③黄灰色 ④須恵器	口縁部内傾し体部と一体化する。罫は短く水平に付される。体部上半に緩やかな筋らみを持たせる。右回転轆轤整形。
第231図13 羽釜 図版 87	口：— 高：— 底：7.6	底部 床直	①粗 砂礫・白色粒 ⑤還元焰 ⑥灰白色 ④須恵器	底径やや広い。緩やかに開く体部下半。右回転轆轤整形。体部縦位・斜位筋削り。器厚やや薄手。
第231図14 甌 図版 87	口：— 高：— 底：(15.5)	底部破片 覆土	①粗 片岩・白色粒 ⑤還元焰 ③灰黄褐色 ④須恵器	遺存状態不良。直線状に開く体部下半。接地面は狭く内面に弱い筋をなす。轆轤整形。回転方向不詳。体部外面撫でを加える。

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第231図 15 壺 底版 87	口: (16.0) 高: — 底: —	口縁部破片 床直上	①細 白色粒 ②酸化劣 ③褐色 ④土師器	小型壺。口縁部外傾し頸部緩やかな屈曲を呈す。肩部の張り弱い。口縁部横撫で、指痕残存。体部上半位削り。内面横位削撫で。
第231図 16 壺 底版 87	口: — 高: — 底: —	肩部破片 床直上	①細 白色粒 ②還元劣 ③灰黄色 ④灰釉陶器	肩部破片。強く張る形態か。頸輪整形。外面軸垂れ。
第231図 17 不明品 底版 87	口: 4.1 高: 1.5 底: 0.7	不明 床直	①細 砂粒 ②還元劣 ③灰色 ④須恵器	不明土製品。外面磨滅のため判然としない。剥落の痕跡も見られるいは把手の一部であろうか。
第231図 18 壺 底版 87	口: — 高: — 底: —	体部破片 覆土	①粗 片岩・白色粒 ②還元劣 ③黄灰色 ④須恵器	外面平行厚き後一部削で。内面円環状当て目。内面一部に滑沢面が看取され、あるいは転用履か。

## 108号住居跡

調査区中央やや西よりの台地較部西側に位置する。周辺は緩やかな北側への斜面地形で、比較的平坦面に近い安定した地点である。ただ西側に至ると、徐々に斜面地形が強くなる。

近接する住居跡としては、北西4mに73号住、西側約4mに98号住が、南側約5mに107号住が位置する。比較的住居密度は高いが、すべて単独の検出であり、重複住居による群を見る地点ではない。

重複遺構としては、3号溝が本住居跡南西隅と重なる。

平面形は、各壁に小彎曲が見られ、やや不整の縦長長方形を呈す。特に北東隅形状が全体の整いを崩している。平面規模は、約3.2×2.8mでやや小型の住居である。

深さは約25cm程度だが、各壁の立ち上がり・掘り込みもしっかりしており、遺存状態は概ね良好といえよう。

床面は、黄褐色ローム塊を主体とした貼床で、北側へ僅かに傾斜が見られるが、ほぼ平坦面を築く。硬化面は、床面中央～竈周辺に顕著で、比較的広い範囲で確認され、西壁や北壁際まで及ぶ。

壁周溝は、南壁～西壁南端に確認された。やや浅い掘り込みである。

柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、東壁中央に設けられる。馬蹄形の燃焼部～煙道部を壁外に突出し、緩やかな凹みを燃焼部に持つ。焼土粒・炭化物・黒色灰の薄い堆積が見られた。

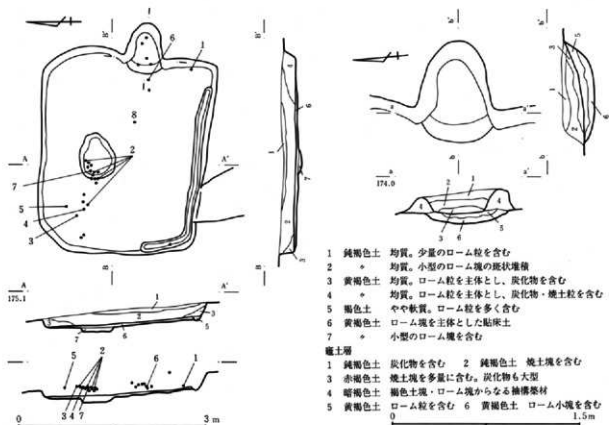
袖は、黄褐色ローム塊・鈍褐色粘質土塊を主体に形成され、僅かに張り出す。その他の構築材・補強材は明瞭には検出されていない。

床下遺構として、中央北寄り検出された不整形の土塊を床下土塊として位置付けたい。

出土遺物量は、多くはなく、覆土中出土のものが目立った。平面的には、竈内及び中央北よりの2箇所少量ながら集中が見られる。完形品は無く破片状態の個体で、土器類7個体、金属器1点を図示した。

出土標高はほぼ一定しており、竈内出土の数点を除くと、廃絶後の流入とも捉えられる。ただ、出土遺物に大きな時期差は無く、流入としても、廃絶時期に近い流入と考えられよう。

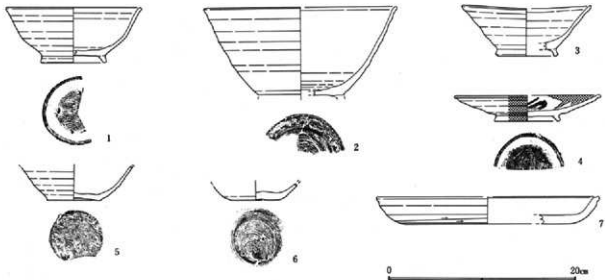
第三章 検出された遺構と遺物



第232図 108号住居跡

第210表 108号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×高さ	住居方位	竪方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dgh-30・31	不整形長方形	323×278×25	N95°E	N97°E	壁間溝・床下土坑	坏 2 埴 3 皿 1 釥 1 金属器 1	



第233図 108号住居跡出土遺物

第211表 108号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②地成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第233図 1 陶 版 87	口：(14.2) 高：6.6 底：5.9	約1/2 床直	①粗 片岩・石英 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部中に丸みを帯びる。高台は開く。内面見込み部は緩やか。右回転軸調整。底部回転軸切り後高台貼付。貼付時周縁調整。
第233図 2 陶 版 87	口：(20.3) 高：— 底：—	約1/3 覆土	①細 白色粒・石英 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	大型品。遺存はやや不良。口縁部僅かに外反し、体部緩やかな彎曲を帯びて直線状に開く。高台は割落。内面見込み部は緩やか。右回転軸調整。底部回転軸切り後高台貼付。貼付時周縁調整。
第233図 3 陶 版 87	口：13.6 高：— 底：—	約2/5 覆土	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③暗灰色 ④須恵器	口縁部に歪みあり。口縁—体部直線状にやや強く開く。下半に僅かな丸みを帯びる。高台は開く。内面見込み部は緩やか。右回転軸調整。底部回転軸切り後高台貼付。貼付時周縁調整。
第233図 4 陶 版 87	口：(15.0) 高：2.8 底：6.5	約2/5 覆土	①磁青 ②還元焰 ③灰白色 ④灰釉陶器	口縁部短く外反する。体部は緩やかな丸みを帯び下半で洗い段を有す。高台は開く。左回転軸調整。底部回転軸切り後高台貼付。貼付時周縁調整。地軸は内面に限られ砥毛掛け。
第233図 5 陶 版 87	口：— 高：— 底：5.7	約2/5 覆土	①細 砂粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器	口縁—体部上半外反する。下半に丸みを帯び、底部僅かに突出し上げ底を呈す。内面見込み部やや明瞭。右回転軸調整。底部回転軸切り後調整。器厚薄手。
第233図 6 陶 版 87	口：— 高：— 底：5.0	約1/3 覆土	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	底部小径。下半—覆部に丸みを帯びて開く。内面見込み部は緩やか。右回転軸調整。底部回転軸切り後無調整。
第233図 7 陶 版 87	口：(23.2) 高：— 底：—	約1/5 覆土	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口唇部内面外傾。口縁部短く外反し体部丸みを帯びる。腰部も彎曲が強く底部境は明瞭としない。右回転軸調整。底部回転軸周り。器厚やや厚手。

## 109号住居跡

調査区中央やや南寄りの台地頂部際で検出された。D区d e r-39・40グリッドにあたる。周辺は北西への傾斜が比較的強くなる地点で、地形変換点にあたる。周辺の住居跡は極めて少なく、距離を置いて北に99号住が見られるのみである。その他の遺構としても、121号土坑が東側に近接する程度である。

本住居跡は東側及び南側の一部を除き、殆どを斜面地形のため流失する。そのため、平面形等の全容は把握できない。おそらく小型の方形を呈する例と考える。深さも、残存する南壁付近で約20cm程度を測り、遺存状態は極めて不良である。

床面は、黄褐色ローム層を基盤とする地床で、緩やかに北側へ傾斜する。硬化面は、竈突口部西に狭い範囲で確認された。

残存する東南隅で、貯蔵穴と竈を確認した。

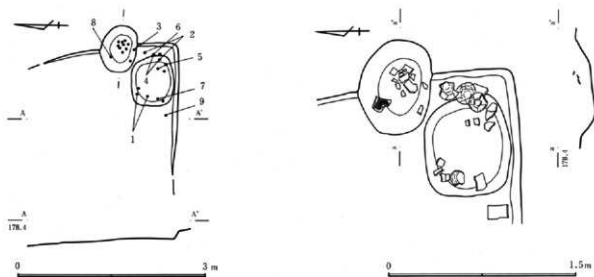
貯蔵穴は、約70×80cmの不整形を平面形とし、

約30cmの深さを測る。比較的良好な立ち上がりを呈し、掘り込みもしっかりしていた。覆土内及び周辺より須恵器器・埴輪や瓦が出土しており、竈との関連性を窺わせる。

竈は、東壁南寄りに設けられる。遺存状態は悪く、使用面下の検出となった。不整形の土坑状の掘り込みを構築時の平面形としている。焼土塊・ローム塊が堆積しており、構築物と考えた。また、瓦・須恵器器破片が出土しており、これらも構築物・補強材として位置付けられよう。

遺物は、前述のように竈・貯蔵穴周辺のみが本住居跡出土のものとして捉えられる。出土状態からは、同時性はある程度は把握されるものの、器種組成及び良好な一括性は提示できる例ではない。居住に伴う例か、廃絶時廃棄例か断定はできない。

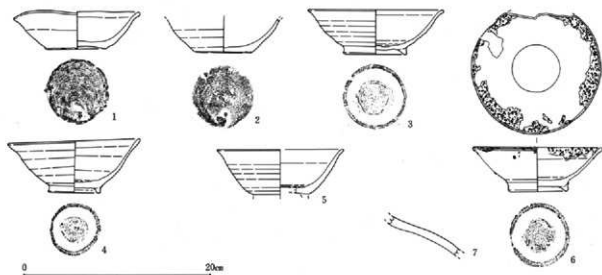
第三章 検出された遺構と遺物



第234図 109号住居跡

第212表 109号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重積遺構
Dde-39・40	—	—×—×22	—	N91°E	貯蔵穴	坏2 埴4 甕1 瓦2	



第235図 109号住居跡出土遺物



第213表 109号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (m) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第235図 1 坏 図版 87	口： 13.1 高： 4.9 底： 6.1	ほぼ完形 貯蔵穴	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部に歪み有り。口縁部外反し体部に丸みを帯びる。底部は僅かに突出し若干上げ底を呈す。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第235図 2 坏 図版 87	口： - 高： - 底： 6.0	約1/2 貯蔵穴	①粗 片岩・白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍褐色 ④須恵器	体部中に明瞭な丸みを帯び、下半はやや外反気味に開く。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後弱い激でを加える。
第235図 3 坏 図版 87	口： 14.0 高： 4.8 底： 6.4	約3/5 壺内	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部丸みを帯びる。高台は開く。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁激で。
第235図 4 坏 図版 87	口： 13.9 高： 5.4 底： 5.3	約3/4 貯蔵穴	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍褐色 ④須恵器	口縁部外反し体部中に丸みを帯びる。底部小径で、高台は直立気味に開く。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁激で。
第235図 5 坏 図版 87	口： (13.2) 高： 4.7 底： -	約1/4 貯蔵穴	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部緩やかな彎曲を帯びて直線状に開く。高台は割落。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁激で。
第235図 6 坏 図版 87	口： 13.5 高： 4.7 底： 5.7	約4/5 貯蔵穴	①粗 砂粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部中に丸みを帯びる。高台は直立気味に付される。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁激で。内面口縁部に油漣付着。
第235図 7 壺 図版 87	口： - 高： - 底： -	体部破片 貯蔵穴	①粗 片岩・白色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④須恵器	強く張る頸部破片。外面横激で。内面横位激で。

## 110号住居跡

調査区中央台地鞍部のやや東側で検出された。D区 b c-33・34グリッドに位置する。周辺は、北側への斜面地形が強く、東側への傾斜はやや緩やかである。また、さらに北側の傾斜は緩やかになり、平坦地形に近くなる。

周辺の住居跡は少ない。北西に112号住居跡、南側に106号住が見られるがいずれも距離をおく古地状況である。近接するその他の遺構としては、2号掘立柱建物跡が東に接する。また、130号～145号土坑が北側で群をなす。

平面形は、比較的整った縦長の長方形を呈す。北東隅及び北側の壁は判然としませんが、壁周溝の屈曲から、推定線を施した。規模は約3.6×3.0mの中型の住居である。

深さは遺存の良好な南壁付近くで約30cmを測るが、

北壁は斜面地形と群在する土坑群のため、立ち上がりも検出されなかった。

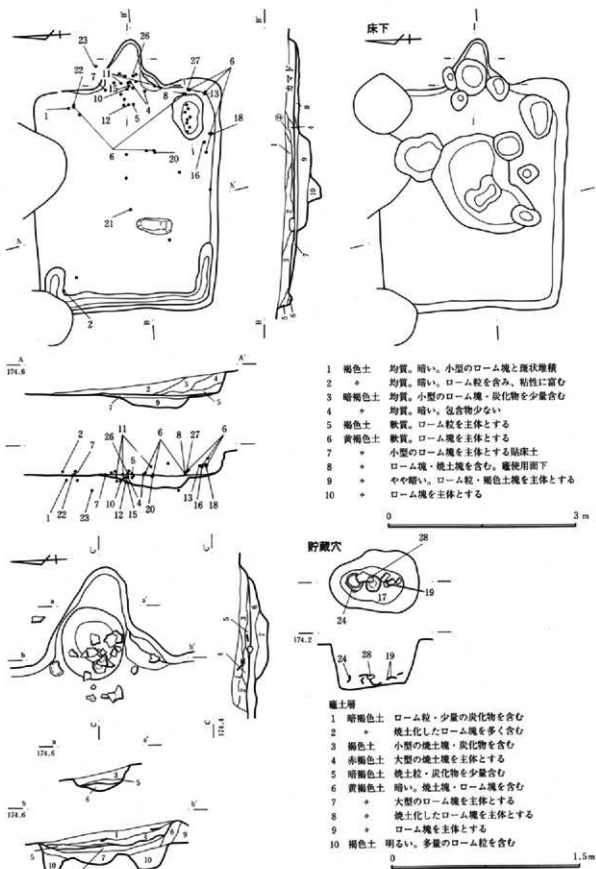
床面は、ほぼ平坦面を築く。黄褐色ローム塊を主体とした貼床がなされていた。硬化面は中央部分を中心に広い範囲で確認され、竈口部周辺に顕著だった。

壁周溝が確認されている。南壁西端から西壁を経て北壁東端に至る。やや浅い掘り込みである。

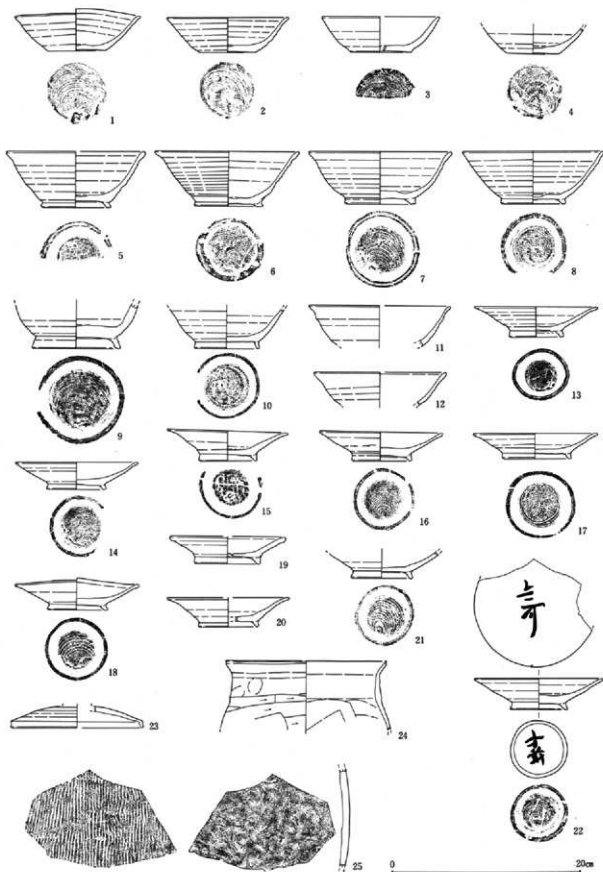
柱穴は、床面上では確認できなかった。床下調査で得られた中央南側の小ビットに可能性を求めたが、確証性に乏しい。

貯蔵穴は、東南隅の不整形円形状の土坑を検出した。掘り込みもしっかりしており、坑底面より土師器壺・須恵器皿が出土している。

竈は、東壁中央に設けられる。燃焼部一煙道部を壁外に突出し、燃焼部は緩やかに凹み、焚口部は比

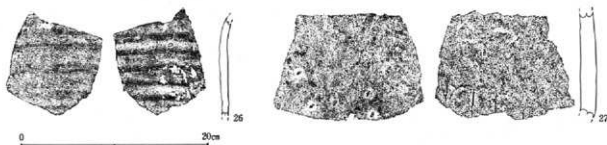


第236図 110号住居跡



第237図 110号住居跡出土遺物(1)

第III章 検出された遺構と遺物



第238図 110号住居跡出土遺物(2)

第214表 110号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	電方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dbc-33・34	長方形	365×300×29	N92°E	N98°E	貯蔵穴・壁周溝 床下土坑	坏4 埴9 皿9 蓋1 甕4	

第215表 110号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(m) ( )推定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴(形態・手法等)
第237図1 坏 図版 87	口: 13.1 高: 4.4 底: 6.2	完形 床直	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③鈍黄褐色 ④須臾器	口縁部に歪みあり。口縁部僅かに外反し体部緩やかな丸みを帯びる。内面見込み部は緩やか。底部若干上げ底。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第237図2 坏 図版 87	口: 12.8 高: 3.7 底: 6.0	完形 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③橙色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し体部丸みを帯びる。内面見込み部は緩やか。底部若干上げ底。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第237図3 坏 図版 87	口:(12.4) 高:(3.8) 底:(6.4)	約1/4 覆土	①砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し体部緩やかな丸みを帯びる。内面見込み部はやや明瞭。底部若干上げ底。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第237図4 坏 図版 87	口: - 高: - 底: 5.5	約1/2 甕内	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③橙色 ④須臾器	体部緩やかな丸みを帯びて開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第237図5 埴 図版 87	口:(14.5) 高: 5.9 底:(6.6)	約2/5 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁部外反し体部中に丸みを帯びる。高台は短く開き気味に付される。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁縁で。
第237図6 埴 図版 87	口: 15.2 高: 5.8 底: 6.3	約4/5 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③橙色 ④須臾器	口縁部外反し体部直線状に開く。高台は短く開き気味に付される。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁縁で。口縁一体部器厚薄手。
第237図7 埴 図版 87	口:(15.0) 高: 2.6 底: 6.8	約1/2 甕内	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁部強く外反し体部中位一下半顕著な丸みを帯びる。高台は短く開き気味に付される。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁縁で。
第237図8 埴 図版 87	口: 14.9 高: 5.5 底: 6.1	一部欠損 床直	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③橙色 ④須臾器	口縁一体部ほぼ直線状に一体化して開く。高台は短く開き気味に付される。内面見込み部は明瞭。内底面の凹み顕著。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁縁で。
第237図9 埴 図版 88	口: - 高: - 底: 9.4	底部 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③橙色 ④須臾器	体部丸みを帯び下半に著しい。高台は若干長く開く。内面見込み部は顕著。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁縁で。底部器厚厚手で量感に富む。

## 第5節 奈良・平安時代の住居跡

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形製・手法等)
第237図 10 図版 88	口：— 埴高：— 底：6.8	約3/5 壺内	①細 白色粒 ②還元焰 ③橙色 ④須恵器	体部緩やかな丸みを帯びる。高台は短く開く。内面見込み部は緩やか。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時間同様で。
第237図 11 図版 88	口：(14.8) 埴高：— 底：—	約1/4 壺内	①細 砂粒 ②還元焰 ③淡黄色 ④須恵器	口縁部強く外反し体部中に顕著な丸みを帯びる。右回転軸線整形。口縁部厚薄手。
第237図 12 図版 88	口：(14.0) 埴高：— 底：—	約1/5 深直	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部中に丸みを帯びる。やや開き気味の器形。右回転軸線整形。
第237図 13 図版 88	口：12.8 皿高：3.2 底：5.3	ほぼ完形 覆土	①粗 砂粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	口縁一部直線状に開く。高台は直立気味に付される。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。
第237図 14 図版 88	口：(12.9) 皿高：2.9 底：5.9	約2/3 覆土	①粗 砂粒・片岩粒 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部中に緩やかな丸みを帯びる。高台は開き気味に付される。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時間同様で。
第237図 15 図版 88	口：12.6 皿高：3.1 底：6.0	約2/3 壺内	①粗 砂粒・片岩粒 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	口縁部外反し体部中に緩やかな丸みを帯びる。高台は僅かに開き気味に付される。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時間同様で。
第237図 16 図版 88	口：13.0 皿高：3.0 底：6.0	ほぼ完形 覆土	①粗 砂粒・石英 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部中に緩やかな丸みを帯びる。高台は直立気味に開く。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時間同様で。底部器厚手。
第237図 17 図版 88	口：12.7 皿高：2.7 底：6.9	ほぼ完形 貯蔵穴	①粗 砂粒・片岩粒 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部中に緩やかな丸みを帯びる。高台は直立気味に開く。底径若干広い。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時間同様で。
第237図 18 図版 88	口：12.9 皿高：2.7 底：6.1	完形 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	口縁部に歪みあり。口縁部外反し体部直線状に開く。高台は開く。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時間同様で。口縁部厚やや薄手。
第237図 19 図版 88	口：(12.0) 皿高：(2.9) 底：(6.6)	約1/5 覆土	①粗 砂粒・片岩粒 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	口縁部厚し体部直線状に開く。体部器高低い。高台は直立気味に開く。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時間同様で。口縁部器厚やや厚手。
第237図 20 図版 88	口：(12.8) 皿高：(3.1) 底：(6.1)	約1/5 床直上	①粗 砂粒・石英 ②酸化焰気味 ③橙色 ④須恵器	口縁部一部緩やかな外反気味に一体化し開く。高台は直立気味に開く。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時間同様で。
第237図 21 図版 88	口：— 埴高：— 底：6.5	約1/3 覆土	①粗 砂粒 ②酸化焰気味 ③淡黄橙色 ④須恵器	体部中に丸みを帯び、比較的強く開く。高台は短く開く。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時間同様で。
第237図 22 図版 88	口：(13.3) 皿高：3.3 底：5.9	約3/5 床直上	①粗 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器 墨書土器	口縁一部緩やかな丸みを帯びて一体化する。高台は強く開く。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時間同様で。内底面及び外底面に墨書。内容不明。
第237図 23 図版 88	口：(14.0) 蓋高：— 底：—	柄：約1/4 壺外	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	天井部丸みを帯びて横を欠。体部一部彎曲する。かえり部は外反気味に直立する。右回転軸線整形。天井部回転差あり。
第237図 24 図版 88	口：(17.0) 蓋高：— 底：—	口縁部 貯蔵穴	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	コ字型。口唇部僅かに直立。口縁部上位外傾し下位は直立する。肩部の張りは高い。口縁部横線で上位と下位で強く凹線状となす。体部上半は横位差あり。体部内面は横位差同様で。

第3章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 測定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第237図 図版 25 88	口： - 堖高： - 底： -	体部破片 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	大甕。外面平行叩きを密に施す。内面横位無で、円環状当て目残る。
第238図 図版 26 88	口： - 堖高： - 底： -	口縁部破片 甕内	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	大甕。内外面とも横位無で。頸部破片であろう。
第238図 図版 27 88	口： - 堖高： - 底： -	体部破片 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	大甕。内外面とも横位無で。内面僅かに円環状当て目残る

較的平坦である。

袖は、緩やかな張り出しを見せる。北側は壁の彎曲を利用し、南側は粘質土を充てていた。袖石の出土は見られなかったが、使用面下調査において、相当部に小ピットを検出した。袖石抜取り穴とも考えたが、袖粘質土下での検出であり、袖構築時の補強穴としても考えられよう。

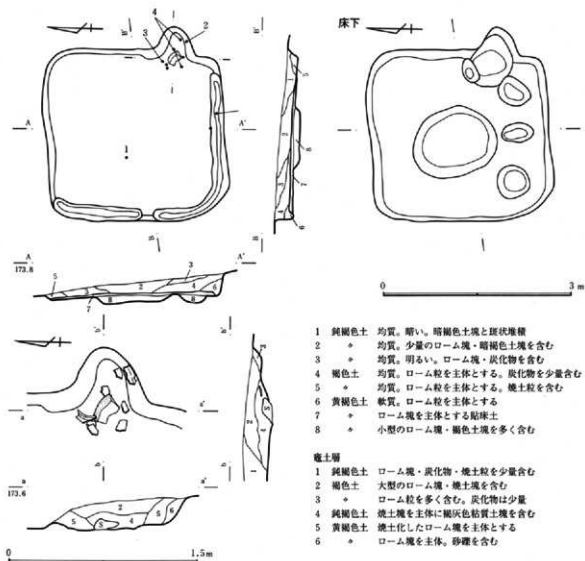
その他の構築材として、燃焼部に散乱する須恵器甕体部破片が壁補強材として捉えられる。伴出する須恵器坏・埴もあるいは補強材の一部とも考えられよう。

使用面下には、燃焼部に土坑状の凹みを検出した。焼土塊が堆積しており、使用時の攪拌も伴うのだろう。ここでは、構築時の所産と捉えた。

床下遺構は、中央に不整形の大型土坑を検出し、小型の土坑や小ピットが重複する。床下土坑として位置付けたい。

遺物は、比較的多く出土した。甕内・貯蔵穴内の出土の遺存が良好である。出土層位は、覆土下層～床直に至り、状況から住居跡廃絶時の一括廃棄と捉えたい。一括性は高いものと考えた。

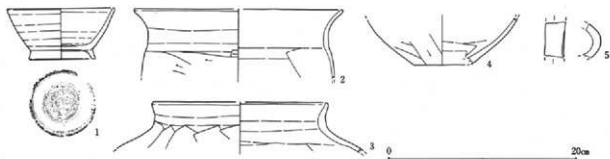
尚、床面中央やや南西寄りに大型の自然石が出土した。床直ではあるが、用途・機能は不明である。



第239図 112号住居跡

第216表 112号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	羅方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Ded-31	正方形	288×272×23	N87°E	N90°E	壁間溝・床下土坑	陶1 粟3 把手1	141坑



第240図 112号住居跡出土遺物

### 第三章 検出された遺構と遺物

第217表 112号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(m) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第240図 1 陶版 88	口：11.3 輪高：5.4 底高：6.9	約4/5 床直上	①細砂粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁一体部僅かな内彎を帯びて一体化して固く。体部器高は高く、高台は固く。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤形。底部回転未切り後高台貼付。貼付時間短縮後。
第240図 2 陶版 88	口：(21.8) 高：— 底：—	口縁部破片 壺内	①細砂粒 片岩粒 ②還元焰 ③明赤褐色 ④土師器	コ字壺。口縁部上位強く外反し下位は外反気味に直立する。肩部の張りは著しく弱い。口縁部横溝で、頸部で凹縁状となす。体部横位・斜位焼削り。体部内面横位焼削。コ字形状は内面に顕著。
第240図 3 陶版 88	口：(18.2) 高：— 底：—	口縁部破片 壺内	①細砂粒 片岩粒 ②還元焰 ③鈍褐色 ④土師器	口唇部僅かに内彎し、口縁部短く直立気味に外傾する。頸部は彎曲し肩部の張りは強い。口縁部横溝で、体部上半は縦位焼削り。体部内面は細かな横位焼削。
第240図 4 陶版 88	口：— 高：— 底：(6.0)	底部破片 壺内	①細砂粒 ②還元焰 ③鈍褐色 ④土師器	体部丸みを帯びて強く固く。外面縦位・斜位焼削り、内面横位焼削。
第240図 5 陶版 88	口：— 壺高：— 底：—	把手 壺内	①軟赤 ②還元焰 ③灰白色 ④灰陶輪器	壺腹に付される把手破片であろう。しっかりとした面を持ち、強く内彎する。施釉方法等不明。

#### 112号住居跡

調査区中央台地鞍部のやや東側で検出された。D区c d-31グリッドに位置する。周辺は、北側への斜面地形が強く、東側への傾斜はやや緩やかである。また、さらに北側の傾斜は緩やかになり、平坦地形に近くなる。

近接する住居跡は少なく、南側に110号住居がやや距離をおいて見られるのみである。しかしながら、北側から東側にかけては、C-D区東斜面住居群があり、本住居跡は住居群の南西端に距離をおく占地といえよう。また、周辺は土坑が散見され、37号-39号土坑や125号・126号土坑がまとまりをなす。本住居跡にも141号土坑が重複するが、新旧は本住居跡が土坑を切る土層観察を得た。

平面形は、整然とした正方形を呈す。各壁に緩やかな彎曲が見られるが、整いを保つ壁を設定する。規模は、約2.9×2.7mでやや小型の住居といえよう。深さは、遺存の良好な南壁付近で約20-30cmを測り、やや浅いが、北壁以外の各壁の立ち上がりは良好でしっかりした掘り込みを呈す。

床面は、僅かな凹凸が見られるものの、ほぼ平坦面を築く。黄褐色ローム塊を主体とした貼床が全面

になされ、硬化面は中央-煙突口部周辺に顕著に確認された。

壁周溝は、南壁及び西壁で検出された。西壁中部で空隙が見られるが、あるいは入口部施設の影響を受けたのであろうか。柱穴・貯蔵穴は床面上では検出されなかった。床下調査において、東南隅に不整形の土坑が確認されたが、位置的にも問題があり確証性には乏しい。

竈は、東壁南寄りに設けられる。馬蹄状の燃焼部～煙道部を壁外に突出し、緩やかな凹みを燃焼部に有す。袖石等の構築材は検出されなかったが、黄褐色ローム塊を主体とした袖を土層観察で確認できた。また、北袖相当部の使用面下には小ビットがあり、袖石抜取り穴等の性格が想起されよう。燃焼部には、大型の自然石・土師器裏破片が出土したが、これも補強材の一部と捉えたい。

床下遺構として、中央に大型不整形円状の土坑が確認された。床下遺構として位置付ける。その他の南側の3基のビットは性格は不明である。柱穴・貯蔵穴の可能性もあるが、位置付けは控えたい。

遺物は、貧弱な出土であり、良好な組成ではない。須恵器端(1)は南壁際床直上出土である。



## 111号住居跡・113号～116号住居跡

5軒の重複住居跡を一括して述べるが、各住居跡は拡張・建て替えといった有機的な関連は持たず、単純な時期差による重複である。

本住居跡群は、調査区東側のC区東斜面に位置する。C～D区住居群の東南側にあたる。

周辺は、東側への斜面地形とはいえ、台地頂部のやや緩やかな斜面地形であり、本住居跡群周辺には、多数の住居跡が密集して検出されている。南側には121号住居跡がやや距離をおいて、西側には122号住居跡が接し、北西～北側にかけて45号住・35号住・48号住等が重複状態で群在する。ただ、東側は斜面地形が発達するためか、近接する住居跡は無く、51住までの10数mの距離が空白となる。

本住居跡も5軒の重複住居と捉えた。調査当初は114号住を中心とした2～3軒の重複と捉えていたが、その後、数地点で竈が検出され、対象範囲も広がったため、精査を重ね5軒の重複を捉えた。ただし、土層軸の設定の誤りのため、新旧関係は判然とせず、確定できない。冬季の調査であり、土層軸が霜柱等の影響で崩壊し、明瞭な新旧観察が果たし得なかった原因もある。反省点である。

以下順次各住居跡の概略を述べる。

## (111号住居跡)

本住居跡群の西端部にあたり、114号住居跡と113号住居跡の間で確認された。調査当初は、東側に重複する115号住居跡と同一の住居として進められた経緯がある。その後、113号～115号住に切られる別個の住居跡として位置付けられたが、竈等の施設は、各住居跡との重複のため、痕跡も見いだせず、床面と南西隅周辺壁の検出のみとなった。

そのため、平面形の確定は果たし得ず、全容は判然としませんが、南西隅の形状と北辺の状況から、比較的大型の方形を基準とする平面例と考えた。

床面は、東側へ緩やかな傾斜を見せるものの、ほぼ平坦面を築く。黄褐色ローム層を基盤とする地床で、硬面は確認できなかった。

深さは、遺存度の良好な西壁で約20cm程で、状態

は不良である。西壁は確認が容易であったが、北壁はやや緩やかな立ち上りを呈する。

床面上の施設は、明瞭ではないが、北東隅に不整形円状の土坑が確認されている。性格は不明である。

## (113号住居跡)

本住居跡群の北端にあたる。111号住・115号住と重複するが、111号住との新旧のみが確認できた。本住居跡が新しい。115号住との重複は、壁段差も少なく、土層軸も設定できなかったため、明瞭な新旧は確定し難いが、本住居跡の竈が、115号住北壁に重なる様相から、本住居跡が115号住を切る新旧関係を判断した。

平面形は、軸長3.4m程度の比較的整った正方形を呈す。北壁と南壁下端に緩やかな彎曲が見られるが意図的な彎曲と考えられよう。

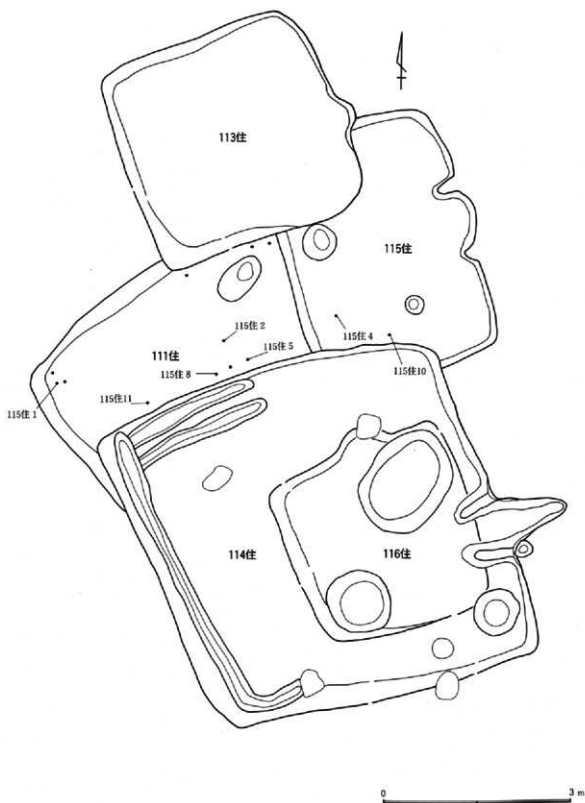
深さは、約35cmを測り、概ね良好な遺存状態を見せる。斜面地形の影響を受けた東壁と111号住・115号住と重複する南壁の立ち上がりは緩やかだが、北壁・西壁の掘り込みはしっかりしていた。

床面は、北東方向へ緩やかに傾斜するが、ほぼ平坦面が意識された構築である。黄褐色ローム層を基盤とする地床で、硬面は床面中央を中心に比較的広い範囲で確認された。

壁周溝・柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

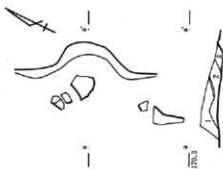
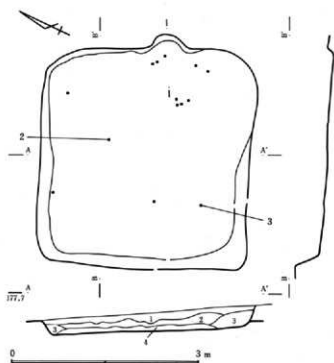
竈は、東壁や南寄りに設けられる。煙道部分が緩やかに壁外に突出し、浅い凹みを燃焼部奥に有す。袖等の構築材は確認できず、燃焼部と周辺に散乱する須恵器壳体部破片を補強材として可能性を求めるとのみである。

遺物も貧弱な出土量で、須恵器碗を3個体図示し得たに過ぎない。すべて覆土下層出土の破片であり、本住居跡の居住・廃絶に伴うものではない。流入と捉えた。



第241図 111・113・114・115・116号住居跡

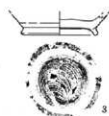
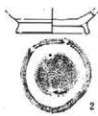
第5節 奈良・平安時代の住居跡



- 1 褐色土 やや砂質。ローム塊の塊状堆積  
 2 \* 均質。大型のローム塊の塊状堆積  
 3 暗褐色土 均質。微量のローム粒・炭化物を含む  
 4 + 小型のローム塊を多く含む

断面層

- 1 褐色土 ローム塊・焼土塊を含む  
 2 暗褐色土 焼土粒・炭化物を多く含む  
 3 \* ローム粒を少量含む



0 20cm

第242図 113号住居跡・出土遺物

第218表 113号住居跡計画表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竪方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cuv-29・30	正方形	345×343×35	N69°E	N67°E		坏1 埴2 金属器1	111・115 住

第219表 113号住居跡遺物観察表

国 器 種	法量 (cm)	残存率	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第242図 1 坏 図版 88	口：(11.0) 高：— 底：—	約1/4	①細 砂粒 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部下半に丸みを帯びる。右回転轆轤整形。
第242図 2 埴 図版 88	口：— 高：— 底：7.5	底部	①細 砂粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部丸みを帯びて緩やかに開く。高台は強く開く。内面見込み部はやや不明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線無で。
第242図 3 埴 図版 88	口：— 高：— 底：7.5	底部	①細 砂粒 ②酸化焰気味 ③純黄白色 ④須恵器	体部直線状に開く。高台はやや短く、強く開く。内面見込み部はやや不明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線無で。

(114号住居跡)

本住居跡群南側で検出された大型住居跡である。

111号住・115号住・116号住と重複し、111号住と116号住を切る新旧関係にある。特に116号住は、床面下の検出であり、明らかな新旧が確認し得た。尚、115号住との新旧は不明である。

軸長5.5m前後の大型の不整形正方形を平面形とする。各辺はほぼ直線状をなすが、隅位置がずれるため整然とした直角でない。また、南東隅とその周辺の壁が斜面地形と試掘坑の存在のため、やや判然としていないが、壁周溝と貯蔵穴の位置関係から、推定線を施した。

深さは、概ね約50cmを測る。西壁は約1m近い深さであり良好な遺存状態を誇るが、北東隅はやや残存状態が悪く、緩やかな立ち上がりを呈していた。

床面はほぼ平坦面を築く。僅かに北東側に緩やかな傾斜がみられるが、全体の平坦さを失う傾きではない。黄褐色ローム塊を主体とした貼床が全面になされる。硬化面も広い範囲で確認された。特に、中央部分-南側及び竈周辺が顕著だった。

壁周溝は、南壁際西端より西壁を経て北壁西半にまで及ぶ。特に北壁際は平行する複条の周溝で、本住居跡内で拡張が行われた可能性も想起されよう。やや浅く立ち上がりも緩やかである。

柱穴は、ピットとしては認められなかった。しかしながら、南壁際と中央やや北側に、良好な配置をもって大型の自然石が配されており、本住居跡は礎石を持つ住居として、特筆されよう。礎石は何れも床面上で検出され、上面に平坦面を向く例が3例ある。残り1例である北東側の礎石も凹凸は強くなく、4例とも整った面上に柱を置くこと想定できよう。礎石間の距離は、主軸方向である東西方向が約2.2-2.3mに対し、南北方向は約3.5-3.6mを測る。柱配列ではやや横長の規格といえよう。また、南壁際西側の礎石部分では、壁周溝が止まる。柱と周溝の機能に密接な関連を見いだせよう。尚、礎石下のピット等の掘り込みは、南壁際西側の礎石のみに床上調査で小ピットが検出されている。

貯蔵穴としては、南東隅に径70cm程の円形土坑が確認された。深さは、約30cm程で掘り込みもしっかりした明瞭な立ち上がりがあった。

竈は、東壁中央やや南寄りに設けられる。溝状の煙道部を強く壁外に突出する。煙道部端部は浅く、立ち上がりも緩やかで残存状態は良くない。

燃焼部は僅かな凹凸を持つが、煙道端部と同様の高さを見せる平坦であり、焼土・炭化物がまとまって堆積していた。焚口部幅に比してやや広めに設定されている。

袖は、両軸とも強く張り出すが、検出状態は低く、おそらく上位には粘質土等の補強が充てられたものと思われる。袖本体は、ローム塊を主体とした粘質土で補強されている。

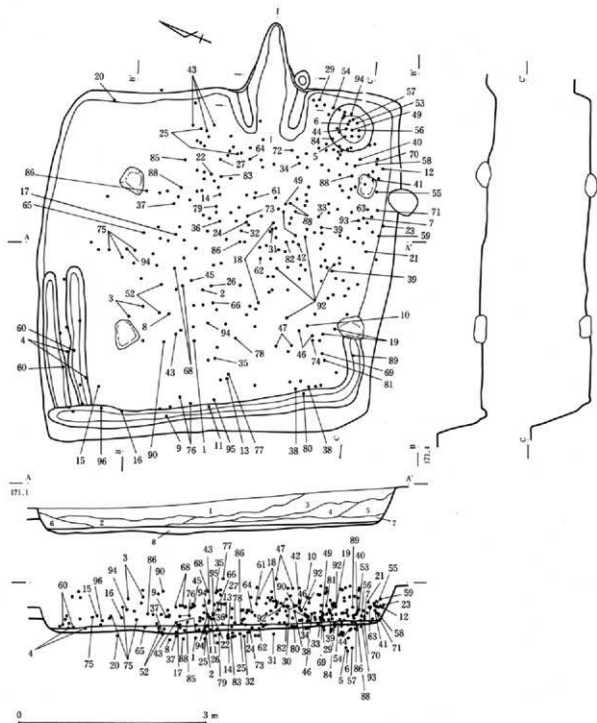
その他の構築材は検出されなかったが、使用面下の調査で、焚口部-燃焼部に不整形の土坑状凹みと小ピットが検出された。土坑状凹みは、構築時の所産と思われ、ピットはあるいは支脚取り付け穴の可能性もある。

床下遺構は、116号住との重複のため、該当する遺構の特定に苦慮した。本住居跡に帰属し得る床下遺構としては、中央西側の不整形円形の大型土坑・南西隅野円形土坑、北西隅の不整形土坑・南東隅の不整形土坑が挙げられる。中央西側の土坑は床下土坑として位置付けられるが、他の土坑は確定は困難である。南東隅と南西隅の土坑は、貯蔵穴の可能性も高い。壁周溝で考えた拡張住居としての可能性も加味しておきたい。

遺物は多量に出土した。覆土上層-床直に至るまで、夥しい量を得た。特に下層-床直は安定した量を誇り、平面的には南半に集中が見られる。

出土土器は、須恵器坏・埴輪に偏った器種組成を見た。土師器坏も併せて完形の出土が多く、良好な遺存状態を示す。また、土師器壺も量的な保証を保つ。住居跡廃絶時の一括廃棄と捉えた。

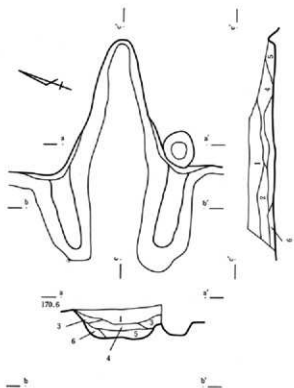
特筆すべき遺物として、須恵器特殊羽釜や不明土製品がある。土製品は、「柄」などの用途が想起されよう。



第243図 114号住居跡(1)

第220表 114号住居跡計測表

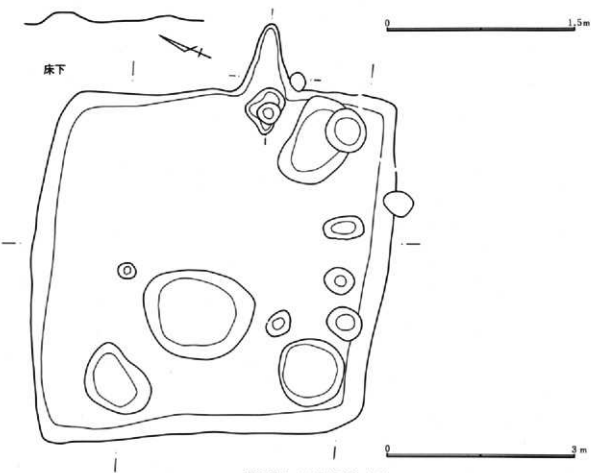
位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cuv-30-326	不整形正方形	565×554×50	N72°E	N73°E	貯蔵穴・壁周溝 床下土坑・礎石	灰35 埴16 葺2 瓦21 甕17 壺1 羽釜1 甕1 土器1 金属器1 他1	111・115・ 116住



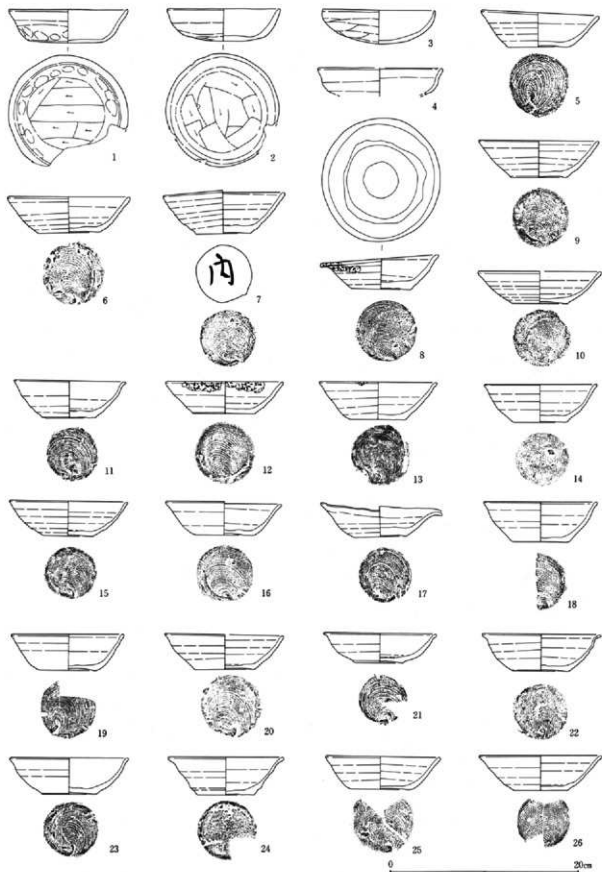
- 1 鈍褐色土 均質でやや砂質。ローム塊の斑状堆積
- 2 \* 明るい。ローム塊を多く含む
- 3 暗褐色土 均質。小型のローム塊を少量含む
- 4 黄褐色土 均質。包含物微量
- 5 暗褐色土 均質。包含物微量
- 6 黄褐色土 均質。小型のローム塊を主体とする
- 7 \* 均質。少量のローム塊・炭化物を含む
- 8 \* 大型のローム塊を主体とした粘床土

礫土層

- 1 褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物を含む
- 2 黒色土 大型の炭化物を主体とする
- 3 褐色土 小型の焼土化したローム塊を含む
- 4 黄褐色土 大型の焼土化したローム塊を含む
- 5 暗褐色土 焼土化したローム塊を多く含む
- 6 黒色土 黒色灰層。炭化物も大型

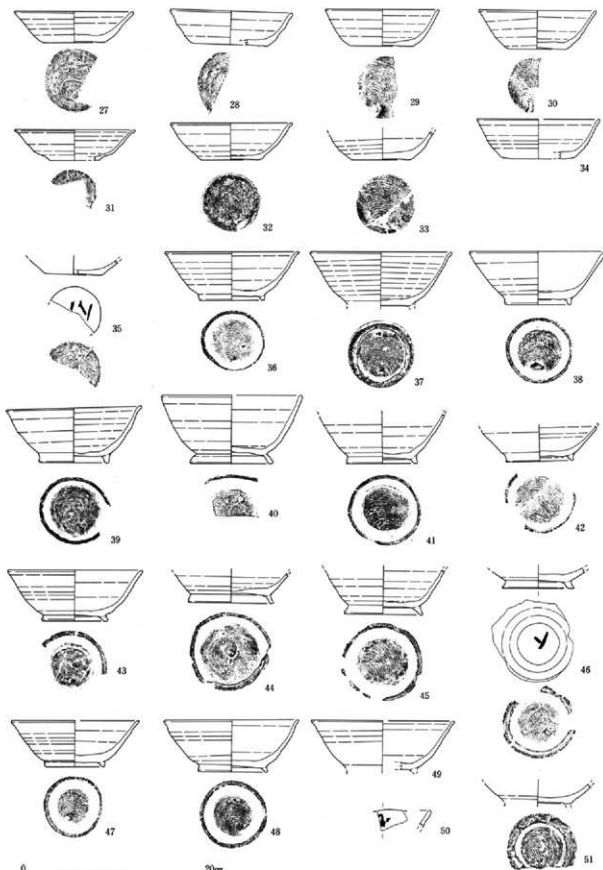


第244図 114号住居跡(2)



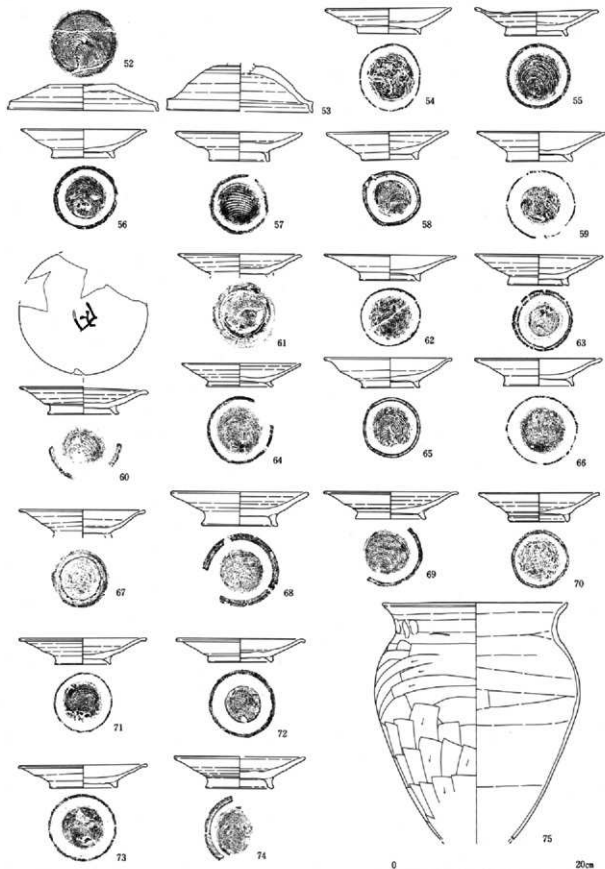
第245図 114号住居跡出土遺物(1)

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



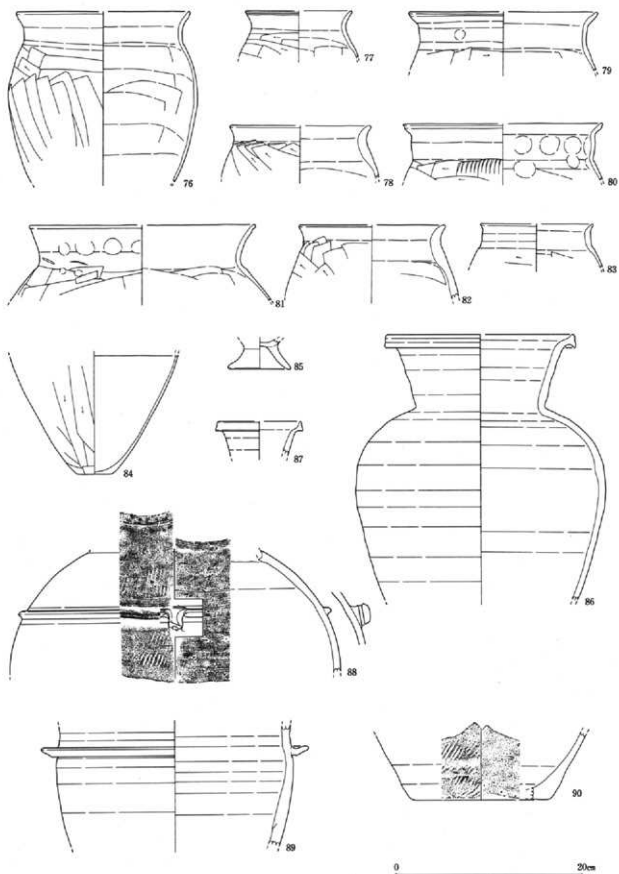
第246図 114号住居跡出土遺物(2)



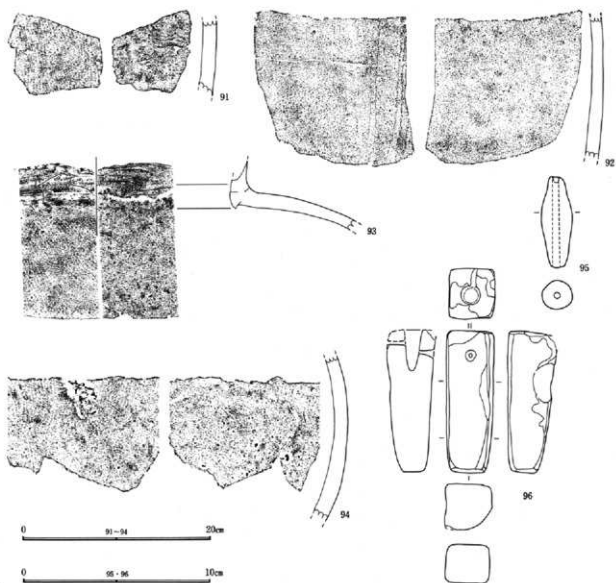


第247図 114号住居跡出土遺物(3)

第三章 検出された遺構と遺物



第248図 114号住居跡出土遺物(4)



第249図 114号住居跡出土遺物(5)

第三章 検出された遺構と遺物

第221表 114号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) 測定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第245図1 図版 88	口：12.6 高：3.6 底：8.2	約3/4 床直	①細砂粒 石英 ②酸化焰 ①橙色 ④土師器	口縁部僅かに内彎し口縁部外傾する。体部は扁平で丸みを帯び、底部平底。口縁部横撫で、体部弱い撫で指痕が残る。底部丸削り。内底面凹凸顕著。器厚薄手。
第245図2 図版 88	口：11.8 高：3.4 底：—	ほぼ完形 床直上	①細砂粒 白色粒 ②酸化焰 ①橙色 ④土師器	口縁部縦やかに外反し体部丸みを帯びる。底部は丸底。口縁部横撫で、体部弱い撫で、底部丸削り。口縁一部器厚やや厚手。内底面凹凸顕著。
第245図3 図版 88	口：11.8 高：3.6 底：—	約1/2 覆土	①細砂粒 石英 ②酸化焰 ①橙色 ④土師器	口縁部内傾気味に直立する。体部一底部丸みを帯び一体化し底部は丸底。口縁部横撫で、体部一底部丸削り。器厚薄手。
第245図4 図版 88	口：(13.0) 高：— 底：—	約1/5 床直	①細砂粒 白色粒 ②還元焰 ①鈍褐色 ④土師器	口縁部強く外反し体部丸みを帯びる。口縁部横撫で、体部弱い横撫で、底部は丸削りか。
第245図5 図版 88	口：12.2 高：3.7 底：6.0	完形 貯蔵穴	①細砂粒 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部縦やかな丸みを帯び開く。底部は若干上げ底。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。
第245図6 図版 88	口：12.7 高：3.8 底：6.5	完形 貯蔵穴	①細砂粒 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅横やかに外反し体部下手に丸みを帯びる。底部は若干上げ底。内面見込み部は明瞭。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。
第245図7 図版 88	口：12.7 高：5.6 底：5.9	完形 床直	①細砂粒 石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器 墨書土器	口縁部に歪みあり。口縁一内部内彎気味に一体化する。底部僅かに突出。内面見込み部は明瞭。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。底部に墨書。「内」か。
第245図8 図版 88	口：12.2 高：3.2 底：6.3	完形 床直	①細砂粒 ②還元焰 ③緑褐色 ④須恵器	歪みあり。口縁部外反し体部中位に丸みを帯びる。内面見込み部は明瞭。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。外面に塗片付着する。内底面に滑沢面を持ち、墨痕が付着する。転用説か。
第245図9 図版 89	口：12.6 高：3.9 底：5.6	完形 覆土下位	①細砂粒 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁一器部縦やかな内彎をもって一体化し、比較的強く開く体部形態。底部は僅かに上げ底。内面見込み部は横やか。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。
第245図10 図版 89	口：(12.9) 高：3.4 底：5.8	約1/3 覆土	①粗砂粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位に丸みを帯び、比較的強く開く。底部僅かに突出し上げ底を呈す。内面見込み部は横やか。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。
第245図11 図版 89	口：11.6 高：3.9 底：5.2	一部欠損 床直上	①細砂粒 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部丸みを帯びる。器高やや高い。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。底部器厚やや厚手。
第245図12 図版 89	口：12.4 高：3.6 底：6.4	完形 覆土	①粗砂粒 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁一器部直線状に一体化し強く開く。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部内外面に油煙厚く付着する。
第245図13 図版 89	口：12.2 高：4.0 底：5.8	完形 床直	①粗砂粒 白色粒 ②還元焰気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部直線状に開く。腰部に丸みを持つ。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部外面に僅かに油煙付着。
第245図14 図版 89	口：(11.8) 高：4.0 底：5.8	約1/2 床直上	①粗砂粒 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位に丸みを持つ。腰部の彎曲顕著。内面見込み部は明瞭。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。

## 第5節 奈良・平安時代の住居跡

図番号 器種	法量 (m) ( ) 測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第245図 四版	15 口：(12.4) 坯高：3.7 底：5.2	約2/3 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③黒灰色 ④須臾器	口縁一体部内彎気味に一体化し比較的強く開く。底部は突出し若干上げ底。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。器厚薄手。
第245図 四版	16 口：12.2 坯高：3.6 底：6.2	完形 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁部外反し体部下半に丸みを帯びる。底部は若干上げ底。内面見込み部は明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。
第245図 四版	17 口：12.4 坯高：3.9 底：5.6	約4/5 床直	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	器形著しく歪む。口縁部外反し体部下半に丸みを帯びる。底部若干上げ底。内面見込み部明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。
第245図 四版	18 口：(11.8) 坯高：4.2 底：6.0	約1/2 覆土	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し体部中位に丸みを帯びる。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。
第245図 四版	19 口：11.7 坯高：3.9 底：6.4	約3/4 覆土下位	①粗 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁一体部上半直線状に一体化し開く。体部下半は丸みを帯び、底部は上げ底を呈す。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。
第245図 四版	20 口：12.4 坯高：3.7 底：6.3	約1/3 床下	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③黒褐色 ④須臾器	口縁部外反し体部上半に丸みを帯び、比較的強く開く。底部は若干上げ底。内面見込み部は明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。
第245図 四版	21 口：11.8 坯高：3.1 底：5.0	ほぼ完形 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁部強く外反し体部丸みを帯び、下半で彎曲する。強く開く体部形態を呈し、底部は僅かに突出する。内面見込み部は不明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。
第245図 四版	22 口：(12.5) 坯高：3.9 底：5.5	約2/3 床直	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁部強く外反し体部丸みを帯びる。底部は若干上げ底。内面見込み部は明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。器厚薄手。
第245図 四版	23 口：(12.2) 坯高：3.8 底：5.4	約1/2 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④須臾器	口縁部外反し体部中位に丸みを帯びる。下半に若干彎曲を持たせ底部は僅かに突出する。内面見込み部はやや明瞭。底部は若干上げ底。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。
第245図 四版	24 口：(12.1) 坯高：4.0 底：6.0	約1/2 床直	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁一体部緩やかな外反気味に開く。底部は平底に近い。内面見込み部は比較的緩やか。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整あるいは僅か。口縁部器厚薄手。
第245図 四版	25 口：(11.8) 坯高：3.5 底：6.2	約1/2 床直	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁部僅かに肥厚する。体部緩やかな丸みを帯びる。内面見込み部はやや明瞭。底部は若干上げ底。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。
第245図 四版	26 口：(12.7) 坯高：3.7 底：5.6	約1/3 覆土下位	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し体部直線状に開く。腰部に若干彎曲を持たせる。内面見込み部は明瞭。左回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。
第246図 四版	27 口：12.4 坯高：3.3 底：6.1	約1/2 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し体部下半に丸みを帯び、強く開く。底部は僅かに上げ底。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。
第246図 四版	28 口：(13.0) 坯高：(3.6) 底：(7.6)	約1/2 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③黒色 ④須臾器	口縁一体部外反気味に開く。腰部に緩やかな丸みを持たせる。底径やや広い。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。
第246図 四版	29 口：(11.8) 坯高：3.8 底：6.7	約1/4 床直上	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁一体部緩やかな丸みをもって一体化する。底部は平底に近い。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。

第三章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第246図 30 図版 89	口：(12.2) 高：4.2 底：(6.0)	約1/2 覆土	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口縁部外反し体部下半に緩やかな丸みを帯びる。底部は若干上げ底。内面見込み部は明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部器厚薄手。
第246図 31 図版 89	口：(12.7) 高：(3.3) 底：(6.0)	約2/3 床直	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③黒褐色 ④須恵器	口縁部外反し体部下丸みを帯びる。腰部に外反気味の彎曲を持たせる。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。器厚やや薄手。
第246図 32 図版 89	口：(12.6) 高：3.9 底：5.8	約1/2 床直	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部丸みを帯び下半に僅かな彎曲を持たせる。底部は僅かに突出する。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。
第246図 33 図版 89	口：— 高：— 底：6.2	約1/2 床直上	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	体部中に丸みを帯びる。内面見込み部は比較的緩やか。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。底部器厚薄手。
第246図 34 図版 89	口：(12.8) 高：(4.2) 底：(6.0)	約1/3 床直上	①粗 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し、丸みを帯びる体部と一体化する。内面見込み部は明瞭。右回転軸線整形。口縁部器厚薄手。
第246図 35 図版 89	口：— 高：— 底：(6.0)	底部破片 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器 墨書土器	体部緩やかな丸みを帯び強く開く。底部僅かに上げ底か。内面見込み部は不明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。底部外面に墨書。判読不能。
第246図 36 図版 89	口：(14.2) 高：5.1 底：6.8	約1/2 覆土	①粗 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部中に丸みを帯びる。高台は短く直立する。内面見込み部は緩やか。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で。器厚薄手。
第246図 37 図版 89	口：14.8 高：— 底：—	高台部欠損 床直	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	器高やや高く、口縁部僅かに外反し体部緩やかに丸みを帯びる。丸みは下半に顕著。高台は割著。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で。口縁部器厚薄手。
第246図 38 図版 89	口：14.2 高：5.6 底：6.6	ほぼ定形 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口縁一体部緩やかな丸みを帯びて一体化する。高台は直立気味に付される。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で。口縁部器厚薄手。
第246図 39 図版 89	口：14.1 高：5.8 底：7.2	定形 覆土	①粗 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	器高やや高く、口縁部外反し体部緩やかな丸みを帯びる。高台はやや開く。内面見込み部は比較的明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で。器厚薄手。
第246図 40 図版 89	口：(14.6) 高：7.2 底：(8.5)	約1/4 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	器高高く、口縁一体部緩やかな丸みを帯び一体化する。体部下半で丸みを強く持たせ高台は強く開く。底部は上げ底。内面見込み部は明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線が強い。
第246図 41 図版 89	口：— 高：— 底：7.4	約1/2 覆土下位	①粗 砂粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部丸みを帯び高台やや短く開く。内面見込み部は明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で。
第246図 42 図版 89	口：— 高：— 底：7.0	約1/3 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	体部中に緩やかな丸みを帯び下半は直線状に開く。高台は外反気味に直立する。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で。
第246図 43 図版 89	口：(14.2) 高：5.4 底：6.8	約1/2 床直	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	器高やや高く、口縁部僅かに外反し体部中に緩やかな丸みを帯び、下半やや顕著。高台は開く。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で。
第246図 44 図版 89	口：— 高：— 底：8.5	約1/3 野蔵穴	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	体部下直線状に開く。高台は強く開く。内面見込み部は明瞭。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で。

第5節 奈良・平安時代の住居跡

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第246図 45 陶版	口：— 高：— 底：8.0	約1/3 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部緩やかな彎曲を帯び、腰部に丸みを帯びる。高台は外反気味に開く。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第246図 46 陶版	口：— 高：— 底：7.6	約1/4 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器 墨書土器	あるいは皿か、体部緩やかな丸みを帯び強く開く。高台は外反気味に開く。内面見込み部は不明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。外面に墨書。判読不能。
第246図 47 陶版	口：(13.2) 高：4.9 底：6.2	約1/4 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部上半は直線状、下半は丸みを帯びる。高台は短く直立する。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第246図 48 陶版	口：14.2 高：5.4 底：6.9	約3/4 覆土	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③黄灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部緩やかな丸みを帯びる。高台は短く開き気味に付される。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第246図 49 陶版	口：(15.0) 高：— 底：—	約1/3 覆土下位	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部緩やかな丸みを帯び下半で顕著。高台は割落。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第246図 50 陶版	口：— 高：— 底：—	口縁部破片 覆土	①細 砂粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器 墨書土器	あるいは坏口縁部か。轆轤整形。回転方向不詳。外面に墨書。判読不能。
第246図 51 陶版	口：— 高：2.7 底：—	底部破片 覆土	①細 砂粒 ②酸化焰気味 ③明褐色 ④須恵器	体部下半は丸みを帯びる。高台は割落する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時の周縁撫で強い。内面に油煙微量付着。
第247図 52 陶版	口：15.3 高：2.7 底：—	約5/6 床直	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③純黄色 ④須恵器	天井部やや低く、無横。体部は直線状に開き裾部僅かに彎曲する。かえり部はやや内傾する。右回転轆轤整形。天井部回転糸切り後無調整。
第247図 53 陶版	口：(15.4) 高：— 底：—	約1/3 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部高く、横附付。天井部一体部丸みを帯び裾部緩やかに彎曲する。かえり部は外反気味に直立する。右回転轆轤整形。天井部回転糸切り後横附付。横は割落する。
第247図 54 陶版	口：13.1 高：2.7 底：6.6	ほぼ完形 床直	①粗 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口縁一体部直線状に一体化し開く。高台は短く直立し肩部鋭い。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第247図 55 陶版	口：13.0 高：2.5 底：6.6	完形 覆土	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③暗灰色 ④須恵器	口縁部に歪みあり。口縁部強く外反し体部下半に丸みを帯びる。高台はやや長く開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第247図 56 陶版	口：13.0 高：3.0 底：6.6	完形 床直上	①粗 砂粒・石英 ②酸化焰気味 ③純黄褐色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位に丸みを帯びる。高台は開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第247図 57 陶版	口：13.0 高：3.1 底：6.1	約4/5 貯藏穴	①粗 砂礫・片岩粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁一体部緩やかな丸みを帯びて一体化する。体部器高やや浅い。高台はやや長く直立気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で強い。底部器厚手。
第247図 58 陶版	口：12.7 高：3.0 底：6.1	完形 床直上	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁一体部ほぼ直線状に一体化する。高台は直立する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第247図 59 陶版	口：13.4 高：3.1 底：6.8	ほぼ完形 覆土	①粗 砂礫・片岩粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁一体部外反気味に一体化する。高台は開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。

第三章 検出された遺構と遺物

図 器 番号 種	法量 (m) ( )推定値	残 存 率 出土 状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第247図 Ⅷ 90 Ⅸ 90 Ⅹ 90	口：13.0 皿 高：2.9 底：7.4	約4/5 床直	①粗 砂礫・片岩粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器 黒書土器	口縁部強く外反し体部緩やかな丸みを帯びる。高台はやや長く外反気味に開く。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁部で、内底面に繋ぎ。「内」か。
第247図 Ⅷ 90 Ⅸ 90	口：13.0 皿 高：— 底：—	高台部欠損 覆土	①粗 砂礫 ②還元焰 ③純褐色 ④須恵器	口唇部やや突出する。口縁-体部緩やかな丸みを帯び一体化する。高台は斜高する。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁部で。
第247図 Ⅷ 90 Ⅸ 90	口：13.8 皿 高：2.7 底：6.4	約2/3 床直	①粗 砂礫・片岩粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部直線状に強く開く。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁部で。器面摩滅著しい。
第247図 Ⅷ 90 Ⅸ 90	口：13.4 皿 高：3.2 底：6.4	定形 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰オリーブ 色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部緩やかな丸みを帯びる。高台は開く。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁部では底面に及ぶ。
第247図 Ⅷ 90 Ⅸ 90	口：(12.4) 皿 高：2.5 底：6.8	約1/3 覆土	①粗 砂礫・片岩粒 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	口縁-体部直線状に一体化し開く。体部器高浅い。高台は短く開く。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁部で。
第247図 Ⅷ 90 Ⅸ 90	口：13.3 皿 高：3.1 底：6.2	約3/4 床直	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部強く外反し突出気味。体部中に顕著な丸みを帯びる。高台は開く。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁部で。
第247図 Ⅷ 90 Ⅸ 90	口：13.9 皿 高：2.4 底：7.2	約2/3 覆土	①粗 砂礫・片岩粒 ②還元焰 ③灰オリーブ 色 ④須恵器	口縁-体部一体化し、体部中に僅かな丸みを帯びる。高台は開く。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁部では底面にまで及ぶ。器面摩滅。
第247図 Ⅷ 90 Ⅸ 90	口：13.2 皿 高：— 底：—	高台部欠損 約3/4 覆土	①粗 砂礫・片岩粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部強く外反し突出する。体部中に僅かな丸みを帯びる。高台は斜高。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁部では底面にまで及ぶ。口縁部器厚厚手。
第247図 Ⅷ 90 Ⅸ 90	口：(14.2) 皿 高：3.6 底：7.8	約1/2 覆土	①粗 砂礫・片岩粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁-体部緩やかな彎曲をもって一体化する。高台はやや長く開く。底部若干小窪。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁部で底面に及ぶ。器厚厚手。
第247図 Ⅷ 90 Ⅸ 90	口：14.0 皿 高：2.9 底：(7.4)	約2/3 床直上	①粗 砂礫・片岩粒 ②還元焰 ③黒色 ④須恵器	口縁部強く外反し突出する。体部中に僅かな丸みを帯びる。高台は短く。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁部で。
第247図 Ⅷ 90 Ⅸ 90	口：12.6 皿 高：3.1 底：6.0	約1/2 床直	①粗 砂礫・片岩粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部中に丸みを帯びる。高台は直立する。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁部で強く高台中位に沈線が通る。
第247図 Ⅷ 90 Ⅸ 90	口：(13.3) 皿 高：2.8 底：5.8	約3/4 床直上	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部強く外反し体部中に緩やかな丸みを帯びる。高台は外反気味に直立する。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁部で。
第247図 Ⅷ 90 Ⅸ 90	口：(13.2) 皿 高：2.5 底：6.7	約1/2 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③淡黄色 ④須恵器	口縁部強く外反し突出する。体部中に緩やかな丸みを帯びる。高台は短く開く。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁部で。蓋では体部に及ぶ。
第247図 Ⅷ 90 Ⅸ 90	口：(13.4) 皿 高：2.4 底：6.8	約1/2 床直	①粗 砂礫・片岩粒 ②還元焰 ③純黄色 ④須恵器	口縁部外反し体部中に丸みを帯びる。高台は短くやや開き気味に直立する。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁部で。
第247図 Ⅷ 90 Ⅸ 90	口：(13.8) 皿 高：3.4 底：(7.0)	約1/3 覆土	①粗 砂礫・片岩粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部-体部直線状に一体化し開く。高台はやや長く外反気味に開く。右回転轆轤整形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁部で。



## 第5節 奈良・平安時代の住居跡

図番号 器種	法量 (m) ( )部定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第247図 四版	75 要 高: - 底: -	口: 19.4 口縁部一 体部約3/4 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	コ字壺。口縁部上位外傾し下位は直立する。肩部は張り体部上半に影ら みを設ける。口縁部横撫で中位に指頭痕残る。体部上半は横位・下半は 縦位匱形。体部内面は横位匱撫で。コ字形状は内面に顕著。
第248図 四版	76 要 高: - 底: -	口: (18.1) 口縁部一 体部破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③純褐色 ④土師器	コ字壺。口唇部僅かに内彎。口縁部上位外傾し下位は直立する。肩部は張 り体部上半に影らみを設ける。口縁部横撫で強く頸部凹縁状。体部上半は 横位・下半は縦位匱形。体部内面は横位匱撫で。コ字形状は内面に顕著。
第248図 四版	77 要 高: - 底: -	口: (11.0) 口縁部破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	小型のコ字壺。口縁部外傾し頸部彎曲する。肩部の張りは高い。口縁部 横撫で。体部上半横位匱形。体部内面横位匱撫で。
第248図 四版	78 要 高: - 底: -	口: (14.6) 口縁部破片 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③純褐色 ④土師器	口縁部短く外傾する。頸部緩やかに彎曲し肩部の張りは弱い。口縁部横 撫で。体部上半斜位匱形。頸部に突出して目残る。体部内面横位匱撫で。
第248図 四版	79 要 高: - 底: -	口: 19.8 口縁部 約1/2 床直	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③赤褐色 ④土師器	コ字壺。口唇部沈線。口縁部上位短く外傾し下位は直立する。肩部の張 りは弱い。口縁部横撫で強く2条の凹縁状となす。中位に指頭痕。体部 上半横位匱形。体部内面横位匱撫で。
第248図 四版	80 要 高: - 底: -	口: (21.0) 口縁部破片 覆土下位	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	コ字壺。口唇部沈線。口縁部上位短く外傾し下位は内彎気味に直立する。 肩部の張りは弱い。口縁部横撫で。体部上半は横位匱形。ノッキング 残る。内面口縁部指頭痕。体部は横位匱撫で。
第248図 四版	81 要 高: - 底: -	口: 23.8 口縁部 約3/4 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口径広い。口縁部外傾し、頸部強く彎曲する。肩部の張りは強い。口縁 部横撫で、中位に指頭痕残る。体部横位・斜位匱形。体部内面横位匱 撫で。
第248図 四版	82 要 高: - 底: -	口: (15.0) 口縁部破片 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部短く外傾する。頸部緩やかに彎曲し肩部の張りは弱い。口縁部横 撫で。体部上半横位・斜位匱形。頸部に突出して目残る。体部内面横位 匱撫で。器厚平。
第248図 四版	83 要 高: - 底: -	口: (11.8) 口縁部破片 床直	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③赤褐色 ④土師器	遺存状態不良。コ字壺。口縁部上位短く外傾し下位は直立する。肩部の 張りはやや強い。口縁部横撫で強く2条の凹縁状となす。体部上半は横 位匱形。体部内面は横位匱撫で。
第248図 四版	84 要 高: - 底: (3.8)	口: - 底部破片 貯蔵穴	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③純褐色 ④土師器	体部中位に影らみを設ける。下半は緩やかな彎曲を以て開く。底径は小 径。体部下半は縦位匱形。内面は撫で。体部中位に輪積み痕。
第248図 四版	85 要 高: - 底: 6.4	口: - 底部一脚部 床直上	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	台付壺脚部。体部は彎曲を帯びて開く。接合部屈曲は強い。脚部は外反 気味に開く。脚部内外面とも丁寧な横位匱撫で。
第248図 四版	86 要 高: - 底: -	口: (20.0) 口縁部一 体部約1/2 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口唇部僅かに内傾し下部は鋭い。口縁部は緩やかに閉じ頸部は屈曲す る。肩部は張り体部上半に影らみを設ける。右回転輪積み痕。
第248図 四版	87 長頸壺 要 高: - 底: -	口: (8.8) 口縁部破片 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口唇部内傾し頸部直縁状に開く。輪積み痕。回転方向不詳。
第248図 四版	88 特殊羽釜 要 高: - 底: -	口: - 体部(背部) 破片 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	頸部緩やかに屈曲し、肩部強く張り球脚状を呈す体部形態。上半に背を 付し瘤状突起の上下に孔を穿つ。外面平行叩き整形後脚部付。貼付時横 撫で。内面横位匱撫でのため当て具不詳。
第248図 四版	89 甕? 要 高: - 底: -	口: - 体部破片 貯蔵穴	①粗 小礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反気味に直立し、体部緩やかな丸みを帯びる。肩はやや外傾気 味に水平に付される。輪積み痕。回転方向不詳。

第三章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第248図 90 要 91 図版	口: - 高: - 底: (14.0)	底部破片 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③黒褐色 ④須恵器	体部下半程かな彎曲をもって開く。外面平行叩き、内面横位・斜位撫で、当て具は不詳。
第249図 91 要 91 図版	口: - 高: - 底: -	体部破片 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	外面平行叩きを密に施す。内面は青濁波状の当て目。
第249図 92 要 91 図版	口: - 高: - 底: -	体部破片 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大槩。外面縦位・斜位撫で。内面撫で。
第249図 93 要 91 図版	口: - 高: - 底: -	底部破片 床直	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大槩。底部外反気味に直立し底部緩やかに屈曲する。体部外面平行叩き、内面撫でのため当て具不詳。
第249図 94 要 91 図版	口: - 高: - 底: -	体部破片 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大槩。内外面とも撫で。
第249図 95 土鋪 91 図版	長: 4.8 幅: 1.7 重: 11.84g	完形 覆土	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰 ③浅黄色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。中位が膨らみ両端が小径の紡錘状の形態。外面縦位撫で。
第249図 96 不明 91 図版	長: 7.6 幅: 2.6 重: 2.6g	一部欠損 覆土下位	①細 白色粒 ②還元焰 ③黒褐色 ④土製品 72.88g	直方体形状で上面・及び側面に小孔を設ける。下位はやや細身で中位に凹みを設けることから擧り具としての用途が想起される。柄であろうか。また上面孔徑は側面に比してやや大きく、差込み対象が擧り具と考えられる。

115号住居跡

北西隅を113号住、南西隅を114号住と重複して検出された。また南側は111号住と重なる。前述のように、111号住と同時に調査された住居で、111号住施設が本住居跡内に確認されなかったことから、本住居跡を新しく位置付けた。

平面形は、長軸を南北に設けた、約4.1×3.0m程の比較的整った横長方形を呈する。重複部分で判然としない箇所もあるが、各壁とも直線状で各隅に整って交わる。

深さは、約20cm程であり、特に北壁は立ち上がりも緩やかで、全体に遺存状態は不良である。

床面は、僅かに北側へ傾斜するが、ほぼ平坦面が意識される。黄褐色ローム層を基盤とする地床である。硬化面は竈突口部を中心に比較的狭い範囲で確認された。

壁周溝は検出されなかった。柱穴も良好な配置を呈するピットが見られないが、中央南寄りと西壁際

で検出されたピットに可能性を求めたい。

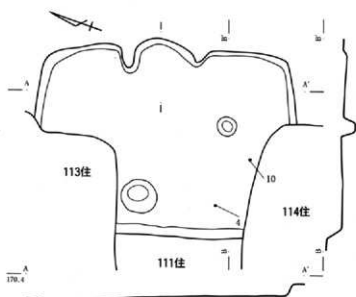
貯蔵穴も検出されなかった。東南隅等の壁彎曲も貯蔵穴を想起させる様相ではなく、本住居跡には貯蔵穴が存在しなかった可能性は高い。

竈は、東壁中央に設けられる。馬蹄状の煙道部～然焼部を僅かに壁外に突出するが顕著ではない。然焼部は若干凹み、少量の焼土粒が散布していた。

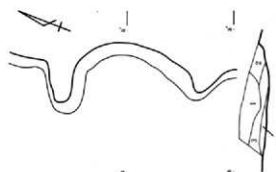
袖は、ローム層を基盤としていた。北側が強く張り出すが、南側は僅かに張り出しにとどまる。検出状態も低く、明瞭な張り出しではない。

遺物は、覆土下層出土のものが多く、前述のように、111号住との重複を誤認しており、遺物の取り上げ番号も、誤認が伴っている。ここに挙げた遺物は111号住出土遺物の可能性も併せ持ち、本住居跡に帰属し得る遺物ではない。また、出土状態も、全体に散漫な状態であり、111号住と併せても、住居跡埋没時の流入として捉えられよう。

第5節 奈良・平安時代の住居跡

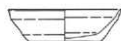


0 3m



0 1.5m

- 1 暗褐色土 少量のローム粒・炭化物を含む  
 2 \* 少量の炭化物を含む  
 3 褐色土 小型の焼土塊を含む  
 4 \* 焼土粒・炭化物を含む



1



2



3



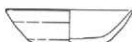
4



5



6



7



8

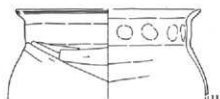


10



9

0 20cm



11

第250図 115号住居跡・出土遺物

### 第三章 検出された遺構と遺物

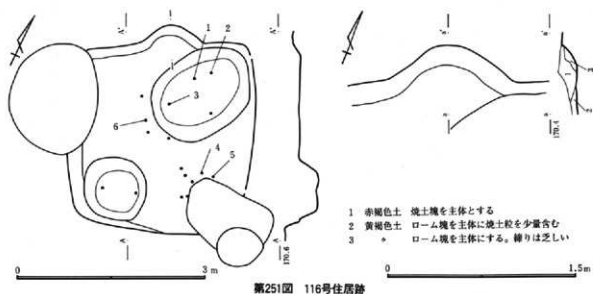
第222表 115号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	扉方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cuv-29・30	隅丸長方形	415×298×23	N70°E	N61°E		坏7 皿1 壺3	111-113-114住

第223表 115号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴(形態・手法等)
第250図 92	口：(11.8) 坏高：3.4 底：7.4	約1/2 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口唇部尖る。口縁部外反し体部緩やかな外反を帯びて開く。腹部僅かな丸みを帯びる。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。
第250図 92	口：(12.4) 坏高：3.9 底：7.0	約1/3 覆土	①細 砂粒 ②還元焰 ③残黄色 ④須恵器	口唇部尖る。口縁一体部緩やかな丸みを帯びて一体化し開く。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。
第250図 92	口：12.2 坏高：3.8 底：5.6	約1/2 覆土下位	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口唇部丸みを帯び口縁部下僅かに外反する。体部中位に緩やかな丸みを帯び底部僅かに突出し上げ底を呈す。内面見込み部はやや不明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。
第250図 92	口：(12.5) 坏高：3.8 底：5.0	約1/2 覆土下位	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部強く外反し体部中位に丸みを帯びる。内面見込み部はやや明瞭。左回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。体部下位の軸彎目強い。
第250図 92	口：12.6 坏高：3.7 底：6.6	約2/3 覆土下位	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口縁一体部上半直線状に一体化し開く。体部下半一腰部緩やかな外反を呈す。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。
第250図 92	口：12.5 坏高：4.2 底：6.9	約3/4 覆土下位	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁一体部歪み著しい。口縁部歪みのための内彎気味。体部中位に丸みを帯びる。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。
第250図 92	口：13.5 坏高：3.7 底：7.0	約3/4 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③純黄色 ④須恵器	口縁一体部緩やかな丸みを帯びて一体化し腰部僅かに外反する。底部は若干上げ底。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。内外器面割傷。
第250図 92	口：(13.6) 皿高：(2.7) 底：(6.8)	約1/4 覆土	①粗 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部強く外反し突出気味。体部は丸みを帯び高台に直立する。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後高台陪付。貼付時周縁微で。
第250図 92	口：- 要高：- 底：-	頸部破片 覆土	①粗 砂粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	頸部直立する。頸部強く彎曲し肩部の張りも強い。頸部横彎整形。体部外面平行引き後丁寧な無で。内面青海波状当て目。
第250図 92	口：20.0 要高：- 底：-	口縁部 約2/3 覆土下位	①細 黑色粒・白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	コ字壺。口唇部直立し比高が高。口縁部上位は外傾、下位は内彎気味に直立する。肩部の張りはやや弱い。口縁部横彎で強く、頸部で四線状となす。体部上半は横位寛削り、体部内面は横位寛削り。
第250図 92	口：(19.4) 要高：- 底：-	口縁部破片 覆土	①粗 砂粒・片岩粒 ②還元焰 ③純褐色 ④土師器	コ字壺。口唇部浅い沈線が高。口縁部上位外傾、下位は直立する。肩部の張りはやや強く体部上半に膨らみを設ける。口縁部横彎で、体部上半横位・斜位寛削り。口縁部内面頸部頭に残る。体部内面横位寛削り。

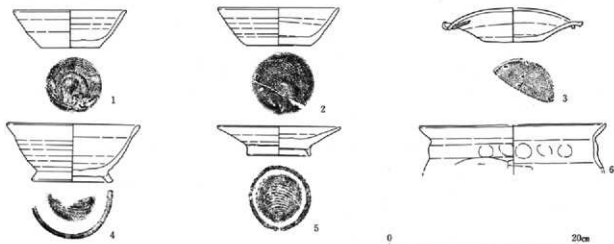
第5節 奈良・平安時代の住居跡



第251図 116号住居跡

第224表 116号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cuv-30・31	不整形	300×—×12	N18°E	N22°E		坏3 碗1 皿1 壺1	114住



第252図 116号住居跡出土遺物

116号住居跡

114号住床下で検出された小型の住居跡である。床下の検出のため、本住居跡を古く捉えたが、114住礎石が本住居跡の上に乗る位置関係からも、新旧関係は保証されるものと考えられる。

本住居跡の検出は、114号住床下精査時に焼土の分布を見たためである。当初は炉等の114住内施設

の可能性を考えたが、本住居跡南壁及び北壁の立ち上がりが確認され、方形の平面形が把握されるに至り、新たな住居跡として認定した。ただし、焼土の分布が住居平面位置において、北側にあたり、北竈を設ける住居跡として、数少ない例を加えた。

平面形は、軸長3.0m程度の小型の不整形方形を呈する。東壁は判然としませんが、北東隅の彎曲から

### 第三章 検出された遺構と遺物

第225表 116号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②構成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第252図 1 杯 図版 92	口：12.0 高：4.0 底：6.0	約1/2 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口唇部失る。口縁一体部外反気味に一体化し開く。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。底部器厚やや厚手。
第252図 2 杯 図版 92	口：12.8 高：4.0 底：6.6	約2/3 覆土	①細 砂粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口唇部失る。口縁一体部僅かな丸みを帯びて一体化する。胴部に若干丸み。内面見込み部は明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第252図 3 杯 図版 92	口：(14.8) 高：3.6 底：(6.5)	約1/3 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁～体部著しく歪む。蓋片の付着もあり付器としての用途は考え難い。口縁部外反し体部直線状に強く開く。内面見込み部は緩やか。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第252図 4 塊 図版 92	口：(13.8) 高：6.1 底：(8.0)	約1/2 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③オリーブ黒色 ④須恵器	口唇部若干肥厚する。口縁部外反し体部下半に丸みを帯びる。器高やや高い。高台は開く。内面見込み部はやや明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第252図 5 皿 図版 92	口：(12.9) 高：3.1 底：6.5	約2/3 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁～体部直線状に一体化し開く。高台はやや長く直立気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。底部器厚やや厚手。
第252図 6 甕 図版 92	口：(19.4) 高：— 底：—	口縁部破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍赤褐色 ④土師器	コ字甕。口縁部上位丸みを帯びて外傾、下位は僅かに内傾気味に直立する。肩部の張りは弱い。口縁部横撫で強く、上位と下位で凹線状となす。体部上半は横位寛開り。体部内面は横位寛撫で。口縁部内外面指滑痕のこる。

推定線を施した。

深さは、約10cm程度で、浅く、各壁の立ち上がりにも乏しい遺存状態不良の住居である。

床面は、僅かな凹凸がみられたが、ほぼ平坦面を築く。黄褐色ローム層を基盤とする地床である。硬化面は、顕著ではなく、中央部分に狭い範囲で確認された。

壁周溝・柱穴・貯蔵穴は特定できなかった。

竈は、北壁やや東寄りに設けられる。浅い掘り込みのため判然としないが、煙道部を壁外に弱く突出し、燃焼部に浅い凹みを持つ。袖等の構築材は確認されず、ローム塊の焼土化したまとまりが、燃焼部上位に確認されたに過ぎない。

床下遺構は、確認されていないが、北東隅の大型の不整楕円状土坑と南西隅の不整円形土坑が床下土坑に相当する可能性がある。

遺物は、少量が出土し6個体を図示した。覆土中の出土であり、平面的にもまとまりを持たない。廃絶時あるいは廃絶後の流入と捉えた。

## 117号住居跡

調査区南東部の北東側への急斜面地形に占地する。周辺の東側への勾配はきつく、冬季調査に際しても苦慮を要した箇所でもある。尚、本住居跡東側より比較的緩やかな傾斜となり、谷地形の発達が見られる。そのため、本住居跡の基盤は暗褐色ローム質土である。

本住居跡は、南壁を118号住居跡と重複する。新旧関係としては、本住居跡が118号住居跡を切る土層観察を得ている。周辺の近接する住居跡としては、南東約3.0mに119号住居跡が、西側には123号住居跡、北側約7.0m程に130号住居跡が位置する。比較的住居跡密度は高い。C区南東部住居跡群と呼称したい。尚、この住居跡群の南限は、調査区域外に延びるが、比較的斜面地形が緩やかなため、住居跡の存在は充分予想されよう。

平面形は、整った縦長の大型長方形を呈する。主軸を東西に持ち、規模は約5.9×4.8mを測る。各壁とも直線状をなし、各隅の対応関係も整然としている。

深さは、約50cmを測り、良好な遺存状態を誇る。ただし、東壁は斜面地形のため浅く立ち上がりも緩やかである。その他の壁は良好な掘り込みである。

床面は、僅かな凹凸を持ち極緩やかに東側へ傾斜するが、ほぼ平坦面が意識された面が広がる。暗褐色粘質土塊を主体とした貼床が全面になされ、硬化面は床面中央を中心に竈口部及び貯蔵穴周辺に顕著だった。

壁周溝は、南壁中位より西壁と北壁を経て東壁北端に伸びる。北東隅で一旦途切れが見られる。また、北壁周溝底面に6基の小ピットを確認した。杭材等の痕跡であろうか。

柱穴は良好な配置を見せるピットを見ない。南壁際西側に壁周溝に重なるピットを得たが、確証性に乏しい。床下調査では、このピットの東側に2基のピットが確認され、さらに北西隅及び北東隅に2基単位のピットを見る。これらを柱穴とする根拠は乏しいが、妥当性を帯びた配列として、柱穴としての

の可能性を探りたい。

貯蔵穴は、南東隅やや西寄りに楕円状の土坑を確認した。中位で段を有し、深さ約40cmを超えるしっかりした掘り込みである。

竈は東壁南寄りに設けられる。馬蹄状の煙道部・燃焼部を壁外に突出し、緩やかな凹みを燃焼部に持つ。袖石等の構築物・補強材は検出し得なかったが、竈口部南側に須恵器坏等のまとまった什器類の出土を見た。良好な出土である。

また燃焼部使用面下には、小ピットを確認した。支脚抜き穴として位置付けたい。

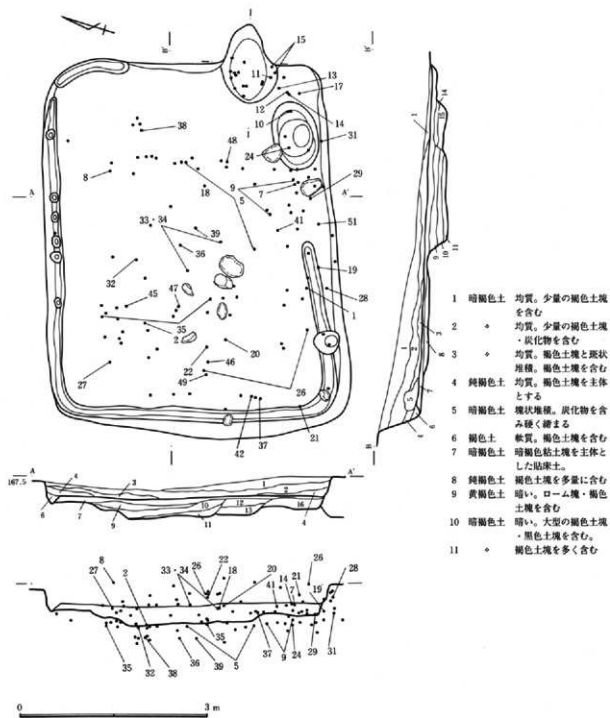
本住居跡は焼失住居である。床面直上に、少量ながら炭化材が出土した。特に北側の炭化材は、南北軸に沿った走行を見せ、南西隅にかかる炭化材は北東方向を向く。全体に住居跡中央を中心とした放射状の配列を想起させるが、上層構造の把握には至らないだろう。また、前述の柱穴の可能性あるピットにも対応しない。

床下遺構は、中央部分を中心に大型の不整形形土坑が重複状態で群在する。床下土坑としての位置付けが妥当だが、群在する要因は確定し難い。

遺物は、覆土上層より床下に至るまで濃密に出土した。前述の竈周辺のまとまった出土など、居住に伴う出土も見られ、一括性に富む遺物群と捉えた。37個体を図示したが、須恵器坏(19・20)のように歪みの著しい凝着した個体もあり、使用に堪えない例である。藤岡・吉井窯址群が南側山地に展開する地域とはいえ、未製品の住居内搬入時期は、居住時ではなく、廃絶時などに求められるのであろう。

尚、特筆する出土遺物として、豊富な鉄器類が挙げられる(336図)。馬具釦1点、鉄釘5点、木質部の遺存する刀子1点を図示した。

第三章 検出された遺構と遺物



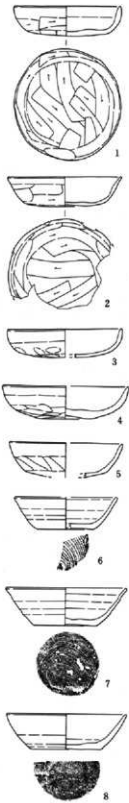
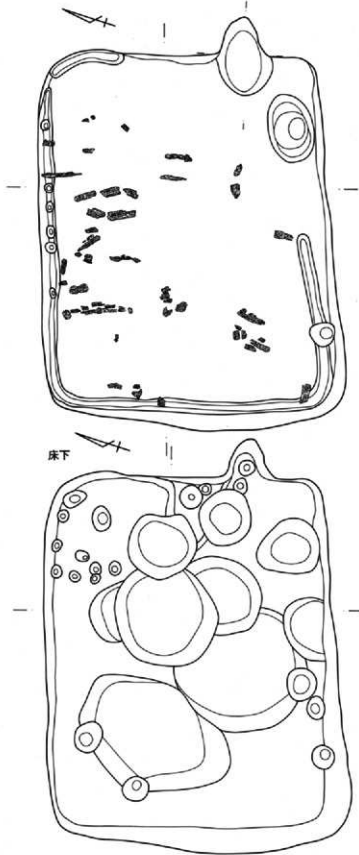
- 1 暗褐色土 均質、少量の褐色土塊を含む
- 2 + 均質、少量の褐色土塊・炭化物を含む
- 3 ◇ 均質、褐色土塊と斑状堆積、褐色土塊を含む
- 4 純褐色土 均質、褐色土塊を主体とする
- 5 暗褐色土 塊状堆積、炭化物を含み硬く締まる
- 6 褐色土 軟質、褐色土塊を含む
- 7 暗褐色土 暗褐色粘土塊を主体とした粘束土。
- 8 純褐色土 褐色土塊を多量に含む
- 9 黄褐色土 暗い、ローム塊・褐色土塊を含む
- 10 暗褐色土 暗い、大型の褐色土塊・黒色土塊を含む。
- 11 ◇ 褐色土塊を多く含む

第253図 117号住居跡(1)

第226表 117号住居跡計測表

位 置 (南東隅)	平 面 形	規 模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	藏 方 位	主 要 施 設	主 要 遺 物	重 複 遺 構
Cmn-34・35	長方形	592×476×48	N71°E	N71°E	貯蔵穴・壁周溝 床下土塊	坏18 陶6 蓋3 皿3 甕4 長圓形1 台付壺1 石1 瓦4 金属器8	118住



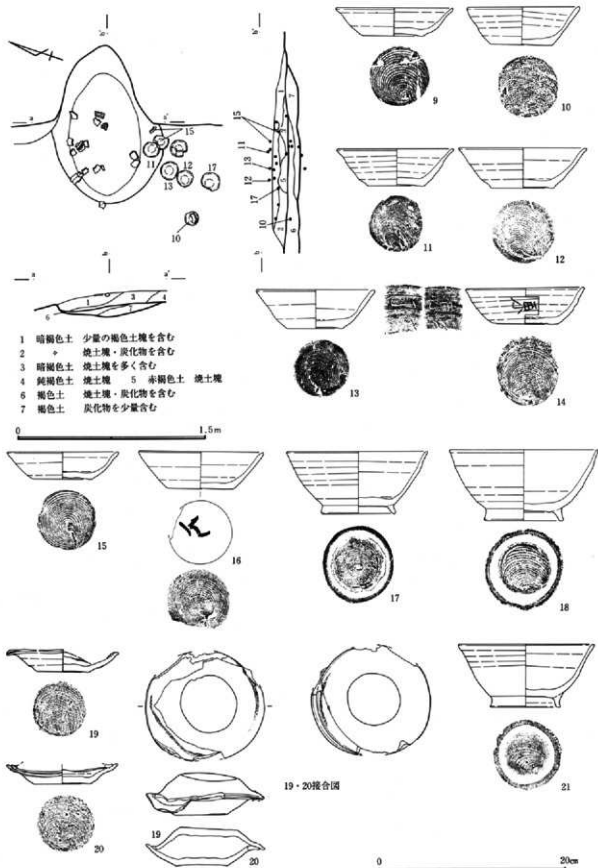


0 3 m

0 20 cm

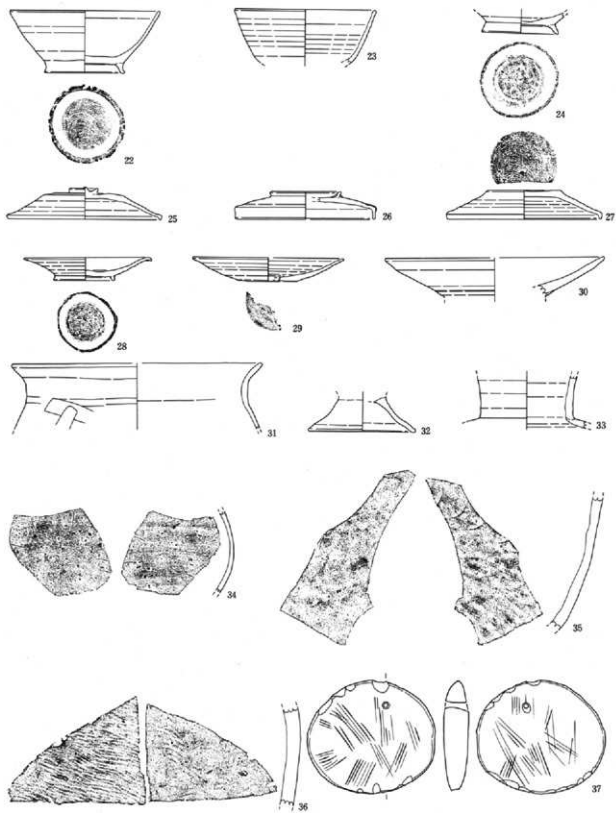
第254図 117号住居跡(2)・出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



第256図 117号住居跡(3)・出土遺物

第5節 奈良・平安時代の住居跡



第256図 117号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

第227表 117号住居跡遺物観察表

図番号 器 種	法量 (cm) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第254図 1 国版 92	口：11.2 高：3.2 底：8.4	完形 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	口縁部一部内彎気味に一体化する。底部平底。口縁部横撫で後体部一部底削り。内底面の凹凸顯著。
第254図 2 国版 92	口：12.0 高：3.1 底：8.0	約1/2 床下	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③鈍赤褐色 ④土師器	口縁部外反し体部中に丸みを帯びる。底部は平底。口縁部横撫で、体部横位削り後上半弱い撫でを加える。底部削り。内底面の凹凸顯著。
第254図 3 国版 92	口：(12.0) 高：— 底：—	約1/2 床下埋土	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③鈍褐色 ④土師器	口唇部僅かに尖る。口縁一部内彎気味に一体化する。底部丸底。口縁部横撫で、体部弱い撫で指頭直残る。底部削り。内底面は比較的平滑。
第254図 4 国版 92	口：(13.2) 高：3.6 底：—	約1/4 床下埋土	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰 ③明黄褐色 ④土師器	口唇部尖る。口唇やや広い。口縁一部内彎気味に一体化する。底部は上げ底で不安定。内底面凹凸顯著。口縁部横撫で、体部横位削り後弱い撫で、底部削り。器厚手。
第254図 5 国版 92	口：(11.8) 高：— 底：—	約1/3 床下埋土	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	口唇部尖る。口縁部外傾し体部境に僅かな屈曲を持たせ体部は直線状に開く。底部境も屈曲し不安定な形態か。口縁部横撫で、体部斜位撫で、底部削り。
第254図 6 国版 92	口：(10.8) 高：(3.4) 底：(6.0)	約1/5 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口唇やや小径。口縁部僅かに外反し体部直線状に開く。腰部に丸みを帯びる。底部若干上げ底。内面見込み部は明瞭。右回転軸整形。底部回転糸切り後無調整。
第254図 7 国版 92	口：12.7 高：4.0 底：6.6	ほぼ定形 床直	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③鈍褐色 ④須恵器	口縁部外反し、体部僅かに外反して開く。底部は若干突出する。内面見込み部は明瞭。右回転軸整形。底部回転糸切り後無調整。
第254図 8 国版 92	口：(12.6) 高：3.7 底：7.2	約1/2 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口唇部やや尖り気味。口縁一部緩やかな丸みを帯びて開く。内面見込み部はやや顯著。右回転軸整形。底部切り難し技法不明。撫でを加える。
第255図 9 国版 92	口：12.4 高：3.0 底：6.4	ほぼ定形 床下埋土	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部強く外反し、体部器高浅く、中に緩やかな丸みを帯び直線状に開く。底部上げ底を呈す。内面見込み部は明瞭。右回転軸整形。底部回転糸切り後無調整。
第255図 10 国版 92	口：11.9 高：3.9 底：6.5	完形 床直	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに肥厚する。体部直線状に開き中位僅かに外反する。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸整形。底部回転糸切り後無調整。
第255図 11 国版 92	口：12.1 高：3.9 底：5.9	完形 床直	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外傾。体部緩やかな丸みを帯び強く開く。下半外反する。底部若干上げ底。内面見込み部は明瞭。右回転軸整形。底部回転糸切り後無調整。
第255図 12 国版 92	口：13.2 高：4.3 底：6.6	完形 床直	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰気味 ③淡黄色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部緩やかな丸みを帯び、下半外反し底部僅かに突出する。内面見込み部明瞭。右回転軸整形。底部回転糸切り後無調整。
第255図 13 国版 92	口：12.4 高：4.1 底：5.8	完形 床直	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰気味 ③淡黄色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部緩やかな丸みを持たせる。底部横撫でに上げ底を呈す。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸整形。底部回転糸切り後無調整。
第255図 14 国版 92	口：12.3 高：4.0 底：6.9	ほぼ定形 床直	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器 刷書土器	口縁部僅かに外反し体部丸みを帯びる。底縁やや広く安定感ある器形を呈す。内面見込み部右回転軸整形。外面及び内面に刺書。横位の刺字で外面「東」、内面「丁」か。

第5節 奈良・平安時代の住居跡

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第255図 四版 15 92	口：11.6 坯高：2.9 底：6.4	ほぼ完形 床直	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部縁やかな丸みを帯び、強く開く。内面見込み部は比較的緩やか。底部は若干上り底を呈す。右回転軸轆轤形。底部回転軸切り後無調整。
第255図 四版 16 92	口：(13.0) 坯高：3.9 底：6.8	約1/2 覆土	①粗 砂粒・石英 ②還元焰 ③黒褐色 ④須恵器	口縁一体部縁やかな丸みを帯び一体化する。内面見込み部は比較的緩やか。右回転軸轆轤形。底部回転軸切り後無調整。外底面に悪曹。割込不能。
第255図 四版 17 92	口：14.8 坯高：6.6 底：7.6	ほぼ完形 床直	①粗 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰黄褐色 ④須恵器	やや大型の碗。口縁部僅かに外反し体部中位に丸みを帯びる。高台はやや長く開く。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸轆轤形。底部回転軸切り後高台貼付。貼付時周縁縁で。
第255図 四版 18 92	口：(15.6) 坯高：7.5 底：8.0	約1/2 床直	①粗 砂粒・石英 ②還元焰 ③鈍褐色 ④須恵器	やや大型の碗。口縁部外反し体部中位に丸みを帯びる。高台はやや長く開く。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸轆轤形。底部回転軸切り後高台貼付。貼付時周縁縁で。
第255図 四版 19 93	口：11.8 坯高：2.4 底：5.5	一部欠損 床直	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③暗青灰色 ④須恵器	2個体とも口縁部外反し体部直線状に開き、右回転軸轆轤形。底部回転軸切り後無調整。口縁部を捉した重ね焼きによる焼成が顕著。赤みが著しく付着としての用途は想し得ない。
第255図 四版 20 93	口：11.8 坯高：2.1 底：5.9	約3/4 床直	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③暗青灰色 ④須恵器	
第255図 四版 21 93	口：(14.2) 坯高：6.7 底：7.3	約3/5 床直上	①粗 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	やや大型の碗。口縁部僅かに外反し体部下半に緩やかな丸みを帯びる。高台は外反気味に開く。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸轆轤形。底部回転軸切り後高台貼付。貼付時周縁縁で。撫では体部下半に及ぶ。
第256図 四版 22 93	口：(15.6) 坯高：6.6 底：8.3	約1/2 覆土	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁一体部僅かに丸みを帯び直線状に開く。高台は開き気味に付される。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸轆轤形。底部回転軸切り後高台貼付。貼付時周縁縁で。口縁部厚薄不均。
第256図 四版 23 93	口：14.9 坯高：— 底：—	約3/4 覆土	①粗 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部縁やかな丸みを帯びる。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸轆轤形。底部回転軸切り後高台貼付。高台貼付時周縁縁で。
第256図 四版 24 93	口：— 坯高：— 底：8.0	底部 貯蔵穴	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	高台はやや扁平で強く開く。右回転軸轆轤形。底部回転軸切り後高台貼付。貼付時周縁縁で。
第256図 四版 25 93	口：(16.0) 蓋高：3.4 蓋径：2.8	約3/5 覆土	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部は平坦で環状縁を付す。裾部縁やかに彎曲する。かえり部は短く僅かに内傾する。右回転軸轆轤形。天井部回転軸切り後換貼付。
第256図 四版 26 93	口：(14.6) 蓋高：(2.9) 蓋径：(7.4)	約1/3 覆土	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	天井部は低く円環状縁を付す。裾部は直線状にかえり部は長く直立する。右回転軸轆轤形。天井部切り難し技法不明。換貼付後撫を加える。
第256図 四版 27 93	口：(16.0) 蓋高：3.1 天井：7.5	約1/2 床直	①粗 砂粒・石英 ②酸化焰気味 ③明褐色 ④須恵器	天井部は平坦で縁を付さない。裾部は外反気味にかえり部は短く内傾する。右回転軸轆轤形。天井部回転軸切り後無調整。
第256図 四版 28 93	口：13.2 皿高：2.4 底：6.2	約3/4 床直上	①粗 砂粒 ②酸化焰気味 ③褐色 ④須恵器	口縁部強く外反し体部直線状に開く。高台は短く開く。右回転軸轆轤形。底部回転軸切り後高台貼付。
第256図 四版 29 93	口：(16.0) 皿高：(2.5) 底：(6.0)	約1/4 床下埋土	①粗 砂粒 ②酸化焰気味 ③純黄褐色 ④須恵器	無台の皿。口縁部僅かに外反し体部下半に丸みを帯び強く開く。右回転軸轆轤形。底部回転軸切り後無調整。

第三章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第256図 30 皿 底：—	口：(23.0) 高：—	破片 覆土	①細 砂粒 ②酸化焰灰味 ③鈍褐色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部直線状に強く開く。下半に高台貼付時の肥厚部と推での痕跡が認められる。右回転軸線整形。器厚やや厚手。
第256図 31 羹 底：—	口：(26.5) 高：—	口縁部破片 床下埋土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	コ字羹。口縁部上位外傾し下位は直立する。肩部の張りは強い。口縁部横撫で強く下位で凹線状となす。体部上半は横位・縦位削り。体部内面横位角撫で。
第256図 32 台付羹 底：(10.3)	口：— 高：—	肩部約1/2 床下埋土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	台付羹脚部。裾部上位外反し下位は肥厚する。丁寧な横位撫でを施す。
第256図 33 長頸壺 底：—	口：— 高：—	頸部約1/4 床直	①細 砂粒・石英 ②還元焰 ③暗赤褐色 ④須恵器	頸部緩やかに開き肩部強く張る。回転軸線整形。回転方向不詳。
第256図 34 羹 底：—	口：— 高：—	体部破片 床直	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③黄灰色 ④須恵器	強く内彎する体部破片。内外面とも撫でを施す。
第256図 35 羹 底：—	口：— 高：—	体部破片 床下埋土	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大羹体部破片。外面叩き整形後撫で。内面撫で。環状当て目残る
第256図 36 羹 底：—	口：— 高：—	体部破片 床下埋土	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③黄灰色 ④須恵器	大羹体部破片。外面密な平行叩き。内面青海波状当て目残る。
第256図 37 磨石 底：—	縦：12.1 横：13.7 厚：2.6	完形 床直	東支武岩 779.8g	扁平な円礫を素材とし上位に孔を穿つ。外縁に微細な調整を施し円形を保つ。表裏面とも不定方向の擦痕が着取される。

118号住居跡

前述の、117号住居跡で重複して検出された住居跡である。

調査区南東部の北東側への急斜面地形に位置する。周辺の東側への勾配は強いが、東側の谷地形に至ると比較的緩やかな傾斜となる。本住居跡の基盤も暗褐色ローム質土である。

本住居跡は、北壁を117号住居跡と重複する。新旧関係としては、本住居跡覆土が117号住居に切られる土層観察を得ている。周辺の近接する住居跡としては、南東に119号住居跡が、西側には123号住居跡、北側約11.0m程に130号住居跡が位置する。比較的住居跡密度は高く、C区南東部住居跡群の一隅をなす。

平面形は、117号住居跡のため判然としない部分

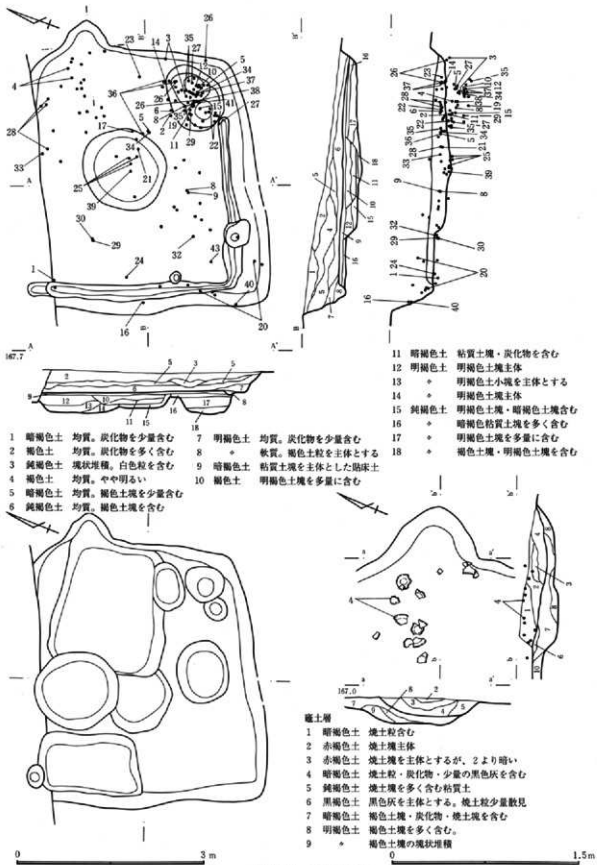
が多いが、主軸長約4.1mの不整形を呈すると思われる。東西軸長は、概ね3.7m前後と推定され、中型の規模の部類に入る。

深さは約50cmを測り、各壁の掘り込みもしっかりしていた。斜面地形の影響を受けた東壁も20cm程度の深さを保っており、重複を勘案しても、遺存度は良好といえよう。

床面は、東側に若干の傾斜が見られるものの、ほぼ平坦面が意識された構築である。暗褐色粘質土塊を主体とした貼床が全面になされてあり、硬化面は、床面中央～竈焚口部周辺に比較的広い範囲で確認された。

壁周溝は、南壁～西壁際で検出された。西壁部分の北端部は重複する117号住居床下でも確認された。

柱穴は、良好な配置ではないが、南壁際西寄り

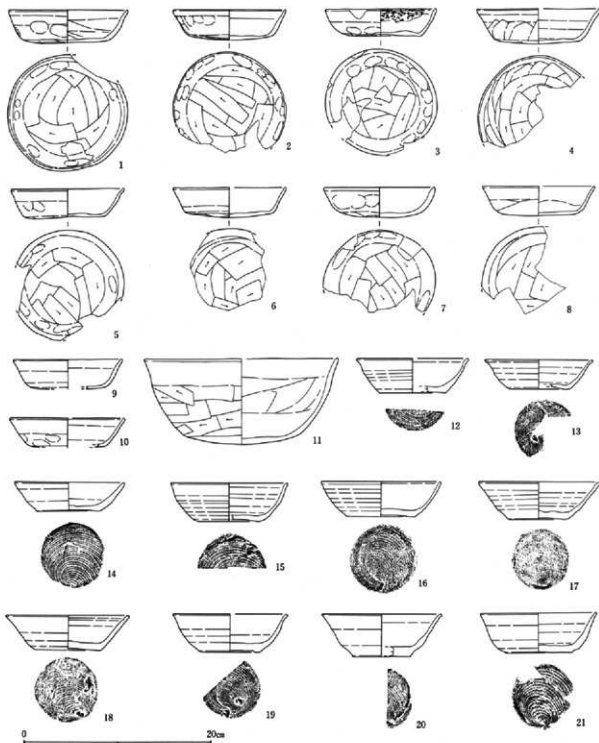


第257図 118号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物

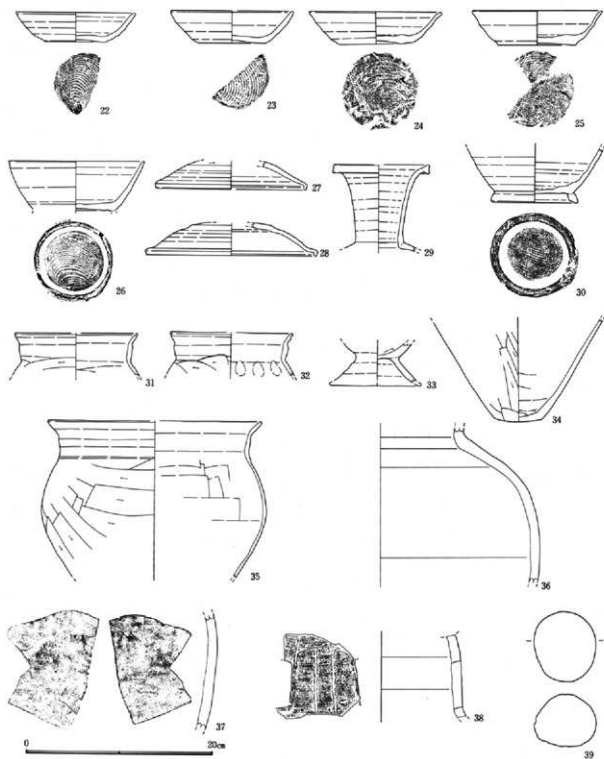
第228表 118号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cma-35・36	—	415×—×48	N69°E	N70°E	貯蔵穴・壁周溝 床下土坑	坏25 埴1 蓋2 長柄杓2 円 面鏡1 菱7 石1 瓦2 金属器2	117住 173坑



第258図 118号住居跡出土遺物(1)





第259図 118号住居跡出土遺物(2)

壁周溝と重なる小ピットを充てたい。尚、床下調査でも、数基の小ピットを得たが、確証的ではなく、柱穴とは断定し難い。

貯蔵穴としては、東南隅の不整楕円状の土坑が確

認されている。床面からの深さは約40cmを測り、掘り込みもしっかりしていた。覆土中～坑底面にまで土器の出土を見る。

竈は、東壁北寄りに設けられる。馬蹄状の燃焼部

第三章 検出された遺構と遺物

第229表 118号住居部遺物観察表

図 番 号	法 量 (cm) ( )推定値	残 存 率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第258図 1 環 図版 93	口：12.5 高：3.4 底：9.2	ほぼ定形 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焙 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部僅かに外反し体部緩やかな丸みを帯びる。底部はやや不安定な丸底。口縁部横撫で、体部弱い撫で指痕が残る。底部鋭削り。内底面の凹凸顕著。
第258図 2 環 図版 93	口：11.9 高：3.2 底：9.2	約3/4 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焙 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部強く内彎し、体部は外反気味に直線状に開く。底部は不安定な丸底。口縁部横撫で、体部弱い撫で指痕が残る。底部鋭削り。内底面の凹凸顕著。
第258図 3 環 図版 93	口：11.7 高：2.9 底：8.0	ほぼ定形 貯蔵穴	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焙 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部外傾、体部丸みを帯びる。底部は平底。口縁部横撫で、体部弱い撫で指痕が残る。底部鋭削り。内底面の凹凸顕著。
第258図 4 環 図版 94	口：(13.0) 高：3.7 底：9.0	約2/5 甕内	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焙 ③明赤褐色 ④土師器	口唇部内彎し口縁部は僅かに外反する。体部は強く開く。底部は不安定な丸底。口縁部横撫で、体部斜位鋭削り後撫でを加える。底部は鋭削り。内底面の凹凸顕著。
第258図 5 環 図版 94	口：12.0 高：3.0 底：8.8	約3/4 貯蔵穴	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焙 ③褐色 ④土師器	口唇部尖り、口縁部外反し体部緩やかな丸みを帯びる。底部は平底。口縁部横撫で強く体部増椋状をなす。体部は強い撫で指痕が残る。底部は鋭削り。内底面の凹凸顕著。器厚薄手。
第258図 6 環 図版 94	口：(11.8) 高：3.2 底：(9.1)	約1/3 床直	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焙 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部やや長く外反する。体部は扁平で底部と一体化し丸底を呈す。口縁部横撫で、底部鋭削り。内底面は平滑。
第258図 7 環 図版 94	口：11.8 高：3.2 底：—	約1/2 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焙 ③鈍褐色 ④土師器	口縁～体部内彎気味に一体化する。底部は丸底。口縁～体部横撫で指痕が残る。底部鋭削り。内底面の凹凸顕著。
第258図 8 環 図版 94	口：(11.8) 高：3.1 底：(8.0)	約1/4 床下埋土	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焙 ③褐色 ④土師器	口縁部比較的強く外反し体部丸みを帯びる。底部は不安定な平底。口縁部横撫で、体部弱い斜位指撫で。内面撫で不定方向。内底面の凹凸顕著。器厚薄手。
第258図 9 環 図版 94	口：11.4 高：(3.2) 底：(8.0)	約2/3 床下埋土	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焙 ③褐色 ④土師器	口縁部外反し体部緩やかな丸みを帯びる。底部は不安定な平底か。口縁部横撫で体部弱い撫で、底部は鋭削り。
第258図 10 環 図版 94	口：(12.0) 高：— 底：—	約1/3 貯蔵穴	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焙 ③ ④土師器	口縁部僅かに外反し体部とはは一体化し直線状に開く。口縁部横撫で、体部弱い撫で指痕が残る。
第258図 11 鉢 図版 94	口：(20.5) 高：9.0 底：—	約1/4 貯蔵穴	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焙 ③褐色 ④土師器	大型品。口縁部は強く外反し、体部器高高く丸みを帯び、丸底底部に至る。口縁部横撫で強く体部境に弱い稜状をなす。体部横位斜位鋭削り、底部鋭削り。体部内面横位撫で。
第258図 12 環 図版 94	口：(11.6) 高：(3.6) 底：(7.0)	約1/3 貯蔵穴	①細 砂粒・白色粒 ②還元焙 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口縁部強く外反し体部直線状に開く。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。
第258図 13 環 図版 94	口：11.2 高：3.1 底：5.9	約1/2 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焙 ③灰色 ④須恵器	口縁部強く外反し体部緩やかな丸みを帯びる。内面見込み部はやや明瞭。底部は上げ底。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。器厚薄手。
第258図 14 環 図版 94	口：11.6 高：3.1 底：6.7	ほぼ定形 床直	①粗 砂粒・片岩粒 ②還元焙 ③灰色 ④須恵器	口縁～体部上半僅かな丸みを帯びて一体化する。下半はやや外反気味に開く。底部若干上げ底。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。器厚やや厚手。

## 第5節 奈良・平安時代の住居跡

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第258図 図版 94	口：(12.4) 坯高：(4.1) 底：(6.4)	約1/2 貯蔵穴	①粗 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し、体部緩やかな丸みを帯びる。器高やや高い。内面見込み部は明瞭。底部は若干上げ底。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。器厚やや薄手。
第258図 図版 94	口：(12.4) 坯高：3.7 底：7.2	約1/2 壁際	①粗 砂粒・白色粒 ②酸化還元味 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口唇部尖る。口縁一体部丸みを帯び一体化して開く。腰部やや外反する。底部は若干上げ底。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。体部器厚薄手。
第258図 図版 94	口：12.7 坯高：4.0 底：6.2	完形 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③赤褐色 ④須恵器	口縁一体部直線状に一体化し強く開く。腰部僅かに外反する。底部は若干上げ底。内面見込み部は明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。体部器厚薄手。器壁割落。
第258図 図版 94	口：12.8 坯高：3.7 底：6.8	約3/4 覆土	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部緩やかな丸みを帯び強く開く。底部は上げ底。内面見込み部は明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。
第258図 図版 94	口：(11.8) 坯高：4.0 底：6.5	約1/3 貯蔵穴	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部やや強く外反し体部丸みを帯びる。底部は極僅かに突出し上げ底を呈す。内面見込み部は明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部器厚やや薄手。
第258図 図版 94	口：(12.6) 坯高：(4.5) 底：(6.0)	約1/3 床直上	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部中に丸みを帯びる。腰部外反し底部僅かに突出する。内面見込み部は明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。口縁部器厚やや薄手。
第258図 図版 94	口：(12.1) 坯高：4.2 底：6.6	約1/2 床下土坑	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部外反し体部下中に顕著な丸みを帯びる。安定感ある器形。底部は僅かに突出する。内面見込み部は明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。
第259図 図版 94	口：(12.6) 坯高：3.1 底：6.6	約1/3 貯蔵穴	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部一体部丸みを帯び一体化し比較的強く開く。底部は若干上げ底。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。
第259図 図版 94	口：(12.8) 坯高：3.4 底：7.0	約1/3 床下埋土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口縁部僅かに内彎し体部と直線状に一体化し比較的強く開く。底部は上げ底。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。
第259図 図版 94	口：13.9 坯高：3.4 底：8.0	約3/4 覆土	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し、体部緩やかな丸みを帯びる。底部は上げ底を呈す。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。
第259図 図版 94	口：(13.6) 坯高：3.6 底：8.2	約1/2 床下土坑	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部強く外反し、体部下中に丸みを帯びる。比較的彎曲が強く腰部は外反する。底部は若干上げ底。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後無調整。
第259図 図版 94	口：14.2 坯高：- 底：-	高台部欠損 貯蔵穴	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口唇部尖る。口縁一体部丸みを帯び一体化する。体部の開きは弱い。高台は割落。内面見込み部は明瞭。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁縁で。
第259図 図版 94	口：(15.8) 蓋高：- 筒高：-	約1/4 貯蔵穴	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部高く丸みを帯びる。腰部は外反気味に落ち、かえり部は短く内傾する。右回転軸彎整形。天井部回転丸削り。
第259図 図版 94	口：(17.9) 蓋高：- 筒高：-	約2/3 床直	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部高く丸みを帯び、体部の彎曲を経て腰部は外反する。かえり部は短く内傾する。右回転軸彎整形。天井部回転丸削り。
第259図 図版 94	口：10.0 長頸部高：- 底：-	口縁部一 頸部約3/4 貯蔵穴	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに内傾。頸部外反気味に弱く開く。肩部の張りは強い。右回転軸彎整形。器厚薄手。

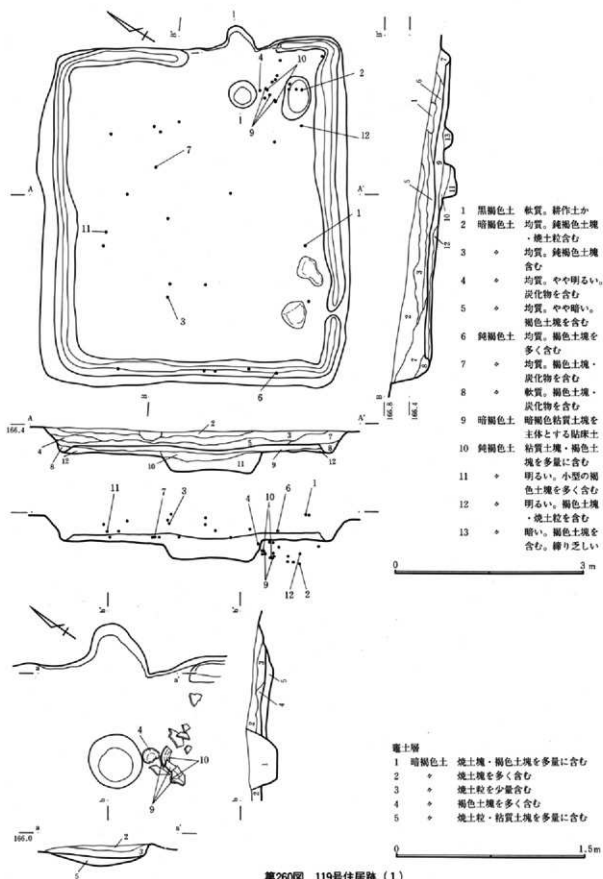
第3章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (cm) ( ) 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第259図 30 長頸壺 図版 94	口: - 高: - 底: 9.0	底部 床直	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰赤色 ④須恵器	体部下半は緩やかな丸みを帯び開く。高台は長く開き気味に付される。右回転軸整形。底部回転糸切り後高台貼付。
第259図 31 壺 図版 94	口: (12.8) 高: - 底: -	口縁部破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③明褐色 ④土師器	コ字壺。口唇部に細沈線走る。口縁部上位外傾し下位は直立する。肩部の張りはやや弱い。口縁部横撫で強く上位・下位で凹線状となす。体部上半は横位丸開り。体部内面横位丸撫で。
第259図 32 壺 図版 94	口: (12.8) 高: - 底: -	口縁部破片 床下埋土	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③鈍赤褐色 ④土師器	コ字壺。口唇部に細沈線走る。口縁部上位外傾し下位は直立する。肩部の張りはやや強い。口縁部横撫で強く上位・下位で凹線状となす。体部上半は弧状横位丸開り。体部内面は撫で、指頭痕残る。
第259図 33 台付壺 図版 94	口: - 高: - 底: -	底部一 脚部約2/3 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③鈍褐色 ④土師器	台付き臺脚部。体部下半は内彎穴状に立ち上がる。脚部は比較的真直状に開く。脚部は横位横撫でを丁寧に施す。
第259図 34 壺 図版 94	口: - 高: - 底: (4.9)	体部一底部 破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③灰褐色 ④土師器	体部下半直線状に開く。底部は小径で不安定。外面縦位丸開り、内面横位丸撫でを施す。
第259図 35 壺 図版 95	口: (22.4) 高: - 底: -	口縁部一 体部約破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③明赤褐色 ④土師器	コ字壺。口縁部上位短く外傾し下位は直立する。肩部の張りはやや強く体部中位に膨らみを設ける。口縁部横撫で強く上位・下位で凹線状となす。体部上半横位丸開り、下半縦位・斜位丸開り。体部内面横位丸撫で。
第259図 36 壺 図版 95	口: - 高: - 底: -	肩部破片 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	緩やかな屈曲を呈す頸部。肩部は強く張り、体部上半に膨らみを設ける。内外面撫でを施す。
第259図 37 壺 図版 95	口: - 高: - 底: -	体部破片 貯蔵穴	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	大壺体部破片。内外面入念な撫でを施す。
第259図 38 円面碗 図版 95	口: - 高: - 底: -	破片 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	遺存状態不良。脚部破片。緩やかな丸みを帯びて開く脚部。中位に方形の透かし孔を4～5単位間隔で設ける。透かし孔間は縦位細沈線が施される。
第259図 39 円罐 図版 95	縦: 7.4 横: 6.6 厚: 5.5	完形 床下土塊	二ツ舌軽石 126.35g	小型の自然石を素材とし、一部に摩滅痕跡が認められる。用途等不明。

一煙道部を壁外に突出し、燃焼部は緩やかな凹みを持つ。袖は、顕著ではなく明瞭に確認できなかった。壁の彎曲も弱く、袖石等の痕跡も見いだせなかった。

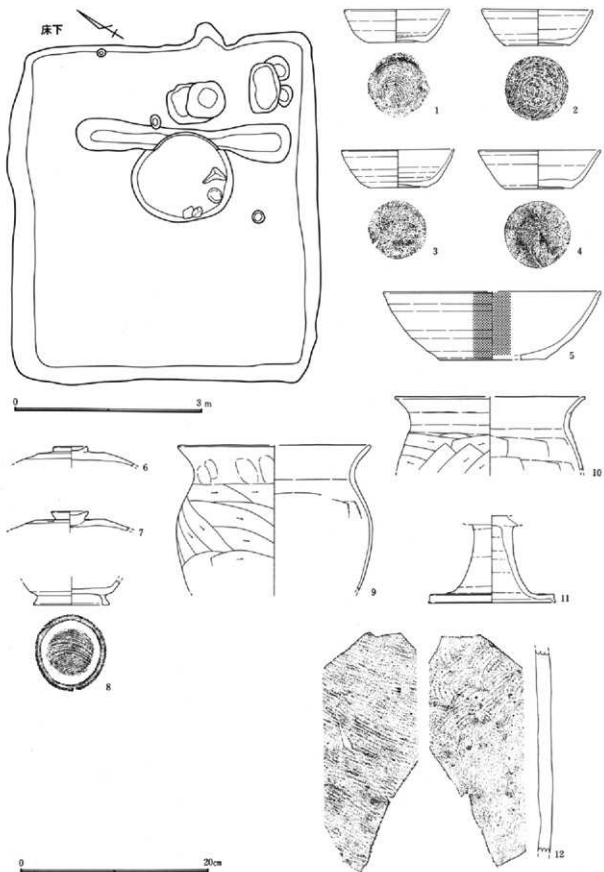
床下調査では、複数の土坑が重複状態で検出された。床面上でも確認された中央の円形土坑(257図上)を中心に南北に連なる円形土坑2基を床下土坑として位置付けたい。また竈突口部一中央部にかけて検出された大型不整形の土坑、西壁際北寄りの小型の方形土坑は性格が不明である。住居構築時の所産であろうか。

遺物は多量に出土した。前述の貯蔵穴内と周辺、竈突口部から北側、床面中央から南西にかけて数箇所の集中が見られた。層位的には覆土下層から床下にかけて満遍無く出土した。器種組成としては、土師器・須恵器類の良好な遺存状態が目立つ。また少量ながら土師器壺の出土も見られ、日常容器の傾向も看取される。破片資料ながら円面碗も出土した。出土状況、遺存度から住居廃絶時の良好な一括廃棄と把握できよう。



第260図 119号住居跡(1)

第三章 検出された遺構と遺物



第261図 119号住居跡(2)・出土遺物

## 第5節 奈良・平安時代の住居跡

第230表 119号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
CM1-35・36	長方形	553×491×47	N61°E	N53°E	貯蔵穴 壁周溝 床下土坑	坏4 埴1 蓋2 高坏1 鉢1 甕3	

第231表 119号住居跡遺物観察表

図番号 器種	量量(m) ( )鑑定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴(形態・手法等)
第261図1 坏 95 図版	口：(11.0) 高：3.5 底：6.0	約3/4 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁一体部縁やかな丸みを帯び一体化する。下手の丸み顕著。底部は若干上げ底。内面見込み部は明瞭。右回転軸調整。底部回転赤切り後無調整。
第261図2 坏 95 図版	口：11.8 高：3.8 底：6.8	完形 貯蔵穴	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁一体部僅かな丸みを帯びはば直線状に一体化する。下手の丸み顕著。底部は若干上げ底。内面見込み部はやや明瞭。右回転軸調整。底部回転赤切り後無調整。
第261図3 坏 95 図版	口：(11.7) 高：4.0 底：6.0	約3/4 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口唇部尖り気味。口縁一体部縁やかな丸みを帯び一体化する。下手の丸み顕著。底部は上げ底。内面見込み部は明瞭。右回転軸調整。底部回転赤切り後無調整。
第261図4 坏 95 図版	口：12.8 高：4.1 底：7.1	約3/4 床直	①細 砂粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁一体部はば直線状に一体化して固く。底部は若干上げ底を呈す。内面見込み部は明瞭。右回転軸調整。底部回転赤切り後無調整。
第261図5 鉢 95 図版	口：(24.0) 高：(7.3) 底：(11.0)	約1/8 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大型品。口縁部僅かに外反し体部縁やかな丸みを帯びる。下手に彎曲を持たせる。内面見込み部は緩やか。右回転軸調整。底部回転赤切り後無調整。
第261図6 蓋 95 図版	口：— 高：— 底：3.4	約1/2 床直上	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部平坦で円環状溝を付す。体部は直線状を呈す。右回転軸調整。天井部回転赤切り後無調整。器厚やや厚手。
第261図7 蓋 95 図版	口：— 高：— 底：3.7	約1/4 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部平坦で環状溝を付す。体部は直線状を呈す。右回転軸調整。天井部回転赤切り後無調整。
第261図8 埴 95 図版	口：— 高：— 底：(8.0)	約1/4 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	体部下手の丸み顕著。高台は開く。内面見込み部は明瞭。右回転軸調整。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁無調整。
第261図9 蓋 95 図版	口：(20.0) 高：— 底：—	口縁部一 部破片 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③明褐色 ④土師器	口縁部外傾し頭部縁やかな彎曲を呈す。肩部の張りはやや弱く体部上手に膨らみを設ける。口縁部横溝でやや弱く指頭痕を残す。体部上手横位、中位は横位・斜位。下位は横位調整。体部内面は横位調整。内面調整形状にコ字が顕著。
第261図10 蓋 95 図版	口：20.0 高：— 底：—	口縁部一 体部約1/2 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③赤褐色 ④土師器	口縁部上位強く外傾し下位反気味に直立する。肩部の張りは弱く体部上手に膨らみを設ける。口縁部横溝で強く頭部で凹溝状をなす。体部上手横位調整。中位は斜位調整。体部内面は横位調整。
第261図11 高坏 95 図版	口：— 高：— 底：13.2	脚部約4/5 床直上	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	脚部。体部下手は強く開く。脚部上位は外反気味に直立し、下位は強く開く。下腹部は直立する。右回転軸調整。体部接合部明瞭。
第261図12 蓋 95 図版	口：— 高：— 底：—	体部破片 床直	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③赤灰色 ④須恵器	外面密接な平行叩き。内面青海波状当て目著しく残る。

#### 119号住居跡

調査区南東部の北東側への急斜面地形に位置する。周辺の東側への勾配は強く、本住居跡北側には段差が見られる。また、東側の谷地形に至ると比較的緩やかな傾斜となり、基盤層も黒褐色土主体となる。本住居跡の基盤も暗褐色ローム質土である。

C区南東部住居跡群の東端にあたり、北西に117号住・118号住が近接する。尚、本住居跡南側は調査区域外ではあるが、比較的斜面地形も緩やかであり、住居群の延長は続くものと想定できる。

平面形は、整然とした縦長長方形を呈す。各壁は僅かな彎曲が見られるがほぼ直線状の走行を見せ、各隅の形状も整っている。規模は、約5.5×4.9mの大型の住居である。

深さは約50cmを測り、遺存度は概ね良好である。東壁も約20cm程の立ち上がりで確認され、他の壁もやや緩やかな立ち上がりながら、しっかりした掘り込みを呈す。

床面は、東側へ緩やかに傾斜するが、平坦面は意識されているようだ。暗褐色粘質土壌による貼床が全面になされる。硬化面は、床面中央を中心に広い範囲で確認され、中央部に顕著な面を確認した。

壁周溝は、東壁際を除きほぼ全周する。南壁西寄りに狭い範囲の途切れが見られるが、あるいは出入口部を暗示するのであろうか。

柱穴は確認されなかった。ただ南壁際で床直で出土した自然石2箇は、配置的にも良好であり、礎石としての位置付けも可能であろう。

貯蔵穴は、東南隅の小型不整形の土坑を充てたい。やや浅く立ち上がりも緩やかである。

竈は、東壁やや南寄りに設けられる。浅く残存状態は不良である。燃焼部～煙道部は壁外に突出し、燃焼部～焚口部は広く平坦である。袖は、南側で壁の彎曲が顕著だが、全体に明瞭な痕跡は見られなかった。尚、焚口部に開く小ピットは重複で本住居跡施設ではない。

床下遺構は、床面中央に大型円形の土坑が確認された。床下土坑とした。東に重なる溝状の落込みは、

他に例がなく、性格が不明である。

遺物は、散漫な出土状態を示す。竈～貯蔵穴周辺に少量ながら集中が見られる。層位的には覆土上層から床下にまで出土が見られる。流入あるいは廃絶時の廃棄と捉えたい。

#### 120号住居跡

調査区南東部の東側への急斜面地形に位置する。周辺の東側への勾配は強く、冬季の調査の際に困難を伴った箇所でもある。

周辺の遺構密度は比較的濃密で、北側には2号配石遺構が、西側から南側には1号配石とテラス状の段差が、北東には122号土坑と124号土坑が、東側にはやや距離を置いて125号・126号住居跡が近接する。1号配石とテラス状の段差は、本住居跡南側に重複する。新旧関係は不明である。

平面形は、約4.5×3.1mの横長の不整形長方形を呈する。特に北壁と北東隅の形状に整いを失うが、北東隅の不整形の彎曲は土坑等の重複の可能性もある。深さは、約30cm程だが全体に浅い印象が強い。各壁の立ち上がりは概ね良好である。

床面は、ほぼ平坦面を築き、黄褐色ローム塊を主体とする貼床がなされる。硬化面は特に顕著ではなかった。

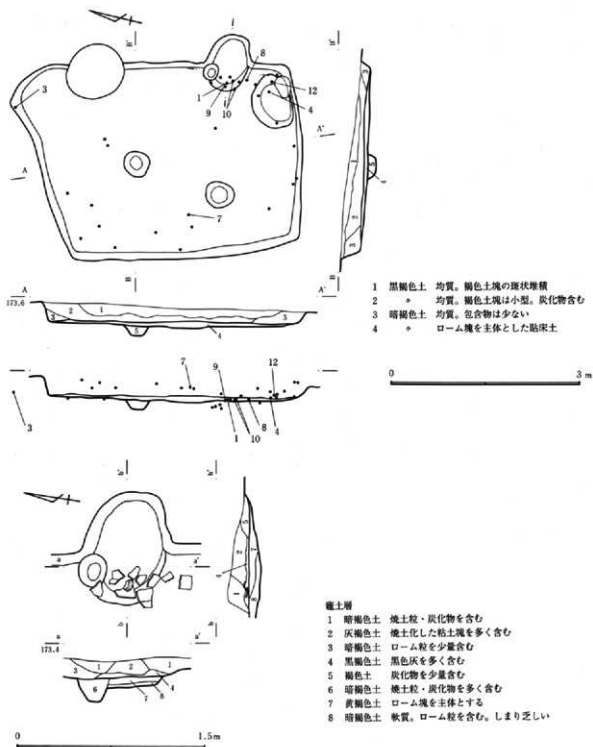
壁周溝は見られなかった。柱穴は中央やや西側に配される2基の小ピットを充てたい。

貯蔵穴としては、東南隅の不整形円状の土坑が確認された。浅く、掘り込みもやや弱い。

竈は、東壁南寄りに設けられる。馬蹄状の燃焼部～煙道部を壁外に突出し、燃焼部は緩やかな凹みを持つ。顕著な構架材の検出は果たせ得なかったが、北袖相当部に小ピットが確認され、抜取り穴としての位置付けも可能ではある。焚口部にかけて散乱する須恵器甕体部破片や羽釜は、補強材の一部と考えられる。共存する土師器甕を煮沸具として捉えた。

遺物は少量が出土したが、竈周辺の出土が主体を占める。居住に伴う遺物群と考えられよう。



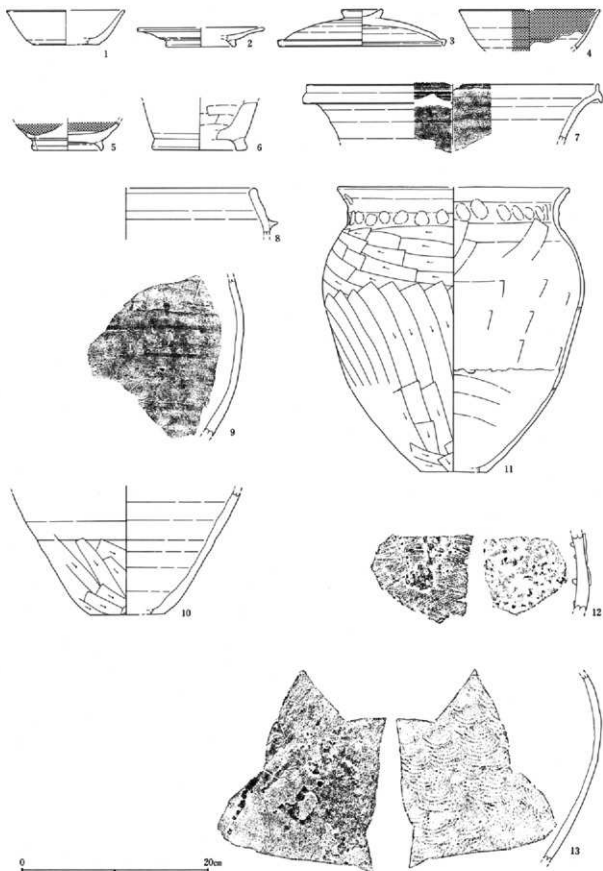


第262図 120号住居跡

第232表 120号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Ctu-38・39	不整形長方形	456×310×30	N72°E	N85°E	貯蔵穴	坏1 埴2 皿1 蓋1 壺1 甕4 羽釜3	122坑

第三章 検出された遺構と遺物



第263図 120号住居跡出土遺物

## 第5節 奈良・平安時代の住居跡

第233表 120号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (m) ( )推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第263図 1 坏 図版 95	口:(12.4) 高:(3.7) 底:(6.8)	約1/3 甕内	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部緩やかな丸みを帯びる。下手に若干彎曲を持たせる。内面見込み部はやや不明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切りか、器面薄著しい。
第263図 2 甕 図版 95	口:(13.0) 高:(2.0) 底:(7.0)	破片 覆土	①粗 砂礫・片岩粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口唇部肥厚し玉縁状をなす。体部は短く下半に丸みを帯びる。高台は若干開き気味。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁縁撫で。
第263図 3 甕 図版 95	口:(17.4) 高: 3.9 底: 4.2	約1/2 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	環状溝を付し、天井部一体部丸みを帯び一体化する。裾部は突出しかえり部は若干内傾する。右回転轆轤整形。天井部回転糸削り後縁貼付。
第263図 4 甕 図版 95	口:(14.8) 高: - 底: -	約1/4 野藏穴	①緻密 ②還元焰 ③灰白色 ④灰釉陶器	口縁部緩やかに外反し体部下半に丸みを帯びる。左回転轆轤整形。蓋軸は漬け掛けか。
第263図 5 甕 図版 95	口: - 高: - 底:(7.0)	底部約1/3 覆土	①緻密 ②還元焰 ③灰白色 ④灰釉陶器	体部下半丸みを帯び強く開く。高台は三日月状を呈し開き気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸削り後高台貼付。貼付時周縁縁撫で。蓋軸は漬け掛け。器厚やや厚手。
第263図 6 甕 図版 95	口: - 高: - 底:(9.0)	底部約1/4 覆土	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部は直立気味に開く。高台は比較的短く内彎気味に開く。轆轤整形後外面撫で。内面横位蓋撫でを施す。器厚著しく厚手。
第263図 7 甕 図版 95	口:(30.8) 高: - 底: -	口縁部破片 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部内傾し端部は尖り気味。頸部強く外反する。右回転轆轤整形。
第263図 8 羽釜 図版 95	口:(26.8) 高: - 底: -	口縁部破片 甕内	①粗 石英・片岩 ②酸化焰気味 ③褐色 ④須恵器	遺存状態不良。口縁部内傾し肩は水平に付される。轆轤整形後周縁貼付
第263図 9 羽釜 図版 96	口: - 高: - 底: -	体部破片 甕内	①粗 石英・片岩 ②酸化焰気味 ③褐色 ④須恵器	遺存状態不良。内彎気味の体部。轆轤整形。器厚比較的薄手。
第263図 10 羽釜 図版 95	口: - 高: - 底:(13.1)	体部~ 底部破片 甕内	①粗 石英・片岩 ②酸化焰気味 ③褐色 ④須恵器	体部下半は直線状に強く開く。腰部で弱く屈曲する。轆轤整形。外面体部下半は斜位・横位蓋削りを施す。
第263図 11 甕 図版 96	口:(24.0) 高:(30.3) 底:(7.0)	口縁・体・ 底部破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	コ字型。体部上半及び下半は復元美滿。口縁部上半は外傾下半は直立する。肩部の張り強く体部上半に膨らみを設ける。体部は凹凸が顯著で底部径はやや広い。口縁部横撫で中位に指頭痕残る。体部上半は横位、下半は縦位・斜位蓋削り。内面は横位蓋撫で。
第263図 12 甕 図版 96	口: - 高: - 底: -	体部破片 貯藏穴	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	大甕体部破片。外面平行開き、内面環状当て目。内外面に自然軸・窓片付着。
第263図 13 甕 図版 96	口: - 高: - 底: -	体部破片 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③明褐色 ④須恵器	大甕体部破片。外面叩き調整後撫で。内面背薄放状当て目強く残る。

121号住居跡

調査区東側のC区東斜面のC区uv-33・34グリッドに位置し、C～D区住居群の南端にあたる。

周辺は、東側への斜面地形ではあるが、やや緩やかな傾斜であり、本住居跡北側には、多数の住居跡が密集して検出されている。

本住居跡は、単独の検出である。北側に密集するC～D区住居群は114号住・122号住等が4～6m程の距離をおく。また、西・南・東側には、住居跡は近接せず、本住居跡の立地は独立した印象を受ける配置である。

平面形は、比較的整然とした横長の長方形を呈す。各壁の走行は直線状をなし、各隅の形状も良好な対応を見せる。規模は、約5.8×4.9mで大型の住居である。

深さは、遺存の良好な南壁付近で約50cmを測るが、東側及び北側は斜面地形のため、壁を逸失しており、良好な遺存状態とはいえない。

床面は、僅かな凹凸を持つものの、ほぼ平坦面を築き、黄褐色ローム塊と鈍褐色土塊による貼床が全面になされていた。硬化面は、床面中央～竈焚口部周辺に顕著で、西壁際にまで及ぶ広い範囲で確認された。

壁周溝は、西壁北半及び北壁東端にかけて検出された。逸失した北壁はこの周溝で推定線を捉えた。やや浅く、立ち上がりも弱い。

柱穴は、四本柱穴を確認した。P1～P4が該当するピットであり、配置も概ね良好で、四本の対応関係も住居規模に沿うものである。柱穴間の距離は、P1～P2間が約2.3m、P2～P4間が約3.0m、P3～P4間が約1.9m、P1～P3間が約2.5mで、やや横長でP1の位置が若干東側へずれる距離関係が把握されよう。平面規模も、P1がやや小型で示唆的である。

貯蔵穴は、西南隅で検出された、小型の円形土坑を充てたい。深さは約10cm程度で浅く立ち上がりも弱い。

その他のピットとしては、P2とP4間に開く小ピ

ット(P5)と南壁際中央に開く小ピット(P6)が良好な位置を示す。P5は補助柱穴として、P6は入口部支柱穴として捉えたが、両者とも浅く、確証性に乏しい。

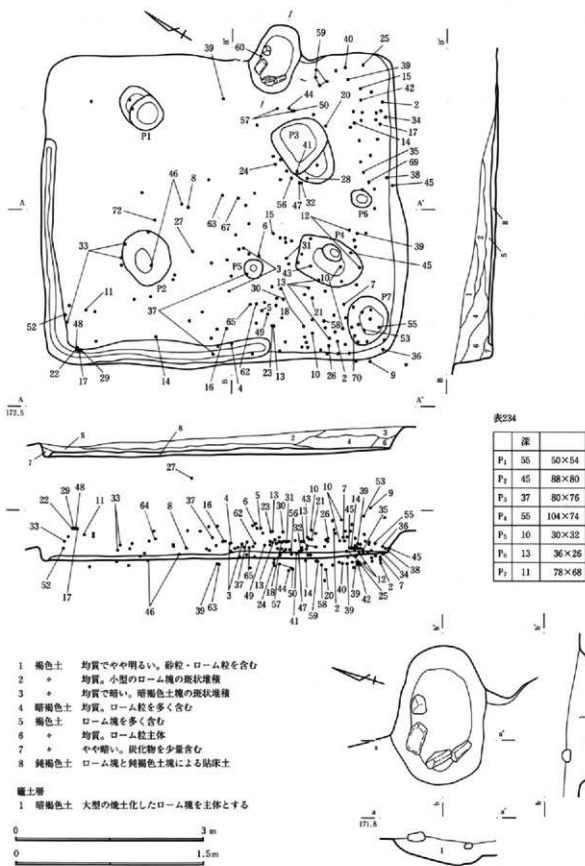
竈は、東壁中央やや南寄りに設けられる。住居主軸と竈主軸は異なり、約15度南に傾く竈である。傾斜地形のため、遺存度は不良で、使用面下の検出となった。楕円状の掘り込みであり、燃焼部～煙道部は壁外に突出する。袖は顕著ではなく、南側壁が僅かに張り出すのみである。また、使用面と思われる竈確認面で、焚口部相当箇所自然石が散乱する。おそらく袖石等の構築材と考えられる。

床下調査を施し、床下遺構の検出につとめたが、僅かな起伏が得られたのみで、明瞭な掘り込みは確認できなかった。

遺物は、多量に出土している。66個体を図示した。住居北側の集積が少なく、南半の集積が取返されるが、北半は斜面地形の影響のため、かなりの覆土遺物が流失したものと考える。おそらく、全域より満遍無い出土状況と捉えられよう。層位的にも、覆土上層～床直まで、特定の層位出土は見られなかった。ただ、下層～床直上の出土土器に若干ながら完形品の遺存率が高い傾向が見られた。

器種組成としては、須恵器坏・埴輪への偏りが著しく、土師器坏がそれに続く。尚、須恵器坏は底部回転調整を施す、当地域では希少な一群である。その他では、須恵器甕・土師器甕・甕等貯蔵・煮沸具も見られたが、量的にはやや乏しく、居住に伴う組成とは考え難い。竈内出土の遺物も極端に少ない。土錘・石製紡錘車も欠損品である。

土器の接合関係としては、覆土上層と床直出土の破片が接合した例もあり、本住居跡埋没過程における同時性が想起される。廃絶時の一括廃棄と考えられよう。

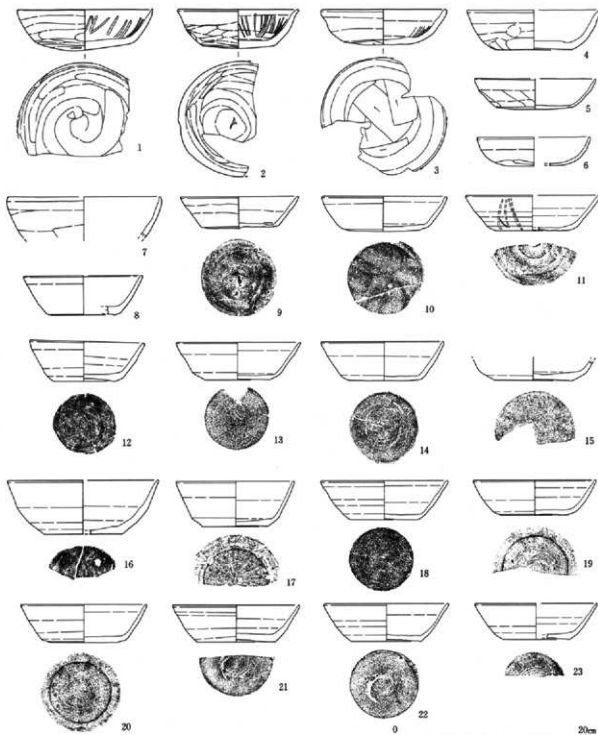


第264図 121号住居跡

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

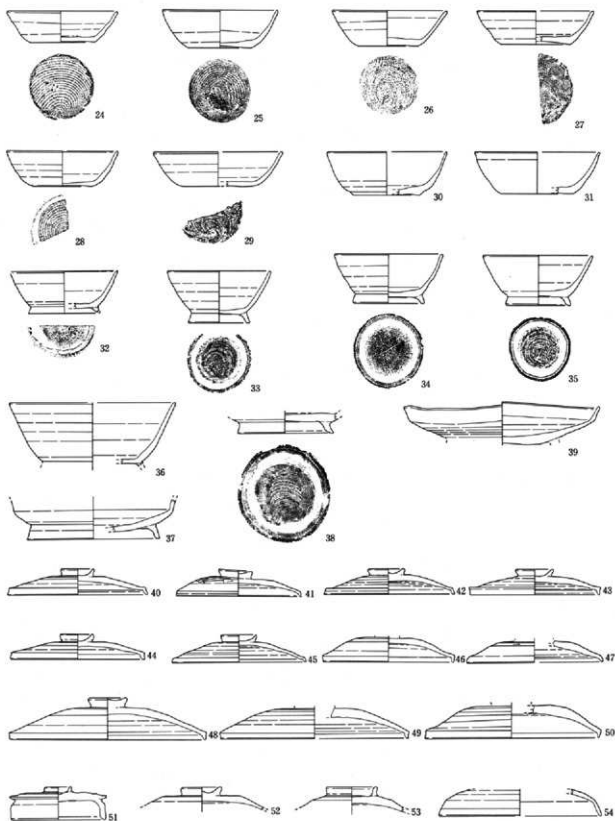
第235表 121号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cuv-33・34	長方形	583×494×48	N60°E	N76°E	四本柱穴・壁周溝 貯蔵穴	坏31 埴5 甕4 蓋15 甕1 甕 6 甕1 鉢1 土垂1 紡錘車1	



第265図 121号住居跡出土遺物(1)

第5節 奈良・平安時代の住居跡



0 20cm

第266図 121号住居跡出土遺物(2)